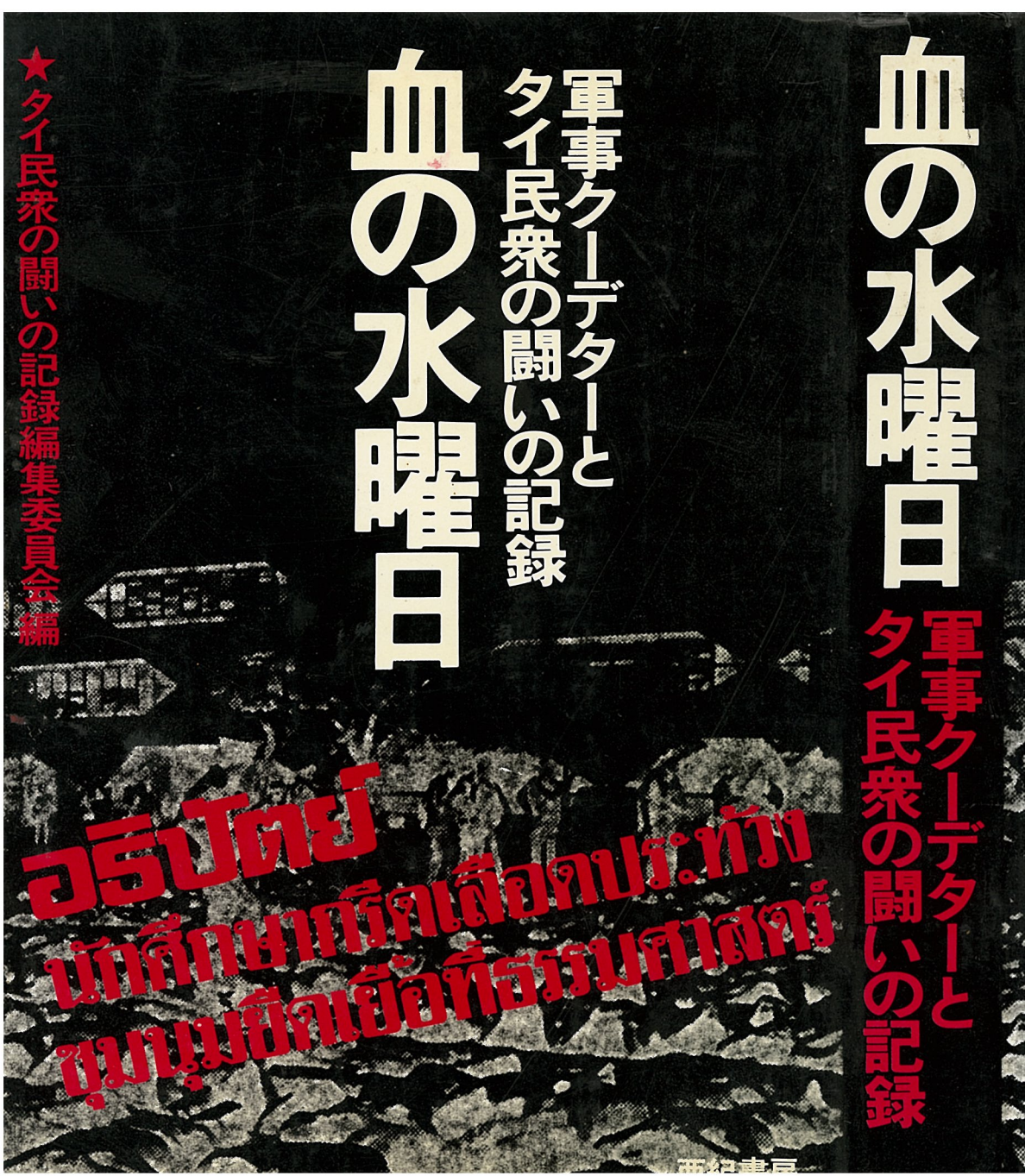
血の水曜日

軍事クーデターとタイ民衆の闘いの記録

★タイ民衆の闘いの記録編集委員会編



血の水曜日
軍事クーデターとタイ民衆の闘いの記録

อธิปตย์
นักศึกษากริดเลือดประท้วง
ชุมนุมยึดเยื้อที่ธรรมศาสตร์

★亜紀書房 一九〇〇円 3031—0148—0098

อธิปตย์ 〈主権〉
นักศึกษากริดเลือดประท้วง
ชุมนุมยึดเยื้อที่ธรรมศาสตร์
〈学生 タマサート大学で抗議集会を持続!!〉

血の水曜日

軍事クーデターとタイ民衆の闘いの記録

★タイ民衆の闘いの記録編集委員会編



亜紀書房

はじめに

一九七六年一〇月六日、この日軍、警察、右派、王室は、独裁制復活に反対する集会を開いていたタイの学生・民衆のうち二〇〇人以上を、タイ史上最も残酷なやり方で惨殺した（血の水曜日、あるいは血の10月6日事件）。そしてその直後に、軍と王室は共同で軍事クーデターを断行した。それから一年目の一九七七年一〇月二〇日、今度は軍が、王室の強い影響下にあった右派政権をクーデターでもって打倒した。結局、クーデター未遂を含めると、この一年間にタイは実に三回に及ぶ政変を経験したことになる。今やタイは、アジアで最も激しく揺れ動く国になった。

タイはこれまで「微笑の国」「仏教の国」と呼ばれてきた。そのような国でなぜかくも残酷な虐殺がおこったのか。

この点を理解するためには、一九七三年まで遡る必要があろう。一九七三年一〇月、タイでは一〇年以上にわたって続いた軍部独裁政権が、二〇万人以上に及ぶ学生・民衆の力によって倒された。のちに「10・14運動」「10・14学生革命」と呼ばれる事件がそれである。そしてこれを契機に、タイではあらゆる階層の人々が、真の独立・民主主義・正義を求める闘争に起ち上がった。以後三年間、学生・民衆の闘いは燎原の火の如く広がり、さらに一九七五年になると、近隣のインドシナ三国が劇的な全面勝利を収めた。この時、タイの支配階級は、国内のあらゆる闘争を徹底的に弾圧する政策にのりだした。そして一九七六年一〇月六日に、彼らは自らの利害を守るために、むき出し

の暴力をもって民主主義を求める学生・民衆の声を圧殺し、タイを再び暗黒の独裁政治に引き戻したのである。

しかしこの「血の水曜日」とクーデターは、より多くの人々を武装闘争の道へ、あるいは体制変革を求める運動へと追いやる新たな契機になった。これまで平和的闘争に徹していたさまざまの政党、組織、個人は、次々と武闘宣言をおこない、今年の九月には、農民、労働者代表を含む広範な民主愛国統一戦線を森の中で結成するに至った。

一方権力を奪取した軍と王室は、今年の一〇月に内部の対立が原因で再度クーデターをひきおこした。形の上では軍が右派勢力を排除して一元的支配を確保することになったが、しかし内部の矛盾はこれによっていささかも解決していない。むしろ権力をめぐる内部抗争は今やますます激化しつつある。

日本政府は、一九七六年一〇月六日の時と同じように、今回のクーデターも即座に承認する旨を発表した。しかし日本がテコ入れする、そして何千人にも及ぶ若い人々の血にまみれた手をもつ現在の支配階級たちが、タイの歴史によって、独立・民主主義・繁栄をそなえた新しいタイを求める勢力によって否定される日は、そう遠くないであろう。

＊　　＊　　＊

この本は、一九七三年の「10・14運動」以降、全国で展開された独立・民主主義・正義を求めるタイ民衆の闘いの記録である。とりわけ一九七六年一〇月の大虐殺の直接の引金になった独裁者プ

ラパート、タノームの帰国に反対する運動、「血の水曜日」、一〇月六日のクーデターを画策した支配階級たちの陰謀の過程、クーデター以後、森の闘いに加わっていったさまざまの人々の声明等を伝える資料集である。その大部分はビラや声明文、ポスター、写真、運動機関紙、手記、手紙等からなる。もっともわれわれはここに収めた声、主張が、即タイ民衆全ての声を伝えるものとは考えていない。しかし新しいタイを求めて闘っている人々の生の声がここにはある。彼らが今何を考え、何をめざして闘っているのか、その直接の声を伝えたいと思ってわれわれはこの本をつくった。

この資料集は、国内外の多くの人々の支援と協力の下にすすめられた。これらの人々の協力がなければ、この資料集も実現しなかったに違いない。心から感謝したい。また出版を引受けて下さった亜紀書房の棗田金治氏、原稿整理、校正をおこなっていただいた石田米子氏、煩雑な原稿を活字に組んでいただいた鎌倉印刷の方々にも、心から謝意を表したい。

一九七七年一〇月二一日、クーデター勃発の報に接して

「タイ民衆の闘いの記録」編集委員会一同

血の水曜日／目次

はじめに

第1章　「10・14運動」と軍事クーデター（総解説）……1

序　「10・14運動」の意志　3

I　「10・14運動」　6

タイの権力構造　独裁政権下のタイ　血の日曜日――一九七三・一〇・一四

II　「10・14運動」の発展　22

「独立・民主主義・正義」――タイ人民の闘い　「国家・仏教・王制」――反共右派組織の結成　体制危機――「10・14」運動以後の矛盾

III　軍事クーデターへの道　45

テロの中の「4・4総選挙」　親米反共グループの巻き返し　独裁者の帰国　血の水曜日　軍事クーデター　武装闘争へ

第2章　反米闘争……67

《解　説》　69

資料1　なぜ、タイに米軍基地が必要なのか　74　資料2　占領されたタイ　79　資料3　タイ全国学生センターの声明　81　資料4　僧侶グループの声明　84　資料5　七月四日へのアッピール　86　資料6　一九七五・七・四反米ポスター　89　資料7　「一九七六年三月二〇日の意志」を支持する声明　90　資料8　タイからの手紙「流血の3・21デモ」　92　資料9　拝啓タイ国民のみなさま　100　資料10　テムコ事件の真相　105

第3章　反独裁闘争(1)――プラパートの帰国……113

《解　説》　115

資料11　軍事クーデターの陰謀――独裁者プラパートの帰国　116　資料12　軍部とサクディナーの抗争――プラパート帰国事件　131　資料13　自由教官戦線の声明　138　資料14　在米タイ人の共同声明　139　資料15　右派の緊急声明　140　資料16　タマサート大学爆弾投下に抗議する声明　142　資料17　暴君追放における民衆の勝利宣言　144

第4章　反独裁闘争(2)——タノームの帰国……147

《解　説》149

資料18　事件の経過　152　資料19　民衆の力を結集し、あらゆる形態の独裁に反対しよう　161　資料20　タノームの犯罪　164　資料21　タノームの帰国　166　資料22　青年僧侶の反タノーム帰国運動　168　資料23　暴君が黄衣をまとい、混乱が生じる　173　資料24　声明——流された血は償わなければならない！　175　資料25　NSCT機関紙『アティバット』最終号　178

第5章　血の水曜日——一九七六年一〇月六日……179

《解　題》181

資料26　メモ——一九七六・一〇・一〇　182　資料27　ドキュメント〝血の水曜日〟　191　資料28　女子学生の手記　209　資料29　その時、日本人は——　222

第6章　軍事クーデター——一九七六年一〇月六日……223

《解　題》225

資料30　クーデター宣言　227　資料31　国家統治改革団命令第1号　229　資料32　国家統治改革団命令第3号　232　資料33　国家統治改革団命令第4号　233　資料34　国家統治改革団命令第5号　234　資料35　国家統治改革団命令第6号　235　資料36　国家統治改革団命令第8号　236　資料37　国家統治改革団命令第22号　237　資料38　国家統治改革団議長令第1号　240　資料39　国家統治改革団議長令第2号　241　資料40　新憲法　243　資料41　一九七六年一〇月六日事件の真相　252　資料42　軍事クーデターに対する在日タイ人の声明　257　資料43　アメリカのアジア研究者の声明　263　資料44　《特別寄稿》第二の道（プェィ博士）　266

第7章　政治犯の逮捕……289

《解　説》291

資料45　獄中からの手紙　298　資料46　タイ政治犯救援のポスター　306

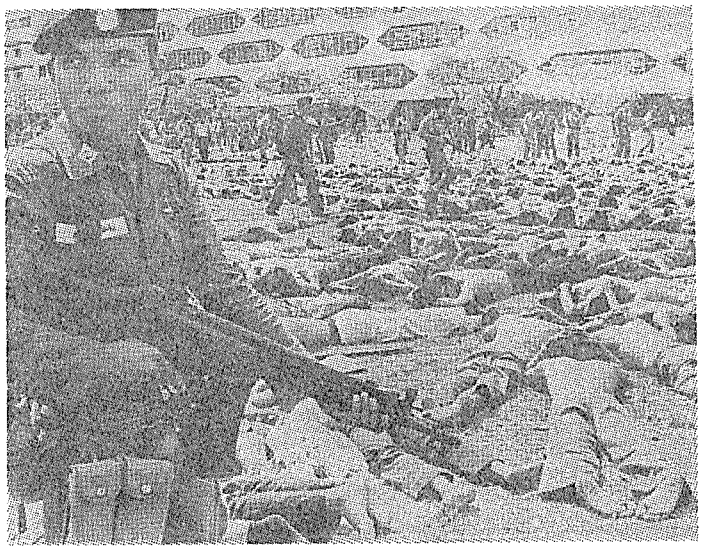
第8章　森の闘い——武装闘争宣言……307

《解　説》309

資料47　タイ共産党一〇月七日声明　314
資料48　一〇月六日戦線宣言　318
資料49　タイ社会党武装闘争宣言　321
資料50　タイ労働運動指導者の声明　328
資料51　統一戦線の呼びかけ　339
資料52　タイ共産党創立三四周年声明　343
資料53　タイ全国学生センターの声明　350
資料54　人民戦争、輝かしい勝利の一年　366
資料55　南タイ・ムスリム学生指導者の声明　370
資料56　タイ全国農民連盟の声明　377
資料57　新聞記者の声明　388
年表……巻末

第1章

「10.14運動」と軍事クーデター



1976.10.6　タマサート大学の弾圧

序 「10・14運動」の意志

民衆の支援を背に受けて／闘おう！　一歩もひくな／力をあわせて敵を倒そう！／正義のために闘おう！

一九七三年六月、ラームカムヘーン大学の学生九人が逮捕された時、タイの学生・民衆は、独裁政権に対する闘争を公然と開始した。学生の逮捕に抗議する運動は、ほどなく二万人を越える大集会に発展し、会場となった民主主義記念塔には、黒い大きな横幕が貼られた――「タイの民主主義はすでに死んだ！」と。そしてこの抗議集会の中から一つの歌が生まれた。「闘おう！　一歩もひくな。」わずか四行の詩ではあるがしかしのちに「10・14運動」を象徴する歌がこの時つくられたのである。

それから、四ヶ月後。バンコクは再び憲法と自由を求める民衆の声で埋まった。一〇月六日、憲法の早期実現を求める「百人委員会」の代表一一人（のち一三人）が逮捕され、それを契機に、タイ全国の学生・民衆は、タノーム、プラパート、ナロンの三暴君に抵抗する闘争に起ち上がったのである。そしてこの運動は一〇月一四日には軍が数百名に及ぶ民衆を無差別に虐殺する流血事件にまで発展した。のちに「10・14運動」あるいは「血の日曜日事件」と称されるこの軍と民衆の衝突で最後の勝利を手にしたのは、結局民衆の側であった。彼らはタノーム以下三人の暴君を国外に追放し、一九五七年以来延々と続いた軍部独裁政権を、民衆の団結によってはじめて崩壊に追いやったのである。そしてこの「10・14運動」の闘いの中で、先の「闘おう！　一歩もひくな」の歌に、新

たに次の歌詞がつけ加えられた。

肩を並べて行進しよう／決意も固く前進しよう／たとえ敵がどんなに打ちすえようとも／恐れることなく、死ぬまで闘おう！

すばらしい自由を求めて／断固として闘おう！　一歩もひくことなく／全ての力を結集して／最後まで闘おう！／ぼくらは自由の闘士だから

＊　＊　＊

一〇月一四日の闘争以後、タイ民衆の運動は急速に拡大した。農村で工場でキャンパスで、あらゆる階層の人々が闘争に起ち上がった。その時彼らは一つの言葉をスローガンに掲げた。「10・14の意志（チェットナーロム・シップシー・トゥラー）に続け！」勇敢に闘い自らの生命を犠牲にした多数の学生・民衆の「意志」。この「10・14の意志」とはいったい何であったのか。それは一言で言えば、真の民主主義をタイに実現することにあったといえよう。これはもちろん独裁体制に衣をかぶせたようなエセ民主主義のことではない。また支配階級がこれまで何度か企ててきたような、民衆の抑圧搾取をごまかすための形だけの民主主義でもなかった。人々が生命を賭してまで目指してきたのは、独立と主権をタイにもたらし、社会正義をタイに実現し、帝国主義による政治的経済的支配の軛からタイ民衆を解放するような、そうした民主主義の樹立であった。

この民衆の意志は、一〇月一四日になってにわかに登場したのではなかった。一九三二年に絶対王制が倒されて以来現在に至るまで、一貫して続いてきたものなのである。タイの民衆は厳しい抑

圧体制の中で、さまざまな形をとってこの意志を表明してきた。そして一〇月一四日、それはついに爆発点に達したのである。抑圧のある所には必ず抵抗がある。民衆の意志が完全に実現されない限り、闘争は絶えることがない。「10・14の意志」がその後三年間の間により広範な民衆たちの手によって継承され、発展していったことはその何よりの証左であろう。

一方反動的支配階級は、こうした動きに慄然とし、あがき、残虐な計画を企てた。一九七六年一〇月六日、タイ史上例をみない残虐さで学生・民衆を弾圧し、クーデターを強行し、血の海の中から再び独裁的支配体制を復活させ、自らの階級的地位と利害を守ったのである。しかし、クーデターをもってしてもタイ民衆を拝跪させ、彼らの意志を棄てさせることはできなかった。むしろエリートの地位に甘んじていた知識人でさえも、いったい誰が民衆と祖国の敵であるのか明確に認識するようになった。多くの人々も、自分たちが選ぶべき将来について判断を下し、自らの思想に確信を抱くようになった。

学生、労働者、農民、民衆は、一〇月一四日と一〇月六日に流された血の中から多くの教訓を学んだ。とりわけ、平和的手段による闘争、妥協的性格をもった闘争は、最後の勝利を獲得しえない、それはタイ社会の根本的変革をもたらしえないという貴重な教訓を学んだ。今、彼らは人民解放軍の隊列に加わりつつある。この三年間マイクやペンを握っていた彼らの手には銃がある。タイ民衆の眼には、「ともに歩いていく道」がどこにつながっているのか、今はっきりと見えているのだ。

I 「10・14運動」

1 タイの権力構造

一九三二年の絶対王制の打倒から一九七三年の「10・14運動」に至るまで、タイでは三四の政権が登場し、その間一二人の首相が内閣を組閣した。一二名の首相のうち八名が文官出身である。しかしこの四一年の間に彼ら文官出身者が議会制民主主義を実施しえたのは、わずか四年強にすぎなかった。大部分の間、政治権力は軍をはじめとする特権的支配階級の手に握られていたのである。

この独裁的支配体制の下で、タイの支配階級（チョン・チャン・ポックロン）を構成していたグループには大別して二つあった。その一つは、一九三二年の立憲クーデター以前から伝統的に権力の座を占めていた「グルム・サクディナー」である。サクディナー（通常は封建勢力と訳される）というのは歴史的には、全国土の主である国王が一定面積の土地とそれと結びついた農民を臣民に下賜し、その下賜した土地の多寡に応じて身分の位階を定めた制度をさす。そしてこの制度の下で、土地と農民に対する支配権を付与されていた王族あるいは貴族的官僚（クン・ナーン）が一般にサクディナー勢力と呼ばれた。しかしこのような本来的意味でのサクディナー勢力は、その後の政治的経済的変遷の過程で次第に変容するか後退を示し、今日ではサクディナー勢力という言葉は、軍部とは区別された政治的支配集団で王室によって特別に権威づけられた特権階級一般、狭義には王室そのも

のを指し示すようになった（少なくともこの資料集では、そのように理解する。事実、資料12「軍部とサクディナーの抗争」という論文で、タイ人自身が使っているサクディナーという言葉は、すでに歴史的な概念からは遠くかけ離れている。またタイ共産党は、サクディナーを王室と捉えている）。

サクディナー勢力の経済的基盤を支えていたのは、土地と官僚の地位がもたらす諸々の特権的便益である。しかし最近ではこの二つに限っていたわけではなく、たとえばのちに社会行動党を結成するクックリット（一九七五年三月から一九七六年四月初まで首相）などは、自らの権益維持のため積極的に銀行資本家との結合を図っていた。

以上のようなサクディナー勢力の頂点に位置するのは、言うまでもなく王室である。王室はタイ民衆の間では仏教の庇護者として、あるいは政治的権力には直接関与しない超越的存在として民衆の上に君臨し、また長い間にわたって崇敬されてきた。しかし実際には彼らはサクディナー勢力の政治的支配を権威づけるイデオロギー的基盤として機能し、同時に経済的にもバンコクとバンコク近県の大半の土地（一説ではバンコク近県の全耕地の六〇パーセント）を所有するタイ最大の地主として、またタイ・セメントやタイ第二位の銀行であるクルンタイ銀行をはじめとするさまざまな会社の大株主としてタイの経済的利害をめぐる闘争に関与してきた。

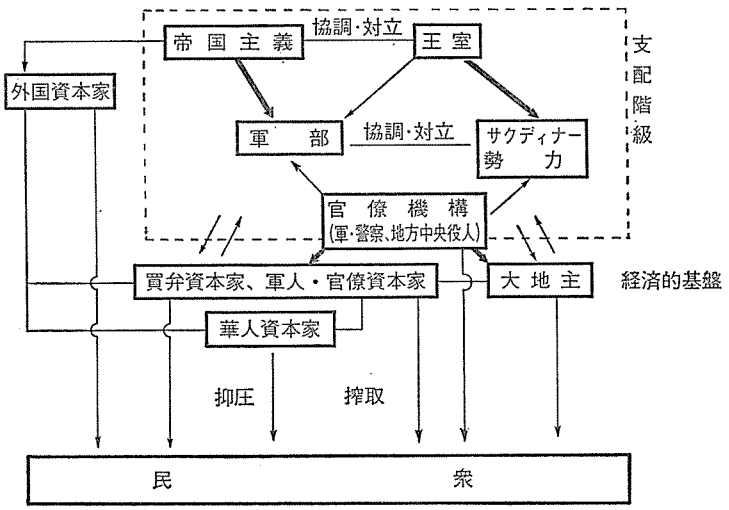
さてタイの支配階級のもう一方の翼を担うのは軍部である。軍は一九三二年の絶対王制崩壊の時点ではそれほど大きな力をもっていたわけではなかった。しかし翌三三年にはパホン、ピブーンを中心とする陸軍がクーデターをひきおこし、さらに同じ年にサクディナー勢力を代表する勤王党がボワラデート親王を担いでおこなった武力反乱を成功裏に鎮圧したことによって、軍はサクディナ

ー勢力に拮抗する一大勢力として登場した。そして一九三〇年代の軍備強化の過程で彼らは着実にその政治的権力を拡大し、第二次大戦後一時的にプリーディーを頭目とする文官グループに政権を譲ったものの、一九五七年のサリットのクーデター以後は、彼らは絶対的権力をほぼその手中に収めるに至った。

そしてこのサリットによる軍の独裁的支配体制の下で、タイの権力構造には新たに次のような変化が生じた。その第一は、アメリカとの軍事的政治的結合の強化の過程で、アメリカ帝国主義の影響が圧倒的に強くなったこと。第二は、サリットが目指した近代国家建設、とりわけ外資導入による経済発展計画の下で、軍・官僚が経済界に進出し、彼らが軍人・官僚資本家としての性格を併せもつようになったこと。さらに外資と結びついた買弁資本家が急速に成長したことである(のちに述べるプラマーンなどはその典型である)。もっとも買弁資本家、軍人資本家、官僚資本家の三者は決して排他的な範疇ではなく、人格的には同一の場合もしばしば見られる。なお伝統的にタイの金融・商業に絶大の力を及ぼしていた華人資本家は若干特異な地位を占めていた。彼らは従来政治権力には直接関与せず、軍、サクディナー勢力のような政治的支配集団に寄生しつつ彼らの経済的権益の拡大を図るのが常であった。

一方王室と軍部の関係はいささか複雑である。王室は基本的には、先に述べたようにサクディナー勢力の頂点に位置するグループであったが、同時に王室は軍を統轄する最高の存在でもあった。タイの憲法に従えば国王は「皇軍」である軍の統帥の地位をしめ、他方軍の立場からすれば、王室は軍の政治的支配の正当性を与えるイデオロギー的源泉であり、その点ではサクディナー勢力と王

第1図



室との関係と基本的には変わりがなかった。しかし軍にとって王室の擁立が絶対不可欠の要件かといえばそうとも言えない。事実一九五七年にクーデターを企てたパオ警察局長官とか、一九七〇年代初めのタノーム＝プラパート一族などは、権力の集中を進めたあまり「王制を打倒して大統領制の導入を企てようとする国賊」であるという噂が流され、結局権力の座から追放される破目になった。彼らが実際に王制を打倒する意図をもっていたかどうかという点は定かではないが、少なくとも王室にとって軍の権力の必要以上の強大化は決して好ましい現象ではなかったのである。王室が一九三二年以来のさまざまのクーデターで一定の政治的介入をおこなってきた理由もまさにそこにあった。

さて以上のような権力構造を図式化して

おけば大概第1図のようになる。

第1図について簡単に説明を加えておこう。タイの政治権力を掌握する集団は大きく言って軍部とサクディナー勢力の二つであり、官僚機構（軍・警察機構を含む）が彼らの政治的支配を支えている。また彼らの下には大地主や官僚資本家、帝国主義勢力と結びついた買弁資本家、さらに華人資本家が存在し、経済的基盤を構成している。このうち、軍人や官僚、王室は、多くの場合人格的に資本家と合体している(いわゆる官僚資本主義)。

一方帝国主義勢力は軍部の軍事的政治的支配を支え、王室は軍とサクディナー勢力の両者の支配を権威づける。軍と王室、軍とサクディナー勢力の関係は、基本的には相互依存的であるが、彼らは権益をめぐって対立する可能性をもっている。最後に、タイの支配階級の頂点に立つ帝国主義と王室は明示的には結合していない。しかし自らの権益を維持していく上では、両者は構造的に相互補完の関係にあるといえよう。

第1図で示された権力構造は、一九六〇年代にはいって形をなし、以来現在に至るまでほとんど変わらなかった。民衆はタイの権力機構から排除され、長い間サクディナー勢力や軍部の政治的支配と経済的搾取の対象でしかなかった。もっとも彼らは決してこの間支配階級の言いなりになっていたわけではない。彼らは制限されたものであれ民主的な諸権利を獲得すると（例えば第二次大戦直後や、一九五〇年代半ば）、あらゆる機会を把捉して自分たちの意志を表明した。しかし支配階級はその都度彼らを徹底的に弾圧し、自らの権益を維持していった。しかも民衆の声は政権を打倒するには当時あまりに断続的かつ孤立的なものでしかなかった。タイは一九三二年以来、数多くのクーデターを経験したが、そのほとんどは、支配階級全体にかかわるものというより支配階級内部の、たとえば軍とサクディナー、あるいは軍内部の政治権力と経済的利害をめぐる闘争が生みだしたものだった。

しかし「10・14運動」でタイの歴史は大きな転回を示す。もっとも一九七三年の「10・14運動」は後に見るように決してサクディナー勢力と軍による支配階級を根本から打倒するものではなかった。しかし、一〇月一四日以降のタイの学生、労働者、農民、民衆の広範な闘いは、支配階級が拠り所としていた帝国主義勢力と王室、そして、買弁資本家や大地主の経済的基盤を根底から揺るがすだけの力量と方向性をもつに至った。換言すれば、一九七三年以降の三年間のタイ民衆の闘いは、支配階級全体にとって明らかに権益の喪失を意味したのである。だからこそ彼らは、内部にはさまざまの対立を含みながらも、一九七六年一〇月六日に、タイ史上例を見ない残虐なクーデターを実施したのである。一九七三年一〇月一四日以降に展開されたタイ民衆の闘争の歴史的意義も究極的にはそこにあった。それは決して日本のジャーナリズムが伝えたように、「タマサート大学で生まれ、今タマサート大学で死んだ」というような「一部の学生」による闘争ではなかったのである。

2　独裁政権下のタイ

「10・14運動」の経過、そしてそれ以後のタイ民衆の闘いの歴史を紹介する前に、サリット政権以後の政治経済的状況について簡単に触れておこう。ここでサリットのクーデターから話を説き起こすのは、「10・14運動」が直接対象としたのが軍部独裁政権であり、その礎石を作ったのが他な

らぬサリットであったからである。

サリットの率いる「兵士団」がタイでクーデターを起こしたのは一九五七年九月のことである。彼がこの時点でクーデターを断行した背景には大きく言って二つの理由があった。一つは、当時警察局長官を勤めていたパオが陸軍を凌駕するだけの権限を当時持ちつつあり、一九五七年九月にはクーデターの計画を企てていたこと。これがサリットのクーデターの最も直接的な理由となった。そして第二の、より一般的な理由としては、一九四七年のクーデター以来政権を握っていたピブーン・ソンクラームの一九五五年以降の「民主主義」的政策が、少なからず軍及びサクディナー勢力の経済的利害を侵害したということである。事実、サリットのクーデターによって、パオとそれに関連する一派は権力集団から排除され、ピブーンも、第二次大戦中軍事同盟を結んでいた日本に亡命するに至った。その結果サリットは、首相兼国軍最高司令官という絶対的地位をその手に収め、彼は憲法の即時停止や民主的諸制度の廃止を通じて六〇年代の軍による独裁的支配体制の基礎を築き上げるに至った。

そしてサリットは権力を掌握するや、ただちに布告第12号（共産主義活動防止令）や第21号（無法分子活動取り締まり令）など一連の布告を発布し、権力内部の反対勢力や進歩的知識人を次々と逮捕し、殺害していった。ピブーンの時代に許可された労働組合や地主の権限を規制する「小作料規制法」が葬り去られるのも、まさにこの時代である。

ところでこの一九五七年のクーデターは、タイにおけるその後の軍による独裁的支配体制の濫觴になっただけでなく、対外関係、とりわけ対アメリカとの関係においても新たな段階を画す契機と

なった。すなわち彼は、一九五七年末にアメリカの投資を保障する協定を強化し、さらに一九六二年に入ると産業投資奨励法を公布して外資の積極的導入に努めた。またこの年三月、タイのタナット外相とアメリカのラスク国務長官は共同声明の中で共産主義の脅威に対する両国の相互依存体制を確認し、翌年にはラオス危機を理由に米兵五〇〇〇人以上がタイ東北部に派遣されるに至った。

サリット政権の下で進められたタイとアメリカの軍事的経済的結合関係は、一九六二年末にサリットが頓死して以後政権を引継いだ独裁者タノーム、プラパートによって、ますます強化された。とりわけ、アメリカが公然とヴェトナムに侵略を開始した一九六五年には、両国の間に秘密軍事協定が結ばれ、タイは侵略戦争の最前線を担うことになった。独裁者たちは、最高時には五万人に近い米軍をタイに駐留させ（一九六八年）、タイ全土に広がる八つの主要基地からは連日のようにB52爆撃機やファントム戦闘機が、ヴェトナムの空に向けて飛び立った。また一九六六年になると、タイは自ら「義勇軍」を組織してラオスに派兵し、侵略戦争への加担をいっそう深化させていった。

このヴェトナム戦争による特需（アメリカは六六年以後、平均一億ドルを越える経済・軍事援助をタイ政府に与えた）は、外資導入と相俟ってタイの経済に急速な成長をもたらした。GNPの成長率は毎年一〇パーセントを越えるという「発展ぶり」を示したのである。しかしその一方で、タイの諸資源は外国資本の支配下に陥り、外資と結びついた買弁資本家がこの間簇生するに至った。また米軍基地の地方都市やバンコクはトルコ風呂や一夜妻、売春のはびこる歓楽街と化した。さらにタイ全土にはりめぐらされた軍用道路網の建設（その多くはアメリカの援助による）は、農村の商品経済化を急速に促し、農村内部の階層分化と没落農民の都市流出に拍車をかけた。経済的利権をめぐる官僚

の汚職が激増したのも、まさにこの時期である。

ちょうどその頃、文献その他を通じて民主主義の洗礼を受けていた学生・知識人は、タイ社会の腐敗堕落を意識し、政治変革の可能性を探る学習グループを組織し始めた。一九六三年に創刊された『社会科学評論』が学生の役割について特集を組んだのは一九六五年のことである。また政治意識に目覚めた学生が農村でおこなっていたボランティア活動は『七つの団体』という雑誌に結実していった。

一九六八年のテト攻勢によってヴェトナムにおけるアメリカの敗北が色濃くなった頃、南ヴェトナムやタイのような独裁政権に対するアメリカのテコ入れが世界各国で非難の的になった。一方タイでは一九五九年に起草委員会が設立されて以来、実に一〇年近くも草案起草に準備をかけていた憲法が一九六八年六月にようやく公布され、翌年の二月にはこれにもとづいて一二年ぶりに総選挙が実施された。

この一九六九年総選挙では、予想通り与党のタイ国民連合が多数派をしめたが、しかし全議席二一九のうち彼らが獲得しえたのは、無所属を含めてもたかだか一一〇に過ぎず、与党はからくも過半数を制するという状況であった。とくにバンコク首都圏の議席一五はその全てが野党でサクディナー勢力を代表する民主党に奪われ、独裁者たちの劣勢は、その後のバンコク市議選（一九七一年）でもますます明らかになった。また与党内部でも閣僚のポストや利権の分け前をめぐって対立が激化し、タイ国民連合は、プラパートを支持する「民主派」とナロンの後押しをおこなう「青年派」

に分裂して、政策の実施、とりわけ予算審議も容易ならざる事態が生じた。

そこでタノーム＝プラパート政権は、共産主義の侵透に対抗するとか、議会制民主主義はタイに混乱をもたらしたとかいう勝手な口実をもうけて、一九七一年一一月にタイ史上前代未聞の「自らが自らに対して起こす」クーデターを断行した。議会制民主主義はわずか二年で崩壊してしまったのである。

しかしこの短命に終った議会制民主主義の時代は、民衆を政治的に覚醒させ、各地に政治的自由を求める運動の種を植えつける結果となった。たとえば学生グループは、一九五八年以来一〇年ぶりの最初の学生運動と称される「総選挙を監視する学生有志のグループ」を一九六八年末に組織し、一九六九年九月には、これが母胎となって一一の大学から構成される「タイ全国学生センター（NSCT）」を結成した。さらに一九七〇年には、タマサート大学で「サパー・ナー・ドーム」グループが結成され、大学側の腐敗の摘発を開始し、チュラロンコーン大学でも、同大学の関与する商業センター、ホテルの建設に関する大学当局の汚職を糾弾する運動が各々組織された。

3　血の日曜日――一九七三・一〇・一四

一九七一年一一月のタノーム＝プラパートによるクーデター、それと起草に一〇年近くもかけた一九六八年憲法の廃止は、当然のことながら学生・知識人の間に強い不満をひきおこした。チュラロンコーン大学では、クーデターに抗議する声明が発表され、タマサート大学の構内でも、学生による最初のインドシナ侵略戦争に反対する展示会が開催された。もっとも「10・14運動」以前の厳し

い状況と、設立まもない学生組織が未だ確固たる基盤を欠いていた条件の下では、学生・民衆の政治的役割は非常に狭い範囲に限られていた。彼らの主たる活動は、もっぱら社会奉仕の側面に限定されざるをえなかった。

しかしティラユット・ブンミーがNSCTの書記長に就任し、タイでは最初の本格的政治活動である日本商品ボイコット運動を一九七二年一一月に計画した時、タイの学生運動は新たな段階に突入するに至った。この運動の目的は、直接的には日本人資本家と結託していた買弁資本家を攻撃する点にあったが、間接的には、帝国主義と協力する独裁政権そのものに抗議する意図も含まれていた。そのことは日本商品ボイコット期間の最終日にあたる一一月三〇日に彼らがクーデターの張本人である「革命団」の本部にデモ行進をおこなった点にも端的に示されている。さらにこの運動は、民衆の眠れるエネルギーを刺激し、学生・民衆の広範な団結を促すことも狙っていた。

この運動は、後との関連で言えば多くの成果を得たと考えられる。とりわけ民衆が学生の役割を評価し、政治意識と経済ナショナリズムがある程度民衆の間に滲透したことは、大きな成果であった。

ところで一九七一年のタノーム＝プラパートによるクーデター以後も社会状況は決して好転したわけではない。むしろ汚職は以前にも増して増大し、また経済的にも貿易収支の赤字は拡大する一方で、インフレの兆しも見えていた。そして一九七三年には世界的凶作の中で、タイは米輸出禁止、首都における米不足というかつてない非常事態を迎えた。

一方、自らに対するクーデターを起こしたタノーム＝プラパートは、体制立て直しのため、一族に

よる独裁的な帝国の建設にのりだした。一九七二年一二月の暫定憲法公布の後組閣された新内閣では、国軍最高司令官のタノームが首相と外相、国防相のポストを、陸軍総司令官のプラパートが副首相と内務相のポストを各々獲得して、事実上、両者でタイの政治権力の中枢を独占するに至った。またタノームの息子でプラパートの娘婿でもあるナロン大佐は、共産主義掃討の英雄として宣伝され、さらには新設の国家行政監督局の長官の地位を利用して、自らに反対する勢力の弾圧(汚職官吏の摘発に名を借りておこなわれた)に猛威をふるった。もっとも三暴君によるこのような権力の集中が汚職の横行をもたらさないはずがない。事実後に明らかにされた数字によると、この三暴君の資産合計は銀行預金と株券のみで実に二億二〇〇〇万バーツに上り、土地等の不動産を加えた財産は、ほとんど計算不可能とまで言われたほどであった。

こうしたタノーム＝プラパート一族による権力の独占とその濫用は、進歩勢力だけでなく次第にサクディナー勢力との間にも対立を生ぜしめ、クリットのような軍の一部の間からも不満の声が聞かれ始めた。そして「ナロンは王制を打倒してタイを共和国に変え、自ら初代大統領になるつもりだ」という噂がタイで流されるまでになった。

一方、一九七三年は、軍部独裁者たちの悪業が相次いで明るみに出た年でもあった。まず最初の衝撃的事件は四月末に起きたトゥンヤイ事件である。これは一部の軍・警察関係の高官が国境を内密に視察するという公務を口実にして、実は東南アジア最大の禁猟区トゥンヤイに密猟に出かけ、獲物をヘリコプターに載せて帰る途次ヘリコプターが獲物の重みで墜落し、発覚した事件であった。この事件は、学生の不満を一挙に高め、「環境保護グループ」等がつくった事件の真相を暴露する

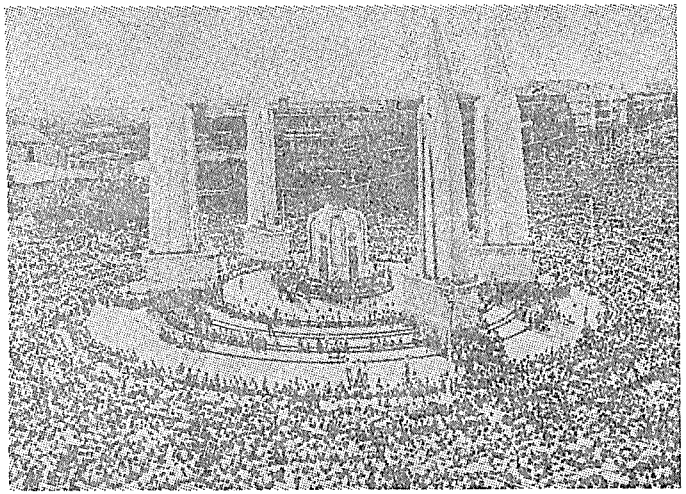
パンフレットの公刊は、民衆の独裁政権に対する怒りに火をともす契機となった。

それから二ヶ月も経たない六月、プラパートは独裁政権の継続を図るため、公務員の六〇歳定年制の一年延期を画策する（プラパートはその年の秋に任期が切れることになっていた）。独裁者の意図を鋭く見抜いたラームカムヘーン大学の学生グループはただちにこれを批判する書物を出版した。この動きはプラパートを激怒させ、彼はラームカムヘーン大学の学長サックを通じて批判的文書をだした九人の学生を即刻退学処分に付した。

しかしこの逮捕事件は、独裁政権に対する批判を強めていた学生・知識人をますます刺激し、六月二一日には抗議の声は二万人（夕方には四万人）を越える大抗議集会に発展した。集会に集まった学生・民衆は政府に対し逮捕された学生九人の即時釈放、サック学長の解任、民主的憲法の早期公布という三項目を要求し、抗議する学生を支援する民衆のカンパはわずか一日で四万バーツ（約七二万円、当時の労働者の賃金は一日二〇〇円程度である）に上った。

四万人を越える集会、そしてデモに発展した抗議運動は独裁者たちを根底から揺さぶり、彼らは一時的にせよ学生・民衆の要求に応ぜざるをえなくなった。しかしのちに政府が発表した声明は、この約束をことごとく踏みにじっていた。憲法の早期実現は言葉の端にもでてこなかったのである。この時、タイの学生・民衆は「もはや政府には誰一人として信用に価する人物はいない」（ティラユットNSCT書記長）ということを完全に悟った。

三年後にタマサート大学が血で染められた日とちょうど同じ一〇月六日に、政府は恒久的民主憲法を要求するパンフレットを配っていた「百人委員会」の代表一一人を非合法集会の容疑で逮捕し



1973年10月13日　民主主義記念塔前に結集した学生・民衆

た。この事件は一〇月一〇日には一大抗議運動に発展し、さらに長い間抑圧され押さえ込まれていた民衆の反独裁の意志が、奔流の如く「10・14運動」に結集していく直接の引き金になった。

一〇月六日の逮捕直後から、全国の学生はただちに抗議行動に起ち上がった。九日にはタマサート大学で学生・教官・市民の三者による連合が結成され「われわれはあくまで前進する。今日この日をもってわれわれは目的を達成するまで闘うことを誓う」という共同声明を発表した。そして一〇日にはチェンマイ大学をはじめ各地の学生が続々とタマサート大学に合流し、集会は二万人を越える大規模なものに発展した。民主主義を求め、独裁体制に抗議する全ての道は今やタマサート大学に通じていた。

一方独裁者たちは、プラパートを長官とする「平和と秩序を回復する」ための特別弾圧機関を設立し、本部を悪名高い共産主義掃討作戦司令部

（CSOC）に置いた。また彼らは、ラジオ等を使ってタマサート大学に結集する学生・民衆の中傷につとめた。追いつめられたタノーム＝プラパート一族の最後のあがきだった。

一二日になると、北タイのチェンマイでも東北のウボンやマハーサーラカームでもバンコクの動きに呼応して一大抗議運動がおこり、一方タマサート大学に結集していた学生・民衆は、逮捕者の即時無条件釈放を求める最後通牒を政府につきつけた。そして最後通牒の期限切れに当たる一三日の正午には、二〇万人を越える史上空前のデモが民主主義記念塔に向けておこなわれた。

この時事態の収拾に乗りだしたのは国王である。タノーム＝プラパートはすでに政権担当能力を失っていた。国王はNSCTの代表等と会見し、彼らにデモの解散を命じたのである。一方この日の夜、国王はプラパートと会見し、その後プラパートは放送を通じて一年以内に憲法を実現することを約束した。これで運動は収束するかに見えた。NSCTは、国王との会見後「勝利」を宣言し、集会に集まっていた人々には解散を呼びかけた。しかし国王の調停案を不満とする一部の学生・民衆はあくまで憲法の即時要求を求め、一三日の夜から一四日の早朝にかけて座りこみやデモを続けていた。

一四日の朝六時、宮殿の前で最初の血が流された。ヂットラダーン宮殿前をデモ行進する学生・民衆に軍・警察が発砲したのである。これを皮切りに独裁者たちは戦車をくりだし、ヘリコプターから機関銃を乱射して無差別の殺戮を開始した。その後学生・民衆と軍・警察の戦闘は、一四、一五日と続き、「血の日曜日事件」は学生・民衆七七名が殺され、四四四名が行方不明になるという一大惨事に発展した。しかしその一方で、タノーム、プラパート、ナロンの三暴君は国王の指示の下で国外逃亡を余儀なくされた。まだくすぶり続ける警察本部の消火活動に当たっていた一学生はこうもらした。「われわれは新しいタイを今手に入れた。しかしその代償は高かった」と。

「10・14運動」は、二つの側面をもっていたと言えよう。

第一に、この運動は当初の目的においてもまたその結果においても、タイの権力構造、社会経済体制を根底から変革するものではなかったということである。憲法の早期実現要求に端を発した「10・14運動」は、確かに三暴君を国外に追放し、一九六三年以来一〇年にわたって続いたタノーム＝プラパート独裁政権を崩壊に追いやった。しかし国王の介入による事態の収拾、サンヤー首相、クックリット国民代表議会議長の任命といったサクディナー勢力の政治権力への進出、タノーム＝プラパートに対立していたクリット陸軍総司令官による軍の再編成等、「血の日曜日」以後の一連の動きは、「10・14運動」がタイにおける民衆の抑圧・搾取機構を根本からつき崩すところまで至らなかったことを示していた。

しかしその一方で「10・14運動」に起ち上がった学生・民衆は、この時手に入れた民主的諸権利と自由を決して形だけのものに終らせなかった。「10・14運動」の過程で政治的に覚醒し、自らの力量を認識した学生、労働者、農民たちは、あらゆる機会を把んで「独立・民主主義・正義」を求める果敢な闘争を展開し始めた。

「10・14運動」はその後三年間の、そして「10・6クーデター」以後の本格的な闘争の未だ序曲でしかなかったのである。

Ⅱ 「10・14運動」の発展

1 「独立・民主主義・正義」――タイ人民の闘い

一九七三年の「10・14運動」、すなわち学生・民衆が一斉に蜂起し、三暴君を権力の座から追放し、タイに議会制民主主義をもたらしたこの運動は、正当な諸権利を獲得し、独裁者の暗黒政治から民衆を解放した点において、彼らの一定程度の重要な勝利であった。タイ民衆は「10・14」の英雄たちの多くの生命とひきかえに、新憲法を得たが、これは言論、出版、集会、政治活動、政党結社の自由など、公然かつ平和的に自らの意志を表現する自由を法的に保障するものであった。法律について言えば、労働者は団結して「協会」を、さらには労働組合を結成することが可能になり、賃金、福祉厚生の向上のため、あるいは労働者の利益のためにストライキをおこなう権利を獲得した。農民は、正義と政府の誠意ある施策を求めてデモをおこなう権利を得た。学生は平和的集会を開き、意見を表明し、特権層の売国的な行為を暴露できるという正当な権利、それに主権を侵害し、タイ隣国との紛争の元凶になり、さらには堕落した文化でもってタイ民衆を汚染してきた米軍基地及び米兵駐留に反対する権利を得た。その他にも、民衆は学習の自由を獲得し、幅広い知識に耳目を開き、民衆に奉仕する新しい文化を創造する自由を獲得した。そして一〇月一四日以後の三年間には、長い間隠されてきた諸矛盾がいっきょに噴出し、さまざまな階層に属する民衆が覚醒し、起

ち上がり、抑圧されてきた権利と利益の回復を求めて闘争を展開していった。

〈労 働 者〉

たとえば労働者は、団結して賃金の引上げと福祉の向上を要求し、資本家、工場主と交渉するために労働組合を組織した。

労働者の闘いは一九七三年一〇月以降、タイ史上最大の規模で普及し、ストライキ件数は一九七三年末で五〇一件と、一九七二年の二〇倍弱に上昇。一九七四年も三五七件と続いていった。

大規模なものから小規模なものまで闘争はあらゆる職種であらゆる形態をとってすすめられたが、なかでも重要な意義をもったのは一九七四年六月の繊維労働者のストライキ、一九七五年八月のドゥシタニ・ホテルの闘争、一九七五年末から翌年春まで続けられたハーラー・ジーンズ工場の女子労働者による工場自主管理闘争などである。

繊維労働者のストライキは、バンコクから数十キロ南にあるサムットサーコンとサムットプラガーン両県の女子労働者が、資本家による一方的操短と無期限のレイオフに抗議して始められた。彼女たちはサナームルワンの広場に集まり、最低賃金の引上げ、労働条件の改善を求めて、一週間にわたる坐り込みを続けた。この闘争は単に繊維労働者だけでなく、ほとんど全産業の労働者から支援を受け、さらにNSCTや「民主主義を求める民衆グループ(略称ポチョ・ポチョ)」もこれに参加した。こうした広範な労働者、学生、民衆の声に押されたサンヤー政権は、最低賃金を一六バーツから二〇バーツに引上げることを余儀なくされ、労働法の早期改正(一九七四年八月、発布は翌年三

月）に追い込まれた。

労働法の改正について政府は一九七五年一月に最低賃金法（一日最低二五バーツ）の全国的実施を指示した。しかしホテル業者をはじめとする資本家の一部はこの法律を完全に無視し去った。そこでタイ最大のホテルであるドゥシタニ・ホテルの労働者は、タードプーム、プラシット等の指導の下で労働運動史上最も戦闘的かつ長期といわれる闘争に突入し、一ヶ月半に及ぶストライキの末勝利をかちとった。

さらに一九七五年末には、ジーンズを生産するハーラー工場の女子労働者たちが、工場の門に「労働者団結工場（ローンガーン・サーマッキー・ガマゴン）」の横幕を貼って工場自主管理の闘争に起ち上がった。彼女たちは内務省労働局や工場側の弾圧に対抗するため、自ら製品の生地を購入し、市価の五分の一以下で製品を売り、賃金は平等に分け、夜は学習会を組織してタイ社会の真実に眼を向けるなど、画期的な闘争を展開した（七六年三月、彼女たちは政府により強権的に逮捕された）。

こうした闘争を通じて労働者は実に多くのことを学んだ。そして彼らは相互に協力し仲間を教育する組織を作っていった。たとえば一九七四年末、タードプーム等によってつくられた「タイ全国労働者連絡センター」は、各労働組合間の連絡調整とともに一般労働者の教育を主要な目的としていた。一九七六年一月には、国営企業を中心とする多くの労働者がサナームルワンで大集会を開き、米と砂糖の値上げに反対した。この時の集会を契機に各国営企業の労働組合は、「タイ全国労働会議」を結成する。そしてこの全国労働会議は、七六年八月、九月のプラパート、タノーム両独裁者の帰国の際には学生・民衆とともにきわめて重要な役割を果たすことになった。

〈農　民〉

軍部独裁時代には、多くの農民は頭を上げることもわずかの権利を要求することもできないほど徹底して搾取・抑圧されていた。しかし「10・14運動」以後の学生、労働者の運動の昂揚をまのあたりにした農民たちは、自ら正当な権利を求める闘いに起ち上がるようになった。彼らは多くの県からバスを連らねてバンコクに「上京」し、幾度となく要求集会を開いた。

なかでも重要な集会は一九七四年一一月に開かれた。すでに一九七四年六月末に、中部、北タイ各県から集まった農民代表は、政府に対し負債農民の救済等六項目の要求をつきつけていた。しかしサンヤー政権はその後もほとんど具体的解決策を講ぜず、そのため三〇県以上の農民代表は一一月に再びバンコクに結集し、一万人を越す大デモを展開した。

この一一月の大農民デモは、後の運動の展開から言えば次の二つの点で大きな意義をもっていた。第一は、当時のサンヤー政権が農民の一大デモの攻勢の中で、彼らが要求する土地改革を受け入れざるをえなかったことである。政府はその後土地改革法、小作料規制法、土地整備法案を相次いで国会に提出し、農民援助の具体化にのりださざるをえなくなった。いま一つの意義は、一一月二四日に当時サナームルワン広場に結集していた農民代表の中から、タイ農民運動史上最初の闘う農民組織「タイ全国農民連盟（サハパン・チャーウナー・チャーウライ・ヘーン・プラテート・タイ）」が結成されたことである。これによって一九七五年以降の農民の闘いは、主としてタイ全国農民連盟が担うことになった。

しかし、一九七五年三月に、クックリット・プラモートが政権を引き継ぐことによって、政府の

対農民政策は大幅な転回を示すに至った。クックリットは農村開発政策の目玉商品として「タンボン計画」を遂行する一方、一九七五年春、農民の要求の焦点であった土地なし農民、負債農民の救済案である「農地関係裁判所（農民の、土地に関する苦情を行政的に処理する機関）」を骨抜きにし、これを地主、資本家にとって都合のいいものに変えたのである。さらに五月には、政府は、バンコクに集まっていた農民の要求を全面的に拒否する姿勢を示した。政府に対する幻想を完全に打ち砕かれた農民指導者は、集会の席上で次のように断言する。

「農民がこの一週間にわたる闘いでえたものがあるとすれば、それはただ政府が民衆をだますそのやり口について若干の知識をえたことだけだ。……われわれは今後、自分たちの手で独自に闘争を闘い抜くであろう」と。

一方、農民たちの闘いの進展は、長い間農民を搾取し、彼らの血と汗の上に富を築いてきた地主・資本家たちにとって、その支配の動揺と利益の損失を意味した。とりわけタイ全国農民連盟の活動基盤であった北部タイの地主たちは、農民の動きに大きな脅威を感じた。そこで彼らは、さまざまの右派勢力・暴力団を使って、一九七四年三月から翌年八月までに、名前が確認されたものだけでも二二名、その他を含めると一〇〇名以上に及ぶ農民指導者を次々と暗殺していった。そして一九七五年七月三〇日には、タイ全国農民連盟副委員長で北タイ農民連盟委員長をつとめるインター・スリブンルアンが白昼自宅の前で暗殺された。

これに対し、政府は犯人を即刻捜査・逮捕し、農民指導者を凶悪な殺人者の手から守るどころか、逆に農民暗殺事件を歪曲し、あまつさえ学生・農民指導者九名を共産主義の容疑で逮捕するというきわめて反動的対応にでた。この逮捕はただちにタイ民衆の抗議をひきおこすことになり、NSCT、全国反独裁戦線、タイ全国労働者連絡センターの各組織、さらにはチェンマイ、カセサート、ラームカムヘーン大等各大学の自治会並びに主要国営企業の労働組合が、タイ全国農民連盟と連繋して、九名の無条件釈放と農民暗殺者の即時逮捕を要求する行動に起ち上がった。その結果、クックリット政権は逮捕者の釈放を余儀なくされたが、この事件は政府が農民に対してまったく誠意がないこと、そして彼らは地主たちの走狗でしかないことを農民の前にはっきりと示す契機になった。

凶弾に斃れたインターが編集し、農民運動の機関紙であった『チャーウナー・タイ（タイ農民）』は次のように宣言する。

「農民は平和を愛する。決して暴力など使いたいとは思わない。しかしわれわれを抑圧する連中は、好んで流血沙汰をひきおこす。もう我慢できない。抑圧されているタイ農民の目標としてわれわれは次のように宣言する。目には目を、歯には歯を、流された血には血を！　敵がやることはわれわれもやらねばならない。敵が銃を使うならわれわれも銃を手にするだろう。

農民、人民のために闘い、勇敢に死んでいった農民の英雄たちを讃えよう！　そして彼らのために弔旗を掲げ、前進し、彼らの流した血にわれわれも続こう！　最後の闘いに勝利するために！」

〈学　生〉

「10・14運動」以降、学生運動は質量ともに急速な成長を見せ、彼らは労働者、農民とともに民

主主義を求める闘いの一翼を担った。

一九七三年一〇月以降、キャンパスの雰囲気は一変した。学生たちは「なぜこんなすし詰めの教室で勉強をするのか、われわれは今何をなすべきか」真剣に自問し、そして大学の囲いの外に広がるタイ社会の現実に眼を向け始めたのである。彼らは民主主義の普及化運動の一環としてグループを編成し、農村に散っていたが、そこで学生は農村の諸矛盾、農民の実情に触れ、教えられるべきはむしろ自分たちであることを悟った。

変革は教室でも進行していった。学友を啓発し、社会の現実を知るため、さまざまの学習会、討論会が開かれた。自主的な講義が学生によって計画され、今まで絶対服従の存在であった教官と活発な論議が交わされた。さらに民衆の理解を促すために多くの展示会が催された。

各大学の自治会は精力的な動きを示し、全国各地の中・高等学校や大学には生徒センターや地方学生センターが次々と設立された。そして全国的規模での学生運動の盛り上がりは、NSCTに統一性を与え、これをタイ民衆の運動の一つの核に変えていった。

一九七二年一一月の日本商品ボイコット運動以後、幾多の政治運動を組織したNSCTは、一九七三年一〇月を転機にその照準を次第に反米反帝国主義の闘争に定めていった（第2章参照）。その最初の大きな闘争は一九七五年五月にマヤグエス号事件を契機として展開された二万人をこす反米デモである。以後一九七五年七月にはタマサート大学で反米集会が開かれ、翌年三月には米軍の完全撤退を求める一大デモがあらゆる階層の人々を集めて遂行された。またこの間、NSCTは、テムコ社をはじめとするアメリカ資本の資源略奪（第2章参照）、タイにおける米軍やCIAの活動を

暴露する出版物を次々と公刊した。

さらに彼らは、タイ全国農民連盟や各労働組合、全国反独裁戦線等諸組織と緊密に協力し、闘争のある所にはほとんどどこにでも出かけていって労働者・農民の運動を支援した。そして一九七六年八月、九月には、独裁者プラパート、タノームに反対する運動を指導し、反独裁闘争の最先端に立つに至った（第3章、第4章参照）。

〈その他のグループ〉

単に労働者、農民、学生だけでなく、さまざまの職業に属する人々も、「独立・民主主義・正義」を求める組織をつくって戦列に加わった。

たとえば、教官たちは、「学生にただ教科書を教えるだけでは意味がない。学生に社会の真の姿を理解させ、社会の矛盾に眼を向けさせることこそが自分たちの責務だ」と認識して、「自由教官連合」や「教師の権利を守るセンター」を結成した。

また芸術家グループの間でも「生きるための芸術」か「芸術のための芸術」かをめぐって議論が生じた。真の芸術は、民衆に奉仕し、新しい社会の建設に加わり、生活の真実を反映したものでなければならないと考えた一部のグループは、音楽や美術に関係する人々を集めて「タイ全国芸術家戦線（ネーウ・ルワム・シンラピン・ヘーン・プラテート・タイ）」を組織した。そして彼らは反米闘争や農民運動の立て看板やポスターを書き、集会や農村に赴いて「生きるための歌」を歌い、闘う人々の士気を鼓舞した。

この「生きるための芸術」を推進していったグループには、『人と水牛』他数々の名曲をつくった学生バンド「カーラーワン」とか「ガンマーチョン」、「ゴン・ロー」、「ルワム・コーン」等がある。

祖国から遠く隔った外国に住むタイ人も例外ではなかった。彼らは祖国の現実に眼を向け、議論し、団結して闘争を組織した。アメリカの「平和グループ」「タイ防衛グループ」、日本の「民主主義闘争委員会」「ヨーロッパ・タイ人グループ」「オーストラリア・タイ人グループ」など世界の各地で闘う諸組織がつくられていった。

外国にいる彼らがタイの闘争に加わり、これに貢献しうる方法は、彼らが住んでいる外国がタイをいかに政治的経済的に支配しているかを明らかにすることにある。そこでたとえばアメリカのグループは、アメリカの第三世界、とりわけタイへの侵略活動に関する諸資料を集め、これを『世界の暴力団・アメリカ』と題する書物にまとめた。またタイの『社会科学評論』は日本にいるタイ人グループの協力をえて、三回にわたって「黄禍（反日）」特集を編集し、反日運動に大きく寄与した。

〈タイの民主主義〉

以上のように、タイ民衆はあらゆる場所でまたあらゆる階層が闘争を組織していった。三年間の闘いは、タイにおける帝国主義的支配を排除し、真の独立と主権を獲得し、また民主的諸権利の実現を図り、富や土地の不公正な分配を糾すという――一言で言えば「独立・民主主義・正義」を求める闘いであった。

この「10・14運動」以後展開された民主主義を求める闘いには、大きく言って二つの課題があったといえよう。

一つは、独裁政権打倒のあと樹立された議会制民主主義をあくまで堅持するという課題である。タイの場合噂されたクーデターの計画は、この三年間で実に二〇数回に及び、学生・民衆は絶えず軍部独裁の復活という圧力に抗しながら、「10・14運動」で獲得した諸権利を守っていかねばならなかった。憲法そのものを守り議会を維持することは、決して所与のものではなく、絶えざる闘争の中でかろうじて支えられたものだったのである。

他のもう一つの課題は、憲法を守るだけでなく、そこに謳われた民主的諸権利を実現する闘いを組むことである。これにはもちろん議会内と議会外の闘争があった。しかし先にも述べたように議会では依然として支配階級が圧倒的な優勢を誇っていた。たとえば一九七五年一月に実施された最初の総選挙の結果はその点を如実に物語っている。具体的にはサクディナー勢力を代表するタイ民主党、社会行動党が全議席の四〇パーセントを占め、一九六九年の総選挙でタイ国民連合（当時与党）を結成し、軍の利害を代表していた諸政党が、ほぼこれと拮抗する三八パーセントを獲得した。一方中道や左派に属するタイ社会党や新勢力党はこの時の選挙では一〇パーセントにもみたなかった。さらに一九七六年四月の総選挙では、徹底的なテロの下で左派政党は、ほぼ完全に議会から締め出され、議会は支配階級内部の権力抗争の場と化してしまった。

このような状況の下で、学生・民衆が民主的諸権利をかちとるためには、当然議会外での闘争に頼る以外はない。事実彼らは工場やキャンパスで、さらには街頭や広場で大規模な集会を開き、民

主的諸立法の実現を迫った。とりわけサナームルワンの広場は、一〇月一四日以後噴出した民衆のエネルギーを直接的に表現する場となった。

政府がこの三年間民主的諸立法を議会で通過させたのは、あくまで広範な民衆の要求があったからである。しかし地方役人や地主は、「小作料規制法」の成立を決して農民に伝えようとはしなかった。また「最低賃金法」が公布されても、資本家の一部はこれを完全に無視した。議会で成立した諸法律を実現するためには、さらに大きな民衆の力が必要だったのである。

政府はこうした動きをことあるごとに「ゴット・ムー(衆を頼んで無法を通す力)が法律を踏みにじる」とうそぶいて非難した。しかしタイで民主主義を実現するためには、民衆の広場における、あるいは街頭における「団結(ルワム・ガン)」以外、他に何があったと言うのだろうか。

2 「国家・仏教・王制」——反共右派組織の結成

暴君を追放し、民衆による民主主義の第一歩を踏み出した「10・14運動」は、権力を掌握している反動的支配階級にとっては、自らの利益を大きく失わせるものであった。彼らは以前ほどたやすく国民を欺き、売国的行為に専念することができなくなった。また労働者の賃金の引上げや農民の土地改革要求、学生の反米反帝闘争はタイの支配階級を構成する軍やサクディナー勢力の経済的基盤を徐々に切り崩していった。そして彼らの数多い悪辣かつ貪欲な行為も次々と暴露されていった。たとえば、サップデューン村やナーサーイ村の事件(共産主義の村という容疑で独裁者たちが村民を虐殺した事件)、テムコ社における売国的行為、タイ亜鉛事件等の公表がそれである。こうした状況は、

彼ら特権的支配階級にとっては、出口のない、抜きさしならぬ事態であった。「10・14運動」による民衆の覚醒と民主主義の進展は彼らにとって没落の開始を確実に意味したのである。

民主主義の開花ととどまることなく拡大する民衆の運動に直面した支配階級たちは、ただひたすら自己の保身と権益の維持につとめた。そして権力を濫用し、あらゆる方法を使って民主主義を愛する民衆を弾圧しにかかった。彼らは自分たちの掌中にあるさまざまな権力機構を利用して騒乱状況をつくり、クーデターの機会を把もうとした。これは支配階級が独裁的権力を再度握り、民衆を抑圧する条件を完全につくり出すための準備であった。一九七四年七月のプラップラーチャイ事件(NSCTが反米闘争を予定していた日に、中国人街で暴動がおこり、警察が徹底的弾圧をおこなった事件)、一九七四年一二月のタノームの帰国工作、一九七五年八月のタマサート大学の焼打ち、そして一九七六年八月、九月におけるプラパート、タノームの相次ぐ帰国など、全てそうした意図を背後にもちつつ遂行された事件であった。

さらに利益を脅された支配階級、とりわけ王室、軍部は、「独立・民主主義・正義」を求める民衆の運動を妨害するために、さまざまの反共的政治集団あるいは準軍事組織——たとえば「ナワポン」、「赤い野牛(ガティン・デューン)」、「ルーク・スア・チャーウ・バーン(ヴィレッジ・スカウト)」「タイ・コウモリ」、「タイ国家防衛団」、「婦人団体」など——を結成した。

これら民衆に敵対する諸組織、なかでも「ナワポン」、「赤い野牛」、「ルーク・スア・チャーウ・バーン」などは、アメリカCIAの支援を受けたISOC(国内治安作戦司令部)や、国王直属でISOCと密接な関係にあったBPP(国境警備警察軍)の直接の指導の下に創設されたものである。

〈ナワポン〉

「新勢力」、「九つの軍」を意味する「ナワポン」は、一九七四年初めにアメリカから帰国したワッタナーが、ISOC長官であるサーイユットの指導と、さらに元陸軍情報部長ワロップ、BPP隊長スーラポン等の協力をえて組織した最初の反共政治組織である。

そのメンバーは、設立当初は主に都市の役人、大学教官、軍人、一部の僧侶等で占められていたが、インドシナが全面的に勝利し、反共の声が一段とタイ国内で高まってからは、その活動基盤を地方役人、教師、商人、地主等の間にも広げていった。一九七六年三月、「ナワポン」自身が発表した数字によると、メンバーの数は二〇万人近いと言われる。軍事クーデター以後首相の座についたターニンもその有力なメンバーの一人であった。

「ナワポン」の主たる活動は、出版物、放送、集会を通じて反共宣伝をおこない、NSCTやタイ全国労働者連絡センター、タイ社会党など闘う諸組織を誹謗中傷し、その活動を妨害することにあった。また農村でも、NSCTやタイ全国農民連盟が農民の間に影響力を及ぼすのを徹底的に阻止することを目標としていた。

〈赤い野牛〉

「ナワポン」がイデオロギー的政治集団であるとすれば、「赤い野牛」はその実践部隊とも呼びうる組織であった。彼らはNSCTが一九七四年九月、憲法に反対する行動をとった時、はじめてその姿を現わし、これに対抗する動きにでた。そして一九七四年一二月、タノーム帰国反対運動の集

会にプラスチック爆弾を投げて以来、ドゥシタニ・ホテルのストライキ妨害、農民・学生指導者の一連の暗殺、一九七五年八月のタマサート大学の焼打ち、そして一九七六年三月二一日の反米デモへの襲撃（八五人が死傷）、同月ラーマー六世技術学校への投爆（三名死亡）、八月、プラパート帰国反対集会への投爆（二名死亡）と、彼らは一貫してタイ民衆に敵対する流血事件の最先端に立ってきた。また一九七五年夏には北タイのラーイ県で反共武装組織を創設し、BPPと共同の行動をとるようになった。

「赤い野牛」の育ての親は、当時ISOCの山岳少数民族部隊を率いていたスッドサーイ大佐である。彼は一九七四年初め、職業学生で甥であったソムサックを通じて職業学生の不満分子に接近し、その組織化を企てた。

一九七三年の「10・14運動」で戦闘部隊として学生・民衆の先頭に立ち、軍隊と果敢にぶつかって多数の犠牲者を出したのは、周知のように職業学校の学生たちである。彼らは一九七三年末に「タイ全国職業学生センター（NVSCT）」を結成し、一九七四年半ば頃まではNSCTと協力関係を保っていた。しかしNVSCTが組織的に立ち遅れを見せたことや、「10・14運動」における役割の評価の違いをめぐって次第に両者の間には亀裂が生じ、こうした機会をうまく利用することによって、スッドサーイは「赤い野牛」の組織化に成功したのである。

〈ルーク・スア・チャーウ・バーン〉

最後に農村部では、「アーサー・チャーウ・バーン（郷土防衛軍）」等さまざまな民間軍事組織と

は別に、「ルーク・スア・チャーウ・バーン」と呼ばれる反共非軍事組織が王室の指導の下につくられた。「ルーク・スア・チャーウ・バーン」の最初の訓練は、一九七一年八月、解放勢力の拠点の一つである北部タイ・ラーイ県のBPPの地区隊長ソムクアンの指揮の下でおこなわれた。その後一九七二年秋に、国王は自身の記念ジャズ・コンサートで「ルーク・スア・チャーウ・バーン」を、王室直属の組織としてテコ入れを始め、さらに一九七三年七月に内務省は、各県知事がこの反共組織の隊長を兼任することを公式に認めた。そして支配階級の危機感が高まった一九七六年六月に、内務省は異例の通達を各県知事に送り、「ルーク・スア・チャーウ・バーン」にできるだけ便宜を図るように指示した。そしてこれを契機にして組織は全国的規模に拡大していったのである。村落の地方役人、村長、地主、商人を中心に結成された「ルーク・スア・チャーウ・バーン」は五日間の反共及び王室尊重のセミナーを受けた後、その資格を示す赤いスカーフと修了証明書を与えられる。彼らは「ナワポン」等と協力して学生の「農村における民主主義普及運動」を阻止し、あるいはNSCT、タイ全国農民連盟を農村から締め出す活動に積極的な役割を果たした。

ところでこうした反共政治集団、準軍事組織は互いに相共通する点をもっていた。つまり彼らは、「国家・仏教・王制」をスローガンに掲げ、民主主義を求める学生、労働者、農民はこれに危害を加える共産主義勢力の手先であると非難したのである。

周知のようにタイは仏教を国教とし、国王は神聖不可侵の存在として民衆の上に君臨する。国民の九〇パーセント以上が仏教を信奉するタイでは、国王は仏教の擁護者として、また人民を庇護する至高の存在として人々から長く崇敬されてきた。「国家・仏教・王制」は、民衆の信頼・尊重を

前提に、タイを統一する基本的原理として機能してきたのである。

一方支配者たちは、この「国家・仏教・王制」を自らの支配に正当性を与える原理として擁護してきた。とりわけこの三つの制度を積極的に利用したのは、サリット元帥である。彼は一九五七年のクーデター以後、国王のアジア、欧米への海外親善旅行を推進し（現国王が公式に海外を訪問したのは一九五九年がはじめてである）、「君主制」の威光の回復を図った。また仏教界に対してもテコ入れを企て、仏教組織をよりハイエラルヒーの強い中央集権的なものに変えていった（一九六三年のサンガ法など）。この二つが最も政治的に利用されたのは、共産主義の温床と言われた山岳少数民族を「タイ民族」に統合しようとした時であった。つまり彼は北部、東北部の辺境に国王、僧侶を相次いで派遣し、王室の崇拝と仏教への帰依をタイ民族のアイデンティティを示す証しとしたのである。こうして「国家・仏教・王制」の三制度は、サリットによって反共軍事国家のイデオロギー的礎石となり、彼の政治哲学は、タノーム＝プラパートによって引き続き継承されるに至った。

しかし「10・14運動」以後の情勢変化は、仏教・王制に対するタイ民衆の信条に少しずつ変化を与えることになった。たとえば従来世俗社会とは無関係に生きていた僧侶の中から、デモの先頭に立って闘う僧侶がでてきた。「10・14運動」以後結成された「タイ全国青年僧侶戦線」などもその典型である。またタノームが帰国して出家した時には、一部の青年僧侶の中から「殺人者タノームに出家する資格はない」と抗議の声があがった（第4章参照）。王制に対する信条も同じである。支配階級に要求をつきつけ、最後には「国王に直接お願いしよう」と呼びかけていた人々も、「10・14運動」以降の闘いの中で、次第に社会を変革する力は陳情ではなく自分たちの組織的闘争の中に

こそあると悟っていった。もちろんこうした動きはタイの中では未だ少数であったが、しかし仏教・王制を支える基盤は、もはや一枚岩ではなくなりつつあった。

一方国内における民衆の運動の高まりと、一九七五年のインドシナの全面的勝利、それに続くラオスの王制廃止は、タイの王室や支配階級に危惧の念を抱かせた。共産主義の支配におびえる彼らは、自らの権益を守るために、仏教・王制の存続の危機を何よりも強調し、サリットと同様に、それらを反共イデオロギーの中心にすえた。彼らはタイの統一原理である「国家・仏教・王制」を、闘う学生、労働者、農民が掲げる「独立・民主主義・正義」に対抗させ、彼らを弾圧する道具として積極的に利用し始めたのである。そして仏教・王制を擁護する国民組織という名に隠れて、「ナワポン」や「赤い野牛」、さらには「ルーク・スア・チャーウ・バーン」等の殺人集団を次々とつくり、あるいは再編していった。これらの組織は、先に述べたように民衆の闘いにあらゆる妨害を加え、「共産主義者」「売国奴」のレッテルを彼らの上に無差別に貼っていった。そして後になると、あからさまに軍部の権力復帰を求める意見を表明し、国民代表議会に代わる「国家統治議会」という独裁的支配体制――クーデター以後の「国家統治改革団」がまさにそれだ――の導入をくり返し提起した。

彼らの反動的性格は、何よりも一九七六年一〇月六日に、タマサート大に結集していた学生・民衆をBPP、警察とともに率先して虐殺したのが、他ならぬ「ナワポン」であり「赤い野牛」であり「ルーク・スア・チャーウ・バーン」であったという事実に端的に証明されているといえるだろう。そしてこの虐殺は、「国家・仏教・王制」が誰のために存在するのかを、はっきりと民衆の前

にさらけだしたのである。

3 体制危機――「10・14運動」以後の矛盾

〈インドシナ解放の衝撃〉

一九七三年一〇月一四日以降のタイにおけるいくつかの矛盾をここで簡単にまとめておこう。

「10・14運動」以降の第一の、そしてもっとも基本的な矛盾は、これまでくり返し述べてきたように、タイ国内で利益を喪失しつつあった支配階級と、政治的に覚醒し、民主主義を求める闘いに起ち上がった学生、労働者、農民、民衆との対立であった。彼らのさまざまの闘争は、サクディナー勢力とその頂点に位置する王室にとっても、軍とこれを支援する帝国主義諸国にとっても、また彼らの政治権力に寄生していた買弁資本家たちにとっても、程度の差はあれ、一様に危機を意味した（**第1図参照**）。そして経済的基盤を徐々に切り崩されていた彼らの危機意識をいっそう駆り立てる事態が一九七五年にはいって生じることになる。一九七五年夏のインドシナ三国の全面的勝利と反米闘争の激化（七六年三月に米軍撤退完了予定）がそれであった。

一九七五年四月のプノンペン、サイゴンの相次ぐ陥落、そして一二月のラオスの王制廃止は、国境を接するタイの支配階級に大きな衝撃を与えた。たとえばタイの国王はラオスで王制が廃止されたその翌日に異例の声明を発表し「外敵の侵略の強化に対してタイ国民は団結してこれと闘う必要がある」と強く呼びかけた。

この「外敵」概念は、戦後の冷戦構造の中で共産主義封じ込めのための一戦略としてつくられて

きたものである。つまり一九四九年、革命に勝利した中国をタイの「外敵」として捉え、タイを中国封じ込めのための反共軍事網の一角にすえるというアメリカの世界戦略の一環だった。

具体的には一九六二年五月、ケネディ大統領が北タイにおけるラオス共産主義勢力の侵透阻止を口実にSEATOを通じてタイ国土に米軍を派遣して以来、アメリカはタイを、中国の影響力の拡大を阻止する防壁として常に利用し続けてきた。一方タイの独裁政権にとってもアメリカの軍事・経済的援助は、彼らの民衆支配と経済的搾取にとって不可欠のテコ入れだった。

しかし一九七二年の中国の国連加盟と米中接近、一九七五年のインドシナ解放とアメリカの完敗、そしてアメリカの「アジア離れ」政策とタイ人民の反米闘争に押された米軍のタイからの全面撤退という一連の情勢変化は、アメリカの反共軍事体制に依存してきたタイの支配階級を足もとからすくうことになった。とりわけ国境を接するインドシナ三国で共産主義が勝利を収め、伝統も文化も根を同じくするラオスでいともあっさりと王制が廃止されたことは、タイの王室をはじめ、軍部、右派勢力に強い危機意識を抱かせた。

加えて国内ではインドシナ解放以後、タイ共産党がその活動を活発化させていた。たとえば一九七五年末には東北タイのナーン県で解放勢力が政府軍を壊滅させた。また一九七六年六月にはペッチャブーン県のカオコオで、タイの空軍機が撃墜され、一〇〇名以上に及ぶ政府軍兵士が包囲せん滅された上、応援にかけつけ陸軍・警察も敗退するという事件が生じた(この事件は、途中でタイの新聞紙上から姿を消す)。

こうした敗北は、軍部をはじめとする支配階級に大きな衝撃を与え、彼らはますます反共反インドシナの姿勢を強めていった。たとえばカオコオの敗退の翌月には、ピチャイ外相がインドシナ諸国と積極外交を展開しているまさにその裏で右派勢力が相次いで在タイヴェトナム人家屋、商店の焼打ちをおこない、また「ナワポン」や「ルーク・スア・チャーウ・バーン」は組織的計画的に反共宣伝を全国で展開した。そして一九七六年一〇月六日にはそのクーデター宣言の中で、公然と、タマサート大で独裁制反対をおこなっている民衆は「ヴェトナム人共産主義テロリストの協力」の下に王制破壊を企てたと断言するまでに至ったのである。

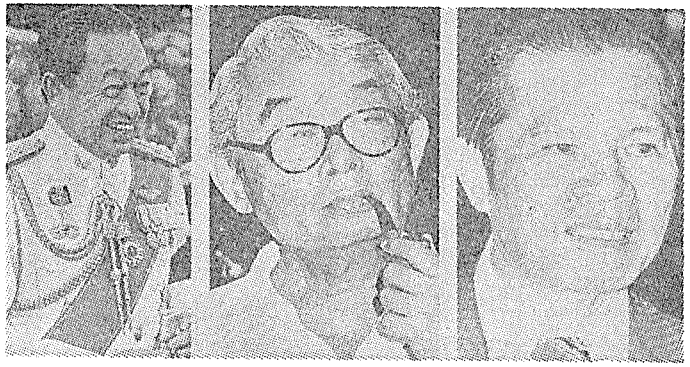
〈支配階級内部の対立〉

国内における民衆の運動の昂揚とインドシナ解放のインパクトによって大きな動揺を受けていたタイの支配階級は、それに先立つ一九七三年一〇月のタノーム=プラパート一族の追放によって、独裁政権下で潜行していた内部の対立をいっきょに顕在化させるに至った。

一九七三年一〇月一四日以降の権力構造の大きな変化をまとめておけば、大体次の三つになる。

第一は、軍部独裁政権の下で権力を制限されていたサクディナー勢力が再び政治の前面にでてきたことである。政党で言えば、タイ民主党(党首セーニー)、社会行動党(党首クックリット)がそれに当たる。さらに王室もきわめて大きな権限をもつようになった。

第二は、軍の内部においてタノーム、プラパート派が後退し、彼らと対抗していたクリット陸軍総司令官の一派が軍の主流を占めるに至ったことである(第2図参照)。もっともクリットはタノーム、プラパートほどの絶対的権限をもたず、これは後に軍内部の激しいヘゲモニー争いの一つの原



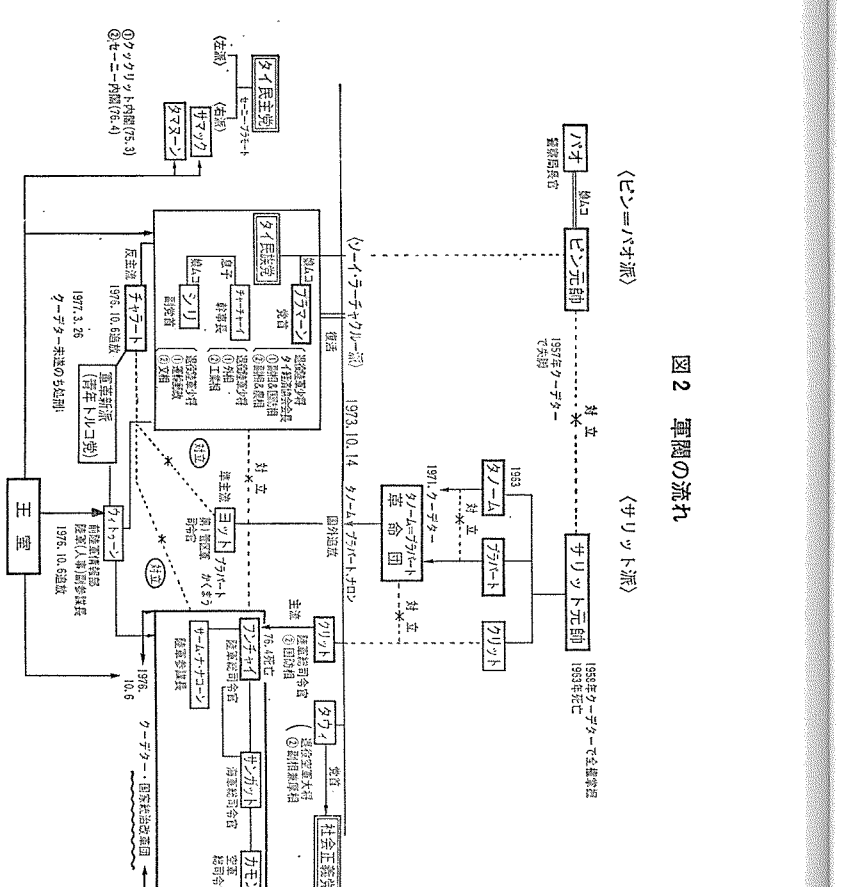
故クリット元帥　　クックリット元首相　　プラマーン・タイ民族党党首

因となった。

第三は、サリットの一九五七年のクーデターでパオとともに権力集団から排除されたピン元師の一族が再び政界に復帰してきたことである。彼らはタイ民族党(チャート・タイ。日本の新聞では一般にタイ国民党と訳されている。党首はピンの娘婿のプラマーン、幹事長はピンの息子のチャーチャイ)を結成し、住居をラーチャクルー通りに構えているところから、通称「ソーイ・ラーチャクルー」派と呼ばれた。

「10・14運動」以後三年間の政治権力は、大概以上の三グループが掌握していたが、最初の一年間は国王主導の下にサクディナー勢力がほぼ権力を制圧したといえるだろう。事実、首相にはサンヤー(前タマサート大学長)、国民代表議会の議長にはクックリットと、各々サクディナー勢力を代表する人物が要職を占めた。一方軍を代表するクリットは当時「民主主義をあくまで尊重する」という談話を発表し、彼らとあからさまに対立することを避けた。

図2　軍閥の流れ



「10・14」以後最初の総選挙がおこなわれたのは一九七五年一月のことである。この時軍とサクディナー勢力はほぼ議席数を二分した。しかしながら過半数を制する政党はなく、その結果最大の議席を獲得したタイ民主党のセーニーがまず首頭をとって連立内閣の組閣を図った。しかしこの試みは、タイ民族党、社会行動党が協力を拒んだため、内閣成立後わずか一週間で瓦壊してしまった。

ついで三月、今度は社会行動党のククリットが、タイ民族党、社会正義党との連立内閣を組織した。もっともタイ民族党と社会行動党は必ずしも利害が一致していたわけではない。しかし、タイ民族党の党首プラマーンは、タイ経済協会の会長及び繊維工業協会の会長をつとめ、日本や台湾資本と結託していた買弁資本家たちの間には大きな影響力をもっていた。一方タイ最大の銀行であり、当時繊維業界に対して最大の融資をおこなっていたグルンテープ(バンコク)銀行の副総裁は、社会行動党幹事長のブンチューであった。両党は経済面では密接に結合していたのである。

さらにタイ民族党のプラマーンは、陸軍のクリットと対立するチャラート等、軍内部のタカ派とはきわめて緊密な関係を保っていた。ククリット首相にしてみれば、タイ民族党と手を結べば一定程度、陸軍主流の権力を牽制することが可能と考えたわけである。かくて連立内閣の下でプラマーンは副首相兼国防大臣のポストにつく。

しかしこの両者を軸とする右派連立政権もその後次第に矛盾を深めていった。その第一の契機になったのは、ククリット首相の改良主義的政策、とりわけ米軍撤退路線の推進(彼は南ヴェトナムのチュー政権やカンボジアのロン・ノル政権の二の舞を極端に恐れていた)が、インドシナの全面的勝利の後、危機意識を高めていた親米反共グループ、たとえばプラマーンや軍とククリットとの対立を

激化させたことである。事実、プラマーンや社会正義党はククリットと違って在タイ米軍の部分的駐留を強く望んでいた。また一九七四―七五年に至る未曽有の繊維不況は、繊維メーカーに対する銀行資本家たちの発言権を以前にも増して増大させ、融資銀行であるグルンテープ銀行が繊維業界を支配する傾向が生まれた。

加えて、一九七五年一〇月の軍の定例人事異動では、陸軍総司令官にクリット系のブンチャイが就任し、クリットは対抗勢力であるプラマーン系の軍人の伸張を抑えるに至った。そして彼は、タイ民主党と手を組んで、タイ民族党や社会行動党の追い落としにかかってきた。

一九七六年一月一二日、ククリット首相は突如国会を解散し、四月総選挙を宣言する。この突然の解散宣言の理由の一つが、三月二〇日に予定されている米軍撤退の完了とそれに合わせた反米闘争の盛り上がりを「総選挙」ムードで追し流そうという点にあったことは否めない。しかしより根本的な理由が、民衆の運動の昂揚と米軍撤退という情勢の下で支配階級内部の対立がますます激化し、彼らの間で妥協の余地がなくなりつつあった点に存在していたことは明らかであろう。

Ⅲ 軍事クーデターへの道

1 テロの中の「4・4総選挙」

一九七六年二月二八日、タイ社会党書記長のブンサノーン博士が自宅からわずか数百メートル離

れた路上で、何者かによって暗殺された。この事件は、一九七四年以来一〇〇名以上に及ぶ一連の学生・農民指導者の暗殺に新たな犠牲者を加えた一事件であったが、同時にそれは、テロの嵐の中で実施された「4・4総選挙」の幕開けを象徴する血生臭い出来事でもあった。

もっともブンサノーン博士の虐殺に先立つ二週間前に、すでにバンコクに本部を構える新勢力党が、「赤い野牛」の爆弾の対象となり、二月一八日には、マヒドン大学の自治会副委員長であったアマレート君が、地方を旅行中に右派の凶弾によって斃れた。また三月一二日には、一九七五年一〇月以来ストライキを続けていたハーラー・ジーンズ工場が立ち入り調査を受け、翌日抗議に起ち上がった女子労働者たちは有無を言わさず強権的に逮捕された。ついで三月二一日には、バンコクの目抜き通りを埋めた反米闘争に爆弾が投げられ、八五人以上の死傷者を出す。そしてテロと弾圧が恒常化する中で、総選挙を目前に控えた三月二四日には、新勢力党の立会演説会に爆弾が投げられ、九名が死亡するという惨事が生じた。『ファー・イースタン・エコノミック・レビュー』の記事によると、この選挙期間中に実に三〇名以上に及ぶ人々が殺されたという。

まさにテロの吹き荒れる中で実施された「4・4総選挙」は、結局タイ民主党が前回の七二から一一四に議席を増大させ、以下タイ民族党が二八から五六へ、社会行動党が一八から四五へ各々議席を伸ばすなど、右派諸勢力の圧勝に終った。こうした勝利の背景には、米軍の撤退とタイの「左傾化」に危惧の念を抱いたクリット元帥、ウィトゥーン中将等軍部とタイ民主党、そして彼らの後押しを買って出たアメリカのテコ入れが、相当程度の役割を果たしたものといわれている。

一方左派諸政党の方は、タイ社会党、社会主義統一戦線、新勢力党の三つを合計してもたかだか

六議席にすぎず、前回の三七議席に比べて惨敗に終った。左派諸政党は、銃剣による妨害によって、今や完全に議会から締め出されるに至ったのである。そして総選挙の直前には、一〇名以上の学生・労働運動指導者が一九五二年反共法に抵触するという容疑で次々と逮捕された。反共法の適用は一九七三年の「10・14運動」以来、はじめてのことであり、それは総選挙後の民主主義の運命を示唆していた。まさに「4・4総選挙」は、「クーデターなきクーデター」を意味し、一〇月六日に断行された軍事クーデターの第一歩を記すものに他ならなかった。NSCTの書記長であったグリアンカモンが「もはやわれわれに残された道はジャングルしかない」というのも、この頃のことである。

2 親米反共グループの巻き返し

この「4・4総選挙」は、左派政党、民衆の弾圧だけでなく、支配階級内部の権力のバランスにも大きな変化をもたらした。

まず現役の首相であり社会行動党の党首であったクックリットがバンコクで落選した。軍部の票田といわれる第一地区で敢て立候補し、米軍撤退の是非をめぐって軍部との対決を試みた彼であったが、選挙の結果は、クックリットの完全な敗北に終ったわけである。

また今回の総選挙で圧勝し連立内閣の第一党となったタイ民主党も、議席数の割には力をもっていなかった。寄り合い所帯のタイ民主党は左派、中道、右派の三つに分裂し、政権を担うにはあまりに統一性を欠き、党首でかつ首相となったクックリットの実兄セーニーも党内から公然と「無能」

呼ばわりされる有様だった。

社会行動党、タイ民主党という、いわばサクディナー勢力を代表するグループが相対的に停滞を示している中で、権力抗争の前面にでてきたのは、一九七五年のインドシナの全面解放以後、次第に声を大にしていた親米反共グループ、とりわけ軍とタイ民族党に結集する「ソーイ・ラーチャクルー」派、それにタイ民主党右派のグループであった。

もっともこれらのグループは決して一枚岩的な存在であったわけではない。とくに「ソーイ・ラーチャクルー」派に属するプラマーン系のグループは、「4・4総選挙」に至る過程で軍の主導権をめぐって激しい抗争を続けていた。総選挙後の四月一四日の人事では、「ソーイ・ラーチャクルー」派につながるチャラートが陸軍総司令官補から陸軍副総司令官に昇格し、クリット系のブンチャイ陸軍総司令官のポストを狙っていた。一方クリット系は、先に見たように一九七五年秋の定例人事ですでに要職を自派で固めていたが、セーニーが政権を握るとクリット自身が閣僚入りを果たし、前クックリット政権下のプラマーンから国防大臣のポストを引き継いだ。

しかし国防大臣就任直後の四月二三日、クリットが突然病死することによって軍内部の力のバランスは大きく動揺することになる。権力をめぐる抗争は激化し、いくつかのクーデター計画が噂され、また消えていくという不安定な日々が続いた。こうした中で軍の内部には大きくいって五つのグループが存在したものと考えられる。

その第一は故クリット系に属するブンチャイ陸軍総司令官、サーム・ナ・ナコーン陸軍参謀長（一九七七年、陸軍総司令官）等のグループで、クーデターに至るまで主導的地位を維持した。第二

は旧タノーム＝プラパート系に属するヨット第一軍管区司令官のグループ。「10・14運動」以降、その勢力は後退したとはいえ、タノーム＝プラパート時代につくり上げた経済的基盤の強さは軍随一であった。第三は、「ソーイ・ラーチャクルー」派に近いチャラートと、彼を中心とする若手将校の集まり「青年トルコ」党のグループである。このグループは、五月六日の異例の人事で、チャラートが陸軍副総司令官から国軍最高司令部付の名目的地位に突如左遷され、またプラマーン付顧問であったパイトゥーン中将（ヴェトナム派兵のタイ義勇軍を指揮）も同じく国軍最高司令部付の閑職に回されたことによって、大きな打撃を受けた。軍内部では米軍存続についてもっとも強硬な意見を吐き、タカ派の先頭に立っていた彼らは、他のグループにとっては「時限爆弾」的存在であり、クーデターを画策していた中心的グループでもあった。さて第四のグループは、これら三つのいずれの派閥にも属さない「独立派」の連中である。グリアンサック（一九七七年国軍最高司令官、一九七七年一〇月国内治安維持最高司令官）、ウィトゥーンなどがそれに属する。最後に国軍最高司令部の存在も重要であった。一九五七年サリットのクーデター以後、国軍最高司令官の地位は陸軍が独占し、国軍の意向は即陸軍のそれと一致しているといっても過言ではなかった。しかしタノーム、プラパート追放以後、陸軍の権限は相対的に低下し、海軍総司令官サンガット（一九七六年一〇月及び一九七七年一〇月のクーデターの「首謀者」）が一九七五年秋、空軍総司令官カモンが一九七六年秋に各々国軍最高司令官に就任した事実に見られるように、「10・14」以降、海・空軍の発言権は上昇し、彼らはともすれば独走する陸軍を牽制する役割を果たした。

以上のように軍の内部には人脈を中心にいくつかの派閥が形成されていたが、しかし彼らは総体

としては共通の危機感を抱いていた。インドシナの勝利と国内共産主義勢力の伸張の中で、アメリカが在タイ米軍を引揚げ、また学生・民衆の民主主義を求める闘争が拡大することは、軍にとって明らかに「赤信号」だったのである。そしてこれらの危機感は、軍のみならず親米反共路線をとる「ソーイ・ラーチャクルー」派のタイ民族党や、タイ民族党に接近していたタイ民主党右派のサマック、ソンブーン、そしてサマックと通じていた王室(王妃系)とも相共通する意識だった。

3　独裁者の帰国

親米反共グループの危機感は、六月末にカオコオで政府軍が解放勢力に敗退し、六月二〇日に米軍の撤退がほぼ完了した時ますます高まった。またタイ民主党中道派に属するピチャイ外相の対インドシナ平和共存路線の推進(八月三日タイ・ラオス共同声明、同月六日タイ・ヴェトナム共同声明)は、タイ民族党やタイ民主党右派、それに軍内部の強硬派のセーニー政権に対する反発と不信感を以前にもまして強化させることになった。

まさにそのような時、独裁者プラパートは秘密裏に帰国したのである(プラパート帰国の経緯とその反対運動は第3章参照)。プラパート帰国を画策したのがいったい誰であったのかは今日依然として明らかではない。しかしヨット等プラパート系の軍人、「ソーイ・ラーチャクルー」派及びチャラートとそのグループ、そして民主党右派のサマック等が中心となってプラパート帰国の準備をすすめ、王室もこれを了承したというのが有力な見方である。この八月のプラパート帰国工作の意図は明らかに国内に混乱をひきおこしてクーデターの機会をつくり出し、同時に民衆の反応がどのようなものであるかを探知することにあった。しかし、第3章の諸資料に見られるように独裁者の帰国は広範な民衆の抵抗をひきおこし、彼らの意図は一週間でもろくも崩れ去る。

そこで彼らは、プラパート追放から一ヶ月経った九月一九日に、今度はタノーム帰国の計画を企てた(タノーム帰国の経緯と反対運動については第4章)。彼の帰国はプラパートの時以上に用意周到に進められた。つまりタノームは病床にあった高齢の父親を見舞うことを口実に、黄衣をまとい僧侶姿でタイに帰国したのである。これはタイ国民の仏教に対する厚い信仰を利用した狡猾な計画であった。

しかしこの奸計も、一九七三年の「血の日曜日」で多くの生命を奪った独裁者タノームに対する民衆の怒りと独裁体制の復活に対する彼らの強い警戒心を弱めることにはならなかった。逆にバンコクや地方の都市には、「タノームの犯罪」と題する特大のポスターが貼られ、NSCTや各大学の自治会、タイ社会党、全国反独裁戦線など諸組織は相次いでタノームの帰国に抗議する声明を発表した。また青年僧侶のグループも起ち上がり、タノームの出家は仏法に違反し、仏教を冒瀆するものである、さらに殺人者タノームの出家を認めた長老会(仏教界の内閣に相当する)は責任をとるべきだと抗議した。

国会の外でくり広げられていたタイ民衆の広範な運動と国会内での民主党左右両派の追及の板ばさみにあったセーニー首相は、九月二三日、国会の質疑応答の最中に突然総辞職を宣言し、セーニー連立内閣の基盤の弱さとその無責任性を暴露した。セーニーは二日後の二五日に再度首相に任命され、第二次内閣の人選にとりかかったが、この最も微妙な時期を、セーニーは暫定政権のまま迎

える結果になった。また人選中の新閣僚の中から民主党右派のサマックとソンブーンが意図的に除外されていたことは、クーデター推進派にセーニー追い落としの恰好の材料を与えることになった。

一方前日の二四日、ナコンパトゥム県で反タノームのポスターを貼っていた労働者二名(全国反独裁戦線ナコンパトゥム県支部の活動家)が生きたまま自動車工場の前に吊され殺されるというタイ史上例を見ない残虐な事件が発生した。そして二日後には『ルアム・プラチャーチャート』と『タイ・ラット』の両新聞が大々的に犯人は警官であると暴露し、反タノームの声はこれを契機にいっきょに全国的レベルに広がっていった。九月二九日、サナームルワンの広場で開かれた抗議集会はすでに三万人を越す大規模な運動にふくれ上がっていた。

この日の集会で代表者たちはタノームの即時追放とナコンパトゥム県の殺人事件の犯人逮捕を政府に要求し、一〇月二日までに回答するよう迫った。しかし二日、NSCTをはじめとする代表者たちと会見したセーニー首相は、後者についてはただちに調査すると約束したもののタノームの追放については確約を拒絶した。そのためサナームルワンの広場に結集していた学生・民衆は一〇月四日以後無期限集会にはいることを決定し、タイ全国労働会議も政府が断固たる措置をとらなければゼネストも辞さないという決意を表明した。

4　血の水曜日

クーデターを画策するグループとそれに反対する学生・民衆、そしてほとんどなすすべを知らず

優柔不断な政策をとり続けていたセーニー暫定内閣の間の緊張は、今や極点に達していた。サナームルワンからタマサート大学構内に会場を移した学生・民衆は「10・14運動」の発祥の地であるラソ・ポー広場の前に集まり、独裁政権復活の阻止に全力を注いだ。もちろんタノームに対する抗議の声が強まれば、ますますクーデター遂行の口実になりうることを彼らが知らなかったわけではない。しかしクーデターを阻止するためには、抗議の声を一〇万人にも一〇〇万人にも広げる以外、今や彼らにとるべき道はなかった。「10・14運動」の三周年記念日は一〇日後に迫っていた。あの日独裁政権を崩壊させたのは、広場・街頭を埋めた無数の学生・民衆の声ではなかったのか。

一方クーデターを狙う「ソーイ・ラーチャクルー」派、軍の一部、タイ民主党右派は、セーニー内閣の崩壊と学生・民衆の弾圧を狙って、全国の右派に総動員をかけ、共産主義勢力がタイの王制をくつがえそうとしているとデマを流し、彼らの危機感を煽った。

クーデターを画策する連中にとって、あとはきっかけさえあればよかった。なければデッチ上げるだけだ。それにタイ全国労働会議はゼネストの構えを見せ、地方でもバンコクの抗議に呼応する動きが活発化していた。もはや彼らに猶予はなかった。

五日の朝、一つの写真が新聞のトップを飾った。昨夜タマサート大学で演じられたナコンパトゥム県の殺害を真似た寸劇の写真がそれである。軍と「ナワポン」はこの写真にとびついた。寸劇で首吊りを演じた役者の顔がワチラロンコーン皇太子に似ている、これは皇室侮辱罪ではないかと非難したのである。とくにデッチ上げの専門紙であった右派系の『ダーウ・サヤーム』紙の写真は皇太子の顔に酷似していた。

タイ民族党のプラマーンの支配下にあり、王室とも通じていた「ヤーングロ（機甲師団放送）」はここぞとばかり政府をつき上げ、NSCTと学生の代表をただちに不敬罪で逮捕するように要求した。「ヤーングロ」は五日の夜を通じて、セーニー首相に左派の閣僚の追放とサマック、ソンブーンの入閣を求め、さらに全国の「ナワポン」、「ルーク・スア・チャーウ・バーン」にバンコクに結集するよう呼びかけ、露骨にタマサート大に集まる学生を殺せ！　と連呼した。

一〇月五日の深夜、ついにセーニー首相は軍と右派の圧力に屈して、NSCTの幹部他寸劇の責任者たちの逮捕を命じる。そして六日の午前二時に、警察局長官はタマサート大の攻撃を指示した（以下、タマサート大での殺戮については第5章参照）。すでにタマサート大に召集されていた警察、暴動鎮圧隊（内務省の直轄）、BPP等は、M16やバズーカ砲で構内にたてこもる無防備の学生・民衆を一方的に撃ちまくり、大学を取り巻く「赤い野牛」や「ルーク・スア・チャーウ・バーン」、それに「ナワポン」は逃げだしてくる学生たちに襲いかかり、殴り、蹴り、吊し、突き刺し、あまつさえ半死の彼らを焼き殺した。

このタマサート大における大虐殺――血の水曜日事件――によって、政府の発表では四六名の人々が殺され、一六〇名以上が負傷、三〇七五名が不敬罪、反共法の違反等で即日逮捕された。しかし殺された学生・民衆の数は、実際には二〇〇名を越えたといわれる。

5　軍事クーデター

タマサート大学構内、その前に広がるサナームルワン広場、そして大学の背後を悠然と流れるチャオプラヤー川を若い血で染めた六日未明の殺戮は、その日の午前一〇時頃から鎮静に向かった。しかし続々とバンコクに上京する「ルーク・スア・チャーウ・バーン」や「ナワポン」のメンバーは、タマサート大の虐殺では飽き足らず、さらに前日成立したばかりの第二次セーニー内閣の崩壊をめざして首相官邸に押し寄せていった。一方官邸内では、緊急閣僚会議が開かれ、その席上ではプラマーンが激しくセーニー首相を問いつめていた。セーニー政権の崩壊はもはや時間の問題でしかなかった。

そして午後七時、元国軍最高司令官のサンガット・チャローユーが、本日午後六時をもって「国家統治改革団（カナ・パティループ・ガーン・ボッククロン・ペーン・ディン）」が全権を掌握したとクーデターを宣言し、タイ全土にただちに戒厳令を施行した（クーデターについては第6章参照）。かくて「10・14」の三周年記念を目前に控えた一〇月六日に、タイの民主主義は暴力的に圧殺され、タイは再び軍部独裁下の暗黒政治に逆戻りしたのである。

ところで今回のクーデターは、タマサート大の大虐殺を命令したグループと同じメンバーが遂行したのではなかった点に注意する必要がある。先に見たようにタマサート大の弾圧は、プラパートの帰国以来、クーデターの機会を狙っていた「ソーイ・ラーチャクルー」派等が警察、右派組織を動員して計画的に遂行したものであった。しかし彼らがクーデターの断行に踏み切る前に陸、海、空の三軍は最高幹部会議を昼過ぎに開き、一足先に全権を掌握したのである。もちろんこのことは軍部がタマサート大の弾圧に関与していなかったことを意味しているのではない。軍はタマサート大の虐殺に暗黙の了承を与えつつ、これをうまく利用する形でクーデターを断行したわけである。

そしてクーデターが成功した後、「国家統治改革団」は、四月以来対立が激化しつつあったプラマーン、チャーチャーイ、シリ等の「ソーイ・ラーチャクルー」派を権力集団から排除し、さらに彼らとつながっていたチャラートも僧院に追いやることによって、支配階級内部の対立にも一時的な結着を与えたのであった。

一〇月六日のクーデターは、いくつかの点で従来のクーデター――一九三二年の立憲革命以来少なくとも五回のクーデターが成功している――と明らかに異なっていた。

従来のクーデターは、文官派と武官派、あるいは軍内部の権力抗争がその直接的な原因になっていた。たとえば、一九四七年ピブーン等「政変団（カナ・ラッタプラハーン）」のクーデターは、文官派のプリーディーと陸軍の対立が直接の原因であったし、一九五七年のサリット率いる「兵士団（カナ・タハーン）」によるクーデターもピブーン派、パオ派とサリット派の軍・警察内部の対立が背景にあった。もちろん今回のクーデターもその背後に権力抗争の性格をあわせもっている。しかし「国家統治改革団」のクーデターを何よりも特徴づけていたのは、一九七三年以後、体制危機に直面していた支配階級全体が自らの権益を維持するためにむき出しの暴力で民衆を徹底的に弾圧したという点であった。

それともう一つ。今回のクーデターで顕著であったことは、王室がかつて見られないほど陰に陽に政治的舞台に登場してきたことである。確かに王室は先の「10・14運動」の時でも、三暴君の追放やその後の政治的調整の過程で積極的な役割を果たした。しかし今回の場合には、王室は「10・14運動」の時とは逆に明らかに民衆を弾圧する側に回ったのである。プラパートが台湾に追放され



クーデター後，「ルーク・スア・チャーウ・バーン」の挨拶をうける国王．右隣はワチラロンコーン皇太子

る直前に国王に謁見したこと、タノームが出家したボーウォンニウェート寺が国王ゆかりの寺であること、一〇月一日に皇太子が突如留学先のオーストラリアから呼び返されたこと、今回のタマサート大の弾圧に直接手を下した右派諸組織、ＢＰＰ、落下傘部隊、さらにタイ民主党右派が王室と密接な関係にあったこと等は、「血の水曜日」事件において王室がいかなる役割を果たしていたかを間接的に物語っていた。また「血の水曜日」までテコ入れしていた「ソーイ・ラーチャクルー」派や右派組織の暴走に危惧の念を抱き三軍協力による軍事クーデターに最後の承認を与えたのも王室であった。なお王室が一〇月六日の時点で、クーデターの実施を「ソーイ・ラーチャクルー」派ではなく三軍に委ねたというのは興味深い事実である。王室にしてみれば、「ソーイ・ラーチャクルー」派は、一九五七年頃のパオや一九七一年～七三年の時のタノーム＝プラパートのように独裁的権力を行使し、その結果王室をないがしろにしかねない可能性をもった危険な存在だった。むしろあくまで王室の意向を受けて行動するようなサンガットやターニン新首相の方が彼らにとってははるかに

好ましい人物であったのである。

かくて一〇月六日のクーデターは、従来超越的存在として尊敬されてきた王室が、現実的な政治の世界でいかなる機能を果たし、かつまた彼らの階級的基盤がどこにあるのかを、タイ民衆に明確に悟らせる契機になった。

その結果、解放勢力の地下放送である『タイ人民の声』は、一〇月六日以降タブーであった王室批判を開始し、一九七七年二月一三日にはワチラロンコーン皇太子の乗った軍用車が直接攻撃を受け、ついで二月一六日にはシリキット王女が殺されるという未曽有の事態が生じた。

タイの王室は、隣国ラオスの王制廃止に衝撃を受け、自己の地位存続のためにあからさまな民衆弾圧をおこなったが、そのことはかえって王制の基盤を根底から動揺させる契機を自らの手でつくりだすことになったのである。

6　武装闘争へ

あなたはおぼえているだろうか／血の一〇月一四日のことを／あなたはおぼえているだろうか／あなたの兄弟や姉妹が弾丸と催涙ガスの吹き荒れる中で／粉砕されていった時のことを／自由を叫んでその素手を振り上げたとき／残酷にも撃たれ、轢きつぶされていった／彼らの魂に安らぎと栄光があるように／それは正義を求めて闘い続ける人々に勇気を与えてくれるだろう

勇敢な人々よ／さあ翔んでいけ／あなたの夢は限りなく貴い／あなたの巣から遠く翔んでいけ／その翼の下にいる人々はあなたを慕うだろう／翼を広げて／さあ翔んでいけ

黄色い小鳥たちよ／あなたは行ってしまう／あなたは自由の魂／今あなたはその生命を全うした

クーデター後、全権を掌握した「国家統治改革団」は、表現、出版、集会、政党結社等あらゆる自由を禁ずる「命令」を次々と放送を通じて発表した。ちょうどその頃、タイ共産党の地下放送である『タイ人民の声』は、レギュラー番組を中断して鎮魂歌の代わりにこの歌を静かに流した。「黄色い小鳥」――この歌は、「カーラーワン」と呼ばれるグループが「10・14運動」の後に作詩作曲し、爆発的にタイでヒットした歌である。その後さまざまの集会で、ストライキ中の工場で、この歌は歌い続けられた。三年間、タイ東北部の農村で「生きるための歌」を歌い続けた「カーラーワン」は、一〇月六日以降ジャングルにはいったと伝えられている。

軍部独裁を復活させたサンガットと、後に国王によって任命されたターニン首相は、今回のクーデターはタイに「秩序と安定」をもたらす上で止むをえないものであったと語った。しかし彼らの言う「秩序と安定」とはいったい何であったのか。人々は表現の自由を失い、ペンを取り上げられ、労働者はストライキの権利を奪われた。大学は厳しい監視の下に置かれ、夥しい数の新聞、雑誌、本が全国の店頭から完全に姿を消した。

全国の大学、高校で授業が再開された時、ラームカムヘーン大やタマサート大、あるいはマヒドン大やチェンマイ大から多くの「行方不明者」が続出したという。彼らのうち一部は「血の水曜日」で殺されていった人々であろう。しかし森に走り、地下に潜った人々も少なからずあった。その数は二〇〇〇とも六〇〇〇ともいわれている。

森にはいり、すでに一〇年前から武装闘争を展開している人民解放軍に参加していった人々は何も学生に限らなかった。一〇月六日以降次々と『タイ人民の声』放送を通じて発表された諸組織の「武装闘争宣言」は、そのことを如実に物語っている。たとえば、タイ社会党（一〇月二一日、『タイ人民の声』放送の声明発表日、以下同様）、元学生活動家であるセクサン、ティラユット、ウェーン、ウィサー等の共同声明（一〇月三〇日）、繊維労働者、ドゥシタニ・ホテルのストライキを指導したタードプーム、プラシット両名の声明（一一月二〇日）、NSCTの声明（一九七七年一月二日）、タイ教師の権利を守るセンターの声明（一月一五日）、タイ社会主義統一戦線の声明（二月一八日）、ジャーナリスト・スィーの「私が選んだ道」と題する声明（五月二九日）、音楽家グループ「ガンマーチョン」の声明（六月五日）、良心的教師の代表であったチョンティラー女史の声明（六月一三日）等々。また常に闘う僧侶の先頭に立ってきたマハー・ジャットもジャングル入りしたというニュースが伝えられた。さらにタイ共産党は、一九七六年一一月二四日に、広範な統一戦線を呼びかける声明を発表し、一二月一日には一〇年ぶりに新たな一〇大綱領を公表した。一方すでにジャングル入りを果たしたタイ社会党は、今年の四月六日、中央執行委を開いて「戦時綱領」を発表し、人民解放軍との連帯を明らかにした(第8章参照)。

このような相次ぐ「武闘宣言」にともなって、人民解放軍の攻撃も日増しに激化している。『タイ人民の声』放送によると、一九七六年の一年で解放勢力は二四六一名の敵を倒し（一〇一五名死亡、一三〇〇名負傷、一四六名捕虜）、一九七七年一月～三月の統計では、すでに一〇〇〇名以上の敵をせ



「共産主義浸透地域」

※ 1976年12月25日、「国家統治改革団」命令第25号(1976.10.17)と1952年反共法(1969年改正)にもとずいて、内閣官房が公式に発表した「共産主義浸透地域」35県(直ちに共産主義掃討作戦を展開すべき地域)の地図である。

出所：THE NATION REVIEW (1977.1.20号)

—— 行政区分
…… 県 境
● 県庁所在地

ん滅したといわれる（前年同期比で五〇％以上の増加）。政府側が公式に発表した「共産主義浸透地域」は、全県七一のうち実に三五に及ぶ。

一方、サンガット＝ターニン政権はこうした事態に対して、徹底的な反共政策をとった。その最初の行動は、一〇月一三日の国家統治改革団命令第二二号「社会にとって危険な人物」にもとづく全国的「赤狩り」の展開である（第7章）。政治犯の救済にたずさわっているある団体の報告によると、第二二号による逮捕者は、「10月6日事件」による三〇〇〇名の逮捕とは別に全国で八〇〇〇名以上に達した。さらに彼らは、今徹底的な「反共・王室崇拝」のイデオロギーの鼓吹に汲々と執着している。しかしすでに述べたように、「10月6日事件」で王室に対する民衆のイメージは根底から動揺しつつある。支配階級はもはや「王権のイデオロギー」だけでは、支配の正当性を維持しえない。そこで彼らが強調してきたのは、外資導入――とりわけアメリカの軍事援助と日本の経済援助――による反共軍事国家の建設構想（サリット体制の焼き直し）であった。しかしこの構想は、日々の新聞が報じるように厳しい現実の前で次第に色あせつつある。

加えて今年の三月末には支配階級内部の対立が顕在化した。先の一〇月六日に権力奪取を試みた軍内部のタカ派チャラートと「青年トルコ」が三月二六日に再びクーデターを企て、首謀格のチャラートが死刑に処せられた事件がそれである（クーデターにはチャラートのみならず、多くの軍首脳も参画していた）。この事件は、王室が主導する現サンガット＝ターニン政権の基盤がきわめて不安定であることを白日の下にさらす結果となった（事実、一九七七年一〇月にターニン首相は追放された）。

一〇月六日のクーデター以降、森にはいっていった人々はその「武闘宣言」の中で、「10・6の

意志を継承し、実現しよう！」と訴えた。一〇月六日に流された夥しい血、「10・14の意志」に代わる「10・6の意志」とは、いったい何であったのか。

それは大きく言って三つの意味があったと言えよう。その第一は、民主主義を求め、それを守る闘いは必然的に体制変革をも含まざるをえないということである。「10・14運動」は確かに議会制民主主義をもたらした。しかし、支配階級そのものの根本的打倒は、この三年間結局、果たしえなかった。今、彼らは知っている。真の民主主義は、支配階級であるサクディナー勢力と軍部、買弁資本家、それとその背後にいる帝国主義諸国の打倒の上にはじめて成立することを。

第二は、このような課題を実現するためには、平和的な手段ではなく、広範な民衆による武装闘争以外ありえないことを、今回のクーデターは、はっきりと示した。タイ共産党とタイ社会党、そしてその他の諸組織との統一行動は、明らかにタイの人民闘争の新しい段階を示している。

第三の意味は、今回のクーデターが、タイの王室のイメージを根本からくつがえしたという点である。すでに述べたように、「10月6日」の弾圧で、王室は決定的な役割を果たした。そして、タイ民衆はこの役割を決して見逃すことがなかった。今タイでは、秘密裏に、王室の土地所有の実態が暴露されている。バンコク商店街の一等地、バンコク近県の土地が王室財産管理局の所有地であることが徐々に明らかにされつつある。タイの王室はもはや超越的存在ではなく、タイ最大の地主であり、サクディナー勢力の頭目であることが人々の間で認識されつつあるのだ。

ここに一人の男がいる。名前はティラユット・ブンミー。彼は一九七二年一一月NSCTを基盤に日本商品ボイコット運動を組織し、一九七三年の「10・14運動」では、その中心的人物として活

躍した。もっともこの時彼はあくまで平和的集会を主張し、武力対決をめざすセクサン等のグループとは路線の上で最後まで対立した。その後彼は、市民組織の一つとして「ポチョ・ポチョ」を結成、あらゆる民主主義を求める闘いそして反米闘争を指導し、それに参加していった。その彼が公然と武装闘争を主張するようになるのは、一九七六年春以降のことである。そして一〇月六日のクーデター以後はただちにジャングルにはいり、一〇月三〇日には『タイ人民の声』放送を通じてセクサン等と武装闘争宣言をおこなった。さらに後になると彼は王制批判を含む声明を発表する。彼のこの五年間の軌跡は、ある意味ではタイの民主主義を求める運動、「10・14の意志」の変遷そのものを象徴しているのかもしれない。そして程度の差はあれ、このわずか三年の間に、少なからぬ人々が自らの生き方を変えていった。そしてそれ以上の人々が今、タイの未来を見つめつつ自らの歩むべき道の選択を迫られている。

タイは今、新しい段階にはいった。タイの民衆は、今自らの力で、自らの将来を切り拓こうとしている。かつて民主主義を擁護するためにつくられた詩は、一〇月六日のクーデター以後解放の詩に変わった。

流された血は償わなければならない
民衆よ、起ち上がれ！
死者のために闘おうではないか
独裁者たちは私たちの土地を血と涙で染めてきた

彼らは私たちの血を償わなければならない
この数年、独裁者は国を売り、愛国者たちを殺してきた
流された血は血で償おう！
流された血を復讐で償おう！
涙をふいて
そして怒りを鎮めるために

第２章

反米闘争



《解　説》

タイにおける反米闘争が最初の大きな盛り上がりを迎えるのは、一九七五年五月のことである。反米闘争の引き金になったのは、「マヤグエス号事件」――五月一二日にアメリカ国籍の貨物船「マヤグエス号」がスパイ行為の容疑でカンボジアの砲艦にだ捕された事件であった。タイ政府はこの事件に関して、米軍がタイ国内の基地を使用することをただちに禁止し、その旨をアメリカ側に通告した。しかしフォード大統領はこの通告を無視して、一四日に沖縄等から海兵隊員七〇〇人以上を強引にタイのウータパオ基地に移駐させた。そのためタイ・米両国間の関係はいっきょに悪化し、同時に全国各地でアメリカの不法行為を憤る声が高まった。海兵隊が進駐してから二日後の一六日、クックリット政権は緊急閣議を開いて駐米大使の召還を決定し、NSCTをはじめとする学生組織や、タイ社会党等も一五日から米大使館に向けて、連日抗議のデモを繰り返した。二万人を越えるこの抗議運動では、NSCT、「ポチョ・ポチョ」、カセサート大学アメリカ帝国主義駆逐戦線、タマサート大学教官グループ、僧侶グループなど、一〇以上にわたる団体が抗議声明を発表し（資料3、4）、さらに海外に住むタイ人もこの運動に呼応する動きを示した。

タイの反米闘争は、この「マヤグエス号事件」を契機にして本格的な第一歩を踏み出し、一九七六年三月二一日のラーチャダムナーン通りを埋めた大規模な反米デモでその頂点を迎える。そして彼らの反米反帝国主義の精神は、それと緊密に結びついていた独裁者たちに対する闘争、一九七六年八月、九月の反プラパート、反タノーム闘争に継承されていった。しかし反米闘争の紹介に移る

前に、タイにおける米軍の撤退交渉について簡単に触れておこう。というのも、タイの反米闘争が最大の目標として掲げていたのが、他ならぬ在タイ米軍の問題であったからである。

アメリカとタイの間で米軍撤退の問題が最初に取り上げられたのは、一九六九年七月のニクソン・タノーム首脳会談の時であった。ニクソン大統領は、この会談直後に有名な「グアム・ドクトリン」を発表し、アメリカの新しいアジア戦略、つまりアジア人によるアジアの自主防衛、自助努力の方針を明らかにした。タイからの米軍の段階的撤退という方針も、この「グアム・ドクトリン」に沿う形で進められたわけである。両国はタノーム・ニクソン会談の合意にもとづいて、九月三〇日、まず翌年七月までに在タイ米軍六〇〇〇人(当時タイに駐留する米軍は五万人に近かった)を撤退させることを決定し、一〇月から実際に撤退が開始された。

しかしその後、米軍撤退は必ずしも順調に進展していったわけではない。アメリカはヴェトナム和平交渉を有利に進めるため、一九七〇年四月にはカンボジアに米軍を派遣し、同時に北爆も再開した。また一九七一年二月にはラオスに侵略し、戦火をインドシナ三国に拡大していった。こうした相次ぐ武力行使の中で、タイは再びインドシナ侵略戦争の前進基地と化し、この間在タイ米軍の数も、減少するどころかむしろ増加の傾向を示すことになった。そして一九七二年の解放軍の春季攻勢によってアメリカの完全な敗北が明らかになり、一九七三年一月にパリで「ヴェトナム和平協定」が締結されると、タノーム首相は公然と「在タイ米軍はタイの安全にとって不可欠である」と発表するまでになった。またこの一月には南ヴェトナムの米軍事援助司令部が米支援活動司令部と名を変えて、東北タイのナコンパノム基地に拠点を移動させ、在タイ米軍の数は、ヴェトナム戦争

の「終結」とは裏腹に、一九六八年当時の最盛時に迫る勢いを示した。

こうした情勢の中で、タイとアメリカが再び米軍撤退の交渉を再開するのは、アメリカがカンボジア爆撃を停止する一九七三年八月以降のことであった。八月一七日に両国は共同声明を発表し、在タイ米軍の存続を前提としつつ、第一回目の部分的撤退が九月に実施された。しかしその後撤退交渉は再び棚上げの状態になり、タイは当時三万五〇〇〇人の米軍を国内に駐留させたまま、「10・14運動」を迎える。

「10・14」以後首相に任命されたサンヤーは、当然のことながら米軍の完全撤退を、自らの外交政策の最重要課題の一つとして掲げた。しかしいつ実施するかについては明言をさけ、結局この問題はサンヤー政権の下ではほとんど進展を見ないまま、クックリット政権に継承されることになった。

一九七五年三月、首相の座についたクックリットは、その施政方針の中で懸案の米軍撤退について言及し、一年以内に撤退を完了させることを確約した。タイの反米闘争が本格的な展開を見せたのはこれ以後のことである。

もっともNSCTは、すでに一九七三年春の段階で、一九七二年一一月の日本商品ボイコット運動以降のNSCTの主要課題は反米闘争であると言明していた。そして一九七四年七月四日にはアメリカの独立記念日にあわせて大規模な反米デモの準備が着々とすすめられていた。しかしこのデモは、その同じ日に中国人街で起きた暴動とそれに対する警官の大量出動(八名が死亡)によって中止を余儀なくされた(そのため、暴動は政府側の陰謀という噂が流れた)。

それから半年、一九七五年四月末のインドシナの全面的解放直後におこった先の「マヤグェス号事件」は、学生を中心とする反米闘争をより広範な民衆が参加する運動へと発展させる一大契機となった。そしてその年の七月四日のアメリカ独立記念日には、デモこそおこなわれなかったが（「赤い野牛」による妨害が伝えられたため、主催者側が中止した）、タマサート大学に多数の学生・民衆を集めて反米集会が開かれた（資料5及び6のポスター）。

このような反米闘争の盛り上がりとインドシナ情勢の変化の中で、クックリット首相は米軍撤退政策を本格的に開始した。しかし米軍の駐留を強く望む軍の圧力と、ラマスーン・レーダー基地等の存続を主張するアメリカ側の意向によって交渉は難航し、クックリットが公約した一九七六年三月二〇日の米軍撤退完了の最終期限は、四ヶ月先の七月二〇日まで延長されることになった。

一方三月二〇日に向けて反米闘争を組織化していたNSCT等は、「一九七六年三月二〇日の意志――四つの支持と四つの反対」と題する声明を発表し（資料7）、翌三月二一日には米軍の完全撤退を求める一大反米デモを展開した。しかしこの日のデモにも爆弾が投げられ、八五人以上の死傷者を出すに至った（資料8）。

そして四ヶ月後の七月二〇日には、最後の大がかりな反米集会が、ラームカムヘーン大や各地の大学で開かれた。もっとも「4・4総選挙」以後のタイの政治状況はきわめて厳しく、反米闘争を組織していたNSCT等は、右派諸組織の襲撃や噂されていたクーデターを回避するために慎重な行動をとらざるをえなかった（資料9）。以上のように、タイの反米闘争は、アメリカの地上軍のアジアからの撤退、そしてインドシナにおける解放軍の劇的な勝利という情勢変化の中で、主として

在タイ米軍の完全撤退をめぐって展開されたが、しかし彼らの闘いの対象は単にアメリカ帝国主義による軍事的政治的支配にのみ限っていたわけではなかった。さまざまの声明が明らかにしているように、彼らは帝国主義による経済的、文化的支配に対しても、この三年間果敢な闘争を組織していった。その典型を示すのが、「テムコ社」によるタイのスズの採掘と販売の独占である。この「テムコ事件」は、アメリカ帝国主義の経済的支配と、タノーム＝プラパート等独裁者の売国的行為を最も象徴的に物語る事件として広くタイ民衆に伝えられ、それに反対する反テムコ闘争は反米闘争の重要な一翼を担うことになった（資料10）。

資料1

なぜ、タイに米軍基地が必要なのか

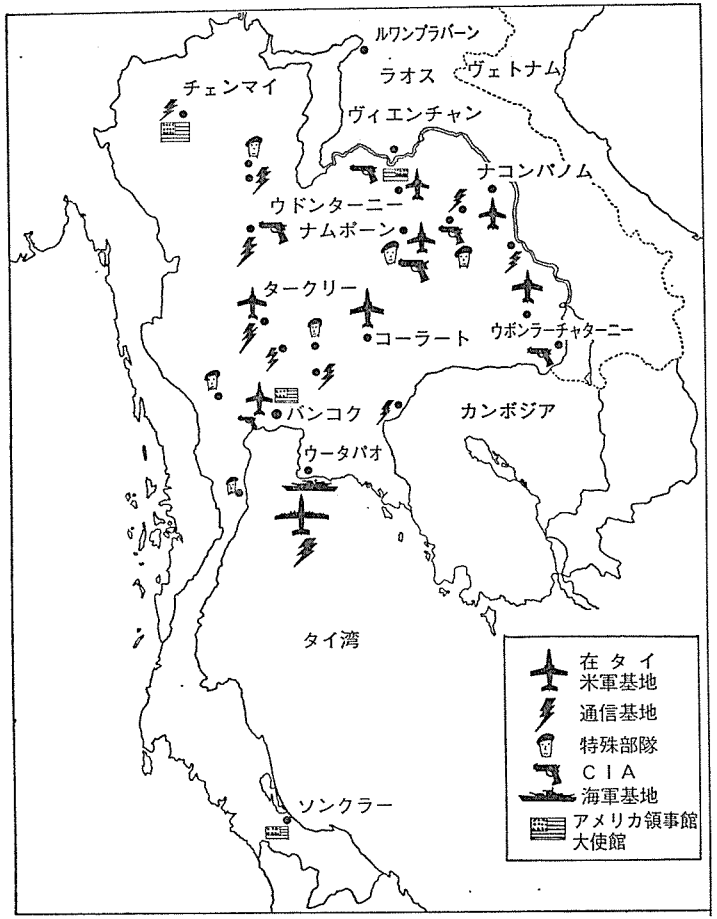
タイ米軍基地に反対する委員会
（一九七五年七月）

「タイの安全」と米軍

過去二〇年間、ありとあらゆる独裁的行動を正当化させるために、「安全」という決まり文句が代々のタイ政府によって用いられてきた。とりわけ一九五四年、タイが東南アジア条約機構（SEATO）に加盟し、アメリカがはじめてこの国にはいってきた時、この言葉はきわめて頻繁に聞かれた。その当時から今日にいたるまで、米兵やアメリカの軍事基地は、代々の政府により、タイの「安全」にとって基礎をなすものとみなされてきた。米軍はタイの安全に本当に必要なのか、この問いに答えるためには、われわれはまずタイの「安全」の目的とその定義を考察しなければならない。

タイ政府の〝二重政策〟

国家の安全を保障するため、タイは過去二〇年間二重の政策をとってきた。北ヴェトナムのイン



在タイ米軍基地・地図〔1975年7月現在〕
（タイの進歩的文芸・評論総合雑誌『プウトゥチョン』第6号，1975.8，32ページより）

ドシナへの進出を封じこめようと画策する一方、ラオスやカンボジアの近隣諸国政府の実権が、バンコクに友好的な支配者集団の手に保持されるようにしむけてきたのである。しかしながらこうした政策は、長く血なまぐさいインドシナ戦争の引き延しとその拡大に貢献するだけで、タイの近隣諸国にとってはきわめて不利なものであることが明らかになった。それらはタイの基本的な安全に寄与するのではなく、隣国たるラオス、カンボジアそして北ヴェトナムとの敵対をひきおこし、逆にインドシナにおけるタイの地位を弱める結果となった。特に、これまでタイ政府は、アメリカが近隣諸国と戦うための軍事基地としてタイを利用するのを快諾してきた。しかしこれはタイの安全に対してきわめて致命的な影響を与えたのである。

在タイ米軍駐留は違法

アメリカのタイへの入国は、三つの主要な場合に分類することができるだろう。

第一に、一九五〇年に締結されたアメリカとタイとの間の軍事援助協定の下ですすめられたタイ軍隊への米軍事顧問・連絡部隊の編入。

第二に、一九六一年のSEATO条約の共同演習条項の下での（一〇〇〇人）、並びに、一九六二年の同条約に関するラスク＝タナット共同声明の下での（一万人）米軍の入国。

第三に、SEATO条約、またはラスク＝タナット声明を引き合いに出すことなくしばしばなされた米軍の入国。これは一九六三年（七〇〇〇人）にはじまり今日まで続いている。

タイにおける米軍の規模は、入国まで規定した条約は何ら存在しなかったにもかかわらず、一九六三年から一九七三年に至る一〇年間の間に着実に増大した。このことは注目すべきことである。後になると、米軍はヴェトナムからタイに非合法的に移駐されただけではない。ヴェトナム駐留アメリカ軍事援助司令部（MACV）もまた、何ら名義上の変更をおこなうことなく、タイ東北のナコンパノムに移されたのである。一九六三年以降、アメリカは一九五〇年の軍事協定をタイ国内での軍事活動を正当化させるものとして絶えず引き合いに出してきた。しかしながら、一九五〇年の軍事協定はタイ軍へのアメリカ軍事顧問・連絡部隊編入だけを規定しているにすぎない。その他には何ら成文協定がない以上、このことは一九六三年以後の米軍の入国は何ら正式の条約に従ってはいなかったことを示している。アメリカによって一九五〇年の協定が絶えず引き合いに出されてきたという事実は、こうした正式の条約が実際に存在する可能性がほとんどないことを意味している。バンコクとワシントンの信頼できる筋が確認したところによると、アメリカの軍事活動は現実にはアメリカ政府とサリット、タノーム両首相との間の二代にわたる個人的協定のもとにのみ遂行されたものであって、国際法上は何らの効力もない。タイの軍事活動に関して尋ねられると、アメリカはただ、タイ首相から許可を受けていると答えるだけだったのだから。

インドシナの平和のために

何年もの間、タイにおける米空軍基地の存在はタイの安全にとって必須であると、タイ並びにアメリカの両政府は主張してきた。しかし、経験からすれば、その存在はただアメリカの利益になるだけである。タイの利用は、B52爆撃機の飛行距離を大幅に短縮することによって、米軍の北爆の

費用を大いに減少させただけであった。もっともこれだけではない。タイの利用は、CIAが関与する偵察飛行や秘密作戦活動を相当促進した。

従来のタイ政府のきわだった傾向は、正式の条約がないにもかかわらず、アメリカにタイにおける軍事活動の自由を認め、周辺の諸国に対する侵略をおこなう基地としてタイを用いることを許してきたことである。このため、タイはインドシナの近隣諸国の尊敬を失ってきた。タイに米軍が存在するという現状はアメリカ人にとってのみ有利であるにすぎない。このことは明らかにタイの安全にもインドシナの安全にも何ら貢献していない。タイにとっては、その国土から米軍基地を撤去することは決して驚くべき処置とはいえない。むしろ、タイが国家主権を保持しており、東南アジアに平和と繁栄をもたらすため近隣諸国と協調していく用意があることを示すのに役立つだろう。タイの安全を考える際、現在タイ政府が直面している真の課題は、インドシナの真の平和を確立することである。

（注）反米闘争のためにつくられたパンフレット『THE SECOND STEP』の編集部解説より。

資料2

占領されたタイ

R・A

一九六八年初めに
世界で最も薄汚ない殺し屋が
タイにはいり込んできた
B52爆撃機が
F15、F45戦闘機が
ラオスに六七二二回も
北ヴェトナムに五五九二回も出撃し
そして四万三〇〇〇人の人々が
それを操縦し、整備し、防備した
それらが飛びたったのは

かつては静かで、住みよい所だった
コーラート、タークリー、ウドン、ウータパオ
ナコンパノム
しかし今、そこには米軍基地がある
米軍の占領によって売春がはびこり
今やどこもかしこも地獄に変わってしまった

年々侵略はひどくなった
しかしそれにも増して抵抗も大きくなった
ある基地では、国民の闘士たちが
攻撃をしかけた
彼らに向けられた一般の人々の眼差しは
どこでも感謝にあふれていた

資料3

タイ全国学生センターの声明

タイ全国学生センター
全国反独裁戦線

タイ国民のみなさん

先日カンボジアは、自己の領海内に侵入したアメリカの貨物船「マヤグエス号」をだ捕しました。これに対してアメリカ政府は、ただちにカンボジアが船を釈放しないならば、断固とした手段に訴えると声明をだし、具体的には海兵隊をウータパオ基地に派遣し、同時に第七艦隊を事件の発生した地域に移動させるであろうと発表しました。

そして一九七五年五月一四日、午前四時四五分に、アメリカは海兵隊員八〇〇人をウータパオ基地に進駐させたのです。一方タイ政府は、今回の事件に関して一三日以降アメリカがウータパオ基地を利用することは絶対的に禁止するという発表をおこないました。

今回の事件はあくまでアメリカとカンボジア両国間の紛争であり、タイはこれとまったく関係がありません。アメリカ帝国主義は彼らの悪辣な陰謀がインドシナ人民によってついえ去ったにもかかわらず、絶えず情勢を煽り立て、それによって戦争をひきおこし自国の権力を拡大し、さらに夥

しい数の生命と財産の犠牲の上にインドシナから莫大な利益をかき集めようという計画を依然として持ち続けているのです。今回アメリカは、タイ政府が反対したにもかかわらず、自らの利益のためタイ国内に海兵隊を進駐させました。このような行為は、タイの主権を完全に侵害するものです。彼らはどんな時でもまるでタイが独立国でないかのように基地を利用してきましたが、これはタイ政府、軍、そして全てのタイ人を侮辱する行為であるといえましょう。さらにアメリカの海兵隊がウータパオに進駐することは、タイ国をそしてタイ国軍と国民を彼らの紛争にまき込むことを意味します。このような薄汚ない悪しき計画はひいては戦争をひきおこし、祖国を愛する兵士の生命を奪い取ることになりましょう。そしてタイがこのような紛争に介入すれば、国民もまた多くの生命を失うことになるのです。

アメリカがタイを戦争にまき込むことに反対しましょう。

軍・警察のみなさん、公務員のみなさん、そして国を愛する各界各層の国民のみなさん。私たちはアメリカがタイの主権を侵害することを断じて許しません。私たちはアメリカがタイ人の生命を奪うことを決して許しません。そしてアメリカが今回タイ政府の命令を無視したことを決して許しません。

私たちは次のように要求します。政府は――

1　ウータパオ基地に午前四時四五分進駐してきた海兵隊とその兵器をタイからただちに撤退させろ！

2　政府は、今回のアメリカとカンボジアの両国間の紛争に関連してアメリカがタイ国内の基地、戦争兵器を利用することを断じて許すな！

3　政府は、今回のアメリカとカンボジアの両国間の紛争に、タイ兵士そして国民の財産と生命を絶対にまき込むな！

私たちは以上のことを政府が実施し、さらに声明にしたがってウータパオやその他の基地をアメリカが利用するのをやめさせるよう要求します。そして私たちは、協力して最後までタイの主権を守っていくことを求めます。

団結して独立を守ろう！

（注）　一九七五年五月二五日のサナームルワンでの反米集会を呼びかけるビラより。

資料4

僧侶グループの声明

独立・民主主義・正義を愛するタイ全国僧侶グループ
（日付なし）

カンボジアは今年五月一二日に、アメリカの貨物船「マヤグエス号」を自国の領海を侵犯したとの理由でだ捕した。これに対してフォード政権は同月一三日に軍艦、駆逐艦、軍用機、武器その他をともなう多数の海兵隊を、沖縄の基地からタイのウータパオ基地に移駐させた。このようなフォード政権の措置はタイとタイ国民の独立・主権を侵害し、かつまたカンボジアのような小国を威嚇するきわめて悪辣な行為である。今度の事件で、正義を愛する全世界の人々の前に「帝国主義」の正体がはっきりと暴露された。タイ国民と正義を愛する全世界の人々はこうした行為を決して許しはしない。われわれはフォード政権に強く抗議し、彼らが、ただちに海兵隊とその兵器をすべてタイから撤退させることを要求する。もし要求に従わないようなら、フォード政権は必ずや国家の独立と正義を愛するタイ国民から厳しい報復を受けることになるだろう。

われわれ「独立・民主主義・正義を愛するタイ全国僧侶グループ」は、フォード政権に対してあくまで断固とした抗議をおこなうようタイ国民そして正義を愛する全世界の人々に呼びかける。わ

れわれは、フォード政権がタイの基地を利用してアジア及び全世界の同胞たちを虐げることを決して許さない。

カンボジア、タイの国民、そして正義を愛する全世界の人々は、アメリカ帝国主義の爆弾が、はじめて東南アジアに落とされ、その結果、数百万のこの地域の国民が殺戮されたときから、彼らに対して激しい怒りの情を抱いてきた。アメリカ帝国主義のこのような行為は「全世界の国民の独立・主権を略奪する泥棒」といった言い方が最もあてはまるような行為である。タイ国民は団結してフォード政権のこのような行為に抗議し、かつ団結して彼らをわれわれの国土から追い出さなければならない。さもなくば、至る所で侵略をおこなっているアメリカは必ずや大厄災をもたらすことになるだろう。

われわれは、フォード政権が海兵隊とその兵器をただちにタイから撤退させることを重ねて要求する。なぜなら彼らの行為はタイ国民の独立と民主主義を侵害するものであり、われわれは決してこのようなことを許しはしないからだ。

（注）ティラウィット他『誰が主権を侵害しているのか』（一九七五・五）付録資料一九五―一九七ページより。

資料5

七月四日へのアッピール

在日タイ人グループ
（一九七五年六月一九日）

タイ人のみなさま

インドシナの平和が、長い間国民が血を流して闘って来た末に、やっと実現されました。それは、彼らが平和を願ってアメリカの侵略や脅威に対抗し、自国の独立を擁護することを目指して闘い、最後にかちとった勝利ではないでしょうか。

このインドシナ戦争の経験は、われわれに次のことを教えました。つまり、タイ国の隣の国の民衆を、二〇年間にわたって残酷に殺してきた世界の愚かな国に、間違って協力してきたことを、われわれは反省しなければならないと。そして、もしアメリカの軍事施設、軍隊、さらに軍事基地が、アジア全体、とりわけタイ国土内に残存する限り、インドシナの真の平和への光明はありえないのではないでしょうか。

マヤグエス号事件は、それらの軍事基地が、あくまで他国を侵略しようとする国の利益のために用いられていることを明らかにした好箇の事例であります。アメリカは、インドシナ戦争で敗北しましたが、しかし、インドシナで戦争をおこす意志は放棄しておらず、まるで世界を支配しようとしているかのようであります。したがって、もしタイ国にこのまま外国の軍隊と軍事基地が存在し続けるならば、それは必ずや、タイ国の独立と主権に対してきわめて危険なものになると確信します。

アメリカ民衆の独立宣言記念日というこの意義深い七月四日に際し、われわれ在日タイ人は、次のように訴えかけたいと思います。

1　アメリカが、タイ国民の宣言どおり他国に侵略するために用いられてきた軍事基地並びに軍隊の即時完全撤退を実行していないという事実に対して、われわれはアメリカ政府を強く批判します。

2　アメリカが、軍隊、軍事基地、レーダー網、さらに軍、警察の顧問団を完全に引き上げ、またタイ国内における秘密の諜報活動をやめることを、われわれは強く訴えます。

3　インドシナにおける友好関係の破壊に導いたインドシナ戦争にやむをえず参加させられた原因であり、またタイ国が自由に自国の政策を決定することを妨げている、タイ・アメリカ間の条約の廃棄を、われわれはタイ政府に訴えます。

4　さらに七月四日、タイ国においておこなわれる国民の反米軍基地運動に対し、われわれは、彼らを全面的に支援し、ともに闘っていくことを表明します。

われわれは、タイの独立と主権が確立するまで以上の訴えをおこなうことを、ここで再度確認いたします。

（注）このアッピールは、英語と日本語の両方で発表された。本資料は日本語のアッピール文から採録。

資料 6



1975. 7. 4　反米ポスター

（7.4反米集会のために作られたポスター．英語版のポスターは世界中に配布された．タイ文の意味は「アメリカ帝国主義を打倒し，タイ民主化を進めよう！」）

資料7

「一九七六年三月二〇日の意志」を支持する声明

在米タイ人民戦線
（日付なし）

一九六二年以来、アメリカは多数の軍隊をタイへ派遣し、さらに多くの恒常的基地、レーダー基地、通信施設をタイに建設してきた。表向きの理由は、敵の外からの侵略からタイを守り支援することにあると言われた。しかしそれは実際には勢力拡大と侵略を狙うアメリカ帝国主義の一貫した政策にすぎなかった。

アメリカがタイを自国の基地と化し、近隣友好諸国に戦争を仕掛けたこと、それにこれら友好諸国の情報を秘密に入手するためにタイにレーダー基地及び通信施設を建設したことは、彼らが直接タイ国民を憎悪し敵対する原因になっただけでなく、タイが事実上、アメリカの植民地、アメリカの奴隷に他ならないことを示す証左となった。

アメリカの支配は単に軍事的側面に限っているわけではない。政治、経済、社会及び文化の全てに、その支配は及んでいるのだ。したがってタイは政治的諸政策を自分自身で実施することができず、アメリカの経済的奴隷に今やなり下がってしまった。また社会的文化的諸問題も多数ひきおこされた。たとえば、娼婦、麻薬、賭博などの問題はその一部であり、精神的道徳的退廃現象もますます深刻になりつつある。

アメリカの支配によって生じたこれらの由々しき結果をふまえた上で、われわれ在米タイ人は、タイ政府がこれらの問題を十分認識しただちにこれを解決すること、また政府は約束を守って一九七六年七月二〇日までに全ての軍事基地、レーダー基地、通信施設をタイから撤退させることを政府に要求する。

タイに対する外国勢力の支配は、アメリカによるものだけではない。実際にはいくつかの強大国もタイを支配している。われわれはタイ国の、完全な主権と民主主義を獲得するために、ここでタイ国民の四つの反対と四つの支持からなる「一九七六年三月二〇日の意志」を支持することにしたい。

四つの反対

1　タイに存在する外国のあらゆる形態の軍事基地及び軍隊はタイの主権を侵害しており、しかもそれは近隣諸国の活動に介入し、武力的に侵略するために利用されている。われわれはこうした基地、軍隊に断固として反対する。

2　われわれはあらゆる形態の外国の政治的介入及び政治的支配に断固として反対する。

3　われわれは外国の経済的搾取及び資源の略奪に断固として反対する。

4　われわれはあらゆる形態の文化的教育的支配に断固として反対する。

四つの支持

1　われわれはタイの主権と国民の民主主義を守るような国軍を心から支持する。
2　われわれは国家の自由を守り、国民の幸福および利益を守るような政策を支持する。
3　われわれは国家の自立的な経済政策を支持する。
4　われわれは国民の大半を占める貧しい人々おおよび搾取されている人々のために奉仕するような、そして大半の国民の要求にもとづきタイの文化を発展させるような教育政策を支持する。

以上国民の全ての要求が実現されるまで、われわれは要求を貫徹し、国民のみなさんとともに最後まで闘っていくであろう。

（注）声明中、「三月二〇日の意志、四つの反対、四つの支持」はタイ全国学生センターが発表したもので、全文は一九七六年三月二三―二五日付『アティパット』紙に掲載された。

資料8

タイからの手紙「流血の3・21デモ」

〈解　題〉

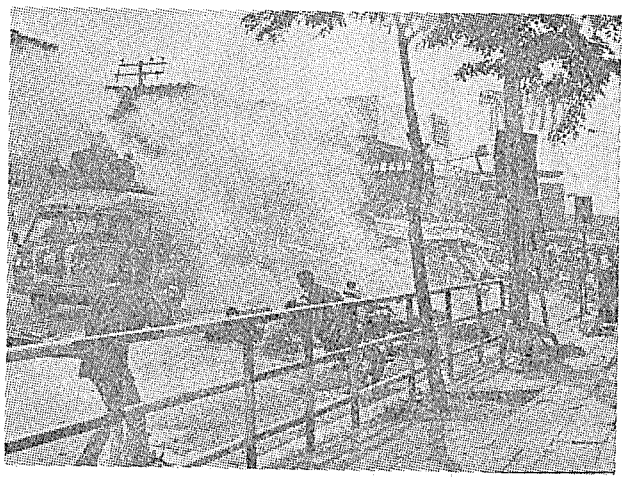
在タイ米軍の撤退期限の切れた三月二一日、NSCT（タイ全国学生センター）を中心とするタイ民主勢力は、「撤退せよ！」という叫びをせせら笑うかの如く居すわりを続ける在タイ米軍を無条件・即時撤退させるべく、在バンコクアメリカ大使館に対して怒りのデモを組織した。しかし、米軍の撤退に本能的危惧を抱くタイの保守支配層は、CIAと結びつくかたわら、行動右翼を雇い入れ、タイ民衆の闘いを弾圧している。この日も、デモがサヤーム広場にさしかかった時、右派から爆弾が投げこまれ、デモは流血の修羅場に早変わりした。しかし、民主勢力の不屈の闘いは、そのような妨害を断固としてはねのけ、アメリカ大使館へのデモを貫徹したのである。この「3・21流血デモ」の模様を伝える手紙が、最近私たちのもとにせられた。この手紙は在タイのある日本人から届けられたものだが、三月二一日のタイ民衆の闘いを知る上で大変貴重なものであると思われるので、ここに掲載する。（日タイ青年友好運動ニュース編集部注）

三月二一日のデモの様子をお伝えします。二〇日には何かがおこると予想され、サンデーマーケットもたたず、サナームルワン（王宮前広場）は静かでしたが、夜にはいってたくさんの人を集めて開かれた国立劇場前の道路での集会にはプラスチック爆弾が投げこまれました。しかし学生たちは連日の緊張とあわただしい動きにもかかわらず、明るい顔で、「明日、アメリカ大使館に向けてデモをするからいっしょに行きませんか。水筒をもってね」などと言っていました。

二一日の朝一〇時から同じ場所で集会が開かれました。始めは人の集まりが悪く、こんな少しの人でデモができるのかと思ったほどでしたが、昼過ぎ頃から暑さにもかかわらず人が増え始めました。宣伝カーの上ではタマサート大自治会の委員長さんがさかんに演説をしています。それから、



1976. 3. 21　反米デモ



デモに爆弾投下

ハチマキをしめて太鼓をもったグループが車の上で、タイの農民の歌のリズムで「アメリカは出ていけ！」という歌をうたって調子づけています。民衆に親しみやすいリズムと歌を使って即興でデモのスローガンを歌うのはとても見事で、感心しました。そのうちにリズムにあわせて踊りが始まります。集会に来た一人一人にタイの国旗が手渡され、車の上のリーダーの合図でオーオーと叫んで一斉に旗をふります。とても楽しいものです。彼らリーダーのアレンジは実にうまく、人々をだんだん励まし、調子づけてきて、デモに出発です。

赤と青と白の小旗が人々の手に手にふられるのは美しいと思いました。日本なら日の丸を振ることなどは右翼しかやらないでしょうが、米軍は出ていけと国旗をふるのは、ここでは若々しいナショナリズムなのです（彼らは他の面でもちろんインターナショナルな心を持ち合わせてもいるのですが、この問題に関する限り、国の主権と独立をかちとるナショナリズムに燃えているのだなとつくづく思いました）。出発したデモ隊は予想をこえて、バンランプーの方へ行きます。というのは、職業学生のグループが民主主義記念塔のところで集会を開いて待ちぶせしていたからです。デモ隊は彼らを避けて、シャルムタイの映画館前にでてきました。職業学生のグループは、マイクで人々にＮＳＣＴのデモに加わらないように叫んでいます（彼らはバスを乗っ取り、デモ隊を阻止しようとしました）。デモをしている若い人たちの自信にあふれた誇り高い輝いた顔と比較すると、職業学生のグループのなんと卑屈なこと！　彼らはギャングのようです。モラルも尊厳もないＣＩＡの犬！　しかし、彼らの劣等感やフラストレーションを利用して、金で彼らを動かす人々の汚なさと残酷さはもっと罪深いものです。

衝突の危機は去りました。デモ隊は橋を渡ってラン・ルアン通りにはいります。いつこんなに人が増えたのでしょうか。みんなは手をつなぎ、歌をうたっています。みんな若い人ばかりです。車の上でこぶしをふりながら、身をのり出すようにして歌をうたう学生、その姿は私に鮮烈な印象を与えました。何と言ったらよいかわからないけれど、彼らには、困難な中でこの闘いをやりぬいている自分たちに対する自信と、誇りと歓びがあふれていました。いっしょに歩いていたタイの友人は、「僕は、この国を誇りに思う。こんなにたくさんの若い人たちが、今こうして胸をはって歩いているんだ。アメリカ軍を追い出すために」と言いました。実際こんなに厳しい日ざしの中を、サナームルワンからアメリカ大使館のあるウィータユ通りまで歩くなんて気が遠くなりそうです。デモの横では、コーラやファンタを売る屋台がいっしょに歩いてついてきます。紙コップに氷をたくさん入れた一バーツ(約一五円)のファンタは、飛ぶように売れています。こういう屋台の人々の耳の早さは驚くべきものです。たくましい生活力。

パヤータイ通りのアジアホテルの前あたりの橋の上でデモ隊は止まりました。目の前はサヤーム・スクエアー(広場)です。「ガティン・デェーン(赤い野牛)」が待ちぶせしているというううわさが流れました。私たちは先頭を行く大きな太鼓をかかえた音楽隊、リーダーたちの乗った宣伝カーのすぐそばにいました。襲われるとしたら真っ先に銃撃され、爆弾を投げこまれる可能性があるのはここだと聞いて、いやな気がしました。こんなところでまだ死にたくはありませんから。その時、職業学生のグループがラーチャダムナーンにあるNSCTの事務所を襲撃したというニュースがはいりました。みんなデモに出ていて、こちらに神経を集中しているのだから、彼らになされるがままです。でも、こんなことは先週から職業学生が事務所をいっしょに使わせろといやがらせをしてきたので、ある程度予想してあらかじめ書類などはみんな移動してあったそうです。アジアホテルの前の坂の上からみたデモ隊の長いこと、こんなに大勢いつの間に人が増えたのでしょうか。実に壮大な眺めでした。昨年のマヤグエス号事件の時を上まわる七三年の一〇月以来の大きなデモでした。まさに国の進路を左右する重要な歴史的なデモだったのです。しかしこんなに大きなデモが何の妨害もなくアメリカ大使館に着けるとは思いませんでした。右翼はみすみすこんなことを許すはずはないのです。

サヤーム・スクエアーを左に折れてデモ隊は進みます。今日は日曜日なので、買物をする人、デモを見に来た野次馬もたくさんいます。デモ隊は手をつないで道の端に縦につながっており、道路の真ん中の人たちは、みんな勝手におしゃべりしたり、さとうきびをかじりながら歩いています。顔見知りの友達を見つけて手を振ったり、歌をうたったり、こんなに緊迫した状況だというのに楽しげで、まるで日本の歩行者天国のようでした。

インターコンティネンタルホテルを少し過ぎた時、突然ドスンという鈍い音がしました。一瞬何がおこったのかわかりませんでした。車の上のリーダーが「走らないで坐れ、坐れ!」と叫びました。みんな不安に襲われ走り出して何がおこったのか確かめようとしました。もうパニックです。リーダーはみんなを冷静にするために必死で歌をうたいました。

突然、うしろからトラックが猛スピードで走りぬけました。顔をこわばらせ、こぶしをふり上げ

た学生が屋根の上に乗っています。二台、三台と猛スピードでサイレンを鳴らして車がかけぬけた時、車の上に横たわっている人の体が真っ赤な血に染まっているのを見ました。血！　血じゃないか！　いったい何が……？　伝令がとんできて、車の上のリーダーに何か伝えました。一瞬グリアンカモン（NSCT書記長）やタマサート大の自治会委員長は真っ青になり、卒倒しそうでした。タマサート大の自治会委員長は蒼白で、よろよろしており、友だちが彼を抱きかかえるようにしていました。グリアンカモンは泣きそうな声で、全力をふりしぼるようにして、サヤームセンターのビルの上から、プラスチック爆弾ではない本物の爆弾が投げられ、銃撃も受け、四人が死亡、たくさんの人々がケガをしたことを伝えました。デモ隊の若い学生たちはいきりたち、「彼らに報復を！」と叫びましたが、リーダーはみんなを冷静にするために必死で歌をうたい続けました。みんな今にも泣きそうになりながら必死で歌いました。血のついたシャツを着た学生たちが、怒りと闘いの決意を示すようにこぶしを高く握りしめて、トラックで病院に向けて走りぬけていきます。リーダーたちは、あれほど衝突を避けるように、流血をみないように、平和なデモを組織するように努めてきたのに、死者を出すことになってしまってさぞ無念だったでしょう。

そして、車の屋根の上に乗っているリーダーたちの狙われやすいこと！　グリアンカモンは、「もし今、車の上に乗っている僕たちがやられたら、誰でもこのマイクを取って、デモを続けてほしい」と叫びました。デモは続行することになり、エラワンホテルの前の交差点をぬけて、プラーンチットにはいりました。両側には、高いビルがたくさんあります。どのビルに彼らが潜んでいて、いつ下のデモ隊めがけて発砲、爆弾を投げるかわかりません。恐かったです。さっきまで胸をはって歩いていた学生が死んだなんて！　四人の中には子供も混じっていたといいます。きっと、物売りの子供か浮浪児でしょう。胸のあたりがキューンと痛くなるようです。

両側の高いビルをみんな見上げて監視しながら歩きました。生きた心地はしませんでした。セントラルデパートの前を右に折れると、ワイアレス通りです。ここは緑の木が多く高いビルはないからもう安心です。それに、アメリカ大使館はすぐそこです。とうとうやった！　アメリカ大使館の前までデモをやりとげたのです。痛ましい犠牲者を出したけれど、こんな多くの人々がデモをしたことによって、この勢力がどんなに大きいか、どんなに強いものであるかを示したのです。緑の並木の静かなアメリカ大使館の通路に、みんなベッタリと坐りこんでしまいました。もう五時をとっくに過ぎていました。朝からこの強い日ざしの中をここまで歩いてきたのです。リーダーは、ヘルメットに身をかためた大使館のガードを前にして、英語で演説をはじめました。そして、デモ中ずっとかかげてきた立看板を大使館入口にたてかけ、集会を終りました。アメリカはもうこの国にいられないでしょう。革命は予期したより早くおこるでしょう。でもその前に何人の人が犠牲にならなければならないかを考えると胸が痛みます。

私の友人たちが生きのびて、人間が人間らしく生きられる社会主義の国を建設することを願わずにはいられません。

（注）『日タイ青年友好運動ニュース』第12―13合併号（一九七六・二・二五）掲載。

資料9

拝啓タイ国民のみなさま

カセサート大学学生自治会、チュラロンコーン大学学生連合
ラームカムヘーン大学学生自治会、マヒドン大学学生連盟
タマサート大学学生自治会、タイ全国学生センター
（一九七六年七月二〇日）

なぜ七月二〇日に行動しなければならないのか？

七月二〇日は、タイの主権を取り戻すことを政府が国民に対して約束した最終期日です。しかし、実際には、政治面でのアメリカの支配はまだ完全に払拭されず、政府のいくつかの機構に彼らは依然として影響力をもっています。ラマスーン基地などはその典型でしょう。経済面でも同じようにアメリカは年々タイの資源から大量の利益をもち去っています。また文化面でも同じで、タイ国民は自分たちの素晴らしい文化のかわりに、腐敗堕落したアメリカの文化を好むようにしむけられています。これらの事実は、タイにまだ完全な主権が存在していないことを示しています。タイはあらゆる面でアメリカに支配されているのです。

だからこそ私たちは起ち上がって、わが国が完全な主権を取り戻すためにありとあらゆる方法をとるよう政府に訴えていかなければなりません。

なぜ、七月二〇日にはデモも集会もおこなわないか？

なぜ、私たちは七月二〇日にデモも集会もおこなわないのか？ それは一九七三年一〇月一四日に、血を流し犠牲をだしてかちとった民主主義を守り、国民に敵対する連中がこの機会を利用してクーデターをひきおこすのをわれわれが避けたいからです。

七月二〇日の行動予定

1 わが国の主権に関する事実及びこの問題に関する国民の意見について、国民のみなさんのもとへボランティアを派遣し、話し合う予定です。

2 これまでアメリカの支配と闘い、命を失った、私たちの勇気のある英雄を偲ぶために劇及び展覧会をおこないます。劇と展覧会はラームカムヘーン大学とカセサート大学で午後四時から開始する予定です。

3 国民のみなさん、生徒、学生がわが国の主権の問題について他の人々と話し合いができるように、なるべく多くの機会をもうけるつもりです。

私たちは、正義及びわが国の主権を愛するみなさんとともに最後まで闘っていくことを誓います。わが国が完全な主権を取り戻し、国民のみなさんが平等と社会的正義を獲得するまでわれわれは闘います。また今後の行動はできるだけ慎重かつ平穏に、そして憲法が定める民主主義の権利の枠内でおこないます。今後の行動は、国民のみなさんの利益に沿う形ですすめていきます。

（注） 七月二〇日の反米集会にむけて各地で配布されたビラより。


[1] ฟอยเหมือนจะเกิดได้ยังไง
ลาดตระเวนเข้าไปในหมู่บ้าน
ยิงปืนกราดเข้าไปในบ้านเรือน
ยิงเสร็จแล้วก็ไปเก็บศพ
ยิงเสร็จแล้วก็ไปเก็บศพ
ยิงเสร็จแล้วก็ไปเก็บศพ



7　しかし正義を愛する国民の集会は、いつも政治的暴力団たちによって妨害された！



8　今回も同じように利益を失いつつある連中は、国民の団結力を破壊しようとして事実に反する情報をデッチ上げた。彼らは独裁体制を再びタイに復活させようとしたのである！



9　彼らの思うつぼにはまりこみ、彼らに悪辣な行動をとらせる機会を与えないためには、国家主権と正義を愛する国民の運動はそのやり方を変え、もっと慎重に行動しなければならない。

資料10

テムコ事件の真相

南タイのラノーン、パンガー、プゥゲート、チュムポン、スラートターニーの各県一帯をおおうアンダマン海の海底(面積四万七〇〇〇ライ)には、約一兆バーツ相当のスズ鉱石がある。しかしこの鉱石はアメリカ企業の手によって独占され、一九五九年以降毎日約三〇〇～四〇〇万バーツの国益が収奪されていった。この陰謀を企てたのは故サリット元帥である。故サリット元帥は、自分の地位を確保するための資金源としてアメリカのユニオン・カーバイト社と結託してスズの探索権をアメリカ系企業に排他的に与え、タイ国民の資源を略奪した。

その悪辣な計画の全貌は次のとおりである。

東洋経済鉱山株式会社――幽霊会社

タイの法律に従えば鉱山業者はタイ国籍の企業でなければならない。そこでアメリカは売国奴たちをつうじて次のような陰謀を企てた。

1　東洋経済鉱山株式会社を設立し、一九五七年四月二三日に会社の登録をおこなった。登録資本金は二〇〇〇万バーツで発行数は二万株である。

2　ついで一九六三年五月三〇日に、サリット政権はその地域の排他的探索権を東洋経済鉱山株式会社に与えた。一方東洋経済鉱山の資本金は、五〇〇万バーツに引き下げられ、これを二万五〇〇株に分けた。株主はタイ人ばかりで一六名。このうち閣僚が一万八〇〇〇株（全体の七二%）を所有した。その内訳は

故サリット元帥	一万四〇〇〇株
タノーム元帥	三〇〇〇株
プラパート元帥	五〇〇株
ウィチャー（鉱物資源局長）	五〇〇株

なお東洋経済鉱山株式会社が探索を許された面積は一〇万一七二八ライで、期間は三年間に及ぶ（当時の鉱山法第四五条は、海底の鉱物資源の探索は三〇〇〇ライ未満、期間は一年未満と定めているが、東洋経済鉱山はこの法律を完全に無視していた）。

3　一九六九年一月一日、タノーム政権は、探索地域のスズの採掘権を東洋経済鉱山に与えた。当時の株主の株所有数は、権力の変化にともなってかなり変わっている。

タノーム元帥	五七一四株
プラパート元帥	七〇一五株
残りの株は、両者の配下に（チャムナーン他二名）	

テムコ社の設立——見えざる吸血（金？）会社

政府との間に交わされた契約は、この利権を東洋経済鉱山と他社との合併会社以外に譲渡することを禁止していた。そこで売国奴たちは、テムコ社（Thailand Exploration Mining Corporation, TEMCO）という合併会社を新たに設立し、一九六九年四月一一日にその利権をテムコ社に譲渡した。しかしこのテムコ社は決して合法的な合併会社ではなかった。それというのも、東洋経済鉱山が保有する株は、払い込まれていない幽霊株（Unpaid Shares, フン・ロム）だったからである。

設立当時のテムコ社の登録資本金は六〇万バーツで、一株一〇〇〇バーツ、六〇〇株であったが、利権を譲渡された後は、資本金は四二〇〇万バーツに増額され、四万二〇〇〇株になった。そしてこの株は次のような株主に各々配分された。

1　幽霊株（金が払い込まれていない株）	
東洋経済鉱山株式会社	一万六八〇〇株
プラパート、アンポン、チンタカーノンなどタイ人個人株主六名	各一株
2　払い込まれた株	一万六七九四株
ユニオン・カーバイト社	二万五二〇〇株
タイ人一名、外国人六名	二万五一九三株
	各一株

収奪——誰が儲けたのか

このテムコ社への利権譲渡によって東洋経済鉱山は一八億六三五〇万バーツを儲けた。しかしこれは国家の収入にはならなかった。

また東洋経済鉱山はその後テムコ社の持株全部をオランダ系のビリトン社に売り渡し、八七〇〇万バーツを受け取った。さらにこの収入の申告はいっさいおこなわず、一六〇〇万バーツ相当の脱税をおこなった。

(注) ビリトン社は一九七〇年にシェル・カンパニーの支配下にはいった会社である

一九六九年以後、テムコ社は年間約六億三〇〇〇万バーツのスズを採掘しており、その利益は次のような株主に持株に応じて配分されている。(一九七四年末現在)

ビリトン社	二万一九九五株
ユニオン・カーバイト社	二万一〇〇〇株
四人の外国人	四株
タイ人(ウィパット)	一株

このようにしてタイのスズ採掘は、ビリトン社とアメリカ系のユニオン・カーバイト両社が支配するテムコ社に独占され、スズの精錬と輸出も、この両社が半分ずつ出資しているタイサコ(Thailand Smelting And Refining Company, THAISACO)が完全に牛耳っていた。

反テムコ闘争

以上の事実を見れば、売国奴一味と外国資本家が一体となってタイ国民の資源を略奪していることは明らかである。この一部の事実についてはマスコミも一九七四年八月に報道したが、政府は何

の措置もとらなかった。

一方南タイの住民は自分の生活を維持するため、前と同じようにスズの採掘をおこなおうとしたが、テムコ社は独占的な利権をたてにとって警察に訴え、彼ら住民を逮捕させた。このような理不尽な事態と弾圧に対して、住民は長い間忍耐を重ねてきた。しかし事態がどんどん悪化したため、彼らは政府に対してテムコ社の利権を取り消すよう要求し、またバンガー県の県知事であるタワット・マカラポーンも住民の要求を支持する動きにでた。

これに押された政府は、この問題を官吏汚職防止委員会にかけ、事実と法に照らして、利権の停止が是か非か検討する旨を発表したが、この過程で一部の政府高官が圧力をかけテムコ社の利権を正当化する動きにのりだした。そこで事実の経緯を知る住民たちと学生は、タイの資源を保護し、汚職と売国奴と外国資本家の癒着関係を糾す反テムコ闘争を組織的に開始した。

そして一九七五年一月二〇日には、多数の住民・学生が政府に対して次のような二項目要求をつきつけた。

要求文

1 現政府はタイ国民の利益を守るため、ただちにテムコ社の利権を停止し、法にもとづいて損害賠償を請求すること。

2 過去及び現在においてこの事件に関係している政府官吏、売国奴をただちに取り調べ、職務

上処罰し、かつ裁判にかけること。」

一九七五年一月二〇日

タイ全国資源保護戦線

テムコ社からビリトン社へ

学生・民衆の反テムコ闘争に直面したタイ政府は、ついに一九七五年、スズの採掘権をテムコ社から取り上げ、自ら「海洋鉱物資源公団」を設立した。一方テムコ社は、自身の株をビリトン社に譲渡し、ビリトン社をつうじてスズ独占の継続を図った。

一九七六年、当時セーニー政権の下で工業大臣をつとめていたチャーチャーイ（タイ民族党）は、公団に対して次のような提案を、つまり公団のかわりに入札によって民間企業にスズの採掘を委託するという提案をおこなった。そしてこの提案にもとづいて入札が実施され、最終的にはビリトン社が（換言すればテムコ社が）スズの採掘委託権を獲得した。

この時タイのチャーチャーイ工業相が主張したビリトン社へのスズ採掘権の譲渡の理由は、次の四点である。

1　テムコ社で働いていた労働者の失業問題の解決に寄与する。

2　ビリトン社に委託すれば、採掘権を取り上げられたテムコ社が、タイ政府を相手どって訴訟をおこすことを宥和することができる。

3　テムコ社は、スズ鉱石の分布図とスズに関する調査報告をビリトン社に譲渡しており、スズ採掘の許可がおりれば、彼らはタイ政府にそれら二つの資料を譲渡することを公約している。

4　タイ海洋鉱物資源公団は、今のところ操業できるだけの準備が整っていない。

なおビリトン社は、年に一七〇〇トンのスズを採掘すれば、そのうち六〇パーセントを公団に引き渡すことを約束していた。

しかしこのような主張に対してタイ全国資源保護戦線、NSCT、そしてタマサート大の環境保護クラブなどは一斉に反対の声をあげた。その主な反対理由は次のとおりである。

1　政府とビリトン社の間に交わされた契約によると年採掘量が一三〇〇から一五〇〇トンの場合はタイ政府が四〇パーセント、一五〇〇から一七〇〇トンの間なら五〇パーセント、一七〇〇トン以上の時には六〇パーセント各々スズ鉱石を取得しうる。しかし一九七五年度の年採掘量は一二三三トンであったため、タイ政府はそのうちわずか三一・二五パーセントしか取得できなかった。

2　テムコ社は、政府に譲渡すると約束した資源分布図と調査報告書を譲渡しなかった。これは明らかに公約に違反する。

3　公団は、現在急いでスズの採掘をおこなう必要がない。というのも鉱物資源はそのまま放置しておいても損われることがないからである。

4　テムコ社の失業問題は事実に反する。テムコ社で働いていた人々は大部分が技術者で、他の会社に転職することはそれほど困難ではない。

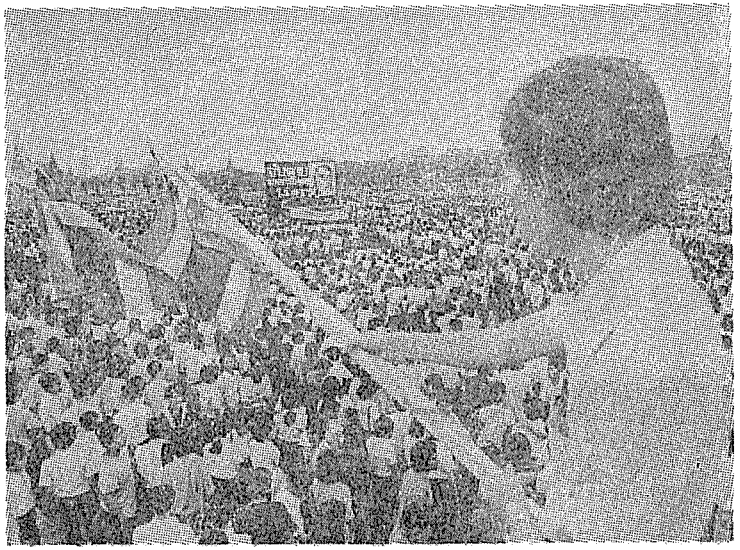
以上のような反対の中で政府は一九七六年九月一四日に、チャーチャーイの提案による入札とこの入札でスズの採掘委託権を獲得したビリトン社はすべて無効とするという決定を下し、近いうちに再度入札をおこなうという発表をおこなった。しかし第二回目の入札が実施される直前にタイは一〇月六日のクーデターを迎え、新たに政権の座についたターニンは、スズ採掘権を再びビリトン社に譲り渡すことを決定したのである。

（注）この報告は、タイ全国資源保護戦線と全国反独裁戦線が作ったパンフレット『アメリカ帝国主義と結託した売国的行為を暴く――テムコ社事件とタイの厖大な鉱物資源について――』、タイ工業省『タイ海底鉱物資源採掘委託の件について』一九七六年六月二一日、在米タイ人連盟『タイ・サー マッキー（タイ団結）』第一巻第二〇号、一九七七年七月一日、の三つの資料を参照し、要約して一つにまとめたものである。

第3章

反独裁闘争(1)

――プラパートの帰国



《解　説》

反プラパート闘争については、タイ全国学生センター及び全国反独裁戦線による詳細な事実経過の説明とプラパート帰国の意図に関する分析（資料11）があるので、解説はこれに代える。なお資料として訳したいくつかの声明については、資料11の「事実経過」の中に、適宜編集委員会が書き加えた。

資料11

軍事クーデターの陰謀——独裁者プラパートの帰国

タイ全国学生センター
全国反独裁戦線

一九七三年一〇月一四日——タイ学生と民衆が起ち上がり、軍部独裁体制と闘い、憲法と民主主義を要求したその日から、ほぼ三年の歳月がたった。その間五つの政府が登場したが、しかし皮肉なことに、民衆の利益を真に代表する政府は一つとしてなかった。彼らはいずれも自分の利害に没頭し、時にはありとあらゆる手段を講じて自己の権力の維持につとめてきた。

現在の政府も四つの政党の連立政権である以上、決して例外ではない。ところで、現政府には主要な派が二つあった。一つは改良主義者、もう一つは軍国主義者である。この相対立する両派は、絶えず権力と利益を求めて抗争を続けてきた。しかし現政府内では、改良主義者の方がより多くのポストを掌握しているので、政府は土地改革とか反汚職計画のような改良主義的政策を推し進めようとしてきた。しかし実際には、現政府は基本的な経済問題の解決とか、国民の利害を守ることに対しては、何ら真摯な努力を払ってきていない。生活費がますます上がっているのはそのいい例である。米価も政府の手で引き上げられた。いわゆる投資環境も、国民をだまして外国企業を引き入

れ、タイでもうけさせるために利用されてきた。こうして改良主義者たちは、「10月14日」の蜂起以後、軍国主義者の信用失墜の中で人気をより獲得してきた楽観主義者たる彼らの本性がどこにあるのかを次第に暴露しつつある。

四月総選挙以降、改良主義的政治家たちは、対立者を誹謗中傷し、民衆の信頼があると公言することによって、より多くの議席と閣僚のポストを占めてきた。そして彼らは、軍国主義者に対抗する権力基盤を確立しようと努力してきた。その結果、両派はことごとく対立するに至った。たとえば外交問題一つをとっても、改良主義者は、アメリカと近隣の社会主義国の両者と友好関係を結んだ方が自国にとって安全だと考え、他方軍国主義者は、頼りにするのはアメリカのみと強硬に主張している。

軍国主義者たちの信望は一九七三年一〇月一四日以降低下したとはいえ、彼らは依然として軍部の中に根強い政治的なつながりをもち、権力基盤を維持する可能性を保っている。こうして彼らはなお、連立政権に圧力をかけ、同時に自分たちの利益をしっかりと守るだけの地位をしめている。したがって、軍国主義者たちはいついかなる時でも改良主義者から権力を奪取する機会を虎視眈々と狙っているのだといえよう。

もっとも両派には利害対立と権力抗争があるとはいえ、彼らの利害と権力が侵害される場合には共に手を結び、民主的諸権利なり言論・集会の自由の抑圧につとめてきた。さらに、セーニー内閣は大学構内の学生の活動ですら規制を加えようとしている。しかし、民衆と学生は、タノーム＝プラパート軍部独裁政権を打倒した、あの一九七三年「10月14日」の英雄的事件を決して忘れてはいい

ない。反軍部独裁の感情は、今なお強いのである。そして民衆と学生の同盟がもつ力は、現政府がそれを認め、また彼らの声を聞かざるをえないだけのものになっている。

民族主義の旗じるしの下、軍国主義者たちは四月の総選挙で以前にも増して多くの議席を獲得した。したがって、彼らは軍部独裁を復活させる期は熟しつつあるとますます確信した。そこで彼らは秘かに以前の独裁者であるプラパートを呼び戻し、それによって改良主義者の力と、学生・民衆の同盟による反撃力を試そうとした。

今や、軍国主義者たちがプラパート帰国の陰謀をたくらんだことは明白である。彼ら陰謀者たちは、全事件を策動し、軍事クーデター――それは必然的に、反軍部独裁運動の全面的崩壊を意味する――を準備しているのである。

タイでは、学生と民衆は、軍国主義者がアメリカと密接に結びつき、アメリカの投資に両者が利害関係をもっていることをよく知っている。軍国主義者たちは、常に「国家の安全とヴェトナムのタイ侵略反対」を錦の御旗とし、アメリカと秘密軍事協定を結び、米軍のタイ駐留と基地利用を認め、アメリカの投資家に鉱物資源の独占を許してきた。

明らかに、彼らはプラパート帰国の陰謀に対抗する学生・民衆の結束力を過小評価していた。全国の学生は同時にこの陰謀に対応し、全国的規模で抗議運動を展開した。反プラパート・反軍部独裁の集会が、あらゆる主要な大学で開かれた。今や、軍部独裁政権の残党が政府とタイの軍隊の中で策動していることは歴然としていたので、あらゆる職業の人々が、熱心に反プラパートの抗議を支援した。多数の労働組合を代表するタイ全国労働会議はもしプラパートがタイにとどまるならば、

全国的ストライキを呼びかけると発表した。

またNSCT（タイ全国学生センター）とNAFFT（全国反独裁戦線）は、以下の二項目の要求書を政府に提出した。

1　ただちにプラパートを逮捕し、起訴すること。
2　プラパートの帰国を手引きした人間を調査し処罰すること。

プラパート帰国のニュースが伝わった時、政府と官僚の一部が本当にプラパートが帰国したかどうか、という矛盾するような意見をもちだしたことは、特筆すべきであろう。首相ですら、プラパートの秘密裏の帰国は知らされていなかったのだ。NSCTとNAFFTが、バンコクにおける反プラパート集会の目的を明らかにした時、はじめて政府は公式にプラパートの帰国を確認したのである。もっとも当時政府は依然として、彼がどこにいるのか知らなかった。

しかし、政府の発表は決して学生・民衆の側の状況には、有利に働かなかった。それはただわれわれの不満を強め、政府が国家機構を十分支配していないことを明らかにしただけだった。プラパートは飛行機に横づけにされた奇怪な大型車に乗せられ、通常の入国管理局を通らないまま車で空港から送り出されたのである。

このため政府はまずい立場に追いこまれた。というのも、このような特権的手続きを計画し遂行するには、どうしても何人かの政府高官の手助けが必要なのは誰の目にも明らかだったからである。

虚をつかれる形となった政府は、どのような行動をとるべきか決断を下すことができなかった。そしてもっとも悪いことに、政府はプラパートとその部下にどのように対処するか決定することができなかった。

独裁者プラパートの居所がわかると、政府は犯罪者として全国的に知られているプラパートと交渉するために、五名の閣僚からなる代表団を派遣した。しかし、彼らは多数の議員と閣議がプラパートの二四時間以内の国外追放をすでにきめていたにもかかわらず、プラパートに対して何の措置もとらなかった。世論の方は、独裁者の即時逮捕を求めていた。

一方、軍部の方では、かつて三人の独裁者たちの部下であったヨット・テープハッサディン・アユタヤー第一軍管区司令官が、ただちにプラパートを自分の庇護下においた。そのため改良主義者は、プラパートは軍人であるから軍が彼の責任を負うべきであるというこじつけをやらざるをえなくなった。しかし、犯罪者であるプラパートが警察に監禁されないで軍に保護されるというのは、実に奇妙なことではないか！

プラパートに対してどのような措置をとるのかというわれわれの質問に対し、セーニー首相は第一軍管区司令部に問い合わせるようにと答えた。一方、その第一軍管区司令官は、プラパートに対する措置は、軍のリーダーと相談する必要があると答えた。

それでも軍国主義者たちは世論を無視することはできなかった。彼らは、プラパートに病気回復のため一週間の滞在を許すと発表した。少しニュアンスは違うが、政府は七日以内にできるだけ早くプラパートは国外に出るであろうと述べた。

したがって、政府が軍国主義者の圧力の下にあることはほぼ確実である。また、政府が軍国主義者のもくろむクーデターに今後対抗しうるのかどうかもきわめて疑問である。

政府が人道的理由を根拠にプラパートに許した七日間の滞在について言うなら、七日間は治療するのに決して十分ではない。また七日間経ったら、はたしてプラパートが国外に退去するのかどうかも怪しいものである。さらにもっと重要なことは、七日間あれば、軍部独裁を復活させるクーデターを準備するだけの時間が十分あるということだ。かくして、多くの民衆は明確な返答(つまりプラパートの国外退去)をえるまで集会を続けることを決定した。

集会の最中に、軍部系のラジオ放送局(「ヤーングロ」)は、サナームルワン、のちにはタマサート大学の構内で集会を続けていた四万人の民衆の決議を中傷し、歪曲した。また実際集会は、憲法に従って合法的かつ平和的にすすめられていたにもかかわらず、彼らは集会をおこなっている民衆が、プラパートの帰国を利用して騒動をひきおこし、現政府をくつがえすつもりだと宣伝した。またより暴力的な形では、政治的グループである「赤い野牛」が集会に手投げ弾を投げた。

爆弾投下と爆発は、明らかに集会を単なるグループ間の衝突に見せかけようとする軍国主義者の策動に他ならなかった。しかし、闘争貫徹の精神、民衆連帯の精神、民衆の連帯の力、そしてクーデター・軍部独裁制に絶対に反対する精神のため、政府は不名誉にも独裁者に対して国外退去を求めざるをえなくなった。

しかし残念なことに、政府はプラパートがあるマスコミを使って次のような声明を、つまり国家の平和と秩序安定のため国外に出ることを決定したのは他ならぬプラパート自身であると、全国民

を前にして述べるのを許してしまった。一度ならず二度までも、彼らは恥ずかしげもなく、反軍反独裁の感情に泥を塗ったのである。

さらに民衆の力をないがしろにする現政府は、冷血漢・殺人者であるプラパートを、国家のために個人の利害を犠牲にして国外に出ることを同意した人間として賞賛した。一方、反プラパートの集会で死傷した人々については念入りに空とぼけた。

「10月14日」の事件を通じて三人の独裁者（タノーム、ナロン、プラパート）を国外に追放したが、しかし独裁体制は依然タイ社会に根強く残っているとの確信を、われわれはこの三年間の経験によって強化するに至った。軍部独裁制復活の試みは、くり返しおこっている。われわれの歩んでいる民主主義への道は、今なお長い道だ。「10月14日」の生命をかけた英雄たちの意志を、次の世代に伝えなければならない。民衆は、いかなるクーデターの試み、悪しき独裁政権復活の試みに対しても警戒し、手を結び、闘わなければならない。

今の政府は、次第に自分たちの弱さと無力さを露呈している。だからタイの学生と民衆は、民衆に敵対する犯罪者、つまりタイにいてプラパートを助けた連中、残虐な三人の独裁者、そして八月二一日の集会に二個の手投げ弾を投げた連中を、政府が裁判にかけるかどうか確信することができない。したがってこれらの課題は民衆の手に委ねられている。団結する民衆のみが、これら全ての問題を解決することができるのだ。

〈付録1〉

事件の経過

——プラパートの不法入国から国外退去までの学生・民衆の闘い

八月一五日（日）

午後五時四五分　プラパート・チャルサティアンが、亡命先の台北からドンムアン空港に到着。彼は飛行機に横づけされた黒塗りのメルセデッツ・ベンツのリムジンにのせられ、どこかへ連れていかれた。

午後九時　入国管理局の役人がチャイナ・エアライン・フライトCI819の乗客リストの中にある〝P・チャルサティアン〟と名のる人物が入国手続きをおこなっていないことを発見した。ドンムアン空港入国管理局は、その旨警察に通告し、その後警察はセーニー首相と関係当局に通告した。

八月一六日（月）

警察の特別部局がプラパートの到着をはっきり確認し、捜査にあたった。

正午　セーニー首相は、プラパートの居所を知っていることを認めたが、詳しいことについては

明らかにすることを拒絶した。

午後八時　閣議が召集されたが、しかしプラパートがバンコクにいるかどうかについては、いずれの省庁も確認できなかった。

午後一一時　内務省副相のサマックがテレビで政府見解を発表。プラパートがバンコクにいるという確かな証拠はないと国民に対して自信をもって語った。もしプラパートがバンコクにいるなら、法にてらして思い切った措置をとるだろうと語った。また、政府はこの事件を口実にわが国の大衆に騒擾をそそのかすグループに対しては断固とした措置をとるとも警告した。

八月一七日（火）

午前六時　NSCTとNAFFTが配布した、軍部独裁復活の陰謀に反対する午後四時からの大衆集会を呼びかけるビラが、バンコク全域に登場した（**付録2**参照）。

セーニー首相は、プラパートがタイにいることを認め、彼の所在をつきとめるためあらゆる努力を払っていると断言した。また政府は「たとえ実力行使で追い出すことになっても」プラパートを確実に国外に退去させると述べた。

彼はまたプラパートが政治的目的で帰国し、その背後にはあるグループの支援のあることも認めた。

午後四時　NSCTといくつかの活動家グループは、サナームルワンに三万人の人を集めて集会を開始した。

午後一〇時　民衆は、セーニー内閣に対して四八時間以内にプラパートを逮捕し、かつ彼を裁判にかけるよう要求した。

八月一八日（水）

セーニー首相は、プラパートを支援した連中と怠慢だった官吏の調査をおこなう委員会を発足させた。政府は、プラパートが、政府転覆を図る一部のあるグループによって政治的〝道具〟として利用されていると非難した。

午後八時　プラパートはテレビ局のチャンネル7のディレクターであるチャイチャーン——彼はプラパートの甥である——の家に居ることがわかった。プラパートは、政府派遣の五人の代表に対して、タイを去るつもりはないこと、いかなる法的処分に対しても裁判で闘うと話したと伝えられた。

午後九時三四分　第一軍管区司令官ヨットが、陸軍総司令官ブンチャイの命令にもとづいてプラパートを保護するため、チャイチャーンの家に到着した。

八月一九日（木）

午前九時　プラパート事件を明らかにすることを政府に求める緊急動議が議会に提出され、議論の火ぶたが切られた。

午前九時三〇分　警察局長官のスィースックは、記者会見の席上で、バンコクの警察に警戒体制

をひくよう命令したと述べた。

午前一一時三〇分　学生、民衆のグループが、追放したタノーム、プラパート、ナロンの三暴君を正式に告発するため、タマサート大学からチャナソンクラーム警察署までデモ行進をおこなった。

正午　チュラロンコーン大学の構内で集会がもたれ、その後サナームルワンに向けて二〇〇〇人の学生がデモ行進をおこなった。

午後〇時三〇分　議会は何の解決策も打ち出さないまま、議論に終止符を打った。六五名の民主党議員が、午後四時までプラパートを国外追放するように政府に対して嘆願すると声明を出した。

学生たちは、タマサート大学で集会を開始。一方セーニー首相は、プラパートをどう扱うか討議するため閣議を召集した。

午後一時　第一軍管区司令官も、閣議に召集された。学生たちは、ラームカムヘーン大学でも集会を開始した。

午後二時三〇分　閣議終了。閣議から出てきた第一軍管区司令官ヨットは、軍はプラパートを国外に退去させるという政府の決定に応じると述べた。しかし彼はこれから他の軍のリーダーたちと相談する予定であるとつけ加えた。彼は、軍が政府に圧力をかけているという点については否定し、「議会をも含めて、他の諸勢力の方が政府に圧力をかけている」と述べた。

午後三時　軍に対して完全な警戒体制の命令が出された。閣僚からなる一団が、プラパートと交渉するため派遣された。同時に軍・警察がドンムアン空港に移動――これは明らかにプラパート亡命の準備のためであった。

午後四時　プラパートに抗議する群衆が、サナームルワンに集まりだした。

午後四時三〇分　ラームカムヘーン大学で集会を開いていた学生が、サナームルワンに向けてデモ行進。抗議に参加する民衆の数は約二万人にふくれ上がった（自由教官戦線が声明、**資料13**）。

午後五時四五分　プラパートとの交渉を終えた内閣からの派遣団は、セーニー首相に報告した。

午後六時三〇分　プラパートは、一週間以内に出国することに同意したと政府が発表。

八月二〇日（金）

少なくとも主要な五つの大学が、プラパート逮捕支持を訴える手段として無期限に授業を放棄した。タマサート大学学生自治会委員長ピチャイは、記者会見で、①プラパートを逮捕せよ、②プラパートの手助けをした連中に対する法的措置をとれという二項目要求に、もし政府が応じなければ、NSCTは共同の抵抗戦線をととのえるべく、全活動家グループとタイ全国労働会議に集会を呼びかけるだろうとの声明を発表した（在米タイ人が共同声明、**資料14**）。

北タイのチェンマイ県では、約一〇〇〇人のチェンマイ大生がプラパート帰国に反対して、プラトウ・タペーで集会を開いた。南タイのパッターニー県でもソンクラー大生が集会をもった。

タイ全国労働会議代表は、電気・水道など、全ての国営企業労働者に対して、全国的ストライキを呼びかけると威嚇した。全国の新聞記者が首相に四項目請願を提出、プラパートの処遇は世論に従っておこなうよう政府に要請した。声明に署名したのは、一五〇人の地方系新聞編集者と四つの新聞協会の各会長である。

学生たちの集会を支持するストライキをうつだろうという一五七の組合からなるタイ全国労働会議の発表――これが実現されれば、ほとんどの国営企業をまひさせることになろう――が続いて圧力が高まった時点で、セーニー・プラモート首相は国王に謁見した。

八月二一日（土）

集会は五日目。NSCTとあらゆる階層（九〇の学生グループ、二五の市民グループ、六つの教官グループ、六つの労働者グループ、三つの政党からなる）の代表者は、二項目要求が最終期限の一二時までにのまれない場合の対策を協議するためタマサート大で会合をもった。

一方、「赤い野牛」、タイ全国職業学生センター、タイ・コウモリ、学生教官連合、いわゆる「愛国者」グループからなる反対グループは、彼らの集会場所を民主主義記念塔からタマサート大に移し、かつNSCTにタマサート大の外に出るなと命じた。彼らはまた、民主主義記念塔の地下に、ある一定の武器をたくわえていると伝えられている（右派が緊急声明、**資料15**）。

午後〇時五〇分　反対グループのメンバーは、警察の阻止にもかかわらず、タマサート大構内に乱入しようとした。

午後一時一〇分　群衆に向かってどこからか発砲がなされた。学生一人（身許不詳）が重傷を負い、その後死亡。しかしタマサート大での集会は、こうした流血をものともせず、続行された。NSCTの防衛隊員は、キャンパスにはいる全ての人々に、危険だから気をつけるように訴えた（NSCTが抗議声明、**資料16**）。

午後六時四五分　モンスーン特有の驟雨が降り、集会場所を水びたしにした。しかし、人々はその場にとどまることを決意、雨やどりを拒否した。

午後一〇時　大学当局公式の許可がまだおりていなかったが、タマサート大学生自治会は集会場所を水びたしのフットボール競技場からタマサート大大講堂に移すことを決定した。

タマサート大の外では、「赤い野牛」が今なお厳重な警戒を続けている。彼らはタマサート大を焼くといった邪悪な企てを画策中と伝えられた。

八月二二日（日）

集会は六日目。午後集会場所が大講堂からもとのフットボール競技場に移された。

午後二時一三分　プラパートは国王謁見を許可された後、台北に向けて飛びたった。彼は、チャーチャーイ工業相、チュムポン警察局副長官、首相の個人秘書パロップその他の高官につきそわれて、特別チャーター機タイ・インターナショナル・DC8に搭乗した。

午後六時　政府によるプラパートの出発の保障とタイ国内でプラパートを手助けした者に対処する法的措置を、スタムNSCT書記長が読みあげた後、タマサート大の反プラパート集会中止が宣言された（NSCTが八月二六日勝利宣言を発表、**資料17**）。

〈付録2〉資料

タイ政府に対するタイ全国学生センターの要求



反プラパート集会　演説しているのは全国反独裁戦線書記長，右隣にいるのはスタム・タイ全国学生センター書記長

一九七六年八月一七日、タイ政府に対して、タイ全国学生センターと全国反独裁戦線は共同で以下のような二項目要求を提出した。

1　一九七三年「10月14日事件」において、罪のない学生・民衆の大量殺戮を命令したかどで、プラパート・チャルサティアンを即刻逮捕し、裁判にかけなければならない。

2　ファシストたるプラパート・チャルサティアンの国内つれもどしに協力した者たちに対して、迅速な調査と法的措置がとられなければならない。

〈要求の正当性〉

1　追放された三暴君（タノーム、プラパート、ナロン）のおかした罪について政府自身が優柔不断であるため、タイ全国学生センターと全国反独裁戦線は、すみやかに法的措置と将来類似のケースに対する模範的措置をタイ政府が追求するよう強制することが必要だと考える。

2　要求の第一点は、現政府がその主要な政策としてくりかえし強調してきた「法と秩序」の原則を実施するために必要である。

3　第二点の目的は、国家と民衆の安寧に不利益をもたらす将来のケースととりくむため、国家機構を改変し、政府の安定を強化するよう政府を鼓舞するためである。

（注）プラパート追放以後、世界各国に配布された英文パンフレットより。

資料12

軍部とサクディナーの抗争
——プラパート帰国事件

『アティパット』紙
（一九七六年八月二一日）

誰も否定できない一つの事実は、プラパート・チャルサティアンがわが国にすでにはいったということである。今回の事件は、三年前の一九七三年まで二〇年間にわたって続いてきたファシスト

独裁体制にわが国の政治状況が逆戻りすることを望んでいる人々――かつてプラパートの配下であったヨット・テープハッサディンのような軍の一部と、タイ民族党に属する一部の人間の手引きによって遂行された。

独裁者プラパートの今回の帰国は、少なくとも次のような二つの政治的事実を明らかにした。

一つはタイ民主党の率いる現政府――それはサクディナー勢力の権力が集中しているところでもある――が実際には無力であったこと。もう一つは、権力の強力な基盤は、依然としてアメリカ帝国主義の支持を受けた軍部のもとにあることの二つである。

一九七三年一〇月一四日の学生・民衆の決起は、軍を分裂させ、国家権力の座から彼らをいったんひきずり降ろした。そして一〇月一四日のクリット・シワラー元帥(当時陸軍総司令官)の無血クーデターによって、タノーム、プラパートたちは国外亡命を余儀なくされた。

一方クリット元帥は、自分の置かれた立場が決してよくないことを、したがって軍が直接政治権力を掌握するのはまずいことを十分承知していた。まさにこの時、サクディナー勢力は、学生・民衆が犠牲をだしてかちとった勝利を横からかすめとったのである。

こうしてサンヤー・タマサックが首相に、クックリット・プラモートが国民代表議会の議長に各々就任した。このことは、彼らサクディナー勢力が政治権力を一手に握ろうとしたことを示している。彼らは表向き社会行動党(クックリットが党首)という政党を別につくったが、しかしこれはタイ民主党の一つの片割れにすぎなかった。

クックリットが内閣を組閣した時、サクディナー勢力は実際には、サンヤーの時ほど権力を掌握

していたわけではなかった。しかしサクディナー勢力は従来彼らがやってきたのと同じ努力を続けた。すなわち一方では、学生・民衆それに軍部の力の分断をはかるとともに、他方では政治経済面での自分たちの権力の確立につとめたのである。彼らは「ルーク・スア・チャーウ・バーン」の勢力拡大にみられるように政治権力の掌握にのりだし、その一方で富くじや航空事業など経済面にも進出していった。

この三年間の間にサクディナー勢力がとりわけ懸命になって精力を注いだのは、学生・民衆の力の分断工作だった。この分断工作のため、彼らは関係のあるマスメディアを利用し、あるいは軍と結託して大学にはいりこみ、混乱をひきおこした。また「ヤーングロ」放送を使って反共宣伝をがなり立てたり、『ダーウ・サヤーム』紙を使って反共ニュースを流したりした。このようにして彼らは(政治の)舞台の上に再び登場してきたのである。彼らは時には軍部が必要とすることを共同でおこなう場合もあった。利害が一致している時には、サクディナーの政治家たちは軍部と緊密に協力しあったのである。

しかしサクディナー勢力が民衆の力を分裂させようとした時、彼らは決して軍に忠誠を誓おうとはしなかった。一方クリット元帥は彼らの様子を見ながら(相手を攻撃する機会をうかがっていた)。もっともサクディナー勢力は、軍(の協力)を欠いていれば、実際の権力を掌握したことにならないことを十分承知していた。事実サンヤー内閣の時には、治安維持に関する事項は全てクリット元帥がこれを担当し、問題が生じるとそのつど彼が事態の収拾にあたった。

ところがクックリット内閣の時、サクディナー勢力と軍の一部の権力は衝突することになった。

クックリットが九名の学生・農民を逮捕し（一九七五年八月）のちに民衆の抗議の嵐の中で釈放を決定した時、軍の手先である警察が彼の自宅に押しかけ、彼の家を滅茶苦茶に破壊したのである。この事件は軍の権力がいかに大きいものであるかを改めてサクディナー勢力に認識させることになった。

軍の権力とサクディナー勢力は別の機会に、今一度対立した。つまりタイ民族党のプラマーンが自分の一派を前面に押し出して勢力を拡大し、自身の権力を打ちたてようとした時がそうであった（プラマーンに近いチャラート・ヒランカムを陸軍副司令官に推したことをさす）。彼はクックリットにサインするように求め、その結果クックリットは全ての軍に承諾のサインをした。このためタイの軍部は一大打撃をうけ、クリット元帥は突然入院して、七六年四月の総選挙後に至るまで病院に閉じこもらざるをえなくなった。

しかしサクディナー勢力のさまざまな分断工作にもかかわらず、軍部はクリットの頓死以後再び結集を開始した。「10月14日」の際かつての上司（であるタノーム、プラパート）にたてついた人物（クリット）は死んでしまったが、しかしプラチュアップ・スンサーングーンとかウィトゥーン・ヤサワットといったような有力者がまだかなり存在していた。もっとも彼らは権力を掌握するほど力があったわけではないが……。独裁者プラパートの帰国は計画的なもので、軍内部はもちろんのこと、プラマーン系と旧タノーム＝プラパート系の間に共通の利害があることを明らかにした。またタマヌーンとかサマックのようなタイ民主党右派の何人かが、今度の計画をあらかじめ知っていたこともほぼ確実であった。

今回の事件は、軍部の結束力とサクディナー勢力の力を試すことが目的だった。というのもプラパートが帰国する時、タイ民族党の人間はこのニュースを意図的に攪乱し、一方プラパートの身をかくまったヨットは、タイ民族党の一派と密接な関係をもっていたからである。また記者会見の席上に現われたタイ民主党右派のサマックは、プラパート事件の事実関係を明らかにするどころか、かえって事実をあいまいなものにし、プラパートやクーデターの動きに反対するため集まっていた国民に対して集会を禁止するように語った。このような動きは、サマックが国民の立場ではなく、プラパートの立場を代弁していることを如実に示すものであろう。

今度の事件で、サクディナー勢力の頭目であるセーニー内閣は弱腰の対応しかとれなかった。プラパートが秘密に帰国してから二〜三日間、政府はプラパートが本当に帰国したかどうかについて確たる返事をおこなうことすらできなかった。事態がどうなっているのか依然としてよくわからないまま、政府は惨めにも独裁者プラパートのもとに代表団を送ったが、このような対処がはたして選挙によって選ばれた政府の態度と言えるかどうか。むしろ大物プラパート元帥のところに挨拶に行くといった方が似合っているのではないか。

ある新聞などは「手も足も出せない政府」といった見出しを一面に掲げたほどである。こうした政府の小心翼々とした弱腰の態度は、プラパート追放をめぐって出された閣議の意見にも共通していた。一方プラパート系のヨットは、自分はプラパート元帥に対して責任をもつ人物であると主張し、国王に仕える国軍の兵士の立場としてはまず内閣の意見をきくべきであるにもかかわらず、彼はプラパートの問題については、まず軍首脳と相談する必要があると語った。このことは彼が政府

の兵士ではなく、プラパートの支配する兵士であることをはっきり示していた。そして政府の声が軍の声に屈伏させられ、結局プラパートを七日間も滞在させることになったことを意味したのである。

サクディナー勢力は、自分たちの指導力がこの程度しかないことを悟るや、目を国民の力の方に転じた。そして従来の立場を翻して、軍の権力と現在闘っている国民の側に加担することをきめた。彼らは国民の力を恐れ、決して彼らを信用してはいなかったが、しかし今回は軍の力によって自分たちの威信が大きく失墜する方をむしろ心配したのである。このようなサクディナー勢力の運命は、一九五七年の「政変団」の時代にクワン・アパイウォンが経験したのとちょうど同じであった。

「10月14日」以降の変化を一言で言えば、国民はサクディナー勢力によってその勝利を奪い取られたと言うことができる。彼らは革命の条件を民衆のためではなく自分たちの権力抗争に変えてしまったのだ。つまり彼らは、ファシストたちの道具であった国家権力を破壊することなく、そのまま自分たちの利益のために利用し国民を引き続き搾取したのである。結局「10月14日」以後の変化はただ三人の独裁者をタイから追放しただけに終り、古くからの機構はそのまま残存することになった。

今回の運動からえた教訓を二つほどあげておこう。

第一は、独立・民主・社会正義を求める闘いは、決してサクディナー勢力や資本家、官僚資本家、軍人で資本家である連中によっては担うことができないということである。またこの頼りない、絶

えず豹変する連中の闘いは決して貫徹しえない。なぜなら彼らは常に自分たちの巨大な利害と結びついているからだ。この闘いを担うことができるのは、労働者、農民、貧しい人々だけである。そして彼らの闘争こそが、わが国に真の独立と民主主義と社会正義をもたらすことができるのだ。

第二の教訓。今回の事件に際して、軍部とサクディナー勢力は国家権力を掌握できると考えた。しかし彼らは思い通りに国民を制圧することができなかった。なぜなら、「10月14日」の流血事件以来、国民は自分たちがもつ大きな力を自覚し、もはやどのような人間に対しても横柄な態度をとることを許さなくなったからである。国民はこの力を血と生命を犠牲にしてかちとってきた。そして彼らは鉄の壁の如く強固に団結し、至る所で闘いを展開し勝利してきた。

国民の課題、とりわけ今回と同じような事件に再びぶつかるに違いないわれわれタイ国民が今果たすべき課題は、「10月14日事件」から教訓を導き出しそれを学び、質的により高い闘争を新たに推し進めることである。そしてそれはただちにはじめなければならない。国民は今すぐ、確固たる原則にもとづいて団結しなければならない。なぜなら今後の闘争は、単なる左右両派の対立ではなく、独裁体制を求める人間と民主主義を求める人間の、クーデターを企てる人々とそれに反対する人々との闘いになったからである。

資料13

自由教官戦線の声明

自由教官戦線
（一九七六年八月一九日）

セーニー政権は、今年の八月一五日夜、暴君プラパート・チャルサティアンがタイに帰国するのを許した。記者会見の席で国民の敵プラパートの帰国事実を隠蔽しようとしたり、生徒、学生、民衆が殺人者に対して反対運動をおこなわないように脅し、暴君プラパートを保護しようとしたことは、明らかに政府の国民に対する不誠実さを示している。

一九七三年「10月14日」の時、生徒、学生、民衆はプラパート、ナロン、タノームの軍部独裁政権に反対する闘争を展開し、この過程で子供、老人、女性、僧侶など数百人の犠牲者を出しながら、ついにプラパート、ナロン、タノームの三暴君を国外に追放した。

それにもかかわらず、暴君プラパートは、今また腹に一物をもって帰国したのである。

ところでかつて政府は、国民のために働き国民の利益にもとづいて国務を遂行するという政策方針を人々の前に明らかにした。しかし今、国民の敵である暴君プラパートはタイに帰国し、全国の国民を踏みにじりつつある。

われわれは政府が国民の前に明らかにした政策を誠意をもって実行し、かつ国民の意志に従って行動することを要求する。そして次の二点を政府に要求する。

1　今日中にプラパート・チャルサティアンを逮捕し裁判にかけよ。
2　今日中にプラパート帰国を手引きしたグループを国民に知らせ、彼らを裁判にかけよ。

われわれは勝利を収めるまで、一致団結して暴君プラパートの帰国に反対し闘うであろう。最後まで団結して独裁者に反対する闘争に参加しよう！

資料14

在米タイ人の共同声明

在米タイを守る会
在米タイ人グループ
人民勢力戦線
（一九七六年八月二〇日）

その支配の間、一貫してタイ国民と祖国を収奪しつづけた主要な暴君であり、しかも一九七三年

「10月14日」の際に生徒、学生、民衆を虐殺した暴君の首領たるプラパート・チャルサティアンが、タイにいる彼の手先の認める中で、秘密のうちにタイに帰国し、それによってタイ国内に混乱をひきおこした。

われわれは、このような暴君の帰国に断固として抗議し、暴君プラパート・チャルサティアンを無条件にタイから追放するよう政府に要求する。もし政府が暴君の帰国を今後とも認めるならば、われわれは現政権を、タイ国民の主要な敵に協力する者とみなすであろう。われわれは、あらゆる手段を使って最後まで彼らに反対し、タイ国民の敵を倒さなければならない。

資料15

右派の緊急声明

アユタヤー県、パトゥムターニー県地区
ルーク・スア・チャーウ・バーン
（一九七六年八月二一日）

敬愛するアユタヤー県、パトゥムターニー県地区の「ルーク・スア・チャーウ・バーン」のみなさん！

わが国の情勢は、現在危機に陥っています。NSCTは、タイ社会党、社会主義統一戦線などと

結託し、プラパート元帥の帰国を利用して大衆を集め、国内に反乱をひきおこそうとたくらんでいるのです。彼らは、かつて国民の怨嗟の的であったプラパート元帥を使って、彼の帰国をこれ幸いに国民を煽動し、反乱を企てようとしているのです。そして彼らは共産主義・社会主義を導入し、支配体制の変革にのりだしているのです。国家・仏教・王制を信じるわれわれとしては、このような事態をどうして許すことができましょうか。敬愛する「ルーク・スア・チャーウ・バーン」のみなさん！　われわれは、タイ人の基盤に立って、さまざまな右派勢力と手を結び、NSCT等がこれからやろうとしている計画に今こそ反対する必要があります。

NSCTが今考えている計画は次のとおりです。

1　現在の情勢にうってつけのプラパート元帥の事件をめぐって討論を巻き起こし、それを自分たちの隠れみのに利用する。

2　現政府は弱体であると追及し、総辞職に追い込む。

3　もし現政府が強硬な措置をとったなら、一〇月一四日の時のように反乱をおこし、ヴェトナム、ラオス、カンボジアの場合のように森から都市に軍隊を連れてきて民衆を殺す。

このような行動をタイで許すことはできません。「ルーク・スア・チャーウ・バーン」のみなさん一人一人が団結し、教師学生連盟その他のグループと連帯し、上述のような陰謀をつぶすためにプラピングラウ橋のふもとに八月二一日に結集されんことを望みます。

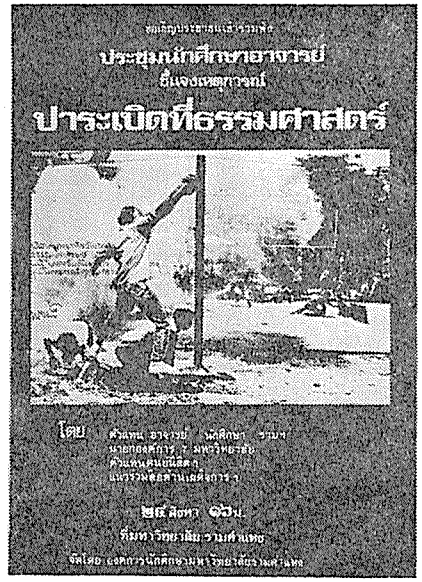
みなさんに心から敬意を表します。

資料16

タマサート大学爆弾投下に抗議する声明

タイ全国学生センター
（一九七六年八月二二日）

今回の暴君プラパートの帰国は、一九七三年一〇月一四日に生徒、学生、民衆を虐殺する命令を下したプラパートの残虐な行為に反対する、祖国・民主主義を愛するタイ国民の闘争をひきおこしました。国民のプラパートに対する恨みは骨髄に達していましたが、集会に集まった人々は衝突を避けるためタマサート大学構内で平和的に集会する方法を選びました。しかし暴君の残虐さを真底から憎むタイ国民が思いもしなかったことが生じました。つまり「赤い野牛」と暴君の手先たちが集会を妨害したのです。彼らは集会に参加していたラームカムヘーン大学の学生たちの隊列の中に火炎びんや殺人用の爆弾を投げ込み、その結果一人が死亡、三四人の重傷者が出ました。またタマサート大学に隣接する国立博物館の壁をよじ登って、集会に参加していた学生・民衆を激しく銃撃し、そのためさらに一人の参加者が殺されました。



「タマサート大学への爆弾投下事件を究明するための教官・学生集会」への結集を呼びかけるビラ

敬愛する国民のみなさん！　平和的かつ合法的な集会がこのようにひどく妨害されていても、なおタイは自由で民主主義の国だと言えるのでしょうか。われわれは今、襲撃され、さらに反乱計画者のレッテルを貼られています。しかし暴君が帰国しているのに、われわれはどうして反対運動をおこなってはいけないのでしょうか。

敬愛する国民のみなさん！　独裁者たちに反対することを望まない連中は暴君の手先でしかありません。タマサート大学の集会に参加した人々に敵対する行為は、明らかに民主主義に対して悪意を持っている人々の行為だといえましょう。

敬愛する国民のみなさん！

たとえどのように非難され、また事実を歪められても、わたしたちは決してそれを恐れず、最後まで暴君プラパートと独裁体制復活に反対することをここに宣言します。

しかし独裁者に対する闘争が十分な成果を収めるためには、全ての国民が全国的規模で一斉

に起ち上がる必要があります。わたしたちは全ての国民に対して、独裁体制の悪に反対する闘争に今参加するように呼びかけます。そして集会に参加する全ての国民が、平和的かつ規律正しく、平穏に運動をすすめるようにお願いします。わたしたちは祖国・民主主義を愛するタイ人の誇りを明らかにするためにあくまで集会を続けます。

国民の力だけが、独裁の悪と徹底的に闘うことができるのです。そして国民の力だけが国の運命を決定することができるのです。

国民の力に敬意を表して

資料17

暴君追放における民衆の勝利宣言

タイ全国学生センター
（一九七六年八月二六日）

暴君プラパート・チャルサティアンが、一九七六年八月一五日、秘密裏にタイに帰国して以来、生徒、学生、そしてあらゆる分野の民主主義を愛する民衆は団結し、一九七三年「10月14日事件」の時に民衆を虐殺した殺人者たちの首謀者たる暴君プラパートの帰国に反対する集会を広範におこ

なった。全国的規模で、また暑い日射しと雨の中でまる三日間、断固とした闘争を続けた結果、（この反プラパート）集会は、以前と同じように民衆の側の勝利に終った。そしてこのことは、民衆に二つの真実を改めて確信させた。一つは民衆の側が徹底的に闘えば、必ず勝利するということ。もう一つは、民衆の力に対抗しうるものは誰もいないということである。

この民衆の偉大なる勝利は、民主的諸権利を尊ぶ意志の主張であったが、同時に独裁政権復活をめざすクーデターの陰謀を完全に粉砕するものでもあった。もし民衆の抗議集会が強固な形で続けられなかったなら、独裁政権の復活は阻止しえなかったであろう。今回の集会は民衆に貴重な教訓を与えた。すなわち、民衆は決して、（支配階級の）ある個人あるグループが独裁者に対して抗議するなどと期待してはならない。民衆のみが自らの運命を本当に、また協力しつつきめることができるのだということを教えた。そしてこの真実は民衆の現実の闘争の中で確かに実証されたのである。

今回の闘争でもタイの青年は、勇敢かつ大胆な精神を発揮した。前の闘争と同じように今回の民衆の闘争も武装した政治的暴力団から干渉と妨害を受けたが、しかし誰一人として身の危険を恐れるものはなかった。「赤い野牛」を名のる政治的暴力団がいかに傲慢にふるまおうとも、彼らがもたらした血債は、いつの日か必ず支払わされるにちがいない。一九七六年八月二一日(のテロで)犠牲となった勇敢なる民衆の子供たちは、民衆の心にいつまでも残るだろう。死を怖れず、困難を怖れない人々の精神こそが、民衆を勝利の方向に向かわせ前進させるのである。一人の英雄が斃れても、それは全ての民衆が斃れることを意味しない。何人といえども民衆を破壊することはできない。なぜなら民衆だけが本当の国家の主であり、かつ真の偉大なる人々であるからだ。

第４章

反独裁闘争(2)

——タノームの帰国



反タノームの看板（血で汚れた僧衣　出家できるのか？）

もし政府が民衆に「法を法たらしめよ」と主張するなら、また政治的暴力団である「赤い野牛」が政府や政府の上にいるある個人あるグループの手先であることを認めないなら、政府は民衆に対してこのような主張が本当であることを示すべきである。すなわち暴君の首領であるプラパート帰国の手引きをおこない、独裁政権の復活をたくらんだ連中とその関係者の捜査をおこない、彼らを祖国と国民を強奪する政治的犯罪に手を貸すものとして、さらには民主主義諸制度の破壊を企てるものとして処分しなければならない。また政府は「赤い野牛」に対する措置について誠意を示すべきである。もし政府が彼らをこのまま放置するなら、政府が民衆を守る能力がないか、そうでなければ「赤い野牛」を民衆弾圧のために支持しているかそのどちらかを意味することになろう。

八月二一日に流された祖国を愛する勇敢なる人々の血を無駄にしてはならない。民衆はこの偉大にして勇敢なる行為の証言者にともになるべきであり、また団結して流された血をとり戻すべきである。

勇敢な英雄　万歳！
民衆の勝利　万歳！

《解　説》

タイ全国学生センターがプラパート追放の「勝利宣言」を発表し、また反プラパート運動の最中に殺された「8月21日の英雄」の追悼集会がタマサート大学で開かれていた日とちょうど同じ八月二六日に、暴君タノームが帰国の申し出をおこなった。政府はこの申し出を混乱の原因になるとして却下したが、タノームは九月一九日政府の決定を無視し、亡命先のシンガポールで見習僧になった上で強引にタイに帰国した。プラパートが秘密裏に、しかも軍の保護の下で帰国したのに比べ、彼の仏教を利用した帰国ははるかに巧妙かつ計画的なものであった。

しかしタノームの帰国に対する学生・民衆の反応は速かった。すでに彼らは新聞や雑誌を通じて、あるいは「タノームの犯罪」と題する特大のポスターをバンコクや地方都市の市内に貼って（**資料20**）、タノームの帰国意志表明に抗議する構えを見せていた。そしてタノームが帰国した一九日には、学生たちはただちに代表者会議を開き、(1)タノームは「10月14日」の民衆虐殺の張本人である、(2)彼の出家は仏教を冒瀆する、(3)彼の帰国は独裁制復活のための陰謀であるという三点の理由を掲げてタノームの即時追放を政府に要求した（事実経過参照）。さらに二二日には「タイ全国青年僧侶戦線」をはじめとするいくつかのグループが、タノームの出家に抗議する声明を発表した。しかしこの時点では反タノームの運動はまだ全国的なものではなかった（**資料22**）。

転機が訪れるのは、九月二三日から二四日にかけてのことである。まず二三日に、国王がタノームが得度式をおこなったボーウォンニウェート寺を訪れ、これが一つの契機となって右派諸勢力、

《解　説》

タイ全国学生センターがプラパート追放の「勝利宣言」を発表し、また反プラパート運動の最中に殺された「8月21日の英雄」の追悼集会がタマサート大学で開かれていた日とちょうど同じ八月二六日に、暴君タノームが帰国の申し出をおこなった。政府はこの申し出を混乱の原因になるとして却下したが、タノームは九月一九日政府の決定を無視し、亡命先のシンガポールで見習僧になった上で強引にタイに帰国した。プラパートが秘密裏に、しかも軍の保護の下で帰国したのに比べ、彼の仏教を利用した帰国ははるかに巧妙かつ計画的なものであった。

しかしタノームの帰国に対する学生・民衆の反応は速かった。すでに彼らは新聞や雑誌を通じて、あるいは「タノームの犯罪」と題する特大のポスターをバンコクや地方都市の市内に貼って（**資料20**）、タノームの帰国意志表明に抗議する構えを見せていた。そしてタノームが帰国した一九日には、学生たちはただちに代表者会議を開き、(1)タノームは「10月14日」の民衆虐殺の張本人である、(2)彼の出家は仏教を冒瀆する、(3)彼の帰国は独裁制復活のための陰謀であるという三点の理由を掲げてタノームの即時追放を政府に要求した（事実経過参照）。さらに二二日には「タイ全国青年僧侶戦線」をはじめとするいくつかのグループが、タノームの出家に抗議する声明を発表した。しかしこの時点では反タノームの運動はまだ全国的なものではなかった（**資料22**）。

転機が訪れるのは、九月二三日から二四日にかけてのことである。まず二三日に、国王がタノームが得度式をおこなったボーウォンニウェート寺を訪れ、これが一つの契機となって右派諸勢力、

とりわけ「ナワポン」や「ルーク・スア・チャーウ・バーン」の活動が積極化した。第二に、この日セーニー首相は、国会で質疑応答の最中に突如内閣の総辞職を宣言し、その結果タイの政局は、一〇月五日にセーニーが新内閣を組閣するまで事実上無政府状態に陥ることになった。そして第三に、二四日にはバンコク近県のナコンパトゥムで、反タノームのポスターを貼っていた労働者二人が、自動車整備工場の門の前に吊されて殺されるという事件が生じ、タイ国民に一大衝撃を与えた(**資料24**)。クーデターの準備に一段と拍車がかかり、他方学生・民衆の反タノーム帰国・反独裁の闘争が一挙に拡大するのは、まさにこの時以降のことであった。

かくて九月二五日には、チュラロンコーン大学に五〇〇〇人以上の人々を集めて大抗議集会が開かれ、先のナコンパトゥム県の絞殺事件の犯人は地元警官であると報道されたその翌日の二九日には、抗議の声はさらに拡大し、闘争は全国的なものに発展した。

またこの間「民衆のためのタイ全国職業学生戦線(ネーウ・ルワム・アーチィワ・プア・プラチャーチョン・ヘーン・プラテート・タイ)」が声明を発表している(**資料23**)。この「民衆のためのタイ全国職業学生戦線」というのは「タイ全国職業学生センター」とは異なった組織で、学生・民衆が集会やデモをおこなう時には常に楯となって彼らの身を守り、一〇月四日以降のタマサート大の集会でも、彼らは防衛隊の役目を引き受けた。「民衆のためのタイ全国職業学生戦線」書記長で当時防衛隊長でもあったオーリッサーは、一〇月六日の大弾圧でアゴを撃ち抜かれ、以降現在に至るまで治療を受けることも許されず、傷口は腐るにまかされているという。

学生・民衆の動きは一〇月にはいるとますます拡大し、地方でも反独裁の運動が活発化していった。また国営企業の労働組合の連合組織であるタイ全国労働会議もゼネストの決意を固め、一〇月四日にはNSCT等が無期限のストライキを宣言する。

この日、集会の場をサナームルワンからタマサート大構内に移した学生・民衆は、一つの寸劇をおこなった。筋書はこうである。第一幕では、オモチャの機関銃をもったタノーム役が学生を乱射する。「10月14日」の虐殺の再現である。ついで第二幕、ナコンパトゥム県の労働者に扮した学生二人が首を吊られる。この寸劇は翌朝の新聞に大きく写真入りで紹介された。

右派と軍・警察はただちにこの写真を問題にした。首を吊られた学生の顔がワチラロンコーン皇太子に酷似している。これは王室を侮辱するものであるから、ただちに彼らを逮捕せよと要求したのである。そしてこのデッチ上げを契機にして、警察・右派は一〇月六日未明、タマサート大に結集する学生・民衆の惨殺を開始した。

資料18

事件の経過

八月二六日　タノーム・ギッティカチョーン元首相兼国軍最高司令官が亡命先のシンガポールから政府に重ねて帰国の許可を求めたが、政府は同日、申し出を却下した。

八月二七日　タノーム夫人のタンプイン・チョンコンがシンガポールからタイへ帰国。一方セーニー首相は、タノームの帰国申請を却下した理由について、プラパート事件のような混乱をくり返さぬためと説明した。

八月二九日　タノームの三人の娘はセーニー首相と会見し、閣議でタノームの帰国要求をとり上げるよう約束させた。

八月三一日　政府は三一日の定例閣議でタノームの申請を反対多数で却下する。

九月一日　タノーム夫人とバンコクに残っていたユッタポン空軍中佐（タノームの次男）は記者会見の席上で、タノームが数日中に帰国する意志のあることを明らかにした。

九月一二日　セーニー首相は、タノーム帰国によって起こりうる政治的法的諸問題の検討をニティパット総理府長官に命じる。

九月一四日　西ドイツに亡命中のナロン元陸軍大佐は、タイ字紙のインタビューに応えて、生活費も底をつき親子三人で苦しい生活を送っていると訴えた。

九月一七日　国軍最高司令官及び軍の定例人事異動が発表される（一〇月一日実施）。国軍最高司令官にはカモン元空軍総司令官、陸軍総司令官にはサーム・ナ・ナコン（クリット系）、陸軍副総司令官にはプラサート（独立系）が各々就任。



托鉢に回るタノーム

九月一九日　午前一〇時二五分　タノームが亡命先のシンガポールから僧衣に身をまとい、日本航空機でタイに帰国した。彼はそのまま王室と関係の深いボーウォンニウェート寺にはいって得度式をおこなった。

午後一時　セーニー首相は、「タノームの帰国は寝耳に水で、何か起こったらただちに緊急閣議を開く」と記者会見の席上で

語る。

午後四時三〇分　学生代表七五名が、セーニー首相の自宅まで抗議に行った。

午後六時五〇分　スタムNSCT書記長を中心とする五つの団体の代表者たちは、セーニー首相に三項目の公開質問状を提出した。内容は以下の三つである。

1　今回タノームは仏教を利用して帰国したが、これは仏教を冒瀆するのみならず、自らの犯罪を隠蔽しようとするものでもある。

2　タノームの帰国はある一部のグループによってなされた陰謀であり、彼らはこの事件を利用して国内に混乱をひきおこし、再び独裁体制の復活を狙っている。

3　タノームが犯した犯罪は、一九七一年一一月一七日のクーデターで憲法を廃棄したこと、大規模な汚職事件に関与していたこと等さまざまであるが、中でも最も大きい彼の犯罪は、一九七三年一〇月一四日の事件で学生・民衆の虐殺を命じたことである。したがってタノームをただちに国外に追放するよう、われわれは要求する。

午後九時三〇分　NSCTをはじめとする多くの団体がタノームに抗議する集会を開始した。

九月二二日　チュムポン警察局副長官は、タノームのいるボーウォンニウェート寺あてに「タノームをよそへ移さなかったら寺を焼き払う」という脅迫状や脅迫電話がきていると語った。警察はボーウォンニウェート寺付近の車や通行人のチェックをはじめた。

「タイ全国青年僧侶戦線」をはじめとする青年僧侶団体やタマサート大学の「仏教・伝統研究会

がタノームの出家に抗議する声明を出す（資料22）。

九月二三日　午後一時三〇分　セーニー首相（兼国防相）は辞意を表明、内閣総辞職。午後五時三〇分　セーニーは南部の旅行から急きょ戻った国王をドンムアン空港に出迎える。

午後九時　国王はタノームに会いにボーウォンニウェート寺をたずねる。

朝六時　タノームは托鉢に出かけ、バンコクでの生活に根を下ろす決意を内外に示した。

『タイ人民の声』放送は、「トララート（暴君の意）が再び帰国した。団結して追い出さなければならない」とくりかえし放送した。

タイ全国労働会議はクーデターを警戒し、セーニーに対して早急に新政府を樹立するよう要求する。

NSCTを中心とする反対派グループは、議会にタノーム事件の介入を求める陳情書を提出。また活動家会議を開き、国民世論の動きを分析した。

九月二四日　セーニー、再組閣の決意表明。(1)再び首相を務める、(2)これまで通り、民主党、タイ民族党、社会国家主義党等の四党連立とする、(3)政策はこれまでと変わらないと語った。

マレーシア国境ではナロンがタイへ密入国しないようきびしいチェックがはじめられた。

反タノーム帰国運動はこの日、全国の大学に広がった。ソンクラー大学（南部）では数日中に反対集会が予定され、ウドンターニー地方ではタノーム帰国反対ポスターが町に貼り出された。

スタムNSCT書記長は学生、労働者、民衆にクーデターの警戒をよびかけ、新政府にただちにタノーム問題を解決するよう要求した。

バンコクに隣接するナコンパトゥム県で労働者のチュムポン氏とウィチャイ氏が絞殺され、郊外の工場の門に吊されているのを発見。二人はタノーム帰国反対のポスターを貼っている最中に殺された。

九月二五日　セーニー首相、再び任命。新内閣組閣にとりかかる。

タノームは厳重な警護の下で病床の父親を見舞った。

チュラロンコーン大学で、NSCT、タイ全国労働会議等五〇〇〇人が反タノーム集会を開く。集会の席上、二四日に起きた二人の労働者の絞殺事件を激しく非難した。

九月二六日　政府はタノームにタイを出国し、インドのカヤ仏教寺院に行くようすすめていたが、タノームはこの申し出を拒否した。

「民衆のためのタイ全国職業学生戦線」が声明を発表（**資料23**）。タイ社会党、ナコンパトゥム県の絞殺事件に抗議する声明を発表（**資料24**）。NSCTや多数の反独裁グループはタノーム問題の解決を要求しセーニー首相と会談。二四日の絞殺事件の犯人捜査の要求状を提出する。

九月二七日　NSCTは、スィースック警察局長官にナコンパトゥムの絞殺事件についての質問状を提出。

九月二八日　『タイ・ラット』紙と『ルワム・プラチャーチャート』紙は、絞殺事件について「殺害犯人は警察」と報道。

NSCTとタイ全国労働会議は「二九日午後、バンコク旧王宮前広場で大がかりな抗議集会を開く」と発表した。

ニティパット総理府長官は、八月のプラパート帰国は、前もって計画されたものであったと語った。

九月二九日　政府は新内閣閣僚名簿を一〇月四日に公表し、政策は一〇月一四日までに発表すると約束。

NSCT、タイ全国労働会議はバンコクのサナームルワンで厳重な警戒の下、学生・民衆ら一万人を集めて抗議大集会を開いた（**資料21**）。

タマサート大学、卒業式（一〇月一日、二日両日）を延期。

九月三〇日　タノームの出国と、絞殺事件の犯人逮捕を求める動きが全国化する。東北部のウボンラーチャターニー県では、学生市民統一会議が一〇月一日に要求集会を開くことを決定。北部のチェンマイ大学生自治会も一〇月一日から無期限の授業ボイコットの開始を決定、NSCTを支持

し大学構内でデモ。一方、チェンマイ市内では、〝愛国者〟と名のるグループが、チェンマイ大学生に不隠な動きがあると非難するビラをまいた。

国会で野党の社会主義統一戦線党党首が、タノーム出国問題とナコンパトゥムの絞殺事件に関する緊急質問をおこなう。

一〇月一日　オーストラリアからワチラロンコーン皇太子が突然帰国。

「赤い野牛」のリーダー、ソムサックはNSCTが暴動をおこして政府を脅し、タノームのいるボーウォンニウェート寺の破壊を計画していると非難。「赤い野牛」は他の右派グループと協力してNSCTの活動を阻止すると発表した。

政府は、タノームは一〇月八日までタイ国にとどまると、テレビ放送で発表。

「10・14運動」の英雄的犠牲者の家族（四人）が、政府のタノーム問題の対処に抗議し、首相官邸の前でハンストに突入した。

一〇月三日　「ナワポン」のメンバー五〇〇人がサナームルワン近くのサナームチャイでタノーム出家を支持する集会を開く。また「ナワポン」の代表はボーウォンニウェート寺を訪れ、プラ・ヤーナサンワォン（タノームの得度式をおこなった高僧）の誕生日を祝福した。

『タイ・ラット』紙バンコク本社に爆弾が投げこまれる。

チェンマイ大学当局、試験延期を発表。コーンゲーン大学の自治会委員長は授業放棄と試験ボイコットを宣言。

一〇月四日　NSCTはサナームルワンに学生・民衆一万人以上を集めて無期限大集会（事実上、一〇月一四日の第三周年記念まで）に突入した。タイ全国労働会議（LCT）もこれに合流。タマサート大学は前期試験をボイコット（午前）。同夜九時、タマサート大当局は同大の無期限閉鎖を決定した。反タノーム集会は全国的規模に拡大。コーンゲーン大学（東北地方）の学生三〇〇人が公会堂前でデモ。また同大学自治会は東北タイ各県で反タノーム運動の組織化を開始する。またマハーサーラカームのナカリンウィロー女子校も試験ボイコット。

タマサート大でナコンパトゥムの労働者の絞殺事件の寸劇がおこなわれる。

セーニー首相、四日に予定していた新内閣閣僚名簿の提出を五日以降に延期。セーニー首相及びスィースック警察局長官はナコンパトゥムの絞殺事件に警察官が関係していたことをはじめて認める。しかし政治的動機は否定し、個人的確執であることを強調した。

右派グループ、サナームルワンの南で約一〇〇名が集会。反タノーム運動は共産主義者が煽動していると呼びかける。

一〇月五日　タイ字紙が四日のNSCTの集会の寸劇の模様を写真付きで報道。その中の役者がワチラロンコーン皇太子によく似ている（とくに右派系新聞『ダーウ・サヤーム』紙の写真が酷似していた）と問題になる。「ヤーングロ」放送がタマサート大の寸劇を王室侮辱罪として激しく抗議、

セーニー首相に圧力をかける。夜、同放送は右派の結集を呼びかけ、サマック、ソンブーンが閣僚入りしてないことを攻撃。

労働組合四三団体は、新政府がタノームを一〇月一〇日までに出国させない場合、一一日からゼネストに突入すると宣言した。

セーニー首相、タマサート大の寸劇事件は「王室の名誉を損うものである」とテレビで発表（二回）、警察当局に厳重調査を命令した。

セーニー新内閣発足。閣僚は次の通り。

セーニー・プラモート首相（兼内相）　プラマーン・アディレクサーン副首相（兼農相）　サウェット・ピエムポンサーン副首相（兼蔵相）　タウイ・チュンラサップ副首相（兼厚相）　プラシット・ガーンチャナワット副首相（前法相）　スリン・マーサディット総理府内相、ニティパット・チャーリチャン総理府内相（兼副国防相）　サンガット・チャローユー国防相　ピチャイ・ラッタクン外相　タウィット・グリンプラトゥム運輸相　ダムロン・ラタピパット商務相　チュアン・リークハイ法相　シリ・シリヨティン文相　チャーチャーイ・チュンハワン工業相

資料19

民衆の力を結集し、あらゆる形態の独裁に反対しよう

（『アティパット』紙（一九七六年九月二四日））

独裁者プラパートやタノームが帰国した目的は、なんと言っても軍の権力を自分たちの手に取り戻したいという点にあった。とりわけクリット・シワラー元帥が死亡して以後、彼ら独裁者たちは、故クリット系のグループと何らかの形で交渉が成立するものと安易に思い込んでいた。しかし九月の半ばに公式に発表された人事異動で何人かの高官が配置がえになり、事態は彼らの予想と異なって、故クリット系のグループが三軍の権力をますます支配しようとしていることが明らかになった。その結果タノームはもはやじっとしていられなくなり、急拠僧衣をまとって帰国した。彼は自分の配下が軍の権力の一部でもいいから確保できるように話をつけるために帰ってきたのである。結果がどうなるか今のところわからないが、とにかく今後の動きには十分注意する必要がある。

ところでこうした軍内部の派閥争いは、タノームが究極的に夢見ていたことと矛盾するのであろうか。否！　それはいささかも矛盾することではない。むしろ彼にとっては、必要不可欠のことだ

った。

一九七三年「10月14日」以後の状況は、国民に一つの事実を教えた。つまり支配階級にとって派閥争いの方が内部の結束より優位に立っている時には、彼らが学生・民衆を大々的かつ強権的に弾圧することはきわめて困難であるということを教えた。とりわけ「10月14日」以来、学生・民衆の団結力が強化され、政治意識も高まった情勢の下では、なおさら弾圧は困難なことであった。

一九七三年一〇月一五日・一六日に三人の暴君がタイから追放された後、軍内部の派閥争いは一段とその激しさを増した。そしてクリット元帥とその配下たちは、軍内部の権力の大半を三人の暴君から奪い取ったが、しかし陸、海、空の三軍にわたる権力を完全に支配しうるようなグループは結局結成されえなかった。

以上旧タノーム＝プラパート系と故クリット系の他に、この三年間の間にはもう一つ別のグループが登場した。チャーチャーイ・チュンハワン（退役）陸軍少将（タイ民族党幹事長）のグループがそれである。このグループは、何人かの重要な軍人を自分たちの陣営に引っぱり込み、今では三暴君や故クリット系のグループと肩を並べるほどの一大勢力に成長した。

国家機構の中では軍が最も重要な位置をしめ、その軍の内部で三つの勢力が派閥争いをおこしているという条件は、学生・民衆が思想的あるいは政治的側面で自らの役割と影響力を拡大させていくことを可能にした。そして組織的にも彼らは反撃をくり返す過程で徐々に力をつけ、また数限りない障害をのりこえていく中で成長していった。

このように民主主義、祖国を愛する学生・民衆の力が増大してきたことは、支配階級（帝国主義諸

国の支援をうけたサクディナー勢力と官僚資本主義者たち）に脅威を与え、彼らをますます憤激させることになった。だからこそ、支配階級は今独裁政権の復活をめざし、他方で学生・民衆の力を破壊しようとしているのである。農民、労働者、学生の指導者が次々と暗殺されていった事件や、「赤い野牛」、「ナワポン」といった右派組織の結成は、彼らのこうした動きを端的に示していた。

しかし彼らが独裁政権を復活させようと思うならば、その前に彼らは、内部の諸問題をまず解決しなければならないだろう。つまり現在のように軍の下部が三つの派閥に分裂している状況を一掃し、軍の権力を完全に支配しうるような一大勢力をつくる必要があるのだ。

今回、プラパートやタノームが帰国したのも、やはり軍の権力を掌握することが目的だった。これは帝国主義のバックアップを受けた支配階級が、軍の最高の権力を獲得するために必要な手段である。そして(もしそれが実現すれば)軍内部も今一度結束の方向に向かうであろう。

資料20

タノームの犯罪

全国反独裁戦線

クーデターを起こした「革命団」の首領であり、権力を使ってブンガート・ヒランカム元大臣等数多くの民衆を刑務所に送り込んだタノームに思い出させてやろう。当時獄中にあったブンガート氏の母親が重病にかかりそして亡くなった時、タノームはブンガート氏を葬儀にも参列させなかったではないか。

1　一九七三年一〇月一四日の時、民衆の虐殺を命令し、七一名の死者と数百人の負傷者を出したこと。

2　一九五八年一〇月二一日、サリット元帥と手を結んでクーデターを起こし、タイを独裁者の国にしたこと。

3　一九七一年一一月一七日、クーデターをおこない、一〇年もかけて作り上げた憲法を廃棄し、独裁体制を復活させたこと。

4　テムコ社から四三〇〇万バーツの賄賂を受けとり、タイの貴重な資源をアメリカに譲り渡したこと。

5　アメリカが国内に基地を建設することを許し、国家の主権を譲り渡したこと。

6　一九七三年のトゥンヤイ密猟事件をひきおこした部下たちの罪を覆い隠したこと。

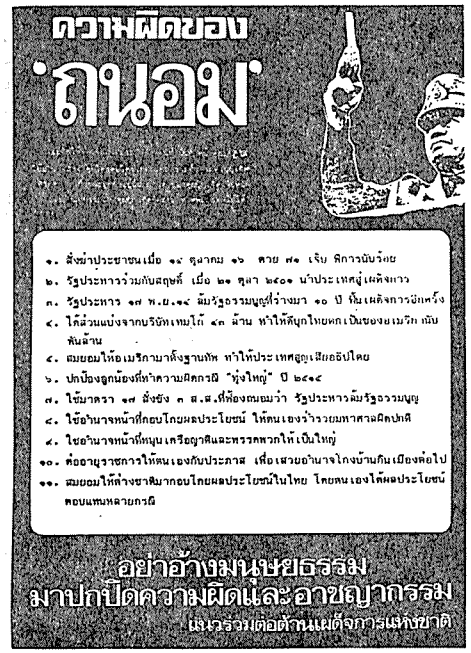
7　タノームはクーデタを起こして、憲法を廃棄したと訴えた三人の国会議員を、暫定憲法第一七条違反で投獄したこと。

8　自分の地位と権力を濫用して利益をかき集め、巨額の富を手に入れたこと。

9　自会の地位と権力を濫用して、一族縁者を高位高官の座につけたこと。

10　プラパートとともに任期を勝手に延長し、私腹を肥やし続けたこと。

11　タイの利益を外国がかき集めるのを許し、しばしば自らもその分け前に与ったこと。



「人道主義」を口実にして、自分の犯罪と罪を覆い隠すな！

資料21

タノームの帰国

正義を愛する国民グループ
（日付なし）

一九七三年「10月14日」の事件の時、学生・民衆、そしてさまざまなグループは広範かつ徹底的に軍部独裁政権に反対した。われわれ民衆は闘争の過程で、三人の暴君――タノーム、プラパート、ナロンの三人をついに国外に追放することができたが、しかし同時に多くの生命を失い、また血の涙を流さなければならなかった。「10月14日」、その日確かにわれわれは三人の暴君を国外に追放した。しかしそれ以後も独裁政権の基盤そのものは、わが国の支配者層の中に依然として残存している。そして全世界の独裁政権に肩入れするアメリカの影響力は、わが国においても強固に存続している。

支配階級たちは、民衆の一定程度の民主的権利を認めざるをえない状況にあるとはいえ、常に独裁政権による支配の復活を望んできた。彼らは真実を歪め糊塗することによって、またさまざまの

緊急の状況をつくり出すことによって、民衆に政情不安のイメージを与え、あわよくばクーデター断行の機会をつかみ、独裁制の復活を目論んできたのである。

彼らは、労働者・農民の正義を求める闘いは騒擾をもたらしていると攻撃し、民主主義体制による国民世論の声は、単なる「衆を頼んで無法を通す力（ゴット・ムー）」でしかないときめつけてきた。そして真の独立と民主主義を求めて闘っている学生・民衆に、国家・仏教・王制を破壊する売国奴（ナック・ペーン・ディン）、あるいはコミュニストのレッテルを貼ってきた。一方彼らは、自分たちのことを国を愛し、国の将来の安全を考える人々と称し、また「10月14日」の闘争は、単なる暴動・反乱にすぎず、三人の暴君はまちがっていなかったなどと事実を歪曲した。そして、学生・民衆の運動が与えるイメージを破壊することができるとなると、彼らは民衆を混乱状況に落とし入れ、さらに一九七四年一二月末のタノーム帰国工作、一九七六年八月半ばのプラパート帰国にみられるように、露骨に独裁制復活という彼らの本性を暴露するに至った。

今度の場合、彼らは常に、「タノームは悪くない。彼がタイ人である以上帰国することができる。彼は出家して、重病の父を見舞うだけだ」と広言してきた。彼らは、国民を泣き落としにかけるため、「人道主義的」理由を強調し、「10月14日」の残虐無比な姿をおおい隠そうとした。そして彼ら自身の政治目的を達成するための隠れみのとして、仏教を利用しようとしている。

独裁体制の復活という重大な危機が、今また到来した。われわれは事態の動きにますます注意を払う必要がある。そしてわれわれ自身の力で軍部独裁体制の復活に抵抗し、最後まで「10月14日」の意志を守り通さなければならない。

このような重大な、独裁体制復活の危機に際し、われわれは互いに団結し、最後まで独裁者の首領であるタノームの帰国に反対しなければならない。そしてあらゆる形態の独裁的支配に反対し、独裁者タノームに次のように警告しようではないか。「タノームは王制をまき込むのをやめろ！」

独裁体制を打倒し、民主主義を前進させよう！

（注）九月二九日、サナームルワンの集会で配布されたビラより。

資料22

青年僧侶の反タノーム帰国運動

『アティパット』紙
（一九七六年九月二二日、二三日）

九月二一日――起ち上がる青年僧侶

青年僧侶たちは、タノームの犯罪を検討する会議を開き、タノームの出家は正しくないと抗議するとともに、仏教界の政府にあたる大長老会（マハー・テラ・サマーコム）に対し、「ただちにタノームの調査をおこなえ、さもなくば仏教は冒瀆されるであろう」という趣旨の文書を手渡すことをきめた。

プラマハー・サウェーン・チュティバンヨー「タイ全国青年僧侶戦線（ネーウ・ルワム・ユワソン・ヘーン・プラテート・タイ）」書記長と、プラマハー・サワット・チャートメット執行委員は九月二一日午後集まり、タノーム元帥が出家することは仏教の教理に照らして正しいかどうか、また仏教が冒瀆されるのを防ぐ上でわれわれ青年僧侶は何をなしうるのかきめるため、二一日の夜、青年僧侶の集会を開くことを明らかにした。

またプラマハー・サウェーン書記長は、青年僧侶たちが大長老会に対し、タノームの出家の是非を検討すべしという要求文を提出することを期待すると語った。そして「もしタノームの出家が正しくないなら、大長老会は責務にもとづいて何らかの措置をとり、タノームを僧房から追放すべきである。なぜなら、大長老会は仏暦二五〇五年サンガ法の第二九条（「刑法上ノ犯罪ヲ犯シタ容疑デ逮捕サレタ〝ビク〟デ、取調官又ハ検事ガ一時ノ釈放ヲ適当トセズ、当該ビクガ所属スル寺院ノ住職ガ身柄ノ保護ヲ拒否シ、又ハ住職ガ身柄ヲ保護スルノヲ不適当ト判断シタ場合、又ハ当該ビクガ所属スル寺院ヲモタナイ場合、取調官ハ当該ノビクヲ還俗セシメル手段ヲ講ズル権限ヲ有スル」）によって、タノームを還俗させる権限をもっているからであると発表した。

また青年僧侶グループは、今回のタノームの出家の是非の審議は、全国民に対して公表すべきであると語った。

さらに、タノーム元帥は、出家する前に「10月14日事件」で、国民を虐殺した張本人として追及を受けており、彼の無罪はまだ証明されていない。そのような人間を出家させることは、大長老会議令に抵触するのではないかと述べた。

またこれとは別に、タノームの出家に際し、彼を正式に認める人物は誰もいない。たとえタノームが自分の身許は親戚によって確認されたと主張しても、それは無効である。なぜならタノームは、多くの国民に対して罪を犯し、国外に追放されたからであり、彼の出入国に対して実際に責任をもちうるのは政府以外にはないからである。

一方、その政府は正式にタノームの出家を認めていない。ただ政府内の一部の人間が、個人的立場から彼の入国と出家を承認しているだけである。だから彼はまだ完全に認められたわけではないと語った。

「ナワポン」のメンバーであるギティウットー(チャッタワン僧侶学院学長)は、タノームの出家に抗議する学生たちを、彼らが仏教を呪咀したという理由で共産主義者として非難した(このギティウットーは「国家・仏教・王制」の三大原則が共産主義者によって覆されようとしている。これら共産主義者から三大原則を守るためには、彼らを殺すべきである。人々は魚を殺して仏にささげ、功徳を積む。共産主義者を殺すのもこれと同じだ」とかつて発言し、物議をかもした)。

しかしプラマハー・サウェーン書記長は、彼の発言は冗談もいいところだと非難した。彼はいったい何を根拠に学生を共産主義者呼ばわりするのか。仏教を呪咀しているから学生は共産主義者だというなら、ギティウットーはどうなのか。青年僧侶を呪咀する彼こそが、仏教を呪咀しているではないか。そして彼の理屈からいえば、彼自身も共産主義者ではないかと非難した。

九月二二日——抗議声明文

九月二二日の朝、「タイ全国伝導僧戦線（ネーウ・ルワム・プラ・タムトゥート・ヘーン・プラテート・タイ)」と「サハパン・プラ・ナックスックサー・プゥヤイ（子供の時、正規の教育を受けることができず、大人になってから教育を受け、現在僧侶なっている人々の連盟)」の両団体は次のような抗議声明文を出した。

仏暦二五〇五年サンガ法によると、犯罪の嫌疑を受けている人の得度式を、ウパチャー(得度式をとりおこない、出家する人が僧になる資格があるかどうか審査する得戒師のこと）はおこなってはならない。にもかかわらず、プラ・ヤーナサンウォン（彼は、現プミポーン国王が出家した際、その得度式に立ち会った僧でもある)がウパチャーになって、タノームの得度式をおこない、その出家を認めたことは教理に反し、このような行動にわれわれは強く抗議する。またタノームは、「10月14日」の殺虐でその手は汚れており、そのような人間の出家を認めることは、仏教そのものの冒瀆につながる。したがって今回の「タノームの出家」は正式の出家とは認められない、と。

青年僧侶たちの抗議声明は、この他にも仏暦二五〇六年の大長老会議令第7号「ウパチャーの任免に関する規則」についても言及した。

それによると、タノームの得度式をおこなったプラ・ヤーナサンウォンのような教理に反する行動をとったウパチャーに対しては、次の五つの処分のうちどれかがとられなければならない。

(1) ウパチャーの職を罷免する。(2) ウパチャーの職を二年間停止する。(3) 一年間再教育する。(4) 訓戒処分にする。(5) 調書をとり公示する。

プラ・ヤーナサンウォンの場合、彼は大長老会のメンバーの一人でありながら、自ら大長老会の



ボーウォンニウェート寺を出る国王．左はプラ・ヤーナサンワォン（9月23日）

規則を破った。われわれは、大長老会が「仏法を仏法たらしめる」よう、全国タイ僧侶の名において要求する。さもなくば、いくら農民に対して「共産主義者が仏教を破壊しようとしている」と教え込んでも、これは逆に本当に仏教を破壊しようとしているのがいったい誰なのか、民衆に理解させることになろう。

われわれは、「三日以内に大長老会が何らかの措置をとるよう要求する。何の措置もとらないなら、ボーウォンニウェート寺の前でわれわれは大長老会議令を燃やして抗議するだろう」と述べて、声明文の最後の言葉を結んだ。

同時に、各県の青年僧侶戦線のグループたちも、タノームの出家に抗議するため連絡をとり合っている。

「タイ全国青年僧侶戦線」の執行委員であるプラ・スラポンは、「二三日の午後二時から、ポー寺院で全国青年僧侶の集会を開き、決議文を採択して大長老会に提出する予定である」と語った。

またこの「タイ全国青年僧侶戦線」とタマサート大学の「仏教・伝統研究会」の両者は、タノームの出家は仏教の教理及び大長老会議令に違反しているという抗議声明文を発表した。

午後七時、「タイ全国青年僧侶戦線」はプラマハー・サムルワイとプラマハー・サウェーンの指

揮の下、ラーチャボピット寺院へ、法王に要求文を手渡しに行った。しかし法王は、文部省宗教局の管轄する問題であると会見を拒絶した。

しかし青年僧侶グループは、書記に文書を託し次の三項目要求を法王に伝えることで同意した。

1　タノームの出家に立ち会ったプラ・ヤーナサンウォンを調査する。
2　国の安全と世論にもとづき、仏教の教理に従ってタノームを処分する。
3　大長老会は、プラ（僧）、サームネーン（見習い僧）だけでなく全国民に対し、この問題に関する見解を公表する。

資料23

暴君が黄衣をまとい、混乱が生じる

民衆のためのタイ全国職業学生戦線
（一九七六年九月二六日）

九月一九日に暴君タノームが剃髪し、黄衣に身をまとって帰国してから、祖国に混乱が生じた。そして多くのグループが激しい動きを展開し始めた。それからというものたとえば、職業学生内部で乱闘騒ぎがおこったが、これには「赤い野牛」が関係していた。またラームカムヘーン大学の学

生が、ボーウォンニウェート寺で地図を所持している所を逮捕された。しかしこの学生は、実は暴君とアメリカの手先である「タイ・コウモリ」のメンバーの一人であった。さらに対抗グループの名をかたって、手紙でボーウォンニウェート寺を焼き払うと脅迫する事件も生じた。暴君に抗議して起ち上がった民衆サイドの活動家に対する脅迫も現在さかんにおこなわれている。たとえば暴君を追放するポスターを貼っていた者を逮捕したり、「赤い野牛」のメンバーがポスターを貼っていたタマサート大の学生を秘かに襲撃したりした。またつい最近では、ナコンパトゥム県で暴君に抗議するポスターを貼っていた民衆二人が絞め殺された。この九日間におこった諸々の事件は、民衆の安全を著しく脅すものであり、誰一人としてこれらの事態が生じるのを防ぐことができなかった。民衆によって選出された現政府でさえ、こうした事態に対して、何らかの毅然たる態度を示すことができなかった。

現在おこっているさまざまな事態は、明らかに（10・14運動で）利益を失った連中と暴君の配下たちがひきおこしたものである。彼らは暴君タノームの帰国を企て、それによって混乱を生ぜしめ、機をつかんで動乱をひきおこし、さらには激しい状況をつくり出すことによって民衆を刺激し、脅そうとしているのである。

われわれ「民衆のためのタイ全国職業学生戦線」は、親愛なる国民のみなさんと職業学校の仲間たちに次のように訴えたい。力を結集して団結をより強固なものにし、現在の情勢を十分に把握しよう。そして総力をあげて（独裁体制の復活に）反対し、相協力して問題の解決にあたろう。たとえいかなる個人、グループにせよ独裁体制の復活をもたらすような情勢をつくりだすことを狙っている

連中は、反逆者（ガボット）であると宣言しよう。無血クーデターであろうと、改革議会、国民議会等の設立であろうと、彼らがめざしているものの本質は独裁そのものなのだから。

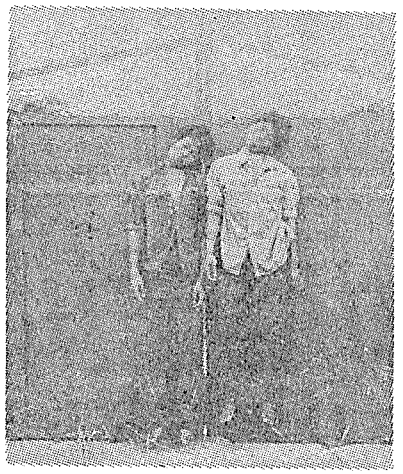
われわれ「民衆のためのタイ全国職業学生戦線」は、今回の陰謀の背後にいる一味を告発し、依然として彼らが民衆に対する抑圧を正当化するために不穏な事態をつくり出そうとするならば、きわめて厳しい教訓を得るであろうことを警告したい。いずれにせよ、政府にはこの問題に対して責任をとることを拒絶する権利はない。われわれは政府が民衆の抗議の声にもとづいて、ただちに暴君タノームに対する措置を講ずることを要求する。また民衆の安全を保証し、民衆を殺害した犯人を早急に逮捕すること、そしてこれらの責任を回避したり、以前の如く責任を他に転嫁したりすることがないように要求する。もし民衆が起ち上がって自らの手で問題の解決にのり出すなら、政府は暴君と同じ立場に置かれることになろう。「10月14日」の事件は、そのことをはっきり示している。勇敢な英雄の流した血に続け！

資料24

声明——流された血は償わなければならない！

タイ社会党
（一九七六年九月二五日）

一九七六年九月二四日未明、ナコンパトゥム県で絞殺事件が発生し、事件の内容を知った国民に



ナコンパトゥム県での首吊り殺人事件

大きな衝撃を与えた。殺されたのは、ナコンラーチャシーマー技術学校卒の電気技師、チュムポン・トゥムマイとウィチャイ・ゲートッサリーポナンサーの二人である。二人は、ナコンパトゥムのムアン郡にある「正義を愛する国民」グループに加わって、独裁者タノームの帰国・出家に抗議するポスターを貼っている最中に殺された。そして二人の死体は、ムアン郡の町から一キロ離れたところにあるコー・スン・ンガワン自動車整備工場の門の前に吊された。二人の死体を調べたところ、全身には打撲傷のアザがあり、首を絞められた痕かあった。またその手首には、手錠によってできたと思われるかすり傷の痕も残っていた。

事件と先の証拠から、チュムポンとウィチャイは、独裁者タノームに抗議するポスターを貼りに行く所で殺されたもようである。このような殺人は、この上なく愚劣な、またえげつないやり方で国民を欺し、威嚇しようとするものである。民主主義体制下にある国で、これほどまでに支配階級が支配下の国民を脅し、抑圧した国は他に見られない。その悪辣さは、インドシナ戦争でアメリカから報償金をもらうために国民の首を切った先例をも凌いでいる。たとえ植民地の奴隷的住民をつ

かまえてその首をはねた植民地侵略者たちでも、憲法に定められている権利にもとづいて、独裁政権復活に抗議する考えを示そうとした国民をつかまえ、はては生きたまま吊すといったほど残虐なことはやらなかった。

われわれタイ社会党は、正義を愛する国民が傷つけられ、脅されているのを黙って見ている地方当局の残虐かつ野蛮なやり方に激しく抗議するとともに、政府が今回の絞殺事件をただちに責任をもって調査し、犯人を逮捕することを、法による権利にもとづき、平和裏に要求する。そして広範な抗議をひきおこし、ついには犠牲者を生みだしたそのものの原因を排除し早急に、しかるべき方法をもって独裁者タノームを逮捕することを要求する。もし政府がこれを無視して、今までと同じように国民を脅す流血事件に対し責任ある態度を示さないなら、われわれ国民は、今後しかるべき対抗的動きを展開するであろう。

われわれタイ社会党は、今回流された国民の血は必ずや償わなければならないと考える。

（注）タイ社会党機関紙『社会主義（サンコムニヨム）』最終号（一九七六・九・二六）掲載。

第５章

血の水曜日

——1976年10月６日



1976年10月６日　学生・民衆の弾圧

資料25　NSCT機関紙『アティパット』最終号


อธิปัตย์

นักศึกษาเกาหลีใต้ประท้วง

ชุมนุมยืดเยื้อที่ธรรมศาสตร์

ต่อต้านเผด็จการ ต้องเผชิญหน้ายาวนาน

《解　題》

一〇月六日の「血の水曜日」事件がいかなる経過でひきおこされたのかという点については、すでに第1章あるいは第4章で詳しく書いておいた。ここでは本章に収録した諸資料について簡単な説明を加えておきたい。

最初のメモ（**資料26**）は、英文で書かれたものであり、作者は不明である。

資料27は、タマサート大学における弾圧がどのようにおこなわれたのか、その詳細な記録であり、英語による一部抄訳は、アジア学生連合の『エイシアン・ステューデント・ニューズ』一九七六年九―一〇月合併号に掲載された。

資料28は、一〇月六日にタマサート大学の抗議集会に参加し、殺戮と逮捕からからくも逃がれた一女子学生が友人にあてて書いたメモの翻訳である。

最後に掲載したのは、日本人が経営するナイトクラブではバンコク最大といわれる「サニー・シャトウ」が一〇月五日に在タイ日本人に配布したビラのコピーである（**資料29**）。クーデターの噂が流され、これに抵抗する学生・民衆が大規模な集会を開き、さらには二〇〇名以上に及ぶ人々が虐殺されるという事件の当日に、タイ進出日本企業や日本人がいかに彼らタイ人とは無関係な世界で生きていたかをこの資料は象徴的に示しているといえよう。

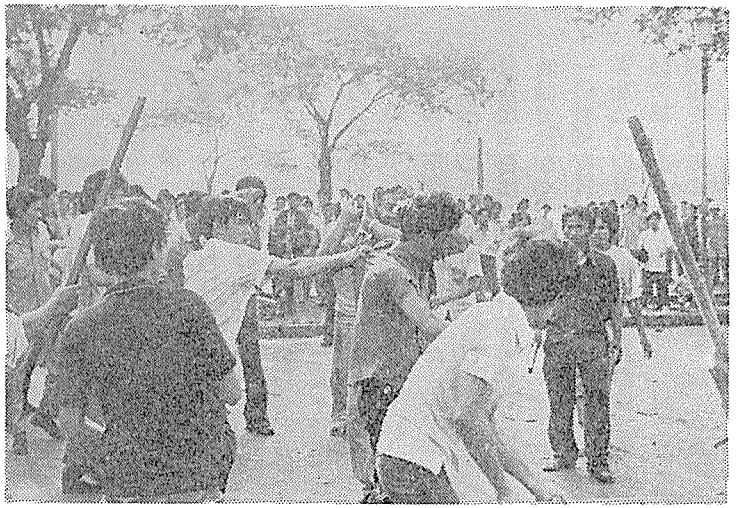
資料26

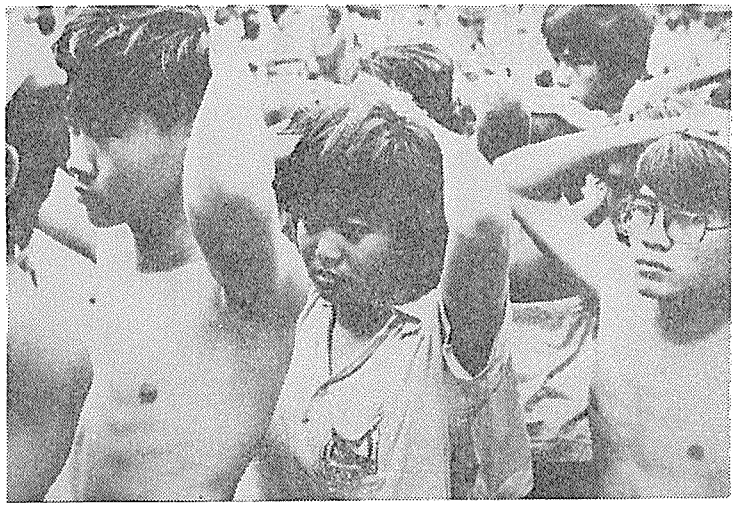
メモ——一九七六・一〇・一〇

タイの状況は、まったく思いもかけず、突如として日頃の状態に戻った
しかし、一九七六年一〇月六日の光景は、今なお私の心と眼に
生々しく焼きついている

私は三年前の一〇月一四日と、今年の一〇月六日の両日、現場に
叫喚と銃声のこだまする真只中に、居た
どちらも血に塗られた、そして死者と傷ついた人々のでた日だった

しかし、両者の間には決定的な違いがあった
単に殺され、傷ついた人々の数が違っていたというだけではない
民衆の行動の背後にある動機と、その精神にも
決定的な違いがあったのだ





一〇月一四日、それは民衆と軍部独裁者のあいだの闘いだった
一〇月六日、それは民衆と民衆のあいだの闘いだった
一〇月一四日、それは光明と希望をもたらした日だった
一〇月六日、しかしそれは、暗黒と破滅をもたらした日だった
一〇月一四日、それは生命を、民衆の力を、一〇人が死に無数の人々が起ち上がる
それを讃える詩をつくった
しかし今、一〇月六日の中から、どのような詩を歌えというのか
一〇月一四日、死んでいった人々には、「英雄」の名が冠せられた
一〇月六日、死んでいった人々には、「裏切者、反逆者」の汚名が着せられた

どちらの事件にも群集がいた
殺されることを恐れず行進し
怒りに声をはりあげ
武器ではなく、棒・石ころ・びんを手にする群集がいた
一〇月一四日、私が見たのは、民衆の集りだった
しかし一〇月六日に私が見たのは、野獣の群れだった

制服を身にまとった野獣たちは、あらゆる方向に、あらゆる街角に

発砲した
銃で撃ちまくり、殴りかかり、靴で蹴った
若者たちは、すでに彼らに屈伏させられていたというのに……

しかし、はるかに正気を失った群集がそこにはいた
もっと野蛮で、残虐で、まったく人非人な群集が……
棒・石ころ・びん・ナイフ、そしてむきだしの手をもった動物の群れは
人々に、若者たちに
つかみかかり、蹴り、打ちすえ、殴り、刺し、吊し
そしてあまつさえ、焼き殺した
プラメーン広場と呼ばれる、人々の集う場で
サンデー・マーケットの名で知られる、あの有名なところで
しかも何千という人々の見ている前で
私の目に焼きついたこのような光景を、どうして拭い去ることができようか
しかし、運命の日――一〇月六日の数多い光景の中でも、あるひとつの光景が
亡霊の如く、絶えず私につきまとい、私を翻弄する
タマサート大学構内のフットボール競技場の真只中に
一台の救急車が停まっていた

七人の学生が、傷つき折り重なっていた
その中に、一人の娘が横たわっていた
彼女の頭は、他の傷ついた男の学生の手で支えられていた
彼女の顔は苦痛で蒼ざめ、くちびるは渇き、目は大きく見開いていた

彼女の手には、血が飛びはね
右足は、大きな傷を受けて、傷口を開け、醜く、血が滲み出ていた
銃弾が多分まだ足の中に残っているのだ、と私は思った

彼女の顔に視線を戻すと
彼女は私の顔を見つめていた
彼女の眼差しは、口で語れない言葉を叫んでいた
その時、私に一体何ができたというのか
おそらく、近くの蛇口から、一杯の水をもってくれば
彼女の渇き切ったくちびるには、若干の生気が戻ったのかもしれない

しかし徘徊する野獣の群れは
助けようという私の思考を凍てつかせた

彼らは、その群集行動の鉾先を、私の方に向けようとしていた
そうなれば、私が次の犠牲者、彼らの餌食になるだろう

再び彼女に目を移すと、その眼はもう別の方向を向いていた
私はその場から立ち去らねばならないと悟った
そして今、この時間から逃がれようとした
私の勇気、熱情、闘争心が、彼女と私を裏切った時
私は、戦場から脱出した、苦痛と恥辱にまみれて……

数分後、私は構外に、プラピングラウ橋のたもとにいた
サイレンがけたたましく鳴り
三台の救急車が、構内から走り出て
傷ついた学生を近くの病院へ運び込もうとした
その中にあの娘がいた

突然、野獣の群れが広場にあふれでた
棒・石ころ・びんを手にもち
救急車に襲いかかった

犠牲者たちは、無慈悲にも完全に殺されるに違いない
その時、機関銃の音が空中に鳴り響いた
警官の射った銃声は、一瞬群集を立ち止まらせた
その間隙をぬうようにして、救急車はスピードをあげ、目的地に向けて疾走した
しかし血と死者に飢えた喧騒は
銃弾によっても鎮めることはできなかった
群集は、二台のバスを奪取し、救急車の後を追いかけた

一〇月一四日、それはなんと素晴らしい日か
そして一〇月六日、それはなんと屈辱にみちた日であることか

この短かい三年間――その間に時間は一体いかなる違いを私たちにもたらしたのか
民衆はますます覚醒したのではないか
民衆は以前にもまして人間的になったのではないか
社会の構造はますます抑圧的でなくなったのではないか
民衆は自らの力を
責任と自覚の力を理解したのではないか

一〇月六日、それは一体何を明らかにしたのだろうか
タイ民衆が相変わらず奴隷の状態にあることを
彼らがますます権力を求める連中の道具になっていることを
権力を失うことを恐れる連中の道具になっていることを
彼らが、異なるイデオロギーに操作され、利用されやすい傭兵であることを
彼らが、自分自身の文化と社会構造の奴隷であることを
明らかにしたのではないか

パターンは今やはっきりしている
それは権力によって織りなされている
その権力は、銃弾に、あるいは暴虐な力によって支えられているのだ

銃を取り上げることは、本当に人に力を与えるのか
それは民衆をより力あるものにするのか
民衆が野蛮な力を使って、互いに対立するのを実際に決めたのは一体誰であったのか
それは民衆自身か
はたまた、伝統と神聖なる王制に盲目的にかしづいている人々なのか

一〇月六日、それは現在まで知られていない多くの事実を
私たちに教えてくれた
しかし、私たちはそれをすすんで学ぼうとしているのだろうか

一〇月六日以降、私たちは一体どこに行こうとしているのか
そしてこの私は、どこへ行こうとしているのだろうか

大学構内で傷を負ったあの娘
救急車の中で再び傷つけられたあの娘
そして今、病院で死につつあるあの娘
私たちの祖国であるタイは、彼女自身の姿ではなかったのか

彼女は私を見つめた
私も彼女を見つめた
しかし彼女を助けるためには何をすればよかったのか
走り続ければよかったのか
たとえ、私は、自分自身の行動を許しえないものとし
そして許さなかったとしても

一体私は何を、そしてどのようにすればよいのだろうか

（作者不詳）

資料27

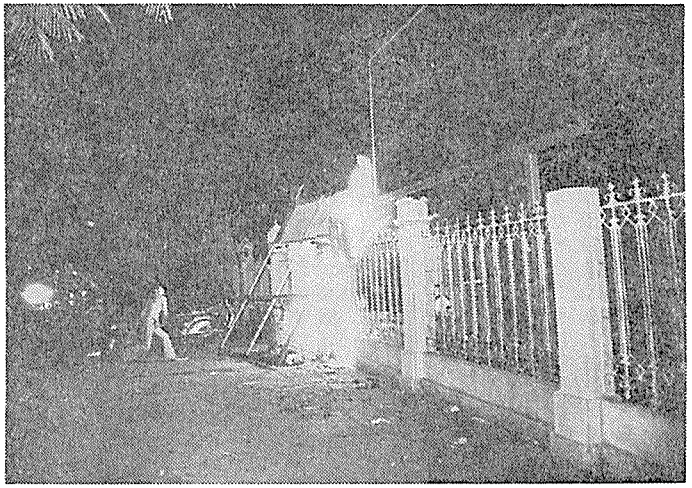
ドキュメント〝血の水曜日〟

一九七六年一〇月六日　午前一時

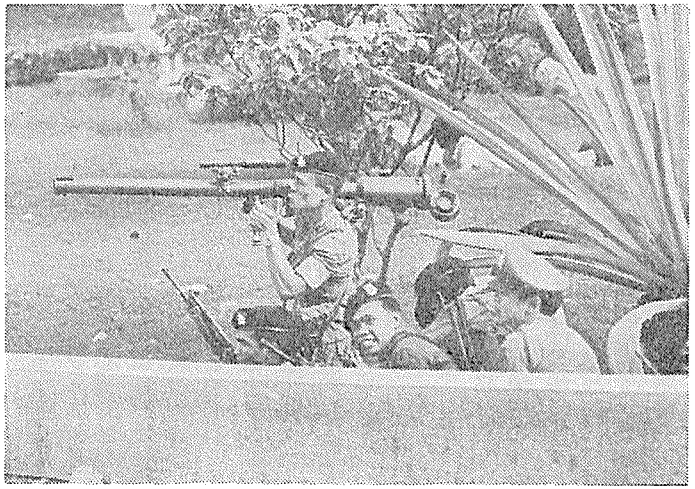
警察局長官スィースック・マヒソタラテープは警察の幹部たちと緊急会議を開いた後、幹部たちとタマサート大学の構内に現われた。その時、タマサート大学では学生・民衆約一万人による集会が開かれていた。

一方、ヤーングロ放送の局長ウネーン・サニットウォン・ナ・アユタヤー、右翼教授のウティット・ナカサワ博士、有名な右翼の司会者アコム・モッカラーノンの三人たちがヤーングロ放送を通じ、国王を讃える歌を流しながらタマサート大学にいる学生と国民に対してただちに断固たる処置をとるように警察に命令していた。そして全国から集めた「ルーク・スア・チャーウ・バーン」に、サナームルワンに九時に集合するよう放送した。

午前二時三〇分

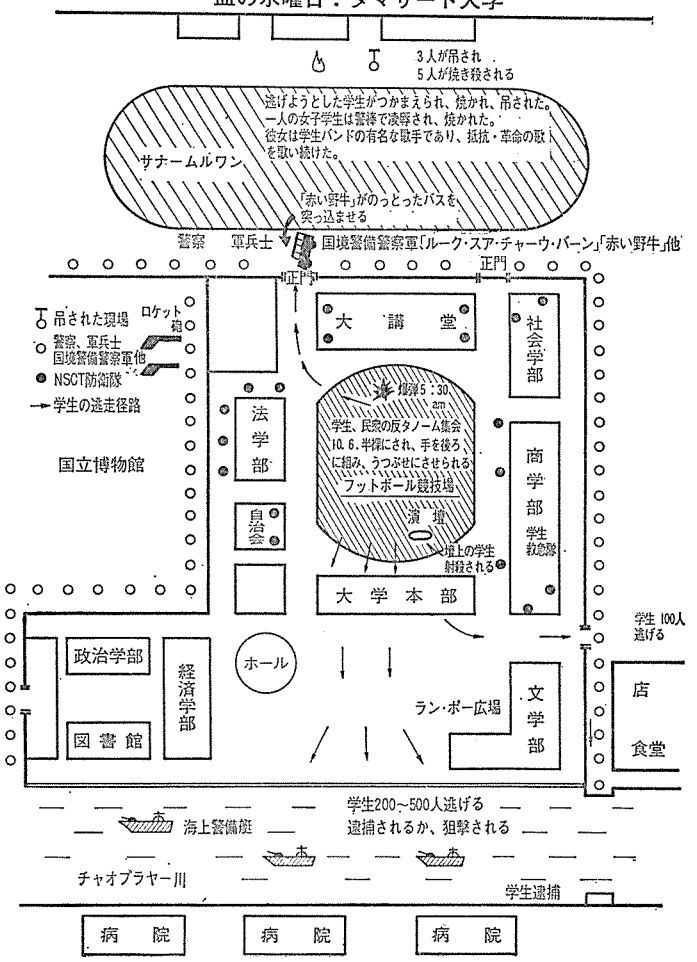


タマサート大正門前



無反動砲で狙撃する国境警備警察軍

血の水曜日：タマサート大学



警察は無線放送を通じて、バンコク警察とトンブリー警察に対して、ただちにバンコク近辺の発電所、水道局、電話局の警備にあたるよう命令を出した。一方、「赤い野牛」のあるグループは、自分たちの身分証明書を集会の防衛隊の前で焼き捨てるなどの偽装をして、大学構内に潜入した。後でこの「赤い野牛」グループは、構外の「赤い野牛」といっしょの行動をとったのである。

午前三時

サム・ヂャルラット(警察特別部隊のリーダー)は、部隊にタマサート大学の全ての門の警備にあたるよう命じた。また海上警備警察は、数隻の警備艇をチャオプラヤー川に待機させるよう命じた。その頃、タマサート大学にいる学生や民衆たちは、外部の動きにはまだ気づかずに、ステージの演説や音楽に聴きいっていた。

午前四時

タマサート大学構内のサナームルワンの方から銃声が聞こえてきた。その頃国王の別荘があるホア・ヒンの市警察のパラシュート部隊に集合命令がだされ、部隊はヘリコプターでバンコクにある軍のキャンプに降りたった。そしてただちにトラックに乗ってタマサート大学に急行した。もっとも彼らが到着したのは午前八時であった。

午前五時四〇分

タマサート大学の集会ステージの右側で突然、爆発音が聞こえた。この爆発音は警察がM79バズーカ砲を大学の外から撃ちこんだものによると思われる。この砲撃で、タマサート大学の集会の参加者のうち一人が即死し、二四人が重傷を負った。同時に「赤い野牛」グループは警察部隊と一緒にタマサート大学のサナームルワン方向の門から突入しようとした。この爆発音のすぐ後、M16ライフルなどがタマサート大学構内に撃ちこまれた。タマサート大学の隣にある国立博物館の方からも銃声が聞こえ始めた。集会場の民衆や学生はおびえていた。

午前五時五〇分

「赤い野牛」と「ルーク・スア・チャーウ・バーン」のグループは通りかかったバスを止め、乗客を全員降ろしてそのバスを乗っ取り、タマサート大学のサナームルワン方向の門を突破し、警察の一部と一緒に拳銃を発射しながらタマサート大学にはいろうとした。しかし集会の警備にあたっていた人たちから抵抗があり、銃声が聞こえた。警察はいっきょにタマサート大学にはいり込んで、大学の講堂やフットボール競技場に雨のように弾丸を撃ちこんだ。ヤーングロ放送の責任者は、タマサート大学にいる学生や民衆に対し、ただちに解散するように呼びかけていた。銃声がだんだん大きくなり、大学の中にいる人たちは身を伏せ、自分を守るために大学の校舎に身をかがめて移動し始めた。大部分の人たちはタマサート大学から脱出しようとしたが、全ての出口は警察の手で封鎖されており、出ることはできなかった。

午前六時

NSCTのヂュッタ・アンスウィタヤーはセーニー首相の官邸に電話し、NSCTのスタム・セーンプラトゥーム書記長が至急面会したい意向であると伝えた。その時セーニー首相は不在で、電話を受けたのはチャラン・カンタウォンという首相秘書官であった。チャラン秘書官は、もしセーニー首相に面会しなければ、NSCTのリーダーと寸劇を演じていた連中を連れて来い、と条件をつけた。その時、タマサート大学にいる学生たちは次々と警察の手で殺されていた。六時にはすでに何十人も死んでいたのである。そして重傷を負っている学生や国民たちを病院に運ぼうとしてタマサート大学を出ようとした人たちにも、警察は許可を与えなかった。

午前六時一五分

タマサート大学の門を突破するのに使われたバスが、「赤い野牛」グループを乗せてヤーングロ放送局に向かったという情報がはいった。その頃、タマサート大学では、内と外の間で銃撃戦がおこなわれていた。警官一人が負傷したという報告があった。そしてタマサート大学構内のステージの上では、学生のリーダーがマイクを通じて警察に対して、たちに銃撃を止めるよう呼びかけていた。しかし警察の方からは何の答えもなく、銃撃は続いた。

午前六時二〇分

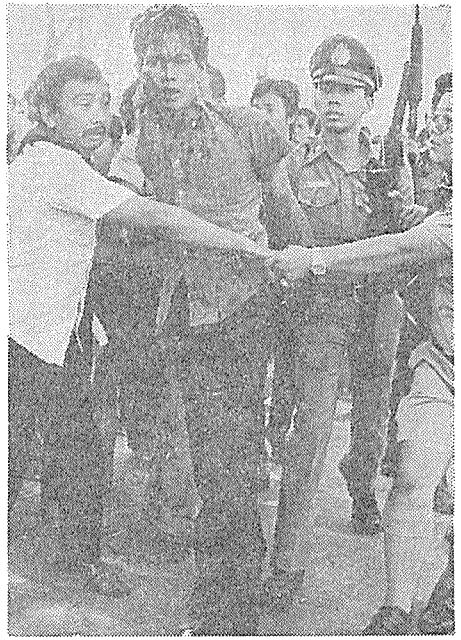
バンコク警察は、全ての警察署に出動命令をだし、その一部にタマサート大学の現場に急行するよう命令を出した。警察の特別部隊はタマサート大学構内にはいり、いろいろな建物を捜索し、学生や民衆を全てフットボール競技場に集合させた。

午前六時三〇分

まだM79バズーカ砲が警察から構内に撃ちこまれていた。ステージの上で指示している学生のリーダーたちの頼みにもかかわらず、警察は攻撃を止めなかった。アンスウィタヤーはまたチャラン首相秘書官に電話して、集会の人たちが解散する態勢が整ったので、警察側の攻撃を止めさせるよう命じてくれと連絡をとった。またトゥライロン・スーンアンナキリ教授(タマサート大学・経済学)からも、すぐ止めさせるようにとの電話があった。

午前六時五八分

チュムポン・ローハチャラ(警察局副長官)は二人の私服警官をタマサート大学に送りこみ、NSCTのスタム書記長をセーニー首相の私邸まで連れていった。しかしセーニー首相は首相官邸に出かけて留守であった。警察はそこでしばらく待たせた後、スタム書記長を逮捕してサムヨット警察署まで連行していった。後でスタムは次のように語っている。「だまされた。最初は、警察が今の緊迫状態をお互いによく話しあって解決しようということで、私たちはここに連れてこられたのです。これはいったいどういうことでしょう。私たちは常に正しい行動をしてきました。全ての国民にもよく考えてもらい、その判断を求めたい」と。



警察・国境警備警察軍・右派

タマサート大学に出向いた警察は、学生たちを厳しく処分するつもりでいた。ある警官は「自分の手で学生を殺してやりたい」というひどいことを平然と語った。そしてタマサート大学近辺の警備にあたっていた警官たちは、学生が「赤い野牛」や「ルーク・スア・チャーウ・バーン」たちによってリンチされたりするのを喜んで見ていた。

午前七時一〇分

NSCTの政治局長プラユーン・アカラポーンは、タマサート大の集会の防衛隊といっしょに警察に行き、集会に参加している子供や女性をすぐにタマサート大学から避難させるよう要求した。しかし警察はそれを拒否した。また、大きな爆発音がタマサート大学構内でおこった。その銃声や

爆発音はサナームルワンの方から聞こえてきたのである。そしてタマサート大学のフットボール競技場に配置されている警察は、大学の校舎に進み、捜索を始めた。ステージの上にいる人たちは、ただちに警察に捜索を止めるよう何回も求めたが、商学部のビルの警備にあたっている国境警備警察軍の一人は、その話がまだ終らないうちにM16ライフルでステージの上を射撃し始めた。そのため、ステージの上にいた集会のリーダーたちは即死した。

午前七時三〇分

チャオプラヤー川に逃げた学生たちは警察の海上警備艇で救助されたが、全員逮捕された。

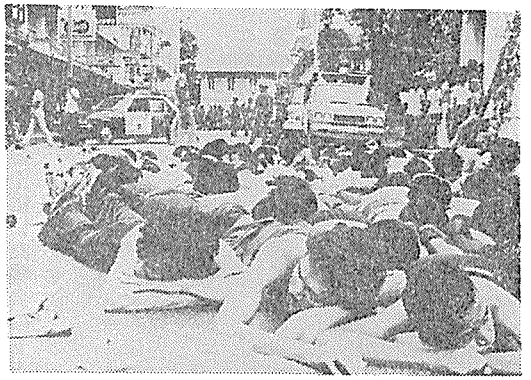
ヤーングロ放送は警察に対し、全員大学のすみからすみまで学生を探すよう指示し続けていた。

午前七時四五分

警察は、タバチャン（チャオプラヤー川を渡る船の乗場）にいる人たちを、タマサート大学から離れさせた。爆弾の音や、M16ライフルの音が雨が降るように聞こえた。その時、一人の警官が拳銃に撃たれて死亡した。

午前八時二〇分

民間最大の放送会社トー・トー・トー・ラジオ放送は、警察のパラシュート部隊がタマサート大学構内に突入し、大学講堂のそばでは七人の死体が発見されたという報道をした。そしてUPIの



グライピット・パンウット記者が首に弾丸を撃ちこまれて死んだというニュースもあった。チャオプラヤー川にいる学生たちは必死でトンブリー側に逃げようとしたが、岸の警官たちはそれに向かって拳銃を撃ち始めた。

午前八時三五分

衝突が激しくなってきた。警察と「赤い野牛」は、タマサート大学構内にたてこもっている学生や民衆たちに対し、総攻撃を開始した。タマサート大学構内からの抵抗は拳銃の音しかなかった。

午前八時三七分

タバチャン方向に逃げこんだ学生たちは、警察によってマハラッド通りに集められた。逮捕された人たちはシャツや時計、指輪、眼鏡などをはずされ、マハラッド通りの暑さにもかかわらず、みな、地面にそのまま手を頭の後部に乗せて、三時間も身を伏せていなくてはならなかった。その中には、二、三人の記者も含まれていた。

一方、タマサート大学近辺にあるレストランや店に逃げこんだ学生たちも、警察に踏みこまれ、

逮捕された。

午前八時五〇分

「ルーク・スア・チャーウ・バーン」たちがサナームルワンに集まり始めた。この行動は、ヤーソングロ放送が命令していたものであった。彼らは集まったところで、タマサート大学にいる学生や民衆をただちに厳しく処分するよう要求し始めた。そして、彼らは首相官邸に移動し始めた。

午前八時五五分

一部の学生たちが、プラピングラウ橋や国立博物館の方へ逃げだそうとしたが、外で待っていた「赤い野牛」に捕えられ、棒で殴られ、ナイフで刺されたり、拳銃で撃ち殺されたりした。これらの暴行を見ていた警察はしかし何も言わなかった。ある学生が頭を血で染めながら、タマサート大学から逃げだしたところを、外で待っていた「赤い野牛」たちは棒で殴り倒した。さらにそこを足で踏みつけ、何度も棒で打ち、彼らの持っていた拳銃で射殺した。さらに首をしばってサナームルワンにあるタマリンドの木に吊した。

このことを目撃したある女性は泣きながらこう言った。

「どうしてタイ人がお互いに殺しあわなければならないの？　三年前に学生たちがあの三人の悪党たちを追いだすためにたくさん死んだのをみんなはもう忘れたの？　この学生たちが何をしたというの？」

ある中年の男性は片手に『ダーウ・サヤーム』（極右翼紙）を持ちながら、その女性に対してこう言った。

「お前はヴェトナム人だろう。死にたいのか？　お前たちはくずなんだ。」

午前九時

タマサート大学にたてこもっていた学生や民衆たちは大学構内のフットボール競技場に集められ、うつ伏せにさせられていた。校舎にひそんでいた学生たちも警察によって連れだされた。男性はシャツを、女性はブラウスを脱がされ、時計や眼鏡、財布などの所持品もみんな押収された。

午前九時六分

スィーラパーゴン芸術大学方向からの警察の攻撃はまだ続いていた。サナームルワンにいる「赤い野牛」たちは殺した四人の学生たちの死体を集め、石油を注いで焼き始めた。その中の一人はまだ息があったので、その火によって焼き殺された。

午前九時一六分

「ルーク・スア・チャーウ・バーン」や愛国グループたち、たとえば婦人連合会、「ナワポン」、タクシーの運転手グループたちがサナームルワンに約一万人ほど集まり始めた。



午前九時二〇分

四人の学生たちが手を頭の上に乗せて、降参するような恰好でサナームルワンの方向の門を通ってタマサート大学から出てきたが、彼らは「赤い野牛」たちに包囲され、棒や拳銃やナイフでリンチを受けた。その中の一人の死体は、「赤い野牛」に小便をかけられた。もう一人は女性であったが、「赤い野牛」グループによって裸にされていた。

サナームルワンの一角では一人の男が近くの右翼団体の群集にやられていた。そこを死体を収容する車が通りかかったが、係員が降りて、その男が死んでいないのを見て通り過ぎてしまった。「赤い野牛」はその男を殺し、後でその死体を焼き捨てた。

午前九時三〇分

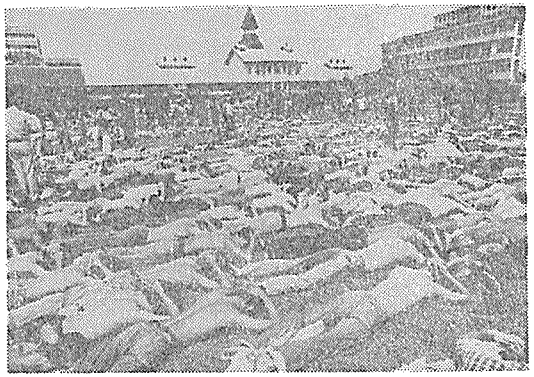
緊急閣僚会議が開かれた。プラマーン・アディレクサーン副首相はセーニー首相（タイ民主党党首）に、スリン・マーサディット総理府相（民主党副党首）、チュアン・リークハイ法相（民主党副党首）、ダムロン・ラタピパット商務相（民主党幹事長）の三人の大臣をただちに解任するよう強く要求した。しかしセーニー首相はそれを拒否した。このセー

ニー首相に対する圧力は、信頼すべき消息筋によるとプラマーン・アディレクサーン自身に首相の座を確保するたくらみがあったのだという。この緊急閣僚会議の主な議題は、タマサート大学でおこった事件に関する声明文の内容と、バンコク市内に緊急事態発生の公布だった。しばらくして元空軍大将タウイ・チュンラサップ（副首相、厚相兼任）、海軍大将サンガット・チャローユー（国防大臣）が会議室から出てきた。両氏とも外に待っていた新聞記者には何も言わなかった。そして会議は一〇時に中断され、その後午後二時までおこなわれた。

後にセーニー首相は新聞記者に対して、「タマサート大学に踏み込んだ警察は、王室侮辱罪に対する公務を遂行したのである。しかし集会に参加していた学生から強い抵抗があり、やむをえず武力を行使した。そしてスタムNSCT書記長などの幹部たちはすでに警察に自首している」と述べた。セーニー首相は政府が国の安全のためにとった行動であったことをくり返していた。そして警察の武力行使の厳しさについては、警察の独自の判断であったという談話も発表された。

午前一〇時

バンコク市内のバス会社に警察から連絡がはいり、ただちにタマサート大学にバスを集めるようにとの連絡があった。そしてバス一台には二四〇人ぐらいの逮捕された学生がつめこまれた。その作業を、その周りにいる「赤い野牛」などの人たちがみつめていた。逮捕された学生たちの貴重品が彼らに奪われたこともあった。



午前一〇時三〇分

国境警備警察、パラシュート部隊、首都圏警備警察、警察特別部隊たちが、大学校舎のすみずみまで捜査を進めていた。トイレや書棚にひそんでいた学生たちが次々とひっぱられ、フットボール競技場に集められた。

午前一一時

「ルーク・スア・チャーウ・バーン」たちが、サナームルワンの方向にどんどん集まり始めた。彼らは、「赤い野牛」といっしょになって、逮捕された学生たちや、構内から逃げ出した学生たちにリンチを加えたり、棒や拳銃やナイフなどでこずいたりしていた。

午前一一時二〇分

救急車が死体を集め始めた。

午後〇時

バス八台が集められ、タマサート大学で逮捕されている学生たちや、フットボール競技場に集められていた学生た

ちを乗せてタマサート大学を去った。同時に「赤い野牛」や「ルーク・スア・チャーウ・バーン」たちは、今日の事件で警察が使っていた武器をフットボール競技場に集め始めた。

午後〇時三〇分

チュムポン・ローハチャラなどの警察の幹部たちが大学の構内にはいって、現場の捜索や残された学生の逮捕活動に対し、自ら指揮をとった。

午後一時

雨が降り始めた。商学部の校舎を染めた血を洗い流すかのように、雨はその場所だけ一時間ほど降り続いた。

集会に参加していた学生や民衆たちはバスに乗せられたまま、大学構内で立往生していた。その間にも「ルーク・スア・チャーウ・バーン」や「赤い野牛」たちは、棒や石を投げるなどし続けていた。このバスはバーンケーンにある警察学校に運ばれていった。その数は男一三〇六人、女六二五人の計一九三一人である。またチョンブリー警察学校には男二六八人、ナコンパトゥム警察学校には男七五八人、女一九人の計七七七人がそれぞれ逮捕された。またそれとは別にナムラン警察署には九人、チャナソンクラーム警察署には三一人、バトゥンワン警察署には一人、バンコク・ノーイ警察署には九人、トプン警察署には四五人と、その逮捕者は計三〇七〇人にも及んだ。

午後二時

「ルーク・スア・チャーウ・バーン」たちが、首相官邸の前で三人の大臣、つまり、スリン・マーサディット総理府相、チュアン・リークパイ法相、ダムロン・ラタピパット商務相の解任を要求し始めた。そしてこのグループの代表として作家のウィモン・チヨムチャラン(有名な右翼女性作家)が官邸に派遣されて、交渉にあたった。

午後四時頃

「ルーク・スア・チャーウ・バーン」たちは首相官邸の門を突破し、その中にはいり込んだ。そして、セーニー首相とチャーチャーイ・チュンハワン工業相(タイ民族党幹事長)が民衆の前に姿を現わし話し合いを始めた。チャーチャーイは背広を脱いで、「ルーク・スア・チャーウ・バーン」のネクタイを見せた。

セーニー首相は次のように説明した。

「三人の大臣は国王の承認を受けたばかりであり、今すぐ解任することはできない。他の方法としては、議会で不信任案が決議されるか、この三人が自ら辞めることしかありえない。そうでなければ私自身が辞める。」

ウィモン・チヨムチャランが「三閣僚を辞めさせる期限をきめろ」と要求したが、セーニーは答えなかった。そして再び中にはいったまま二度と姿を見せなかった(後でわかったのだが、セーニー首相は軍のある部分に連行されたのだった)。

「ルーク・スア・チャーウ・バーン」たちは、六時まで集会を続け、ワチラロンコーン皇太子の呼びかけで解散した。テレビの9チャンネルがタマサート大学でのフィルムを三回放映した。

この頃、サラン・ブンナーク(皇太子の付け人、家庭教師)は、記者たちに「タマサート大学での群衆のほとんどは、ヴェトナム人であった。タイ語も話せなかった」と語った。そして9チャンネルの記者に対しては、「われわれが一所懸命努力しているのに、お前たちがああいう放送をするとは」と怒った。記者が「あなたは9チャンネルの放送を見たのか」と聞くと、サランは、「自分は見てない。ヤーングロ放送を聞いている」と答えた。ある人によると、サランはサナームルワンで学生の死体を足蹴にしていたという。

午後六時

タイ国営放送が、海軍大将サンガット・チャローユー国防相を議長とする国家統治改革団が全ての権力を掌握したことを発表した。それは、国家の安全と王制の維持のためであり、今までの政府はあまりにも自分たちの利益や権力にとらわれ、いろいろな問題をひきおこしたためであったからだという。国家統治改革団からの声明は、アコム・モッカラーノンによって次々と読まれていった。

最初に戒厳令が公布された。全ての新聞の発行は禁止する。夜間の外出は禁止する。裁判は全て軍事裁判にきりかえる。また共産主義に関する書物を没収する。翌日の新聞を売りだそうとしていたところが全て禁止させられたことによって、国民は完全に情報から遮断されてしまった。新聞や印刷物に対する検閲委員会が設置され、テレビやラジオも全てのニュースを流すのを禁止させられたことにより、国家統治改革団の情報しか伝えられなくなってしまったのである。

資料28

女子学生の手記

一九七六年一〇月六日――それは私にとって一生忘れることのできない日です。それは最も残酷野蛮な一日でした。

何百発の銃声、何十発の爆音、タマサート大学に溢れる泣声、悲痛な叫び、大学の壁の血染めの手形、点々と続く歩道の血痕、生臭い血の臭い、フットボール競技場に散乱する学生のテキスト、ノート、肩掛のカバン、服と靴の山、そして学生・市民が脱がされグランドに四つん這いにされていた間に警察や軍人の手で引きずられてグランドに集められた三〇体位の友人の屍体の山……私は、はっきり覚えています。

学生・民衆の集会は、元首相タノーム・ギッティカチョーンの帰国反対とナコンパトゥム県での二人の市民労働者の首吊り殺人事件の犯人逮捕要求のためのものでした。社会正義を求める集会のたびに、私たちの集会は最後に必ず混乱をひきおこすと中傷されました。なぜなら、集会の終りに

は必ずと言ってよいほど爆弾が投げ込まれ、銃が撃たれ、ある時は会場に毒ヘビが放たれるという具合に、毎回のように死傷者が出ていたからです。たとえば、一九七六年三月二〇日～二一日の米軍基地追放集会では一〇人位の死者を出し、またプラパート帰国反対集会、そして今回の時も同様でした。

一〇月六日午前二時、初めの二発の爆弾はターブラチャン内で集会の安全警護の任務にあたっていた友人七人を死傷させました。その時、私と友達はグランドの演説台前でその爆音を聞いたのですが、単なる〝いつもの弾圧、いやがらせ〟だという風に受けとめていました。みんなはその爆音に驚きましたが、それを振り払うように力強く一団となって歌い始めました。私は、ターブラチャン門周辺にいなかったので何がおこったかわかりませんでした。事件後、現場に居り保釈されたばかりの友人の話によると、爆弾を投げ込まれた後、私たちの防衛隊は、22口径か、38口径の短銃しか持っていなかったが、負傷者をスィーラーチャ病院に運ぶ車が安全にターブラチャン門を通過できるようにと、数発撃ち返しました。その事件発生と同時に機甲師団放送局（ヤーングロ）は、学生がタマサート大学ターブラチャン門から発砲し警官一人が重傷を負ったと放送しました。

その後学生代表は緊急会議を開き、政府と交渉することを決定し、スタム・セーンプラトゥームを始め七人の学生代表が交渉に出かけました。セーニー・プラモート首相は、首相として何らかの決断を下すべき責任があるにもかかわらず何の動きもしませんでした。セーニー政権は、頭脳を持たず他人の命令に従うのみの単なるロボットにすぎなかったのです。

民衆と学生たちは「われわれは戦うのだ！　命を失っても戦うのだ！　われわれにはもう選ぶ道

がない。われわれにはもう失うものが何もないのだ！」という合言葉に従って集会を続けました。その言葉がどういう意味を持っているのか、私たちはよくわかっています。トンチャイ・ワニチャクさんのその言葉が終ると、聴衆の力強い拍手と歓声があがりました。その頃、私たちは政府との交渉に出かけた代表の帰りを待っていたのです。

私は時計をつけていなかったので、事件の時刻を正確に言うことができませんが、私自身の計算では午前四時頃、私たちがグランドに集まった時、大学の正面側の門と博物館側の門から数十発の銃声がグランドに向かって鳴り響いたと記憶しています。その時私たちの人数は五〇〇〇人ぐらいでした。私たちは武器を持たず、素手しかなかったのですが、私たちには戦う以外に残された道はありませんでした。その後、私たちは一定の間隔をおいて銃撃されました。弾丸はあらゆる方向から飛んできましたが、グランドにうつぶしたので負傷者はそれほど多くにはなりませんでした。安全のため女性は建物の中に入れられ、防衛隊が集会参加者の確認をしようとしましたが、演壇の前には、まだ多くの参加者が残っていました。

午前六時、タマサートの集会参加者は機甲師団放送局（ヤーングロ）の放送によって、スタム・セーンプラトゥームと仲間六人が逮捕されたことを知らされました。そして、その時私たちはすでに包囲され、激しい銃撃を受けていました。タマサート大構内は混乱状態に陥りました。私たちはその当時、警察と軍に包囲されたことしか知りませんでした。スタムと仲間が逮捕されたことで単純な弾圧でないことはわかりました。それはもう、いつものような状況ではありません。しかし私たちは、警察・軍がどういう目的でどれくらいの人数でタマサートを包囲したかという外部状況を正

確に判断することができませんでした。

激しく銃撃されたため、私たちの多くが負傷しました。負傷者を病院に運ぼうとターブラチャン門まで行った者は、待ち受けていた警官に逢い、また撃たれてしまいました。負傷者三人はそこで死亡しましたが、彼らは命を守るため必死でそこから逃げ、幾人かがある寺院まで逃げることに成功しました。この寺院の一人の老僧は、彼らを隠れ場所に連れて行ってくれたのですが、その寺院に向かう途中ターブラチャン市場の路を通るのを見ていた市民が警察へ通報したのです。その老僧の助けで逃れた友達の話によると、彼らが寺院にはいってから一〇分もしないうちに、大勢の軍・警察が捜索に来て逃れてきた一〇人近くを捕えたということです。しかし、私の友達と彼の仲間三人は、その老僧の助けで本堂の天井裏に隠れ、子弟の服に着替えさせてもらい難を逃がれました。

六時三〇分、タマサート大は激しく銃撃され、爆弾が投げ込まれ始めましたが、ターブラチャン門は大勢の警官と群衆で通ることができなくなっていました。銃声はまだ消えませんでした。短銃を持っている学生が対抗して撃ち返しましたが効果はありませんでした。それは、集会参加者が包囲されていたのと、建物に隠れている敵をはっきり見ることができなかったからです。負傷した者、無傷の者等が入り乱れてタマサート大の裏の小門から川端に沿って泳いで逃げようとしました。

八時三〇分、私は友人といっしょに商学部の建物に居ました。この建物は国立博物館に面していて、自治会と法学部の建物に相当の間隔があるために博物館(この建物は他より高い)と隣の国立劇場がよく見えました。

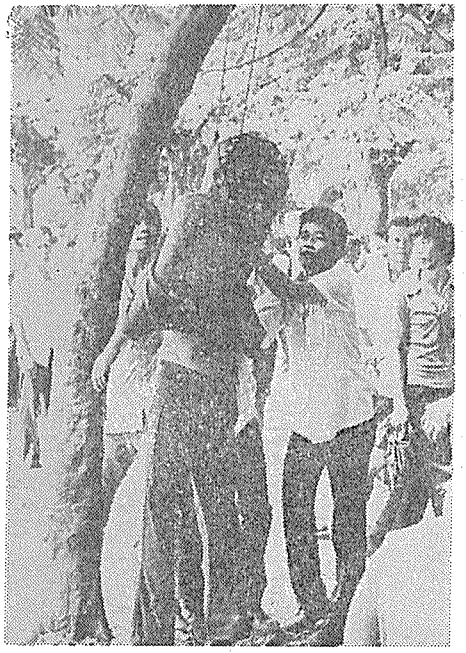
私は激しい銃撃音を聞きました。それと同時に六個の爆弾が投げ込まれました。その弾丸が博物

館と国立劇場から撃たれたのを、私たちははっきり見ることができました。私たちは銃についての詳しい知識を持っていなかったので、どれくらい威力があるものかわかりませんでしたが、博物館と国立劇場の窓の四ヶ所に大きな黒い銃口が見えました。そこには相当の人がいたように思います。私たちの両耳に恐ろしく大きな銃撃の音と爆発音が飛び込んできました。と同時にグランドの数十人が倒れるのを見、私たちは思わず叫び、そして走りました。激しい怒りを胸にグランドへと……。私の前を走っていた数人の友人は恐ろしい弾丸と数個の爆弾に倒れました。私は驚愕のあまり茫然と佇みました。最初に弾丸に当たった女性が苦痛に呻きました。しかし彼女は気丈にも倒れた友人を助けようとするのを私は見ました。建物の中にいた者も友人が倒れるのを見ると、言葉で表わすことができないほど激しく怒り、悲しみながら走ってきました。みんなの顔は涙で埋まり、自分自身の危険も忘れ、友人を助けようとしました。その時、二回目の激しい銃撃音が聞こえ、友人を助けようとした先の女性は倒れました。ある女子学生は気が狂ったように泣き叫び、ある人は身体中血で赤く染まりました。防衛隊の一員である短髪、黒シャツ、ジーパン姿の友人は、弾丸でお腹をやられました。その弾丸によってできた穴は小さな子供のげんこつより大きいものでした。いつもと同じように看護員として集会に参加していた友人のマヒドン大の学生が、弾丸で大きくえぐられたその学生の腹部に白い布をかぶせました(翌七日、警察病院で腹を覆った布を摑んだその屍体を見つけましたが白い筈の布は血で赤く染まっていました)。

私は、この死んだ友人の言葉を思い出すたびに涙がでてきます。彼は負傷し、激しい苦痛の中で、私と友人に安全な場所に避難するよう言ったのです。「伏せろ……女性なのに……建物の中に避難

しろ……早く……聞こえないのか……」彼は目を大きく開いたまま息を引きとりました。その後、私たちは避難した建物から外に連れ出され大学の後方の食堂の門からチャオプラヤー川に飛び込みました。私たちは川岸に沿って泳ぎ、プラピングラウという大橋に出ました。その時九時二五分。そこから暫く泳ぎ民家の石垣に着いた時、警官が私たちを引き上げてくれました。私たちは警官を見て、また潜ろうとしましたが「早く上がってこっちに来なさい。着替えに連れて行ってあげるから」という市民や警官の暖かい声が聞こえました。少し安心したのと同時に、悲しみが川の水とともに流れ、ただ無器用な仕草と赤く腫れた目の辺りに涙の跡だけが残りました。着替えの服が誰の物かなどということを気にもとめず、汚れた髪や顔を洗いもせず、市民に対する感謝も忘れ、慌ててプラピングラウ大橋に向かって走りましたが、群衆で身動きできない状態でしたので、私たちはタマサート大学の正門前へと走ったのです。

そこも、サナームルワンの広場も群衆で溢れていました。銃声や爆音がまだ聞こえていて、サナームルワンの広場から煙が上がっていました。その煙は五人の学生の屍体が燃やされて生じたものでした。積み上げられて焼かれた屍体は胴の部分だけが燃え頭や手足はそのまま残っていました。その場に居合わせた人の話によると、学生五人が手を挙げて大学の正門から出てきたところを群衆が発砲し、その中の一人が弾丸を受けました。弾丸に倒れた学生はリンチを受け、意識を無くした後、大きな木の杭を身に突き立てられて死にました（その杭は前もって準備されていたのかもしれません）。他の四人は、群がった人々に蹴られ、殴られ、そして椅子でたたかれる等のリンチを受け、その中の二人はタマリンドの木に吊され、ナイフでメッタ切りにされました（その一人は、地方修復



グループのメンバーで、その連絡先は中央キリスト教学生事務所の中にありました）。警察と政府の話によると、吊された二人は名前・住所を答えなかったことからタイ語を話すことができないと判断され、破壊活動に来たヴェトナム人と誤解されたので、群衆が彼らにリンチを加えるのを警察はどうすることもできなかったということです。

その後、落下傘部隊、パーワイ兵（ロッブリー県パーワイ郡に駐屯する陸軍司令部の軍人）等が乗ったトラック一〇台がどこからともなく現われました。大学の正門前の群衆に混じっていた「ルーク・スア・チャーウ・バーン」のメンバーは、歓声をあげて兵士たちを迎えました。トラックから降り五分ほどの集合の後、兵士たちは大学のホールの前からはいり校舎に向けて銃撃を始めると同時に、一部のグループは隣にある国立博物館にはいりました。私の友人は記者

や警官に混じって博物館にはいり、設置された司令部や置かれた鉄砲を見てきました。彼の話によると、商学部の建物に避難していた学生(六〇人位)が手を挙げながらグランドを経て大ホールに向かっている途中、一発の銃声が鳴り響きました。それは、商学部の建物付近から発砲されたものでした。その途端、警察と軍は銃口を学生に向け、無差別に発砲し始め、みんなは一瞬にして倒れました(最初に逮捕されたのはこのグループの学生たち)。彼はこんなことを言いました。「警察や軍がこんな残酷な行為をするのかとわが目を疑ったけれど、これは事実なのだ」と。

その後警察等は大学の建物から学生を一掃し始め、それにともないあちらこちらで銃声が聞こえました。逮捕された学生たちは、捕虜のように扱われながら、拘置所行きのバスを待つためグランドに集められたのです。

私はタマサート大学に殺到する二〇〇人ほどの群衆にまぎれこみました。警察は、グランドで学生が衣服を脱いだり、勝利の状況を説明したりするのに気をとられていて、群衆が構内にはいるのを防ぐことができませんでした。

そこで二〇〇人の群衆が目にしたものは、性別を問わず衣服や靴を脱がされ腹這いにさせられた四〇〇〇人ぐらいの学生たち、燃やされている服・靴の山…。軍・警察はふせている学生たちの間に銃を持って立ち、背中を踏んだり蹴ったりし、少しでも頭を上げたものはただちに殴打されました。燃やされていた靴や服、それに遺体は午前一一時四五分現在は少し燃えただけで残っていました。なぜなら、燃やすために使ったのは少量の石油と二、三本の木だけだったので、雨が降るまでに燃やすことができなかったからです。



グランドの隅には、三〇体以上の屍体が積まれていました。『スター』ドイツ新聞と『ニューズ・ウィーク』にこの証拠の写真は載ったのですが、タイで発売された『ニューズ・ウイーク』の写真は引き裂かれていました。

しばらくすると、逮捕者を運ぶバスと救急車が到着しました。救急車から降りた人たちが積み重ねられた屍体の頭と足を逆に持って運び込みました。その後、警察は多分群衆の見たものが何であったか気がついたのでしょう。屍体運びを見ていた群衆を追い出すため、彼らに銃を向けたのです。出る途中、私は構内での警察がいかに残酷であったか、人々に話すことを忘れはしませんでした。

前に言ったように、建物の壁には血痕が付着し、歩道には散乱した本や血痕が残っていました。私がかつて通ったあらゆる場所は、血と割れたガラスの破片が散乱す

るばかりでした。

それにしても、今回の事件は警察の過剰防衛だとは言えないでしょうか。私は一一時三〇分頃タマサート大学から出ましたが、その後の激しい雨にもかかわらずサナームルワンの広場等にいた群衆は、その場を離れようとはしませんでした。群衆の中にいた「ルーク・スア・チャーウ・バーン」、全国職業学生センター及び「ナワポン」たちは「愛する国民のみなさん、この瞬間からタイ全国学生センターという言葉は存在しないのです」と言い、〃万歳〃を叫びながら街にくり出しました。群衆の中には〃万歳〃を叫ぶ人もいたけれど、多くの人々は終始無表情で平静を装っていました。誰も口を開こうとはしませんでした。木の下や向かい側の貯蓄銀行の階段には、涙を浮かべて坐っている学生や民衆の姿が見えました。

約三〇〇〇余人の学生は、その後大学構内で午後三時過ぎまで取り調べを受けたのですが、その間大学の門は閉ざされ立入禁止となり、周辺は警官によって厳しく見張られていました。四日後「タマサート大学構内に隠れていた学生七人が警察に捕えられた」という記事が新聞に報道されました。七人の中男三名、女が四名。彼らの供述によると三日間というもの何も口にしておらず、空腹に耐えかねて食物を捜しに男三人が隠れ場所から出、残った四人は帰ってこない友人を捜しに出ようとしていた矢先に警察が逮捕に来たとのことです。

タマサート大学で最後に逮捕されたのはヂャランという人で、彼は六日間も隠れていたのです。彼はタマサート大学卒で私たちの先輩であり学生会議や集会のつど、彼の姿が見られました。

狭くて小さな大学ですらこういう状態であるのに、軍は共産主義者を完全に鎮圧できるのでしょ

うか。

当日の午後六時に、全てのラジオ放送局はクーデター（美しい言葉で言えば、サンガット・チャローユー海軍大将に指導された国家統治改革団による改革）について放送しました。国民はこの時から、持っている限られた権利と自由を完全に失ってしまったのです。

新しい法律が次から次へと発表されましたが、そのほとんどは禁止法で、例をあげると、五人以上の集会禁止、労働者のスト禁止、政治に関係する組織結社の禁止等です。それ以外は、何々をしなければならないという義務についての法律、そして特に共産主義者または共産主義に関係ある者を弾圧する法律が目立ちました。

一〇月七日未明―

バンコクの街は静かでした。軍も警官も「ルーク・スア・チャーウ・バーン」も「赤い野牛」も民衆も学生もみんな疲れていたのです。

「国家に対する義務遂行を終え、『ヤーングロ』の自由放送協会は、間もなく同協会を解散致します。われわれはみなさんに別れの言葉を伝えるのを淋しく思いますが、なすべき義務を完全に遂行できたことに誇りを持ってお別れ致します。」「ヤーングロ」放送局はこう発表し、その後間もなく解散しました。

私たちは友人の遺体を確かめるため「親類が行方不明になっている」と嘘をつき警察病院にはいりました。早朝だったので学生風の人が一二～一五名いる程度でした。

私たちの目にはいってきたのは、六日に殺され運び込まれた学生や民衆の屍体でした。冷凍室の

床には屍体が沢山置かれていました。正確な数はわかりませんが、少なくとも三〇以上の屍体が冷凍室に、そして隣の部屋には二六の屍体が置かれていました。それら全ては、そのままの状態、つまり傷口がそのままで屍体は血に染まっていました。

ここで強調したいのは、一〇月六日に死んだ民衆・学生の数は政府発表の三六人よりも明らかに多かったということです。現場での状況、警察病院での確認等から判断すると、少なくとも五六人が死亡しました。

私たちは警官の乱暴な態度に耐えながら、屍体安置室のガラス越しに〝親類〟を捜しました。目の前で屍体を虐待したり、乱暴な言葉で皮肉ったりしている警官を見て、私たちは言葉で言い表わせないほど悔しい思いを味わいました。目が涙でいっぱいになりながらもみんなはただ黙って静かにじっと我慢していました。

私はみんなといっしょに男子二四人、女子二人の友人の遺体の前に立ち、この残酷な事実を脳裡に、この悔しさを胸に刻みつけました。

爆弾を受け腕の肉が削げ、もげそうになっている美しい長髪の女友達の遺体は裸でした。もう一人の女性は、顔に銃で受けた大きな傷があり、身体は血と泥にまみれていました。彼女は髪が短く、グレーの漁夫風のシャツ（大学で売っている長袖のシャツ、漁夫シャツと呼ばれている）とグレーのジーパンを身に着けていましたが靴は履いていませんでした。

ある屍体（親戚によって確認されたらしく、マヒドン大学生と書かれた札が貼ってあった）は頭部が破壊され脳味噌がなくなり、眉毛から下の顔の部分しか残っていません。そして、腹部の傷を覆った布を

摑んでいるあの男の屍体……。

私は、これらの屍体を眺めながら、警察・軍より危険な武器を持っていると噂された学生から、わが身を防衛するという口実の下で、警察・軍が使った武器はこんなものだったのかと言いたい思いに駆られました。

その時、私の胸にある歌詞が浮かんできたのです。

……もし鳥に生まれるなら、平和をもたらす白い鳩に生まれたい。
もし花に生まれるなら、光と蜜を与えるひまわりに生まれたい。
もし空の上の雲に生まれるなら、永遠に田に水を与えたい。
でも、もし人間に生まれるなら、国家のために死んでゆきたい。
土の上に横になって兄弟が渡る道になりたい。
そしていっしょに、この国土で勝利の旗を掲げたい。

第６章

軍事クーデター

——1976年10月６日



そして，ここから新しい歴史が始まったのだ……

資料29

その時、日本人は——

SANI Chateau

日頃のご愛顧を心から御礼申し上げます

皆様のご支援によりお蔭を持ちまして当クラブも開業20周年を迎えることができました。
つきましては10月６日(水)の夜は特別ショーを企画しておりますのでご来店下さいますようお待ち申し上げております。

なお例年のようにドリンクをサービスさせていただきます。

今後は皆様の憩の場、社交の場としてご希望に添うべくサービスの改善に努めますのでより一層のお引立ての程をお願い申し上げます。

名声、設備、ロケーション共に
バンコク最高のナイトクラブ

サニー・シャトウ

電話：252-6714，8681

※ 特別に招待状をお送りしませんがあしからずよろしくお願い申し上げます。

《解　説》

一九七六年一〇月六日午後七時、サンガット・チャローユー「国家統治改革団」議長は放送をつうじてタイ全土にクーデターを宣言した（資料30）。そして同じ日に出された「国家統治改革団命令第1号」で、彼は戒厳令を全国に布告し、同時にタマサート大学に集まっていた三〇〇〇名以上の学生・民衆の逮捕を正当化する法的根拠を明らかにした（資料31）。

さらに「命令第3号」では一九七四年憲法、議会、内閣の廃止を命じ（資料32）、「命令第4号」では政治集会の禁止（資料33）、「命令第5号」では言論・出版の自由の停止（資料34）、「命令第6号」では政党結社の自由の停止と既成政党の解散（資料35）を各々命じ、「10・14運動」でタイ民衆がかちとったさまざまの民主的権利を完全に葬り去るに至った。また「命令第8号」では、反共法に抵触する人々の審理判決は軍事法廷でおこなうことを決定し（資料36）、「命令第22号」では、「社会にとって危険な人物」という範疇の下に、「独立・民主主義・正義」を求めるタイ民衆のあらゆる闘いを弾圧する体制を整えた（資料37）。

以上一連の命令と、一〇月七日の「国家統治改革団」及び「顧問団」のメンバー発表によって（資料38・39）、軍事政権の基礎固めをおこなった彼らは、一〇月八日にターニン・グライウィチアン最高裁判事を新首相に任命。そして一〇月二二日には、新憲法が発布され（資料40）、同日ターニン新内閣が発足した。この新憲法は、『バンコク・ポスト』の解説が述べているように、首相に絶対的権限を付与しており、一方一九七四年憲法で明記されていた言論・出版等さまざまの自由は、

完全に条文から抹殺されるにことになった。

なお本章には　今回のタイのクーデターに関して各々異なった見解を示す三種類の文書を収録した。

第一は、クーデターを起こした権力集団が一〇月六日のタマサート大学での弾圧とその後のクーデターの理由を説明したパンフレットで、国内のみならず国外にも各国大使館をつうじて配布されたものである（資料41）。

第二は、現在ロンドンに亡命中で、一〇月六日の「血の水曜日」の時、タマサート大学の学長をつとめていたプェイ博士が、この資料集のために特別に寄稿された原稿である。プェイ博士は、一九七三年「10・14」以前にはタイ国立銀行の総裁などの要職をつとめ、タイのリベラルな知識人の中では最も著名かつ重要な人物として世界的に知られていた。資料に見られるように、彼は、軍による独裁はもちろんのこと共産主義による武装闘争も否定し、「プラチャー・タム（民主主義と仏教における正道を混合した独自の概念）」にもとづく新しい道を提唱して「10月6日」以降ジャングルにはいった知識人・学生とは一線を画す毅然たる態度を表明している（資料44）。

第三は、外国に住むタイ人が今回のクーデターに直面して発表した声明である（資料42）、またアメリカの諸大学のアジア研究者が発表した声明も同時に収録した（資料43）。

なお、「10月6日」以降ジャングルにはいって「武装闘争」を次々と宣言した諸組織・諸グループのクーデターに関する見解は、第8章に一括して収めたので、そちらを参照されたい。

資料30

クーデター宣言

国家統治改革団
（仏歴二五一九年一〇月六日）

「国家統治改革団（カナ・パティループ・ガーン・ボッククロン・ペーン・ディン）」は、本日水曜日午後六時をもって統治権を掌握し、全事態を制圧下においた。

国家統治改革団は、一般国民と同様に、現在危機が生じていることを認めた。いくつかの学生組織を含む一部の国民は、不敬罪を犯し、タイ国民の心を冒瀆してきた。このような王制の破壊を目的とする行為はタイを支配しようとする共産主義者たちの陰謀の一環であった。

警察が逮捕に向かった時、これらのグループは、ヴェトナム人共産主義テロリストと協力し、戦争に使われる重兵器を使ってこれに抵抗した。そのため市民・警察側には死傷者が続出し、事態は悪化して混乱が生じた。

何名かの閣僚、いくつかの政治団体、またマスコミ機関がこれらの活動を強力に、また公然と支援していることが明らかになった時、現政府が憲法にもとづく諸手段をつうじてタイを立て直すこ

とは不可能になった。もし事態の悪化をこれ以上許すならば、国民はますます大きな危険に直面し、解決は困難を増したであろう。

国家統治改革団は、こうした事態に断固として対処するため、全権を掌握する必要があると考えた。

わが国が存続し、タイを共産主義的帝国主義に転落させないための方法はこれしかない。議会は存在していたとはいえ、政治家たちは同一政党の中でさえ分裂し、政党の綱領を守るでもなく、国民が課した責務を遂行するわけでもなかったことは、国民にとって明白である。こうした事態が憲法の機能を不可能にさせた。

国家統治改革団は、王制をわが国至高の体制であり、何人といえどもこれを侵害することはできないものとして擁立する。

全権掌握の目的は、国王を国家の恒久的元首とする体制を維持することにある。国王陛下と王室は、国家統治改革団によって擁護され、あらゆる方法をもってその身の安全は守られるであろう。

国家統治改革団は、国家の安全にとって必要とされる場合以外には、どのような機構もこれを変えるつもりはない。また全ての外国人、とりわけ大使、総領事、領事、大使館職員、領事館職員、国際機関の官吏は、国家統治改革団によって保護が与えられる。

国家統治改革団は、国王を元首とする民主的政体を求める国民の気持を擁護し、現在の諸状況に適した、国王を元首とする民主的政体ができ上がるまで、段階的にこの統治体制の基盤を強化する

ありとあらゆる措置をとることを断言する。

資料31

国家統治改革団命令　第1号

全国民の安寧・秩序・安全をまもるため、国家統治改革団は仏暦二五一九年一〇月六日一九時一〇分を以って全国に戒厳令を布告する。そして以下のとおり実施する。

第1項　仏暦二五一九年一〇月六日一九時一〇分以降に生じた違法行為で、本命令の末に付したリストに該当するところの刑事違反容疑のある事件は、全て軍事裁判所の裁判権限下におかれる。ただし、児童及び青少年裁判所管轄の事件は例外とする。

第2項　第一軍管区内の全ての刑事裁判所及び県裁判所、及びロッブリー陸軍管区内の全ての県裁判所をバンコク軍事裁判所とする。ここに述べた以外の県裁判所で各々の軍管区に位置するものは、各々の陸軍管区の裁判所とする。

ここにいう軍事裁判所は三名の裁判官からなり、それが事件の審理判決組織をなす。そして判決どおりに事件を強制的に処理できるものとする。

第3項　刑事裁判所長官、刑事裁判所判事及び全ての県裁判所判事を、軍事裁判所組織法に従い、

第2項にいう軍事裁判所裁判官とする。

上述の判事と同様、地方裁判所長官を軍事裁判所裁判官とする。そして本命令による軍事裁判所である自己の所轄管区内の裁判所において事件を審理判決する権限を付与する。事件調書の調べが終了後、判決文に署名する権限を付与する。

刑事裁判所書記官及び全ての県裁判所書記官を、各々の軍事裁判所の軍事裁判所書記官とする。

第4項　検察官を軍事裁判所検察官とする。

第5項　刑事裁判所の庁舎及び全ての県裁判所の庁舎を本命令による軍事裁判所の庁舎とする。

第6項　本命令施行前に生じた全ての事件は、発生時に施行されていた法律及び戒厳令にもとづいて処理する。

第7項　戒厳令の解除後も、本命令による軍事裁判所は、裁判所に滞留している全ての事件及び戒厳令解除時以前に生じた違法行為にかかわる全ての事件について、第1項に従って審理判決する権限を有する。

仏暦二五一九年一〇月六日

海軍大将　サンガット・チャローユー国家統治改革団議長

国家統治改革団命令第一号添付リスト

(1) 第一〇七条から第一一二条までの国王、王妃、皇太子及び摂政の御身に対する違反。

(2) 第一一三条から第一二九条までの王国内外における国体の安全に対する違反。

(3) 第一三〇条から第一三八条までの諸外国との友好関係に対する違反。

(4) 第二〇九条から第二一六条までの国民の安寧に関する違反。たとえば秘密結社のメンバーになること、秘密犯罪組織に加入すること、暴力を行使しての集会、暴力による脅迫または、国内に不穏不安を生ぜしめる行為。

(5) 第二一七条から第二三九条までの国民に危害を及ぼす行為に関する違反。

(6) 第二八二条から第二八四条、及び第二八五条、とりわけ第二八二条と第二八三条にかかわるところの性に関する違反。すなわち、暴行の目的でまたは他人の性的欲望を満たすために、婦人または女児を処遇したりそそのかしたりすること。

(7) 第二八八条から第二九四条までの生命に対する違反。

(8) 第二九五条から第三〇〇条までの身体に対する違反。

(9) 第三三四条から第三四〇条第2項まで、第三五七条、及び第三六〇条第2項の財に関する違反。すなわち窃盗、ひったくり、脅迫、恐喝、強盗、略奪及び盗品のあずかりにかかわること。

資料32

国家統治改革団命令　第3号

国家統治改革団は、国家統治の秩序のために国家統治権限を滞りなく掌握した旨の声明を出したことにかかわり、以下のことを命じる。

1　仏暦二五一七年タイ王国憲法を廃止する。ただし、枢密院のみは依然として存続し、今後ともその任務をおこなうものとする。

2　憲法とともに国会及び内閣を廃止する。

3　全ての裁判所は、法律と国家統治改革団命令の定めるところにより、訴訟事件の審理判決権限を依然として有する。

4　国家統治改革団司令部を設置する。そして国家統治改革団議長を武官及び文官の最高司令官かつ全王国の事態統轄者とする。

5　内閣総理大臣を欠いている間にあっては、内閣総理大臣または内閣の権限及び任務であると法律で定められた権限及び任務は、国家統治改革団議長もしくは国家統治改革団の委譲せる者に属するものとする。

6　全ての省の次官を各々の省の最高責任統轄者とする。大臣の権限であると法律が定めている全ての権限と任務は、次官に属するものとする。次官は、国家統治改革団議長、または国家統治

改革団議長の委譲せる者に直属して公務の執行にあたる。通常の公務でない公務、または問題のある公務、または政策にかかわる公務、または他省に関係ある公務については各省次官は国家統治改革団議長に具申して裁決を求めねばならない。武官の場合は軍事監督部長を通すことにし、文官の場合は民事監督部長を通すことにする。

仏暦二五一九年一〇月六日

海軍大将　サンガット・チャローユー国家統治改革団議長

資料33

国家統治改革団命令　第4号

仏暦二五一九年一〇月六日一九時一〇分を期して、タイ全土に戒厳令が施行された。

したがって、いかなる場所での五名以上の政治集会もこれを禁止する。違反者は、六ヶ月を越えない拘留または一〇〇〇バーツを越えない科料またはその両方の刑に処する。

仏暦二五一九年一〇月六日

海軍大将　サンガット・チャローユー国家統治改革団議長

資料34

国家統治改革団命令　第5号

国家統治改革団の国務遂行を円滑ならしめるために、また国家の安全と国民の安寧を保つために国家統治改革団は全ての種類のマスコミが、以下のとおり実行するよう命令する。

1　ニュース及び論評を掲載する日刊の新聞及びその他の国民に対する印刷出版物は、タイ語または外国語を問わず、現時点をもってその印刷出版販売を停止する。国家統治改革団が改めて別に命令を出すまでとする。

2　論評及び随筆または娯楽記事の類を掲載する週刊の雑誌及び他の国民に対する印刷出版物は、現時点をもって出版販売配布以前に、国家統治改革団から委任を受けた報道検閲委員会にその論稿及び原稿を送り、検閲を通らねばならない。

3　公営及び民営を問わず、全てのラジオ放送局は、各局の通常番組を中止する。そして、民衆連絡局の管轄下にあるタイ国放送局の放送を中継放送するのみとする。

4　公営及び民営を問わず全てのテレビ局は、国家統治改革団が特別に任命した委員会の監督下におかれる。

5　民族団結の分裂をうながしたり、あるいはいかなる方法であれ民族・国家の安全を破壊する共産主義を信仰するように読者を導く情報、論評、論文を掲載した文書及び出版物は、いかなる種類のものであれ、全て没収し完全に処分する。

内務省は本命令による業務を所轄する。なお本命令は現時点をもって発効する。

仏暦二五一九年一〇月六日

海軍大将　サンガット・チャローユー国家統治改革団議長

資料35

国家統治改革団命令　第6号

仏暦二五一七年タイ王国憲法は仏暦二五一九年一〇月六日付の国家統治改革団命令第3号によりすでに廃止された。したがって、仏暦二五一七年政党法もこれを廃止する。この法律にもとづいて結成された政党は、全て廃止するものとする。また、何人も今後は政党を結成することはできない。

本命令は、現時点をもって有効とする。

仏暦二五一九年一〇月六日

海軍大将　サンガット・チャローユー国家統治改革団議長

資料36

国家統治改革団命令　第8号

仏暦二四九五（一九五二年）年共産主義行為防止法に対する違反行為は、国の安全及び国民の安寧と秩序に関し特別の理由をもつ罪である。現在生じている事態にあっては、なおさらのことである。そこで、国の安全及び国民の安寧のために、現在すでに戒厳令が施行されている以上、効果のある厳格な運用がおこなわれるべきである。

したがって、国家統治改革団議長は以下のとおり命じる。

1　仏暦二四九五年共産主義行為防止法違反行為容疑による全ての事件は、他の違反容疑があるなしにかかわらず、また容疑者の拘置逮捕は、本命令日、それ以前、もしくはそれ以後を問わず、その審理判決は軍事裁判所の権限下にあるものとする。また、違反行為が仏暦二五一九年一〇月六日一九時一〇分付の戒厳令施行日、それ以前、またはそれ以後におこなわれたかは問われない。

2　本命令は、本命令日においてすでに裁判所で審理中の事件には及ばない。

仏暦二五一九年一〇月六日

海軍大将　サンガット・チャローユー国家統治改革団議長

資料37

国家統治改革団命令　第22号

（前文）

国民の安寧を乱し、危険有害な活動をおこない、あるいは国家の治安、経済を破壊することで社会に対し危害をもたらす活動をなす個人・集団が存在している。彼らを善良な市民に矯正し、国民の安寧と国家の繁栄をはかるため、彼らに対し処置がとられるべきである。

国家統治改革団は以下のような命令を公布する。

第1項　社会に対し危険な者とは以下の活動をなす者をいう。

(1)　他人に迷惑をかけたり、脅迫したりする活動。あるいは違法な方法で他人を恐怖させること。

(2) 定住所を定めず、正業によって生活していることが不明の者。
(3) 公序良俗に反する方法で生計を営む者。
(4) 販売あるいは他の違法活動の準備のため違法に銃器、弾薬、爆発物を集合させること。
(5) 国民に騒乱をおこさせ、あるいは国家の平穏を犯すため、煽動、支援すること。
(6) 国民に、国王を元首とする民主政体以外の政体を信奉させ、あるいは同調させること。
(7) 違法に賭場を営み、あるいは売春宿経営、賭博開帳及び富くじの元締めになること。
(8) 利益のために売惜みし、あるいは違法に価格をつり上げること。
(9) 違法にストライキやロックアウトをおこなうこと。

第2項　行政官、警察官は、熱心に捜査し、もし社会に対し危険な者と考えられれば、この者を逮捕し調査するために検察官に送ることができる。もしこの者が社会に対し危険な者であると判明すれば、検察官は三〇日を越えない範囲で矯正のため拘禁できる。

第3項　社会に対し危険な者を拘禁し、三〇日が過ぎた時、もし首都警察総監あるいは各県知事が、この者が依然社会に対し危険な性向をもち、あるいは活動を続けるとみなすなら、この者を職業訓練矯正所に送ることができる。

第4項　内務省は職業訓練矯正所をつくり、また、拘禁、矯正、職業訓練、釈放に関し審査するため、三人以上からなる一個あるいは数個の委員会をつくることができる。

この委員会は、二ヶ月ごとに、被拘禁者がさらに拘禁を続けられるべきか、あるいは釈放されるべきか、を審査し命令を下す。また、釈放にあたって何らかの保釈金をとるか、執行猶予にするか

どうかをきめる。

第5項　首都警察総監あるいは各県知事が職業訓練矯正所に送った者は、刑法により検察官の権限に従って禁固中の者として取扱う。

第6項　この命令第22号によって社会に対し危険な者とされた者がさらに刑法上の違法行為の疑いがある場合、検察官は、別途に起訴する。また法律に規定された容疑者拘留期間の規定や方法によらず、国家統治改革団命令によって拘禁できる。

第7項　仏暦二五一八年の数種の矯正、職業訓練に関する法律を廃止する。

第8項　第8項記載法律により、矯正、職業訓練を裁判所が命じたものの中で、この命令第22号公布以前のものは有効であり、第7項の記載の法律に従う。

この命令は現時点より施行する。

仏暦二五一九年一〇月一三日

海軍大将　サンガット・チャローユー国家統治改革団議長

資料38

国家統治改革団議長令　第1号

国家統治改革団の任命について

国家統治改革団司令部の業務の円滑な運営をはかるため、国家統治改革団を設置する。メンバーは以下に示す者によって構成される

(1) サンガット・チャローユー海軍大将（国家統治改革団議長）　(2) ガモン・デーチャトゥンカ空軍大将（国家統治改革団副議長）　(3) グリアンサック・チャマナン陸軍大将（書記長）　(4) ガウイー・シンハ海軍大将（副書記長）　(5) チャラーン・ポンパーニット（書記長補佐）　(6) ブンチャイ・バムルンポン陸軍大将　(7) サーム・ナ・ナコーン陸軍大将　(8) アモーン・シリカーヤ海軍大将　(9) スィースック・マヒンタラテープ警察局長官　(10) パニヨン・ガーンタラッタ空軍大将　(11) プラサート・タンマシリ陸軍大将　(12) プラローン・ウイーラプリー陸軍大将　(13) カムロン・リーラシリ空軍大将　(14) プラサーン・アマータヤグン陸軍大将　(15) サタープ・ゲーヤーノン海軍中将　(16) ヨット・テープハッサディン・ナ・アユタヤー陸軍中将　(17) プレーム・ティンスラーノン陸軍中将　(18) ソムサック・バンチャマーノン陸軍中将　(19) アムナート・ダムリガーン陸軍中将　(20) ピン・タンマスィ陸軍少将　(21) テープ・グラーンラート陸軍少将　(22) アルソ・タワータシン陸軍少将　(23) サウェーン・チャーモーンチャン陸軍少将　(24) プラティアップ・テートウィサーン陸軍少将

以上、仏暦二五一九年一〇月六日付で発令する。

仏暦二五一九年一〇月七日

海軍大将　サンガット・チャローユー国家統治改革団議長

資料39

国家統治改革団議長令　第2号

国家統治改革団議長顧問団の任命について

以下の者を、国家統治改革団議長の顧問とする。

外務及び内務関係顧問団
(1) タナット・コーマン陸軍大佐　(2) タマヌーン・ティエンガン氏　(3) スントーン・ホンラダーロム氏　(4) スクム・ティラワット氏
財政・農業・交通・商業及び工業関係顧問団
(1) チャラーム・プラチュアップモ氏　(2) パンラート・ブーラナシンラピン氏　(3) チャーンチャイ・リーターウォン氏　(4) サノ・ウーナーグーン氏　(5) スクム・ナワパン氏　(6) スティー・ナータウォンタット氏　(7) スパット・スタータム氏　(8) オップ・ワスラット氏　(9) アムポーン・チャントーンウィチット氏
厚生・教育・司法及び大学関係顧問団
(1) ターニン・グライウィチアン　(2) プラトゥアン・ギーラブット　(3) ピンヨー・サートーン博士　(4) ウィナイ・トーンロンヤー氏　(5) セーム・プリンプワォンゲーウ医師

以上は、現今をもって発効する。

仏暦二五一九年一〇月七日

海軍大将　サンガット・チャローユー国家統治改革団議長

資料40

新憲法

『バンコク・ポスト』紙
（一九七六年一〇月二三日）

首相に広範な権限

二二日、午後三時半に公布されたタイ国第一〇次憲法は、国家の安全と王制と経済への脅威に対して迅速かつ思い切った処置をとる特別な権限を首相に与えた。

＊　＊　＊

新憲法第二一条はまた、平和と秩序を乱す者を効果的に鎮圧し、公共財産を破壊する煽動者及び活動に対し断固たる処置を講ずるため幅広い権限を首相に与えている。

首相はまた、第二一条にもとづく同じ権限を公共の良俗や人々の健康に悪影響を与える諸活動に関係した人物に対しても行使することができる。

これら権限は、この憲法の公布の前後にわたってそのような活動に従事した人物に対しても用い

ることができる。また国の内外でこのような罪に関連した人物に対しても適用が可能である。

サリット・タナラット政権時代の一九五九年憲法の第一七条よりもさらに強力であると考えられる。第二一条は、上述の犯罪に関連して、首相が出す全ての行動に正当性を与えている。

全文二九条にわたる新憲法は、国家統治改革団を首相の諮問評議会に変えた。この評議会は、三〇〇名ないし四〇〇名から成る国家統治改革議会が、三〇日以内に任命されるまでの立法の任務を負う。

昨日任命された内閣と議会は、四年間任務を遂行する。その後、同等の権限を有する民選の下院と勅選の上院からなる国会が設立される。下院の選挙は、最初の四年間の終了から九〇日以内におこなわれる。

完全な民主主義

この国会は四年間を期限とする。これは国王を国家の元首とする完全な民主主義へ向けてのタイの政治発展における第二期に相当する。第三期の四年間には、下院の権限が増大し、上院の権限は縮小されるだろう。

これまでタイの憲法は、一九三二年（三九条）、再度一九三二年（六八条）、一九四六年（九六条）、一九四七年（九八条）、一九四九年（一八八条）、一九五二年（一二三条）、一九五九年（二〇条）一九六八年（一八三条）、一九七四年（二三八条）に公布されてきた。

新憲法は、国民の民主的権利と責任に対する理解と感覚の政治的発展に適合した修正をうながすような条項を備えている。

憲法の前文は、国家統治改革団が、国王陛下に、一部の人々が王国の安全と王制と国家経済に打撃を与える活動をおこなってきたと報告したことを述べている。これらの活動は、一九七六年一〇月六日の暴力的蜂起において頂点に達し、国民と国家を危うくするに至った。そのため、改革団は、権力を掌握し、一九七六年一〇月六日午後六時、タイ国憲法を支障なく停止した。

国民は、国家の安全と公共と幸せの増進にとって国王を元首とする民主政体がタイに最も適した最良のものであるという信念を明らかに示している。しかしながら過去四〇年間、この統治形態は、人々の望むような成果をあげてこなかった。というのも、段階的な発展を可能にするような適合的機構が欠けていたからである。

国難に直面して

一九七四年のタイ国憲法には、命令の実施を不可能にするような障害や相矛盾する条項が存在していた。選出され、政府内で発言権をもつ人々でさえ、さまざまなやり方で憲法を尊重せず、自己の利益を国家の利益に優先させた。これらのことは全て、民主主義を失敗させ、国を災難に直面させる原因となった。国家の行政改革を通じ、段階を踏んだ発展計画によって民主主義を救うことが、不可避の任務となった。

最初の四年間は、国の経済的政治的安定を回復する期間である。この期間には、政府をコントロールするために任命されたメンバーが構成する国家統治改革団を通じて、国民が国の行政に参与す

るようにするのが適当である。同時に国民は自らの責任に理解と関心を持つよう促されるべきである。第二期の四年間は、選挙で選ばれた下院と勅選された上院の両者による国会を通じて、国民は政府に大幅な参与を許される。上院と下院は、政府を統制するのに同等の権限を有する。

第三期の四年間は必要な範囲まで下院の権限が増大され、上院の権限が縮小される。この時期以後は、人々が国家と民主主義に対する自らの義務と責任に目ざめるならば、上院は解散させられ、下院のみが残ることになろう。

各段階における民主的な統治形態の再編成は、各時期の状況による。国王を元首とするこの民主的制度の改革がこの憲法の目標を達成するためには、憲法を各時期の諸条件に適応するように修正することが重要である。その目標とは、この国の主要な制度である「国家、仏教、王制」を護持することによって、国家の安全と国民の幸福を実現することにある。

段階的発展計画と国家統治改革団の目的を実施するために、国王陛下は現時点から効力を発揮する次のような憲法を公布された。

新憲法

第一条　タイ国は、一体かつ不可分の王国である。

第二条　タイ国は、民主政体をとり元首として国王を有する。

第三条　主権はタイ国民に帰属する。元首である国王は、憲法に従ってこの権限を行使する。

第四条　国王は、タイ国軍隊の総帥の地位にある。

第五条　国王は、神聖不可侵であり、いかなる方法によってもその責任を問い、もしくは訴訟を提起することはできない。

第六条　国王は、適格者を枢密院議長一名及び他の一四名を超えない枢密院顧問官に選任する。枢密院は国王が協議を必要とする陛下御自身の事項について奏上する義務を有する。枢密院顧問官の選任及び解任は国王の発意にもとづく。国家統治改革議会の議長は、枢密院議長を任命もしくは解任する勅命に副署する。枢密院議長は枢密院のメンバーを任命もしくは解任する勅命に副署する。

第七条　国王は、国家統治改革議会を通じて立法権を、内閣を通じて行政権を、裁判所を通じて司法権を行使する。

第八条　何人も法の範囲内での権利と自由を有する。

第九条　何人も国家・仏教・王制及び本憲法にもとづく民主主義政体を護持する義務を有する。何人も国を防衛し、また法律に従う義務を有する。

第一〇条　国家統治改革議会に、立法の任務を遂行させる。メンバーは三〇〇名以上、四〇〇名以下とする。メンバーは国王陛下により任命され、任命の時点より四年間つとめる。

国王はその事項に関する議会の決定に従い議長の勧告にもとづき、任期満了以前に議員の職を解任する特権を有する。

欠員または追加メンバーを補充するために任命された議員は、議会の任期の残余期間のみ在任する。

第一一条　国王は議会の決定に従い、メンバーの中から議長・副議長または複数の副議長を任命する。

第一二条　国家統治改革議会は法案の提出、動議の提出、会議の手続き、質問事項の提出、協議その他議会の権限からひき出される諸活動に関して議会のための規則を起草する権限を有する。

第一三条　議会の会期中、いかなる議員も事実の陳述、もしくは意見、投票を特権として遂行することができる。その事項に関しては、訴追を免除される。この免除は、議会の命令の下でおこなわれた議会の委員会の会議や、会議の報告書の印刷出版者にも与えられる。

第一四条　議会の会期中、犯罪により拘留または公判中の議員は、議長の要請があれば釈放され公判を一時停止される。

第一五条　法案は内閣もしくは議会のメンバーよってのみ発議され得る。しかし議員は議会または外部から任命された一二名をこえない法案審議特別委員会の承認を得たあと、法案を発議する。

法案審議特別委員会に対し、議会と内閣はそれぞれ六名以下を任命する。財政法案は内閣によってのみ発議されうる。法案審議特別委員会は法案が財政法案であるか否かを決定する。

第一六条　国王は国家を統治する内閣を構成するために首相と二〇名以下の大臣を任命する。首相と閣僚は現在の国家統治改革団のメンバー、もしくは給与をうける公務員、政府機関の職員、国営企業の職員であることはできない。営利企業のいかなる地位につくこともできない。

議長は首相を任命する勅命を副署する。首相と国務大臣は、その見解を聞くため議会を召集する権利を持つが投票権は有しない。

第一七条　国王は、首相の勧告にもとづき国務大臣を解任する権限を有する。

第一八条　国家統治改革団のメンバーを含み、首相の協議したいと望む事項、また本憲法に指定されたその他の任務に関して、意見を申しのべる任務をおう首相諮問評議会を設ける。内閣と諮問評議会は、共同で国家の安全に関する政策を立案する。国家の安全に関する限り、内閣は前記に従い立案されたとおりに政策を遂行しなければならない。諮問評議会に欠員が生じた場合、もしくは追加人員が任命される場合には、諮問評議会の承認を得て首相が任命する。

第一九条　王国の安全の保持、防衛、公共災害の防止に関する事項に緊急の必要性がある場合、もしくは税制、外国為替に関する法案の必要がある時には、国王は法の強制力をもって勅令を公布する権限を保有する。勅令が公布された時には、内閣はただちに勅令を批准する法案を提出する。議会が承認すれば、勅令は制定された法として存続する。議会が承認しない場合には勅令は終了するが、勅令の施行期間中は何事にも影響を受けることなく存在する。

勅令が承認されてもされなくとも、官報でその事項を報道する。勅令が承認されなかった場合には、その効力は官報における発表で生じる。

第二〇条　国王は法と対立しない勅令を公布する権限を有する。

第二一条　王国、王制、国家経済または国家業務などの安全を危険に陥れる活動、煽動、平和と秩序、公共の良俗を脅す活動、国家財産の破壊活動、もしくは人々の健康に有害な活動を首相が未然に防止し鎮圧する必要があると考えた時は、その活動のなされたのが本憲法の公布の前であると後であるとを問わず、また王国の内外を問わず、首相はいつでも内閣と諮問評議会との賛同を得て、命令の発令または必要な行動を実施する権限を持つ。首相の命令・行動及び命令の実施は合法とみなされる。

前記の規定にもとづき首相が命令の発布もしくは行動を実施する場合には議会に報告する。

第二二条　あらゆる法案、勅命と勅令は首相または国務大臣により、副署されねばならない。

第二三条　裁判官は法に従い、裁判において何の拘束も受けない。

第二四条　憲法の改正は、以下の条件と手続きの下でのみおこなうことができる。

(1)　改正の動議は、内閣により提出されなければならない。

(2)　改正の動議は、憲法改正案として国会に提出されることを要し、三回の読会において審議されなければならない。

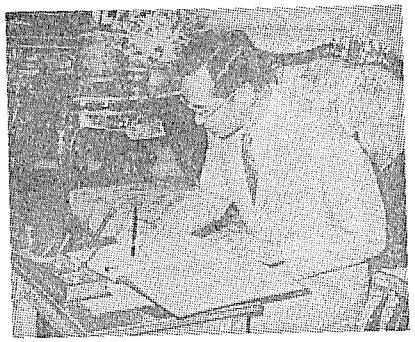
(3)　第一読会においては、氏名点呼方式により原則的受理を票決するが、これは両院議員総数の半数以上の多数決により行なわなければならない。

(4)　第二読会においては、改正案について逐条審議をおこない、その票決は単純多数決による。

(5)　第二読会の終了後、一五日の猶予期間をおき、この期間を経過した後、国会は第三読会をおこなう。

(6)　第三読会における最終票決は、氏名点呼方式によるが、改正案の採択は両院議員総数の半数以上の多数決によらなければならない。

(7)　第三読会通過後、法案は署名のため国王に奏上され、官報で発表された後効力を発揮する。



新憲法に署名するブミポーン国王（10月22日）

第二五条　本憲法に条項のない事項においては、民主的制度にもとづきタイの伝統的慣行に従う。議会と関連して、前項に関して問題が生じた場合、または内閣が議会に考慮を求めるため問題を提出した場合は、議会がその決議をおこなう。

第二六条　議会のメンバーの任命は、本憲法の公布日から三〇日以内に完了されるべきである。議会が任命されるまで、首相の諮問評議会が議会の任務を遂行し、第一三条でのべられたと同じ免除規定をうける。

第二七条　国王に任命され、本憲法の公布の日に首相の地位にある人物を、第一六条により国王に任命された首相とする。

第二八条　本憲法の公布より四年間に、本憲法は民選された

下院と勅選された上院とから成る国会を準備するため改正され、本憲法の四年の期間終了から九〇日以内に、下院の選挙、上院の任命のための準備がなされねばならない。

第二九条　本憲法の公布以前におこなわれた、国家統治改革団の議長並びに改革団による行動、命令、発表は、どのような条件、やり方、立法的行政的司法的効果をもっていようとも、命令の施行は合法とみなされる。

（注1）なお、一九七四年第九次タイ王国憲法（全文二三八条）に明記されていた国民の身体の自由（第三三条）、居住の自由（第三八条）、言論、執筆、印刷、出版の自由（第四〇条）、集会の自由（第四三条）、政治活動、政党結社の自由（第四六条）、旅行、居住選択の自由（第四七条）、職業選択の自由（第四八条）等は全面的に削除され、第八条「何人も法の範囲内での権利と自由を有する」という簡単なものに変えられた。

（注2）訳載にあたり、一九七四年憲法と重複する部分は、外務省アジア局南東アジア第一課の一九七四年タイ王国憲法（仮訳）を参照した。

資料41

一九七六年一〇月六日事件の真相

総理府

一九七六年一〇月以前

一九七三年一〇月一四日事件以後、左派勢力はタイ全国学生センターという名を使って自らの活動の中心をつくりだした。これは、周知のように力を合わせて独裁者たちを追放し、当時の政府を辞職に追いやった学生に対する国民の強い信頼をうまく利用したものであった。

左派勢力は、タイ全国学生センターという名に拠って経営者に抗議するためにストライキを起こすよう組織的に宣伝したり、違法なやり方でデモを実施して全般的な混乱をひきおこしたり、また友好国との友好関係を破壊するなどした。その結果――

(1) 国民は動揺して、政府が確固たる基盤を維持していることを信じなくなり、
(2) 国家の経済も混乱して、国内外の投資が減少し、
(3) 国民と官僚の間には対立が生じ、
(4) 国民の道徳は低下し、
(5) 米国をタイから撤退させてこれまでの友好関係を悪化させ、あるいは南部の中国人共産匪の鎮圧に関してマレーシアに抗議するなどＡＳＥＡＮ諸国との協力関係を破壊して、タイを国際的に孤立させるに至った。

左派勢力が右派政党の名をかたって国会にはいり、さらに閣僚の地位につくや、彼らの活動はますます活発になっていった。これらの政治家たちは、議会での権力を使ってタイ全国学生センターを名のる左派勢力を支援し、さらには国の報道機関を利用して国民を煽動するまでになった。

彼らは、タイに友好的でない諸国の人間と連絡をとり、都市に匪賊の武装組織をつくるため、バ

ソコクその他の大都市に武器を持って潜入した。これは遠く隔った農村の共産匪と都市の活動を結びつけるための工作であった。

左派勢力は、準備工作の段階がいよいよ完了したと考えるや、大規模な次の行動に着手する機会をうかがった。そしてタノーム元帥の首都での出家とナコンパトゥム県での二人の絞殺事件が起きると、これに乗じてタマサート大学で煽動的な活動をおこなった。

一九七六年一〇月六日事件

タマサート大学における煽動的行為は、一〇月初め以来激しくなり、ついには学生を皇太子の姿に仮装させて首吊り劇を演じ、共産主義勢力の陰謀の一部である王制破壊の意図を公然と示した。この不敬行為は、当然昔から国王をこのうえなく尊重するタイ国民の激しい怒りをひきおこさずにはおかなかった。

一〇月五日、「国家・仏教・王制」を愛するおよそ一〇万人の国民は、心を一つにしてタマサート大学に赴き、構内に押し入って、大衆を煽動する行為を止めさせようとした。警備にあたっていた警官は、構内には武器をもったグループがいることをよく知っていたので、彼らが構内にはいるのを押し止めようと懸命に努力した。しかし極度に怒り狂っていた国民はこれを聞き入れようとはせず、一〇月六日の午前二時頃、一部の国民は無防備のまま大学の壁をよじ登って中にはいろうとして銃撃され、負傷あるいは死亡した。

その頃構内では、後に判明したことであるが、集会のリーダーたちが学生・市民を煽動し、集会

がバラバラになることを恐れて、サナームルワンに集結していた国民の数やその怒りの声が構内にいる人々に知られないようにした。そのため構内の学生・市民は構外の状況を正しく認識することができず、ますます大胆になっていった。このような詐欺的方法だけでなく、リーダーたちは構内から出ようとする人々を暴力的に阻止した。

午前七時頃、事件終結の交渉をおこなうため、警官が国旗を掲げて大学にはいったが、彼は狙撃され負傷した。その結果、警官たちは入構して捜査し、さらに必要ならば武器を使ってもよいという命令を受けた。

その時、二台のバスを運転していた市民が大学の正門を突破し、警官は容易に入構することが可能になった。タマサート大学を占拠していたグループは、戦争用の重火器を使って猛烈に銃撃を開始した。警官はこれに反撃し、いくらか前進した。このため双方の側に負傷者、死者がでた。また大学占拠の集会に参加していた少なからざる人々は、外に出ようとして後ろから味方に撃たれた。構内で煽動していた学生たちのうち、あるものは武器を持ったまま逃走し、あるものは役人たちに投降した。銃声の只中にいた愛国的国民たちは、怒りを露わにし、サナームルワンで遺体を木に吊し、身許不明の四屍体を燃やした。

ついに役人たちはタマサート大学を制圧し、学生、暴動者で、投降したものの数は三〇五九人、また死者は学生たちが四六名、警察側が二名、その他に愛国者、暴動者の負傷数は約二〇〇名に及んだ。さらに役人たちは、戦争に使用する相当数の重火器をこの時押収した。

一〇月六日、その日一日中、愛国的国民は旧王宮前広場で集会を続け、その数は一〇万人近くに

達した。そしてこのうち一部は、首相官邸に向かって行進をおこない、左派学生の活動を支援していた一部閣僚の解任を要求した。

混乱がますます深まっていく中で、（セーニー）政権は、タマサート大学における集会と暴動の張本人であるタイ全国学生センターとその他さまざまの左派組織に対して、何らかの措置をとることを躊躇した。後に明らかになったことではあるが、左派勢力の指導者の大部分は、タマサート大学の闘争に命を賭して参加していたわけではなかった。彼らは愛国的国民と警官に激しいやり方で反撃する準備をすすめていた。一方愛国的国民の方でも、政府に提出した要求をあくまで主張し続けていた。そのため事態は次第に危機的様相を深め、このまま行けば国全体を破壊するような広範かつ激しい暴動と戦闘が起こる危険性が強まった。

国家統治改革団

国家統治改革団は、国家の方途に関して自信を喪失させている流血と騒擾を見ることによって、国家を脅している災禍がいったい何であるかを明確に認識した。そこで一〇月六日午後六時から、全ての統治権力を掌握することを決定し、同日午後七時に、国家の報道機関をつうじてこれを全ての国民に伝えた。その結果、混乱状態はただちに平定されるに至った。

国家統治改革団は、権力掌握についてはあらかじめ何の準備もすすめていなかったので、国民がこの点についてどのような考えをもっているのかまったく確信がなかった。そこで世論の把握に努め、ほとんど全ての国民が今回の統治改革に賛意を表し、なかにはもっと早くやるべきだったと述べる人もいたことを知ったのである。

資料42

軍事クーデターに対する在日タイ人の声明

在日タイ人グループ
（一九七六年一〇月七日）

一九七六年一〇月六日に事件が生じた。この時国境警備警察軍、落下傘部隊、「赤い野牛」等は、タイ政治史上最も野蛮かつ残虐なやり方でタイの学生・民衆に襲いかかった。その結果、平和的に暴君タノームの帰国に抗議していた学生・民衆は虐殺され、あるいは負傷し、さらに多くの人々が逮捕された。ついでその同じ日にクーデターがおこった。われわれ在日タイ人は、今回生じた事件に対し、大きな悲しみと驚きの念を禁じえない。

われわれ在日タイ人は、わが国の将来を憂慮しつつ、今回生じた事件について検討を加えるため、一九七六年一〇月七日に集会をもつに至った。

今回のクーデターが、以前から長い期間をかけて準備され、企てられたものであることはすでに疑問の余地がない。一九七三年一〇月一四日に、生徒、学生、民衆が政府を打倒して以来、利益を

失いつつある連中はあらゆる方法を使って、民衆の自由と正義を愛する権利を破壊し、独裁体制の復活をめざしてきた。このことは、民衆の側に立っていた学生、農民、労働者、政治家の指導者たちが彼らに絶えず残酷に暗殺されてきたことからもうかがい知れるだろう。また彼らは「ヤーングロ」のようなマスコミを使って事実を歪めたニュースを流し、自分たちの考えに同意しない人々には誹謗中傷を加え、また独裁政権による支配に同意するようにしむけた。同様に彼らは「赤い野牛」や「ナワポン」のような政治的暴力団を支援し、爆弾を投げて民衆を殺した今年の三月二一日や八月二一日の事件の時のように、民衆に暴力を加えていった。

さらに利益を失いつつあるグループは、クーデターをひきおこすための誘い水として、暴君の入国を図った。すなわち一九七四年一二月には暴君タノームを入国させ、今年の八月には暴君プラパートを帰国させたのである。この時民衆の側では二名が殺され、多数の人々が負傷した。しかしクーデターの計画は、民衆が激しくこれに反対したため失敗に終った。そこで最後に、今度は暴君タノームを僧衣に身を包ませ、今年の九月一九日に帰国させた。彼の帰国はただちに民衆の広範な反対をひきおこした。そこで彼らは、ナコンパトゥム県で暴君に反対していた二人の男を残虐にも吊して殺した。この事件は、正義を愛する心をもった民衆には正視しがたいものであり、独裁者のグループの野蛮さに対する激しい非難の声をひきおこさずにはおかなかった。かくて学生・民衆はタマサート大学で平和的に抗議を開始した。一方独裁者の方は、学生は皇室を侮辱したと主張し、これを口実にして今年の一〇月六日早朝に、民衆を暴力的に弾圧したのである。そしてこのタマサート大の虐殺は、その日の夕方おこったクーデターの原因になった。このような一連の事実を見るな

ら、今回のクーデターが長期間にわたる極秘の計画の末に断行されたことは明らかである。

民衆は、タマサート大学の構内で一〇月四日から集会を続けていた。そして六日の朝二時、銃声が轟き、一人が負傷した。国境警備警察軍と落下傘部隊は（これを合図に）タマサート大学構内に強盗よろしくなだれ込み、機関銃や手投げ弾や対戦車砲を使って構内にいる三〇〇〇人以上の学生・民衆に襲いかかっていった。無防備のまま集会を開いていた彼らはすでに疲れ果てていた。彼らは暴君タノームを国外に追放し、タイ国内で民主主義を守り抜くために、平和的な要求闘争をずっと続けていたのである。

APの報道が伝えるところによると、「赤い野牛」や「ルーク・スア・チャーウ・バーン」はこうした軍・警察の後に続いて構内にはいり込み、警察が学生を逮捕するのを待ち受けて彼らの体を死ぬまで足で蹴りこずつき回した。またタマサート大学から逃げだしてきた四人の民衆を司法省の建物の前でひきずり回し、ナイフで切り刻み、ガソリンをかけて火をつけ、別に準備してあった古いタイヤを死体の上に積み上げて燃やすなどした。

このようなならず者の集団のうち別の連中は、二人の民衆をサナームルワンの広場に立っているマカームの樹に吊り下げた。そのため眼球は二つとも飛び出し、のどはくびれ、それでも飽き足らない彼らは、木に吊した屍体を狂ったように木や椅子で殴りつけた。

一方タマサート大学の構内では、集会に参加していた一部の人々がこうした野蛮な虐殺からなんとか逃げだそうとして、チャオプラヤー川の向こう岸まで泳いでいったが、中には辿り着かないまま溺死する者もあった。逃げることができなかった人々は、男女を問わず警官に銃をつきつけられ

強制的に上半身裸にさせられた上で、芝生の上にうつぶせにさせられた。また彼らはフットボール競技場の真ん中まで這って行くように命令された。うつぶせになった人々の間にはすでにこと切れた人や体中血だらけになっている人も混じっていた。芝生は民衆の血ですっかり染まっていた。その後芝生の上にうつぶせになっていた人々は命令によって手を頭の上に組まされ、すでに待機していたバスまで一列縦隊に歩かされた。現在これらの人々がどうなっているのかはまったくわからない。ところで、負傷者を運んだり、あるいは逮捕した人々を車にのせる時にも、なお血に飢えたならず者の集団は彼らに襲いかかり、殴る蹴るなどの暴行を加え、なかにはそのまま殺されたものもいた。

ちょうど同じ頃、六日の昼前にセーニー首相の家に交渉にでかけていたタイ全国学生センターのスタム書記長と民衆代表六人は、セーニーの命令により不敬罪で逮捕された。ある情報によると、民衆の代表はすでに殺されてしまったという。

今回の弾圧で三〇人以上の人々が死亡し、二〇〇人以上が負傷した。また少なくとも一七〇〇人が即逮捕され、その後逮捕された人々も加えるとその数は三〇〇〇人以上に及んだ。彼らが今どうなっているかはまったくわかっていない。

民衆を残虐に弾圧した後、一時的に小康状態が訪れたが、その後機会をうかがっていた一部のグループが、ついにその本性を暴露するに至った。六日の午後七時一〇分、サンガット・チャローユー海軍大将が全権掌握を宣言したのである。彼らが述べた理由は、以前に軍の独裁者たちがクーデターをひきおこした際に主張した口実と何の変わりもなかった。すなわち、彼らは、タイが由々し

き混乱に陥り、文民政権は事態を収拾しえず、その結果国家・仏教・王制が危機にさらされたと述べ、あるいはタイ人は民主主義を手にするには未だ教育が欠けており、受け入れ準備が十分できていないと主張したのである。記者会見でのサンガットの話によると、彼らは「国家改革評議会（サバー・パティループ・ヘーン・チャート）」を設立したという。ところでこの評議会はすでに前々から、「ナワポン」や「ヤーングロ」さらにはセーニー政権内の一部の閣僚によって準備され、その構想は広く宣伝されていたものであった。この評議会のメンバーは勅選による二四名の軍人から構成され、逆にすでに国民が選出していた二七九人の代表は罷免されることになっていた。また彼らは、学生・民衆が一九七三年一〇月一四日に血と生命を犠牲にしてかちとった憲法を廃棄し、その後戒厳令を布告して彼らに異議を唱える国民を逮捕一掃するように命令を下した。さらに五人以上の集会の禁止、新聞、印刷物、ラジオ、テレビ、その他各種マスコミのきびしい検閲、各政党の解散等一連の命令によって、彼らは国民の自由権を奪い去った。この時彼らの口からくり返しでたのは「愛国」という言葉であったが、しかし彼らはその言葉とは裏腹に、国民に銃をさし向け、軍部独裁制を復活させ、再び国民を抑圧するに至ったのである。

以上の事実を見れば、先のクーデターが、基本的人権を完全に破壊する独裁体制の樹立を意味し、同時にそれは一握りのファシストたちがタイ全土の国民を抑圧するためにおこなったものであることは火を見るより明らかである。またこのクーデターは、行政面及び司法面での全権を文民政権から奪取する機会を与え、一握りの人間が、国の統治権を牛耳る機会を切り拓き、また少数の人間が大多数の人々から利益を収奪しうる機会を増大させ、ますますその力が大きくなっていた学生、民

衆、労働者に対して残虐かつ野蛮に弾圧することを正当化する機会を与え、独裁体制を再びタイに復活させる契機をつくりだした。このような独裁体制(の悪業)をかつて身にしみて味わってきたタイ国民は、決して今回のクーデターを甘んじて受け入れることはないだろう。

われわれ在日タイ人グループは次の点で合意に達した。

1 われわれは一九七六年一〇月六日のクーデターに抗議する。

2 われわれは、タマサート大学とサナームルワンで野蛮に学生・民衆を虐殺したことを非難する。

3 タマサート大学で逮捕され、基本的人権を無視された全ての学生・民衆の釈放を要求する。

4 仏教と王制を今回のクーデターで道具として利用したことに抗議する。

クーデター反対!

資料43

アメリカのアジア研究者の声明

ジェローム・コーヘン(ハーバート大学法学部教授)
ジョージ・ケーヒン(コーネル大学国際関係学部教授)
ダニエル・レフ(ワシントン大学政治学部教授)
ジェームズ・スコット(エール大学政治学部教授)
ベネディクト・アンダーソン(コーネル大学政治学部教授)
(一九七六年一〇月一一日)

われわれは学者として、とりわけアジア研究の専門家として、バンコクのタマサート大学での残虐な暴力行為とタイにおける軍部支配体制の復活に対して、われわれがうけた衝撃を表明したい。「改革団」はさまざまな分野で自らの行動を正当化し始めているが、しかし、それらは一つとして、検討に価しないものばかりである。

われわれは、急進的な大学生たちがタイ政府の武装転覆をたくらんでいたときかされた。しかし、実際に、武装転覆を首尾よくおこなったのは軍自身に他ならなかった。かりに、タマサート大構内でバリケードを組んでいる学生たちが発砲したとしても——「改革団」による虐殺をフィルムに撮ったCBSレポーターからは、学生が発砲したというはっきりした証拠を見いだすことはできない

――それは明らかに自己防衛を目的としていた。彼らのうちのあるものがピストルを所持していたとしても、右派暴徒による暴力沙汰、放火、殴打、「未解決」の殺人事件などが過去二年間に急速に席捲し、そしてついには今年の二月にコーネル大学の卒業生であるタイ社会党書記長のブンサノーン・ブンヨートヤーン博士の殺害と、穏健派である新勢力党のバンコク本部の爆破で頂点を迎えるに至ったことを想い起こすならば、彼らの行為は十分に理解できることといえよう。「改革団」の一味は、法と秩序の尊厳を回復するために行動を起こしたと主張している。しかし実際には、民主的代議政体という制度を受け容れようとせず、ここ二年間にわたってその政権の土台を切り崩すことに全力を尽くしてきたのは、軍部と警察であった。また「赤い野牛」のような極右テロリストやならず者の集団は、これまでまったくとがめられることなく多くの非道を犯してきた。というのも、彼らは国家の治安維持機構の手によって武装化され、訓練を受け、保護されてきたからである――そしてこれはチリ、ブラジル、アルゼンチンの場合と驚くほどよく似たパターンであった。また昨年には、学生ではなくまさに警察が、穏健なクックリット・プラモート首相の自宅で酔っ払いのように略奪をおこなった。そして軍放送局はまったく恥知らずにも、〝右は左を殺せ！〟というようなスローガンを絶えずくり返すことによって、右派私刑集団を煽動してきた。

「改革団」の一味は、しばらくすればきっと、自分たちはタイ国民の強固な支持を得ていると主張するようになるだろう。しかし実際には、一九七五年と七六年におこなわれた二回の総選挙で、極右派政党は選挙民から圧倒的に拒絶されていた。一九七六年の投票結果によると、選挙民は明らかにセーニー・プラモートのような穏健かつ中道の法律家が支配する民主党に統治を委託したのである。この民主党は、四半世紀にわたって軍部独裁に市民の側から反対してきたという輝かしい歴史を持っている。

今度の事件の真相は次のとおりであった。即ち今回のクーデターは、長く権力の座を保ってきた権威主義的かつ官僚主義的一派が、議会制民主主義そのものによって「(自らの権益を)脅された」ことに対し暴力的な反動を示したということである。彼らは従来、社会の他の連中から、何ら疑いをもつことなく敬意を表され、また批判や責任を問われることなく過ごし、ワシントンと密接でしかも非常に有益な関係をもつことに慣れ切っていた。したがって、低賃金労働者が賃上げを求めるストライキ権を要求し、農民が大きな態度で既存の土地改革法の実施を要求し、さらにまた検閲のない新聞・雑誌や選挙による議会が、広範な汚職と権力の濫用を暴露した時、また幅広い層からなる穏健な政治集団によって支持され、民主的に選出された政府が、中国やインドシナ近隣諸国との関係の正常化にとりかかった時(そのための一つの条件は、明らかにタイ国内に存在する巨大なアメリカの軍と諜報機関の撤退であった)、まさに彼らは恐慌状態に陥ったのである。

「改革団」の一味は、自らが強力な親米主義者であり、また反共主義者であると宣伝することによって、国内政策とは関係なく、アメリカの承認と財政的軍事的援助をたやすく獲得できると期待していることは明らかである。しかしわれわれは、アメリカ国民がもはやこのように皮肉な論理の立て方に惑わされず、また人道的信義をもってわが国の外交政策を樹立することを信じて疑わない。過去二年間、アメリカ政府当局は、わが国がタイ民主制を支持する旨をくり返し述べてきた。そうならば、タイにおいて最初の真の国民の代表であった政府が、基本的には過去の遺物であり、信頼

に価しない軍部を代表している現政権によって打倒された今こそ、アメリカ政府はこのクーデターを拒絶し、それによって彼らの誠意を表明すべきであろう。

資料44

《特別寄稿》第二の道

プェイ博士（元タマサート大学長）

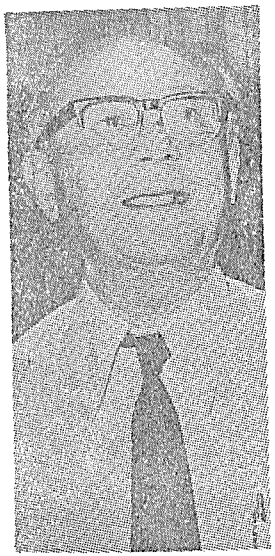
〈略　歴〉

一九一六年、バンコクに生まれる。タマサート大学卒業後、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスで特待生として研究を続け博士号を取得する。一九四九年大蔵省にはいり、一九五八年に大蔵省主計局長に就任。一九五九年から一九七一年までタイ国立銀行の頭取をつとめ、タイの金は彼の署名がない限り一銭も動かないとまで言われた。また一九六四年から一九七二年まで母校であるタマサート大学経済学部長を兼任し、同時に英米のさまざまの大学の招聘教授あるいは客員研究員を歴任した。

一九七三年の「10・14運動」以後は、首相付経済顧問審議会の委員長及びタイ国立銀行理事会のメンバーをつとめ、一九七五年以来「10・6クーデター」で国外に亡命するまで、タマサート大学学長の地位にあった。現在はロンドンに在住。活発な講演、執筆活動を今なお続けており、最近はアメリカの人権委員会でタイの政治情勢と政治犯の逮捕について証言をおこなった。

著書も多数あるが、代表的なものとしては『タイの経済』（一九五六）、『プラチャー・タムの平和』（一九七二）、『回顧と展望』（一九七六）などがある。

以上の略歴からもわかるように、プェイ博士はタイのリベラルな知識人の中では最も著名かつ重要な人物であり、彼の発言と行動は、常にタイの学生、知識人、官僚に大きな影響を与えてきた。



(一)

日本にいる私の友人たちがタイに関する書物を出版すると知って喜びに堪えません。現代においては真実を知ることはなかなか困難なことです。とりわけタイに関する諸事情については、この感を深くします。というのもタイの現政権は、向こう一二年間はタイ国民に自由を与えないという政策を打出してタイ国民の自由と権利を抑圧するとともに、新聞の発刊停止、テレビ・ラジオニュースの捏造、真実を報道した外国人ジャーナリストの国外追放など一連の方法によってつとめて国外にタイの真実が伝わらないようにしているからです。ですから、もしタイ政府の魔手によって罰せら

れることを心配しないですむ自由な筆者が書いた書物があるなら、これは事実を比較するチャンスを世界に与える上で大きな貢献をなすことでしょう。確かに文筆の自由を有する者は、また捏造の自由をも持っています。しかし、批判的精神をもつ読者ならば、タイで出された他の書物と比較することによって真実をつかみ、自由な熟考によっていずれが正しく、いずれがそうでないか理解することが可能であると思います。

(二)

一九四八年以来続いていた独裁体制からタイを解放した一九七三年一〇月事件がどのようなものであったか、この書物ははっきりとそれを示すでしょう。タイ社会の自由獲得とともにおこるはずだった政治的、経済的、社会的、文化的興隆は、十分な時間を必要とするものでした。しかし、私たちが真の自由を獲得していた期間は、一九七六年一〇月に突如終りを告げ、興隆開花せんとしていた諸事象もまた、ことごとく消滅せざるを得ませんでした。

一九七三年から遡ること二五年間、タイは独裁的支配の下にありました。総理大臣になる者は、誰もが元帥の肩書を必要としました。タイ政府は「われわれは自由民主主義の下にある。しかし、まだ民主主義は十分育っていない。だから新憲法はくり返しまた何年もかけて起草する必要がある」といって国民を欺いてきました。選挙の時には、さまざまのきたない手を使って、選挙を汚しました。最もましなやり方ですら、なんと金による買収で、しかもこれは公然とおこなわれました。選挙になると、権力と金力を持った者が、これを使って選挙を破壊し、その一方では「国民は無知

文盲で政治的知識を欠いているから、タイ国では民主主義が十分発達しないのだ」とうそぶいて、責任を国民になすりつけました。選挙によって軍事政権与党が議会で絶対多数を獲得しても、この絶対多数は金によって与党をつくったのですから、やがて金が底をつくと、絶対多数派も雲散霧消してしまいます。そして軍部が自分自身に対するクーデタを起こすということになるのです。このような具合で、二五年という歳月が過ぎました。しかし本当のところは、権力は極く少数の者の掌中にあり、彼らが年齢に従って順番にこの絶対権力を行使してきたのです。「権力は不正によって腐敗する。絶対権力は絶対に腐敗する」といいます。不正がタイ社会に蔓延しました。これが数十万人の国民がバンコクの街頭に出て抗議し、統治体制を自由なものに変えた一九七三年一〇月事件の一つの原因であったのです。

一九七四年憲法も完全無欠なものではなく、いくつかの欠点をもっていました。しかし全起草者は、あらゆる面で自由かつ公正な憲法をつくろうと努めたのです。憲法それ自体は、一片の紙切にすぎません。いつでも破り捨てることができます。そして、民主主義を破壊しようとする者から守る何の保障もありません。そこで民主主義破壊勢力はただちに破壊計画を企て、実行にうつすことができたのです。というのも軍部であれ、内務省であれ、学界であれ、一九四八―一九七三年の間と少しも変わっていなかったからです。二五年間にわたる独裁によって弱体化していた民主主義体制及び自由の体制は、必要以上の政党の乱立をもたらし、公選政府はいくつもの政党の連合政権となり、その結果何事にも円滑さを欠きました。このように、七三年以後も彼らは弱体ぶりをさらしたのです。これが、地主及び資本家のグループによって支援をうけた軍人政党、軍部及び警察に、

民主主義の根幹打倒の機会を与えてしまいました。彼らは一九七六年一〇月六日、独裁権力を再び掌中に収めたのです。

しかし、一九七三年一〇月以後三〇年間の政治的傾向は、民主主義的方向の少なからざる回復でした。一九七六年四月四日の選挙では、一九七五年の第一回選挙に比べ、当選した議員で大政党に所属している人の数が増加し、これにともなって議会に議席を有する政党の数も減少しました。全国民は政治意識に覚醒し、農民と労働者の連携は増大し、自由と権利を行使する青年層は、それを建設的に行使しました。タイ国とはただバンコクだけを意味するのではなく、政府は何の配慮も加えないが、しかし多数の人々が住む農村もまたタイなのだという意識や、政府は各地方の国民の喜怒哀楽に関心を払うべきだという要求が高まりました。国民の意識下に埋もれてきた自由と権利を、権力によって押さえつけることは、もはや不可能になりました。もしこの民主主義体制が、あと一〇年ほど続いていたら、この体制の弱点となっていた政治状況も時が解決したでしょう。というのは国民が無知文盲だから民主主義を維持できないのではなく、国民が人権を行使できる十分な機会をもちえなかっただけなのですから。

経済面について見ますと、タイの問題は、全般的国民経済の悪化とか危機といったことにあるのではありません。そうではなくて、各部門間の経済発展の不均衡こそが問題だったのです。一九五五年以来、タイの経済、金融、財政のメカニズム及び運営はある程度安定したものでした。バーツ貨は長らく安定していました。通してみると成長率は高いものでした。しかし、バンコク、都市、農村間の成長は跛行的で、バンコクがすさまじいまでの速度で成長したのに対し、農村は昔と同じ

かある地方では逆に後退した所さえあったのです。バンコクの人口はどんどん増加しましたが、農村では逆に減少しました。工業、商業、商業銀行の利潤は、ぼう大なものでしたが、農民の所得はかえって減少するか、増大したとしてもわずかなものでした。労働者の賃金について言えば、バンコク及び農村のいずれでもきわめて低いものでした。一九七三年、政府がきめたバンコクにおける労働者の一日の最低賃金はわずか一二バーツ（一八〇円くらい）にすぎません。

一方商人、産業資本家、銀行家、それに官僚でさえも所得はきわめて高く、必要以上の奢侈にふけっていました。とりわけ官僚は権力者に近ければ近いほど、合法あるいは非合法の活動で異常な成金になったのです。ところが大部分の人の所得の源泉となる米価は、第二次大戦後以来、世界市場のほぼ半分、ある場合には実に三分の一の低米価に抑えられてきました。そして、農民は旱魃、水害に見舞われて収穫がない時には、自己の農地を手放さざるを得ませんでした。このような状況になった理由は、人口の増加といった理由もありますが、独裁体制が最大の元凶でした。すなわち、議会は真に国民の代表としての役割を担う公選議会ではなく任命制議会であり、任命された議員は当然自分を任命した独裁者に同調しました。そして独裁者を取巻く者たち、官僚、商人、産業資本家たちは、独裁者と相互依存関係にある連中でした。独裁者は、全体の福祉のために国家を発展させなければならないというような考えはまったく頭になく、ひたすら自分の周囲だけ見て、自分と自分の仲間たちの利益になる政策だけを実施しました。政策を公式に発表することと実際に実施することとは別のことです。発表するだけなら、口先で全体の利益のためにとか何でも言えたわけです。

しかし一九七三年一〇月以来、上述したようなタイ経済の欠陥を徐々に解決しようという努力が

はじまり、政府、大学、学生及び個人は、真に農村開発の仕事に取り組むようになりました。農民は自分たちの利益のために団結して真の協同組合や農民グループをつくる権利を獲得しました。今まで鉱山業者や金持に農耕上の損失をうけても結局泣寝入りする他なかった人々も、自分たちの正当な権利を主張できるようになり、政府も多数派の人々の利益に関心を払わざるを得なくなりました。郡長、県知事、地方警察及び地方軍によって種々の方法やさまざまの容疑で苦しめられてきた人々も、自分たちの主張ができるようになりました。選挙において国民の支持を必要とする代議士は、国民のための代表とならざるを得なくなりました。米価をはじめ他の農産物の価格は引き上げられ、政府はいくつかの農産物については最低価格を保証するまでになりました。都市の労働者の場合を見ても、彼らは労働組合を組織して、賃金や労働条件全般について自らの正当な権利を主張しました。バンコクの最低賃金は一日当たり一二バーツから一六バーツさらに二〇バーツ、二五バーツと引き上げられました。しかしこれでは節約して生活しても十分とはいえないので、何回かストライキに訴えてそれ以上の成果を獲得しました。経済及び社会問題は、順次改善されていきました。しかしまだ満足といえる段階ではありませんでした。タイ人の労賃は他の諸国に比べると依然として低いものでしたから。

一九七六年一〇月、再度独裁が開始され、経済及び社会問題解決の進展は一頓挫せざるを得なくなりました。農民の所得は独裁者の手で抑えつけられ、彼らが団結して権利を主張することもできなくなりました。公選の代議士もいなくなりました。労働者は今も名前だけの労働組合は持っています。しかし彼らはストライキを禁止され、社会にとって危険ということで集会もできません。労

働局が最低賃金を二五バーツから二八バーツに上げることを提案しましたが、政府は認めませんでした。つまり経済及び社会状況は一九七三年以前に逆戻りしたのです。それこそ独裁者の思いのままになったわけです。

学問の自由であれ、文化の自由であれ、芸術・文学であれ、一九七三年一〇月までは狭い範囲に限られていました。その後研究及び文化の全面的興隆開花を生み出すまでに自由が拡大され、顕著な成果を生みました。しかし教育や医療などを改革しようとする動きは、一九七六年一〇月六日に頓挫せざるを得ませんでした。これらの改革は長らくしまい込まれ、それが再び日の目を見るのは遠い将来のことでしょう。というのは、新しい独裁者は社会に対し有害危険であるとして、数千数万に及ぶ書物を焚書処分にふし、学校や大学で自分の頭を使って学習したり教えたりすることを禁止し、音楽や演劇についてはその一部の作品を演ずることを禁じたからです。

(三)

現在のタイの状況を見てみましょう。一九七六年一〇月六日以後、政府は絶対的権力を握って人民の自由と権利を取り上げました。誰でも何か話したりあるいは、書き、考え、学ぼうとする場合には、政府の認める範囲を越えることはできません。その政府の承認の範囲は、今やますます狭くなっています。新聞及びその他の報道機関は、政府の気にいるようなやり方をしなければなりません。労働者・農民は、集会、結社の権利を持っていませんし、学生センターをつくることもできません。一九七四年憲法は完全に廃止されました。公選制の議会は解散させられ、任命制議会が設立

されました。新しい「憲法」は、行政、司法、立法の絶対的権限を政府に与えています。もし政府の気に入らない人がいれば、政府は自分自身で判決を下すことができます。裁判所に起訴したり、他の司法的手続をとる必要はまったくないのです。そして官僚も、もし気に入らない人がいれば「社会にとって危険」という便利な容疑でもってその人を自己の掌中に長らく起訴する必要もなく拘禁できるのです。さらに政府は、恣意的に誰でも死刑の判決を下せるのです。このような状況ですから、逮捕拘禁は今広範になされています。

一九七六年一〇月六日、タマサート大学で三〇〇〇人以上が逮捕されました。このうち数百人は五、六ヶ月間勾留され、その後特赦ということで釈放されました。残りの者に対しては、一九七七年三月以後、政府は重い刑罰でもって一〇〇人以上を起訴しました。注目すべき点は、一九七六年一〇月から一九七七年三月まで勾留された人たちは無罪にもかかわらず、無報酬で勾留されていたということです。彼らは何の補償も与えられず、名誉は一方的に傷つけられています。実はこのような多数の釈放には、以下のような理由があるのです。(1)政府が容疑を確定できなかったこと。(2)政府が世界、とりわけアメリカ合衆国の新大統領の人権外交を配慮して、タイ政府が人権を侵犯しないよう努力していることを示してアメリカから引き続き援助を得ようとしたこと。この二つです。

起訴された一〇〇人以上の者について言えば、このうち三〇人以上は、証拠不十分で起訴できなかったため、検察官が警察当局に突き返したにもかかわらず、警察が無理やりに起訴させたものです。この一〇〇人以上の中の幾人かは、共産主義活動容疑で軍事裁判所に起訴されました。この軍事法廷では弁護士を付けることができず、上告もできません。もし政府が「憲法」の第二一条(首

相の非常大権)を使って自分で判決を下すというようなことをしない場合でも、司法手続きを通すというメリットを被告は受けられませんし、最悪の場合には、第二一条(首相大権)で罰せられるかもしれないのです。というのは、普通の裁判では政府側が敗訴して面子を失うことになるかもしれないからです。現政権は、すでに第二一条を使って三人の容疑者を死刑に処し、残りの人々も投獄しました。さらに調子にのってこれを続けようとしています。これがはたして、法律家であり、かつて裁判官、法学の教授であった現ターニン首相のやることでしょうか。また閣僚の中にも幾人も法律家がいます。それにもかかわらず、法律の原則に従って法律を施行しようなどとはしないのです。

タマサート大学で逮捕された三〇〇〇人以上の人は「はっきり」している人たちです。事件が白日の下におこった以上、はっきりと人々は確認できるのです。しかしこの後、全国の農村で数多くの人々が逮捕されていますが、この人数については、政府が公開しないので知ることができません。新聞も掲載することができません。これらの人々の大部分は名もない人たちです。しかしタイ人にはかかわりありません。ある推定では逮捕後すぐ釈放された者も含めて約五〇〇〇人が逮捕されたと言われています。また別の推定では、共産主義者容疑、あるいは社会に対し危険という容疑で依然二〇〇〇人が勾留されていると言われています。この社会に対し危険という容疑で逮捕された者の中には、役人の私怨によって逮捕された者が沢山います。たとえばマハーサーラカーム県のある医者の場合がそれです。この医者は、多くの村民を長い間助けてきたのですが、これは県知事、郡長、官僚資本家の利益と相反していたため、この医者の敵たちは何度もこの医者をつぶそうと試みてきました。そして一〇月六日のクーデター後ついに機会をつかんで社会にとって危険な人物としてこ

の医者を逮捕してしまったのです。

ところが何百という村民が連日この医者を拘置所に訪ね、拘置所が混み合うほどになりました。そのため役人たちも、証拠なしとしてこの医者を釈放せざるを得ませんでした。このケースはほんの一事例にすぎません。たまたま、ある程度地位もあり村民に敬愛されている人だったので釈放されることになったのです。政府に逮捕されても、報道することが許されてない例が沢山あります。たとえば、チョンラップラター寺の僧侶、信者の事件がそうです。民衆を痛めつけたいと思っている役人はどこにでもいます。そのうえ彼らは政府から庇護されているのです。たとえ僧侶であっても例外ではありません。

たとえば、ナコンスィータンマラート県ピブーン村の三人の僧侶の身の上におこった事件もその一つです。一定の修業をつんだ僧でさえも、役人はこの寺の住職を騙してナコンスィータンマラート市の法廷で証言してもらいたいから、この間ある寺院に泊まっていただきたいと言って外に連れ出しました。しかし実際には彼らを監獄に連れて行き、他の犯罪者たちの中に押し込んだのです。後日、親族が訪ねて行きましたが、会うことができませんでした。いっしょに投獄されていた人の話では役人と農村開発ボランティアの連中が引きずり出して殺害したことがわかりました。社会にとって危険という容疑者の大部分は貧しい人々であり、扶養せねばならぬ妻子や父母をかかえています。長く逮捕勾留されていると自分だけでなく、少なくとも六人ぐらいの家族も同じように苦しむことになります。さらにある場合には自分の村から遠く隔ったバンコクやその他の都市の監獄に送られ、非人道的な役人の下でそのまま「行方不明」になる人もいます。

今までの話では、一九七六年一〇月六日に逮捕された人に対する役人の虐待、拷問については触れませんでした。したがって次にこれについてのべましょう。虐待、拷問ははっきりと見ることができました。タマサート大学近くの住民や各警察署のまわりの住民は、自分自身の眼で見たのです。その後も、タマサート大学で逮捕された人々は、自分や他人について自白させるためにといって虐待や拷問を受けています。しかしタマサート大学で逮捕された人々に対しては公衆の眼が光っているので、その後は虐待、拷問はいくらか減ったようです。しかし依然小さな独房や暗室に入れられたり、面会を禁止されている人たちがいます。一方、一般の国民に知られないで逮捕された人々の多くについては、とりわけ遠く隔った地域の人々については、残虐な扱いを受けているのではないかと懸念されています。

「現憲法」の第二一条を行使したり、国家統治改革団の布告によって社会にとって危険という容疑をかけたり、新聞の発刊を停止したり、集会を禁止したりするなど種々の方法で権力を使って威嚇するのは一般国民を恐怖させ彼らが敢て真実を表明したり、政府支持以外の他の意見を表明したりすることがないようにするためです。政府が全国民は現政権を支持しているなどということができるのもこうした威嚇があるからなのです。しかしこれは飛躍した一方的言い分です。一九七六年一〇月六日以後、国内が平静になり秩序が回復し犯罪が減少したという政府の主張に関していえば、タイ国内で出ている新聞だけみてもこの主張が正しくないことは明らかです。殺人、窃盗、強盗、強姦、恐喝の類で紙面は満ち満ちています。それで総理府長官などは政府自身が新聞を出すことを計画したほどです。民主主義国で政府が新聞を出しているような所はありません。政府が新聞を出

しているのは共産主義体制の国だけです。たとえばソ連の『プラウダ』や『イズベスチャ』のように。はっきりしていることは、共産勢力との衝突が今やますます頻繁になっていることです。この点については政府側の発表と共産側の発表とは、大体一致しています。

(四)

共産勢力は、一九六三年から一九七三年の間に拡大したといっています。これはある程度はその通りです。確かに地方役人に苦しめられた人々（たとえば、南部のタンデーン事件や東北部のナーサーイ村事件）によって党員は次第に増大しました。しかし増加率は低く、強力な勢力はもっていませんでした。一九七三―一九七六年の民主主義の期間には共産勢力と政府側の衝突は減少し、戦闘による双方の死者の数も減少しました。これは政府の統計を見れば明らかです。ところが、一九七六年一〇月六日以後衝突回数、死者、負傷数は激増しています。政府の統計によれば、一九七七年の一月から三月までの戦闘及び死者数は一九七三―一九七六年の間の各一年間の戦闘及び死者数を上回っています。

このことは予想できることです。というのも、一九七六年一〇月六日以後の政府側のやり方や人民を威嚇する独裁制が、学生、労働者、農民及び一般市民の選択の幅を狭いものにしたからです。もし屈服せず権利が制限されることを認めないなら、独裁権力による逮捕投獄あるいは死刑を待つか、そうでなければ国外に亡命するか、森にはいって共産勢力と手を携える以外に道はないでしょう。後者の道を選んだ人は数多くいます。その数がどれほどになるかははっきりとはわかりません。

政府側は数百人にすぎないと言っています。一方共産側は数千人と言っています。また全国の大学や師範学校を中心とした高等教育機関から行方不明になった学生の数を五〇〇〇人から六〇〇〇人にものぼると推計している人もいます。行方不明になった学生のうち三分の一が共産勢力に合流したと仮定すれば、先の数字を基礎としてだいたい一五〇〇人から二〇〇〇人が共産勢力と合流したという数字が得られるでしょう。

しかし、共産主義者とともに武装闘争することをきめた人々の数は、彼らの質に比較すればたいしたことはありません。今回ほど共産側に多数の高い知識をもった人が加わったことは今までありませんでした。工学、医学、物理化学、政治学、経済学、法学、教育学などさまざまの分野の学生、教師が多数加わったのです。タマサート大学での残虐な行為に加わった全ての軍、警察、市民と統治権を獲得した全ての人々及びその後に成立した政府は共産主義者の強化のために手助けをしたことになります。もし事実にもとづいて注意深く法律を適用するならば、政府それ自身と官僚は共産主義活動防止法上の違法行為を犯したことになります。というのも、彼らは共産主義勢力の拡大に手をかしたわけですから。

以上のべて来た理由で、政府側と共産側の戦闘は本当に激化しました。また近い将来においてそれはますます激化拡大するでしょう。タイには、ヴェトナムやクメール型の激しい内戦がおこるでしょうか。これについては、筆者はまだ外国からの介入に言及していません。しかし、もし政府が一方の大国から武器を獲得するなら、共産側は別の大国から武器を獲得せざるを得ないということは明白に言えるでしょう。もう一つ明白に言えることは、政治的主義主張に何の関係ももたない民

衆、即ち農民、零細商人などが、ますます重い苦しみを受けることになることです。双方の軍事指導者やバンコクの金持は、自分だけ逃げ出すことができます。外国で土地や家屋を購入するためあるいは投資するために、国外に送金するという問題がすでにおこっています。この中には幾人もの将軍も含まれているのです。

ですから、平和を愛し国民の苦難を解決せんと欲する人にとって最も重要なことは、外国にタイ政府に対してであれ、共産側に対してであれ、武器を与えさせないよう努力することです。アメリカにはタイ政府に対して武器を与えさせないように努力し、ヴェトナム、中国、あるいはソ連には共産側に対して武器を与えさせないように努力する人は緊張緩和に貢献するでしょう。このような努力を妨害する人は、考えが狭く浅慮の人であるばかりでなく、タイ人同胞の苦難にまったく関心を持たない人です。

現在迫りつつある内戦で、誰が勝利するかは重要なことではありません。敗れるのは普通のタイ人とタイ民族なのです。

前述の誰が勝利するかは重要なことではないというのは、人民の権利と自由の観点からです。というのは、もし独裁政府が勝利した場合、権利と自由は今同様、あるいは今以上に抑えつけられるでしょう。これは一九四八年以後と同じです。一方もし共産側が勝利した場合、世界の共産国家の実情や共産主義思想そのものからみて、人民の権利と自由は制限されざるを得ないでしょう。というのは、プロレタリア階級独裁がおこなわれるわけですから。

タイの共産主義者はヨーロッパの共産主義とは違うし、タイ共産党が七六年一二月一日発表した

一〇項目の政策では、共産主義と異なる政治思想を持った人にも協力の機会が開かれているという人もいます。しかしこの点は、政策の発表ではなく実際の行動で証明されなければなりません。

勝敗に関して言えば、政府は第一に職権を使って常に悪徳を重ね、第二に前年の末から何度もクーデターの噂があり、実際に、今年の三月には政府が鎮圧したとはいえクーデターが勃発し、また六月にもクーデターの噂が広がったように、政府を後押ししている軍部は現在いくつにも分裂しています。したがって政府は中国の国民党や南ヴェトナムと同様に敗北するにちがいないと言う人もいます。この意見は、十分に考慮されるべきでしょう。現政権に近い人が外国に金を持ち出して逃亡の用意をしているという噂も、この意見を考慮すれば十分あり得ることだと思われます。

(五)

私や私の幾人もの友人は、平和的方法による民衆正道（プラチャータム）の実現という原則を堅持しています。私はこの原則については一九七二年四月『民衆正道の平和』（カレットタイ出版社、一九七三年）の中で書いています。以下この書物からいくつか引用してみましょう。

最初に、私に対し善意をもつ幾人もの友人たちの疑問点に答えたいと思います。彼らは、私に「年もとっているのだし、なぜ平穏を求めないのか。どうして静かに学生に教えたり、本を書いたりせずに、自分から災を招いて他人にののしられ心を乱されるようなことをして、友人兄弟姉妹を苦しめるのか」と質問するのです。私は、友人兄弟姉妹たちを苦しめていることは確かに申訳ないと思っています。しかし、私の返答は、「私はこのような地位にある。このように年もとっている。

もし私がこのことに取り組みやり始めないで、人がやるのを待っているのは、あまりにも情けないじゃないか」(同上書五九頁)ということです。

民衆正道(プラチャータム)という言葉を、私は民主主義(プラチャーティパタイ)という言葉より使いたいのです。というのは、民主主義という言葉は、政治の世界であまりにも使われ過ぎているからです。たとえば、独裁体制の下にありながら、学校では生徒にタイ国は自由民主主義の国だとくり返し教えてきました。もう一つの理由は、民主主義というものは、正道の原則に拠らなければ完全でないし、またひ弱なものだということです。もし私たちが多数による統治をおこなったとしても、その多数派に対し不満がおこった時、少数派が自分たちの意見を表現する機会が与えられなければなりません。これが正道というものです。

民衆正道の原則というのは幅広い原則で、二つの中心的要素からなっています。即ち、第一の要素は、他の人の自由と権利を犯さない範囲内で各人の自由と権利を行使する(人権に関する国際連合の文書に従って定義)。第二の要素は、自己が生活する社会の運命を左右する決定に参加する。この場合各人は地位、性別、出身にかかわらず平等の権利義務を有すること。

自由と政治参加の原則はヨーロッパ、アメリカの西欧諸国だけの原則でもなければ、富裕な国だけの原則でもありません。この原則は全ての国家の正道に合致しているのです。たとえば「タイ」という言葉は、自由あるいは主人公という意味に他なりません。政治的自由をもたないタイ人は完全にタイとは言えないのです。また仏教の原則に従って仏事(サンガカム)をおこなうことは、種々の行為に参加することです。したがって自由と参加は、全世界に受け容れられる正しい原則であって、タイのような発展途上国では使えない、西欧世界だけのものということではありません。

私たちが自由と参加というこの原則に拠った時、民衆正道の形態はどのようなものになるのでしょうか。これは必ずしもヨーロッパ、アメリカをモデルにする必要はありません。タイ社会に適合した民衆正道の形態を考察するのは、タイ人政治学者の任務です。彼らがこの任務を成し遂げることができるには、学問の自由を必要とします。

統治において民衆正道がゆきわたっている国では、どのような政治的主義、即ち共産主義、社会主義、自由主義、保守主義、極左、極右のどれであろうと活動することができます。しかしこれには次の二条件がともないます。

(イ) 自分と異なる考えをもつ人を認める。即ち複数の政党を認めること。

(ロ) ロやペン、あるいは暴力を使って他の人や他の人の思想を破壊しないということが常に民法、刑法の原則であること。

「民衆正道とは正道が力であるということで力が正道であるということではない。民衆正道が実現されている国家は法と秩序をもたねばならず、あるグループの恣意によって統治されるべきではない」(同上書六一頁)。

もし私たちが現政権の人々が毎日語っていることを聞けば、力が正道であるという顕著な例を見いだすでしょう。たとえば彼らはタイの新聞は適正な意見を出版する自由をもっていると言います。ではこれが適正な意見であるかどうかきめる人は誰でしょうか。力をもっている人に他なりません。もし新聞が権力者と相反する意見を掲載したならば、彼らは違法だと宣告するでしょう。このよう

なことができるのは、彼らが独占している権力を使って国家を支配し、彼らが考えることが正しいのだとして、人民に押しつけているからです。

「民衆正道は国民にかかっている。もし大部分の国民が民衆正道を欲しないなら、誰かがこれを与えたとしてもやってゆくことはできない。したがって始まりも終りもタイ国民（その権利と自由）次第なのである」（同上書六一頁）。

民衆正道が支配する社会では、私たちは次のようなものの間の格差や相違を是正しなければなりません。つまり、政府と人民、官僚と国民、女性と男性、金持と貧乏人、肥沃な地域とやせた地域、就学の機会の有無、保健衛生面での格差等々。これらの格差や相違は政治主義や何らかの主義主張から発生したものではありません。これらの問題の平和的是正に貢献するのは、道徳、親切、一体性、調和協調、貧困層の代表としての代議士の存在、出身や地位を問わず各人に対する人間としての尊厳の尊重、相互援助のための団結の自由な存在なのです。

「平和的方法以外に民衆正道を獲得する方法はない。武力を使って脅迫殺害し、民衆正道をたとえ獲得したとしても、それは一時的なもので永続的民衆正道を維持できない。どちらか一方が武力を使えば、敗れた方も武力で対抗しようとするであろう。双方が武力を用いて衝突したなら、どのようにして民衆正道が維持できるというのか」（同上書五九―六〇頁）。

一九七六年一〇月六日及びその後の事件は、従来平和的方法に関心を持ってきた人たち多数に平和的方法を放棄させました。彼らは「われわれが平和的方法を使ってきたので、奴等に殺された」といって平和的方法は自殺に等しいと言います。彼らの発言は苦難を経た人たちのものですから、

理解し難いものではありません。しかし、彼らは暴力によって闘争すれば、たとえ権力を獲得したとしても権力維持のために武力を使わねばならず、平和は達成できないということを考えてはいません。また武力を使って闘争すると、戦闘に関係しないより多くの中間派の人々を苦しめることになること、たとえばヴェトナムやカンボジアの農民が数百万人も無駄死にし、何十万もの家族が貧民になって流浪していることを考えの中に入れてはいないのです。

平和的方法に対しては、別の批判もあります。即ち相手側が武力を使う限り、平和的方法で達成される機会はこないという批判です。

「民衆正道のための平和的方法は、武力を持った相手側に対して使う時、成功できるのか否か確信できない。そしてたとえ成功したとしても、ガンディーがイギリスに対してやったように長い時間を必要とするだろう。素手で武力に対抗する以上、武力で対抗する場合よりもはるかに苦難を受け、忍耐を続け、勇敢であることが必要なのである。」

「平和的方法では民衆正道をもたらすことができないとわれわれがあわてて失望してしまったり、（実際には、先に、失望しなくてもよいのに）成功できないとあきらめてしまったりするなら、自由のために活動し、話し、筆をとることは疑問となるにちがいない。私自身は、成功の望みがないからといって筆をおさえたり、話をしないということはできない。それをやめたら息がとまるような思いをするだけだ」（同上書六〇頁）。

「プェイ博士が平和的方法による民衆正道やケム・ジェンジィン氏の手紙を書いた時、バカだとかハネ上がりだとか言われ、何の成果も上がらないだろうと考えられた。これに対してはその通り

だと答えておこう。いやそれ以上に、外国における平和的方法では、多くの人が逮捕、虐待、さらには殺害されている。しかし彼らはこれを栄光として続けているのだ。だからバカやハネ上りと言われ、虐待されたりするのも平和的方法の一部と言える」（同上書七二頁）。

私が五年前に書いたこの本の六二頁、六四頁で、私は平和的方法を二つの期間に分けています。つまり長期的なものと当面のものとにです。要約して言うと、常に自由と権利を要求して書き、話すように努め、各人は忠実に尊敬と信頼を得るように努め、改良より防御の方がやさしいのですから民衆正道が今以上に悪くならないようにし、相互に堅く団結し、忍耐する。これが長期的方法です。一方当面の方法は、時と場所によって変わります。しかし同じ考えをもつメンバー間の関係を維持し、自由と権利擁護の機会を見つけるために状況と事実を探究し、誰か害を受ける者があれば相互に助けあい、民衆正道について書き、要求することを絶えずすすめるべきです。

民衆正道の平和に関心をもつ人、特にタイにいる人は困難な状況にあります。というのは武力を用いて殺し合う連中の中間に位置しているからです。独裁政権側は、私たちを彼らの政策に反する活動をしているものと見るでしょう。たとえ私たちが平和的方法を用いるのだということを明確に示しても、彼らは私たちを敵とみなし、私たちを迫害し逮捕するでしょう。一方共産側は、私たちを都市にいて政府側と協力するものだと見て信頼しないでしょう。このように危険は西方から加わります。特別に慎重になる必要があるのです。このことは、活動にさらに困難を加えるでしょう。またさらに悪いことには、「中間派」の人々が私たちを共産勢力だと考えて、「手でこがないだけでなく、足を水中に入れて進行を妨げている」と疑うことです。

(六)

タイ人の選択には、二つの道があります。第一の道は、他人を戦わせて内戦にし、長期化させたまま放置し、数万数十万の人が苦しんでも仕方がない。誰がどのように統治するか、誰がだまし取るかは自分には関係ない。誰かが逮捕拷問されるのはその人の運がなかったからだ。戦争になって誰がどのくらい失うか、またその後の権力を誰が握るかは運次第だ。自分だけが安全であればそれでよいという道です。

第二の道は、苦しめられないようにあらゆる所で防御し、防御できない場合はその苦しみを最小にするよう努力することです。軍・警察であれ文民であれ、官僚であれ国民であれ、共産主義者、社会主義者、自由主義者、保守主義者の別なく、彼らはタイで生存しなければならず、子孫もタイ人である人々です。正しい道は相互の協調を見つけることです。現在においては協調の道を見いだすことは不可能です。というのは両側がそれぞれ強力に対峙しているのですから。矜持と勇気をもった人でも中間にある人は巻きこまれてしまいます。しかし、協調の道と方法を見いださねばなりません。協調とはともに応じ合い、承認し合い、権利と自由を尊重し合い、真実を尊重することです。一時的な利益のために中傷したり、曲解したり、欺いたりしないことです。言いかえれば、公衆の原則を支持し、平和的方法によって民衆正道をすすめる努力をすることです。もし多数のタイ人が、第二の道を選択するのであれば、公然と第二の道を選択することを発表しなければなりません。そうしなければタイ社会はより安易な道である第一の道を行くことになるでしょう。

第７章

政治犯の逮捕



笑顔を見せるスタムＮＳＣＴ書
記長とスラチャート執行委員

《解　説》

タイ政治犯の逮捕

タイ政治犯救援署名実行委員会

三〇七三名の逮捕――一〇月六日『血の水曜日』

一九七六年一〇月六日「血の水曜日」――この日、軍、警察、王室、右派勢力は、タマサート大学に結集し、暴君タノーム帰国と軍部独裁の復活に激しく抗議していた学生・民衆二〇〇名以上を血に飢えたように虐殺した。そしてタマサート大構内、あるいは大学前のサナームルワン、背後を流れるチャオプラヤー川を若い血で染めたその同じ日に、彼らは三〇七三名に及ぶ学生・民衆を、不敬罪をはじめとする九つの容疑(国家統治改革団命令第1号及び付録を参照)で即日逮捕した。

逮捕された人々のうち二七名は、リンチや軍・警察の虐待によるひどい負傷で警察病院等にただちに収容されたが、残りの人々はバーンケン臨時刑務所をはじめとする各地の収容所に勾留された。

その内訳は、バーンケン臨時刑務所一九〇二名(男一二七九、女六二三)、チョンブリー警察学校二六八名、ナコンパトゥム警察学校七七七名(男七五八、女一九)、チャナソンクラーム、タオプーン、ナンラーン、バーンケン各警察署に計九九名(男八〇、女一九)である(以上タイ字紙『デイリー・タイムズ』。一方三月一日の当局発表による一〇月六日の逮捕者総数は三二二六名であり、依然正確な数字はつかめて

いない。『バンコク・ポスト』紙三月二日)。

保釈金、一人当たり年間国民所得の六倍！

六日に九つの容疑で逮捕した後、当局は八日から「保釈」の手続きを開始した。当局がこのように早々と保釈に踏み切った理由は、多数の学生・民衆を勾留するだけのスペースがなかったことと、「血の水曜日」の弾圧に動員した軍・警察への特別手当をただちに捻出する必要があったからである。

それはともかく、八日以降の保釈金支払いによって、三〇七〇名余の逮捕者のうち二五〇〇名近くが釈放された。もっとも保釈金の額は、最低四五万円(現金)から最高一五〇万円(土地等不動産の場合)に及んだ。この四五万円という額は、タイでは一人当たり国民所得の六倍に相当し、高校卒の警官の初任給一万二〇〇〇円の四〇倍弱にあたる。そのため、逮捕者をだした家では親戚から金をかき集めたり、土地を売り払って金をつくらざるをえない状況に追い込まれた。しかしそれでも保釈金の支払える人々はまだましな方で、貧乏な家庭の逮捕者は、当局が保釈を禁じた「中核人物」とともに引き続き自由を拘束される身となった。

一方、保釈金が払えないまま残された家族の生活も、逮捕者に劣らず悲惨だった(六日の逮捕者の中には、学生だけではなく労働者、農民も相当数含まれていた)。たとえばバンコクでアイスクリームを売って暮らしを立てていたマーイさんの一家では、柱になっていた夫が捕った後、ただちに生活が窮迫した。奥さんは当初借金でくいつないでいたが、そのうち借金の途も断たれ、彼女は長女を姉さんの家に預け、次女を連れて昔働いていたことのあるバンコク近県のサトウキビ農園に日雇い労

働者として働きにでかけることになった。その日暮らしの彼女たちにとっては、保釈金の支払いどころか、バンコクにいる夫に面会することもままならぬのが現状である。

一〇月以降相当数が釈放された後も引き続き勾留、取調べを受けていた人々のうち、三一一名が今年の三月に証拠不十分、あるいは一八歳未満の理由で釈放され、結局三月末現在で「10月6日事件」に関連して最終的に起訴された学生・民衆の数は七五名であった(一九七七年九月現在一八名)。

その内訳は次のとおりである。

1 不敬罪 スタム(タイ全国学生センター書記長)、スラチャート(チュラロンコーン大学自治会副委員長)、プラパン(プラチョーム工業大学院生自治会委員長)、アピナン(七六年一〇月四日にタマサート大で首吊り寸劇を演じ、彼の顔のつくり方が皇太子に酷似していると強弁され、「血の水曜日」の直接の引き金になった。しかしこの「皇太子侮辱寸劇」事件は、明らかに警察と右派がタマサート大に結集していた学生・民衆を弾圧するためにデッチ上げた事件である)、アヌポン(タマサート大演劇部部長、寸劇の責任者)、ブンチャート(寸劇の時、アピナンの首の綱をひっぱる役目を果たした。今年の三月二二日に報道写真を根拠に起訴)、ウィロートの計七名。このうちブンチャートを除く六名全員は、同時に共産主義の容疑もかけられている。

2 共産主義の容疑 プラユーン(タイ全国学生センター副書記長)他計一六名。

3 騒擾罪等刑法上の容疑 アーロム(タイ全国労働会議執行委)他計五二名。

タイ全土で「赤狩り」開始！——「社会にとって危険な人物」

一方「10月6日」以降も、サンガット＝ターニン政権は、タイ全土において狂気じみた「赤狩り」を展開した。たとえばチェンマイでは、一〇月一六日の朝、県警が六〇名の警官を動員して市全体をくまなく捜査し、チェンマイ師範学校の元自治会委員長スガンヤ（女性）、チェンマイ大の職員組合の人等計九名を逮捕した。このような「赤狩り」は「10月6日」以降連日のようにおこなわれ、逮捕者総数が現在どのくらいに達しているかはまったく不明であるが、「社会に奉仕する宗教グループ」の最近の発表によると逮捕総数は八〇〇〇名、そのうち少なくとも二〇〇〇名は今も勾留中といわれる。

「10月6日」以降の逮捕の法的根拠になっているのは、一〇月一三日に国家統治改革団が出した命令第22号「社会にとって危険な人物」と共産主義の容疑（国家統治改革団命令第8号、第29号等）の二つである。このうち前者の第22号は捜査官に令状なしによる家宅捜査と逮捕の権限を与えており、また勾留期間も、最初の三〇日間以降何度かの更新（計一八〇日）を認めている。

第22号のいう「社会にとって危険な人物」が具体的に何を指すのか、当局ははっきりとした規準を示していない。しかしこの命令にもとづいて逮捕されたのは、たとえば地方で医療普及活動に従事していたウィチャイ先生、バンコクのスラムで子供たちに読み書きを教えていたアト先生、進歩的週刊紙で知られる『ディトゥラット』や『プラチャーチャート』などに寄稿していたジャーナリスト、繊維労働組合の活動家であるソムマイ、ウドン県地区の教師連合のメンバーであったソンギット先生、それにタイ社会党、タイ全国学生センターのメンバー等々である。つまり七三年一〇月以来三年間、タイの真の独立・民主主義・正義を求める闘いの先頭に立ってきた人々が今逮捕されているのである。

「社会にとって危険な人物」とは、要するに「現在の反動勢力にとって不都合かつ危険とみなしうる人物」を指しているのだ。しかし本当に社会に危害を加えているのは誰なのか？

拘置所の実態

「10月6日」直後には、バンコク及びその近郊の刑務所は、「血の水曜日事件」の逮捕者であふれた。たとえばバンコクのバーンケン刑務所ではわずか四九平方メートルの部屋に八〇名の人々が詰めこまれ、また同刑務所に勾留されていた女子学生は「一つの房に二二五人の人々がはいっており、そこでは立ったままで眠らなければならないのです」と語ったほどである。

こうした拘置所の不足状況に直面して、政府は全国五ヶ所（バンコクの北部ランシットとアユタヤー、東北部のコーンケーン、北部のラムパーン、南部のナコンスィータンマラート）に拘置所の新設を計画し、建設費と維持管理費を含む六二〇〇万バーツの予算を先頃承認した。

逮捕当初には警官から暴行を受けた女子学生も何人かいたといわれる。さらに当局は、拘置所内での拷問は絶対にないとくり返し強調したが、ワイヤーをゴムで包んだムチで殴りつけたり、電気ショックを与えたり、水滴を長時間額にたらしたりといった類の行為がとくにＮＳＣＴの指導部に対しておこなわれた。こうした警察の暴行は地方になるほどひどくなっていると伝えられている。

ところで拘置所内での生活は、現在のところほとんど知らされていない。わずかに「社会に奉仕する宗教グループ」が勾留者と若干のコンタクトを保っている程度で、それすらも厳しい監視の下

におかれている。三月末に起訴された七五名の人々、あるいは一〇月六日以降逮捕された人々が今どのような生活を送っているのかは、まったく不明といってよい。

共産主義の容疑――弁護士なき裁判

「10月6日」に逮捕、勾留された人々のうち二二名は、共産主義の容疑で起訴された。また「10月6日」以降も共産主義の容疑で次々と逮捕されている。

ところでいったん共産主義の容疑がかけられると、被告の法的保護はなきに等しくなる。たとえば共産主義関係の場合には軍事裁判所で一方的に審理され、一度判決が下されると、控訴・上告の道は完全に断たれる。また共産主義の容疑者は、命令第22号、及び軍事裁判所法第22条に見られるように弁護士を選任することすらできない。そしてこの共産主義者であるか否かの判断は、まったく現政権の恣意的判断にかかっているのだ。そのためスタムNSCT書記長等は、自分たちで法律関係の本を読んで、自分で自分の身を弁護するための準備を今獄中ですすめているといわれる（裁判は一九七七年九月五日から開始された）。

いったい誰が誰を裁くのか！

一九七三年一〇月一四日の「血の日曜日」に、七六名の学生・民衆を虐殺し、また四〇〇名以上の行方不明者を出した張本人である独裁者タノーム、プラパート。汚職や売国的行為によって国家予算の実に三分の一に及ぶ黒い財産を一代で築き上げた彼らは、二年以上の審理の結果、というよ

り、「10月6日」の軍事クーデターによって、七六年一二月五日に最終的に不起訴処分になった。

一方、この三年間米軍の撤退を求め、最低賃金の引上に奔走し、土地の公正なる再分配のために起ち上がった学生・労働者・農民は、「社会にとって危険な人物」あるいは「共産主義者」という理由で次々と追われ、今逮捕されている。

「勇敢で犠牲をいとわない闘いを展開した『10月6日』の英雄たちの偉大な行動は、タイ国民の心とタイ民主主義、祖国の独立を求める闘いの歴史の中に永く書き留められ、讃えられるであろう。われわれは『10月6日』に殺された英雄たちの遺族に対して心から敬意と深甚なる哀悼の意を表したい。そしてわれわれは断固として、『10月6日』に血を流した英雄たちに続き、彼らの精神と行動を最後まで貫き、流された血への復讐をやり遂げなければならない。

流された血は血で償われなければならないのだ！

悪辣な殺人者たちは、歴史によって、また人民によって十字架にかけられ審判されるであろう。人民は永久に彼らを呪詛し、非難するであろう」（タイ繊維労働者のストライキ及びドゥシタニ・ホテルのストライキを指導した戦闘的労働者タードブーム、プラシット両名による一九七六年一一月一〇日の声明）。

現在のサンガット＝ターニン政権には彼らを裁く資格はない。むしろ彼らこそが近い将来裁かれるであろう。

（注）タイ政治犯救援署名実行委員会『セーリーパープ――タイ政治犯に自由を』一九七六年五月より。編集委員会の方で若干加筆訂正をおこなった。

資料45

獄中からの手紙

チャッチャワン・セアダンさんの手紙

私は一九七六年一〇月六日に逮捕され、起訴が延期されたまま未だ獄中にいます。ただ家族のことをとても心配しています。私はバンコクのある自動車修理工場で長い間働いてきました。両親はピッサヌローク県で大変貧しい生活を送っておりました。父は米を運ぶ労働者で、母は小さな店を経営していましたが、年もとり仕事ができなくなったので一九七五年に私は両親をバンコクに呼びよせました。バンコクで両親は菓子売りをし、私も働いていたので生活は以前に比べると少しは良くなりました。しかし五、六ヶ月すると父は脳の病気で倒れ、母が面倒を見ることになり、菓子売りも止めなければならず、まだ幼い弟や妹をかかえ、私は五人の家族を養わなければならなくなりました。月給の一五〇〇バーツ（約二万二五〇〇円）のうち三〇〇バーツ（約四五〇〇円）の家賃を払いながら、なんとか生活をたてていました。しかし私が逮捕されて以来、母は家賃を払うことも食べ物を買うことさえもできずにいます。家主は家族の者に家を出るように言ってきましたが、引越しの費用もなく、またいつ私が釈放されるのかもわからず家族は大変な窮地に立たされているのです。母は現在五〇歳で父は六三歳です。田舎にいた時も母には大変苦労をさせましたし、私がバンコクに両親を呼んだために、私が逮捕された後もっと苦しいめに会わせることになりました。私は牢獄で食事をするごとに、家族はどうやって食べているのだろうかと思うととても心が痛むのです。私が書いてきたことは全て事実です。家族は現在、トンブリーのクロンサン、サムレー、チャラーソンナコン通り二一一五番の借り家に住んでいます。母の名前はナムタン・レックミチャイです。どうかあなた方のグループが私の家族を助けてくれることをお願いします。この手紙がどうかあなた方のグループに届きますように。下手な文章を許して下さい。

チャッチャワン・セアダンより

バーンケン警察学校の臨時収容所四階四〇一号室にて

プラニー・バンナコーンさんの手紙

私はアユタヤー県セナ郡ランチャラケー行政村第八区九番で生まれました。父はシリ、母はチャンといいます。兄弟は一〇人で私は四番目です。寺の小学校の四年を終えただけです。家庭は大変貧乏で、両親は田舎で米運びと数頭のブタを飼うだけで生計をたてています。そのため私はプラプラデーンの繊維工場に働きにでました。兄や姉たちは自分の家のことで精いっぱいで私が残りの家族の面倒をみなければならないのです。今、誰も家族を助けてくれる人はいません。どうかあなた方「社会に奉仕する宗教グループ」の援助をお願いいたします。両親ももう年をとり、残りの六人の弟妹のうち四人は小学生であと二人はまだ学校へもはいっていません。もちろん私の保釈金を払うお金などありません。母は今、心臓病にかかっています。高齢の父だけの力ではとても家族を食

べさせることはできません。私の仮釈放のことも考えて下さるようあなた方のグループにお願いするためこの手紙を書きました。どうか助けて下さい。

プラニー・バンナコーンより

シーチャン・バンクントットさんとマライ・バンクントットさんの手紙

私たちの出身地は、ナコンラーチャシーマー県ダンクントッド郡ノンブアタキャット行政村ノンウィアン村第八区一七番です。父の名前はトゥー、母はエァンです。兄弟五人中私は二番目で、マライは三番目です。私たちが小さい頃に両親はなくなりそのため私たち兄弟のうち二人はおばあさんに育てられ、末の子は別の人に育てられ、私と兄はおじさんの所で育てられました。私は二二歳までおじのところで畑仕事を手伝ってきました。ところが、おばあさんが年をとり子供の面倒も見られなくなり、四番目の弟も病気にかかり、家には薬を買う金も食物を買う金もなくなってしまったのです。私はそれを見て、妹のマライを連れてバンコクへ出稼ぎにきました。私たちはいとこが住むプラトゥムワン郡ロンムアン行政村チャラットウォン通りの一五六の三二番地に住んでいました。私とマライはいとこの手伝いをしながら仕事を探していましたが、まだ仕事が見つからないうちに逮捕されてしまったのです。

私たちシーチャン及びマライは、あなた方「社会に奉仕する宗教グループ」の助けをお願いします。

マーイ・サワーンチャンさんの手紙

私が生まれたのはバンコクに近いサムットサーコン県ガトゥムベーン郡のある村でした。家は大変粗末で、たった一つの部屋しかなく、この部屋は時に応じて台所になったり寝室になったりしていました。大切な家具などもちろんなく、水ガメと何羽かのにわとりが財産でした。

私は現在二〇歳を少し越えていますが、一〇歳の時に職を求めて家を出ました。あちこち渡り歩いた後、私はガーンチャナブリー県に行き、ある砂糖キビ農場に雇われました。一日の収入は二五バーツ（約三七五円）でした。私は農場で知り合ったチュアイと結婚し、今では二人の娘――五歳の長女と二歳になる次女――がいます。

結婚した後、私は家族とともにバンコクへやってきました。私は職をかえアイスクリームを売って生計をたてるようになりました。くらしの方は相変わらず苦しかったけれど一所懸命に働きました。そして「10月6日」の日、私は久しぶりにガトゥムベーン郡の故郷へ帰省しようと思いましたが、その前にちょっとタマサート大構内の集会を見に行きました。そしてそのまま集会に参加していた学生・民衆とともに逮捕されてしまったのです。

現在、私は家族のことを大変心配しています。前に述べたように、家族のくらしは全て私の肩にかかっていたからです。私が逮捕されたため一家の収入源はなくなり、妻のチュアイは次女を連れて再びガーンチャナブリーの砂糖キビ農場に戻りそこで働くようになりました。また長女は姉の家に預けましたが、彼女の家も決して裕福だったわけではありません。私の保釈金を払える人は誰もいませんでした（保釈金は四五万―一五〇万円、のち一五万―三〇万円に引き下げられた）。妻のチュアイ

と姉のソムクアンは何度かバーンケンの刑務所に面会に来ましたが、農場につとめているチュアイにとって仕事を一日休んで面会にくることは大変なことでした。今、私の家族がどんな苦境に立っているかをわかっていただきたいと思います。

（注）以上の手紙は、政治犯救援の活動をおこなっている「社会に奉仕する宗教グループ」に送られてきたものである。

スラチャートNSCT執行委員の手紙

もう四、五日たつと年が明ける。しかしそのことは現実が変わることを意味するわけではない。確かに日も月も年も刻々と変わってきた。だがふつうの人々の生活は——時間の移り変わりを考えないなら——ずっと同じだった。彼らの生活条件の改善は、年の変わりとは何の関係もなかった。

事実、彼らは予想もしない状況のため、ますます重荷を背負うことになったように思われる。経済用語で言えば「消費者は起こったことを引受けざるをえない」のだ。彼らにとって新年とは、ただ彼らがまたこの一年、差別され惨めな生活を送らなければならないことを意味するだけなのだ。

本当の新年とは、全ての人類が新しい人生、新しい生活、幸福を享受できるということだろう。これこそわれわれが求めている新年なのだ。われわれはそれを実現しなければならない。

友よ！　新しい年を迎えよう！　われわれがひとたび決心し、強固にそして忍耐強くやれば、新しい年は必ずやって来る。それはむつかしいことだろうか。否！　「穏やかな海は、立派な船乗りをつくり上げない」ということわざ通り、新しい人生、生活、幸福をめざす闘いはわれわれを十分

きたえてくれるだろう。

そうだ。新しい年はわれわれとともにある。決意と鉄の意志さえあれば、われわれの崇高な目的は実現することができるのだ。よりよい社会は手の届かないところにあるのではない。多くの国の人民が彼らの目標を達成したではないか。われわれは彼らとどこが違うというのか。彼らは決してそれを天から授けられたのではない。

もちろん、このような課題に犠牲はつきものだ。われわれは人々の骨からレンガを焼き、血と涙からセメントをつくらねばならないだろう。また額に汗して働かねばならないだろう。あるものは苦難に耐える必要があるかもしれない。しかしそれは各人が担う使命、気高い歴史的使命なのだ。誇りをもってわれわれに与えられた課題をやろうではないか。

今、年の瀬に接し、新年がいつもの如くやってくる時に際し、わたしはみんなに挨拶する言葉はほとんどない。ただ人民のよき子供のように「価値ある人生を、偉大なる人生を生きてほしい。誇りある死に方をしてほしい」と望むだけである。

われわれに力を！

一九七六年一二月二六日

スラチャート・バムルンスック

（注）スラチャートはチュラロンコーン大自治会副委員長でかつNSCTの執行委員の一人でもある。彼はNSCTの仲間たちとともに一〇月六日の朝、逮捕された。

屈託のない端正な顔立ちをしたスラチャートは、他のNSCTのリーダーたちとともにバーンクワーン（別名ノンブリー特別刑務所）にクーデター以後監禁されている。彼らは各々別個に独房に入れられた。

なお、スラチャートは昨年一二月の半ばに拷問によって殺されたという噂が流れた。
確認された情報によると、彼はふたとおりの方法で拷問された。一つは、性器に電気ショックを与えるやり方、もう一つは鉄のワイヤーをゴムでくるんだもので殴るやり方である。
刑務所は彼の手紙が外に出るのを許可したが、これは明らかにスラチャートが殺されたという噂を否定するためになされたものだった。彼の手紙には一二月二八日付「認可」というスタンプが押されている。

スタムNSCT書記長の手紙

友よ！
ほの暗い光がほのかに獄舎を照らす
夜の寒さに私はふと目覚め、毛布を広げて側らで寝入っている友人にそれをかける
君たちのことを想うと、私の心は安まる

ここにきてから、いろんな苦労があった
だがはっきり言おう
バーンクワーン、それは外にいる人々の眼にはいかにも残酷な場所に見えるかもしれない
しかし、われわれは別の場所で疲れ果てた末、ここへやってきた
だからバーンクワーンはわれわれに新たに屈辱を加えたり傷つけたりはしなかった
好意にみちた眼差し、陽気な言葉がわれわれを暖かく迎えてくれた

ここは、私や仲間にとって十分のスペースがある
多くの人々が気を遣ってくれた。元気か、意気銷沈していないか

友よ！
私がまだ自由の身だった頃、お坊さんから話を聴いた
彼は母親に対する感謝について話をしてくれた
私は感動した
話というのはこうだ
新しい生命は、母親の苦痛と苦しみの中から生まれてくる
大変な苦痛の中で母親が血と涙を流さなければ
新しい生命はこの世の中に生まれてこないのだ
それを聴いて私は涙を流した
彼は正しかった！

一九七七年一月一三日

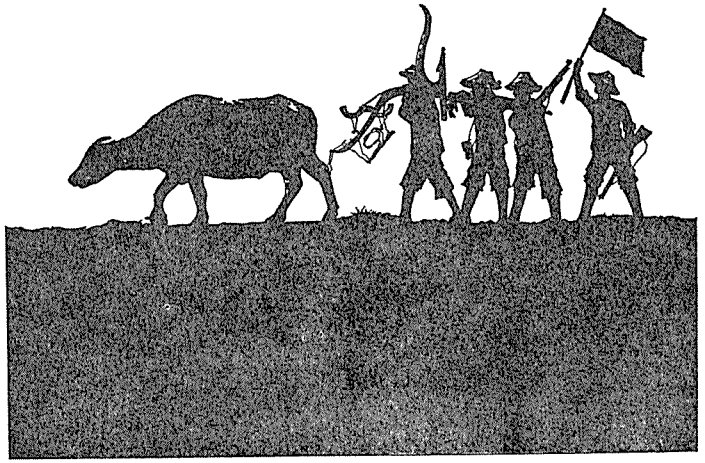
スタム・セーンプラトゥーム

（注）スタムはNSCTの書記長、一〇月六日の朝、他の仲間たちとともに逮捕された。彼はバーンクワーン刑務所に拘禁され、スラチャートと同じ拷問を受けた。この詩的手紙は検閲され、表には一月一四日付「認可」という監獄局のスタンプが押してあった。

第8章

森の闘い

——武装闘争宣言



資料46　タイ政治犯救援のポスター
（オーストラリアの救援グループがつくったもの）



《解　説》

一〇月六日、タマサート大学で流された若い人々の夥しい血は、一九七三年一〇月一四日以来、独立・民主主義・正義を求めて闘ってきたタイの学生・民衆に一つの大きな教訓を残すことになった。それはもはや平和的手段による闘争では真の民主主義を実現しえないこと、新しいタイを建設するためには妥協のない断固たる武装闘争しか道がないことを彼らにはっきり悟らせたのである。タイ史上最も残虐な事件と呼ばれた一〇月六日の弾圧は、彼らが王室をも含む支配階級に対して多少なりとも抱いていた幻想を完全に打ち砕いてしまった。そして一〇月六日以降の戒厳令体制と「赤狩り」の開始は、一九七三年以来さまざまの階層・分野で平和的闘争を展開していた多くの人々を、地下や国外に追いやり、あるいは沈黙と忍従の日々へ追いやる結果となった（資料48）。しかしそのうち少なからざる人々、とりわけこの三年間戦闘的な闘いをすすめてきた組織、個人は森の中にはいっていった。そして彼らはタイ共産党の地下放送である『タイ人民の声』放送を通じて次々と「武装闘争宣言」を発表し、六〇年代半ばから始まっていた人民戦争の隊列に加わっていった。

最初に武装闘争宣言をおこなったのは、タイ社会党である（資料49）。ついで一〇月三〇日には、一〇月一四日付——あの記念すべき「10・14」の三周年の日——の宣言文を元学生活動家たちが連名で発表した。この宣言にはセクサン・プラサートグン（「10・14運動」を指導、その後タイ全国独立学生連盟、全国反独裁戦線の議長、全国労働者連絡センター書記長）、ティラユット・ブンミー（一九七二―七三年タイ全国学生センター書記長、一九七三年憲法即時要求で逮捕。「10・14運動」の指導以後は「ポチョ・ポ

チョ」を結成。その他ナーサーイ村等の虐殺やマヤグエス号事件などの反米闘争を指導。セクサンとともに全国反独裁戦線で活躍する)、ウェーン・トーチラーガーン(一九七四年マヒドン大学生自治会委員長、全国反独裁戦線執行委)、サマーン・ルアットワォンハット(資料55)、プリーディー・ブンスー(一九七三年憲法要求で逮捕。「ポチョ・ポチョ」の執行委、反米闘争を指導)、チラナン・ピットゥラプリーチャー(ウィタヤーサート女子学校卒。タイ女性解放運動を指導する。「10・14運動」の女性闘士の一人)、ウィサー・カンタップ(一九七三年六月、ラームカムヘーン大の事件で、さらに一〇月には憲法要求運動で逮捕。「生きるための芸術」運動を指導する。音楽家)が各々名前を連らねていた。

さらに一九七六年一一月二〇日には、一九七四年の繊維労働者の大ストライキ、一九七五年のドゥシタニ・ホテルのストライキ等を指導し、同時に戦闘的労働者たちの全国組織である全国労働者連絡センターを設立したタードプームとプラシットの両名が声明を発表した(資料50)。そして翌一九七七年には、まず一月二日にタイ全国学生センターが声明を発表し(資料53)、以後一月一五日にはタイ教師の権利を守るセンターが、二月一八日にはタイ社会主義統一戦線(党)が、二月一二日には南タイ・ムスリム学生指導者のナレットとサマーンが(資料55)、相次いで声明を出した。また三月一八日には、一九七五年七月三〇日暗殺された北タイ農民連盟委員長インターの後を受け継いだスィートンがタイ全国農民連盟を代表して武闘宣言をおこない(資料56)、五月二九日にはタイ・ジャーナリストを代表するスィーが言論統制、王室批判を含む声明を(資料57)、六月五日には新文化運動の一翼を担ってきた音楽家グループ「ガンマーチョン」が、六月一三日には良心的教師を代表してチョンティラー女史が、各々声明を発表した。

そして一九七七年九月二六—二八日には、タイ共産党、タイ社会党、社会主義統一戦線党、さらに労働者代表としてタードプーム、農民代表としてスィートン、元学生活動家代表としてティラユット、それにスィーを加えた広範な統一戦線組織である「民主愛国勢力連絡委員会(カナ・ガマガーン・プラサーン・ンガーン・ガムラン・ラック・チャート・ラック・プラチャーティパタイ)」が森の中に設立された。

こうした広範な分野に及ぶ武装闘争宣言は、次の二つの点できわめて重要であったと思われる。第一はタイ社会党、全国労働者連絡センター、タイ全国農民連盟、タイ全国学生センター等、一九七三年以降の闘争の主要な担い手であった諸組織が、タイ共産党の指導する人民武装勢力に加わったことである。とりわけ都市部の運動に強い影響力をもっていたタイ社会党がただちに武闘宣言を発表し、その後一九七七年四月六日に常任委員会を設置、四項目にわたる当面の政策を発表したことは重要であった。一方タイ共産党も二月二八日、ちょうど一年前に暗殺されたタイ社会党書記長のブンサノーン博士を追悼する集会を開き、四月六日のタイ社会党の綱領に対してもただちにこれを歓迎する中央委員会決定を伝えた。こうした動きがタイ共産党の呼びかける統一戦線の拡大と強化を大きく促進していることは明らかであろう。

さて第二の意義は、一連の宣言がバンコクその他都市に在住する学生・知識人に与えた測り知れないインパクトである。現在『タイ人民の声』放送に最も熱心に耳を傾けているのが国内外の学生・知識人であることは想像に難くない。ペンやマイクを奪われた彼らは、王室・軍による強権的支配の下で現在沈黙を余儀なくされているが、しかし彼らは『タイ人民の声』放送をつうじて森の闘

いを知り、勇気づけられ、自らの将来の選択を迫られている。

一方新たな事態を迎えたタイ共産党は、「10・6クーデター」の翌日に、タマサート大の大虐殺と独裁制復活を激しく非難する声明を発表し（資料47）、ついで一一月二四日には一連の武闘宣言を受けて、広範な統一戦線を呼びかける声明を放送した（資料51）。さらに一二月一日には、一〇年ぶりに新綱領が発表された。もっともこの党創立三四周年声明は、一九六八年の一〇大綱領と比べた場合、前文と後文こそ情勢の変化に応じて大幅に変わっているが、綱領そのものにはほとんど変更が加えられていない。その意味でこの声明は、タイ共産党の従来の方針を再確認し、タイ国内外に改めてそれを知らしめるのが目的であったと考えられる（資料52）。

ところでタイ共産党が武装闘争の最初の口火を切ったのは一九六五年夏のことであった。もっともそれに先立つ一九五一年の第二回党代表大会で、彼らはすでに毛沢東思想にもとづく武装闘争方式と農村による都市の包囲という戦略を決議していた。しかしその翌年の一九五二年に反共法が実施され、さらに一九五七年以後サリットが徹底した共産主義弾圧政策を遂行したことにより、党の活動は一時的に沈滞を余儀なくされた。タイ共産党が再びその活動を開始するには、一九六〇年のラオス危機とそれ以降のインドシナ情勢の変化を俟たねばならなかったのである。一九六二年三月、五八年以来の沈滞を破って『タイ人民の声』放送が第一声を放った。以後六四年一一月には「タイ独立運動」が、翌六五年一月には「タイ愛国戦線」が各々設立され、六五年八月にはタイ東北部のナコンパノム県で最初の武装闘争ののろしがあげられた。その後タイ共産党は徐々に攻撃を活発化させ、一九六九年一月一日にはタイ人民解放軍最高司令部の名前でタイ人民解放軍の成立が公式に

宣言され、現在に至っている。一方タイ共産党もその一ヶ月前の一九六八年一二月一日に党創立二八周年声明として「タイ共産党の当面の政策」を発表し、アメリカ帝国主義の駆逐と独裁政権打倒による人民政府の樹立を第一とする一〇項目の綱領を明らかにした。

また党は、自らの目標と任務について次のように述べている。「われわれの革命の目標は、帝国主義、サクディナー（封建主義）、官僚資本主義の排除である……わが党の任務は広範な大衆を動員して人民戦争に参加させ、売国奴タノーム一味を打倒し、アメリカ帝国主義を駆逐し、いっそう多くの根拠地をつくり、強化し、解放区を拡大することにある」と（一九七二年一二月一日「党創立三〇周年声明」）。そして一九七三年「10・14運動」以後は、情勢の変化を踏まえつつ、独立・民主主義・正義を愛する全ての人民の闘いに支援を送り、かつ武装勢力との連帯を呼びかけた。

なおタイ共産党は、従来打倒すべき反動的支配階級として、帝国主義、サクディナー、官僚資本主義の三つをくり返し強調してきたが、一九七七年五月六日の「人民は国土の主である」と題する放送では、サクディナー勢力をタイ史上最も強力な抑圧階級であると規定し、さらにサクディナーは王室を中心とする一握りのグループであることを明確にした。

最後にタイの解放勢力の実勢を簡単に紹介しておこう。一九七七年二月三日の国内治安作戦司令部（ISOC）の発表によると、解放勢力は全国で七〇〇〇名強、うち東北部に二六五〇、北部に二四〇〇、南部に一六〇〇、中部に五〇〇存在するといわれている。しかし実際は一万名をすでに越えているというのが妥当な見方のようだ。また一九七六年一二月末に政府がただちに共産主義掃討作戦を展開すべき地域として公式に指定した県は、全国七一県のうち三五県に及んだ。

資料47

タイ共産党一〇月七日声明

「われわれは、『血の10月6日』をひきおこし、権力を奪取し、ファシスト独裁体制を復活させた軍部極右反動勢力に反対する」

タイ共産党

（『タイ人民の声』放送一九七六年一〇月七日）

サンガット・チャローユーを首領とするファシスト軍部極右反動勢力は、アメリカ帝国主義の命令にもとづいて「血の10月6日」をひきおこし、血に飢えた野獣の如く、学生・人民を弾圧し、クーデターを起こして権力を奪取した。そしてファシスト独裁体制を復活させ、祖国を裏切り、残虐無比に人民の基本的権利を奪い取った。彼らは全国に戒厳令をしき、憲法を破棄し、国会を解散させ、政府を倒し、政党を葬り去った。さらにまた共産主義者の容疑で、祖国と民主主義を愛する人民を、大規模に弾圧殺戮し、逮捕拘禁した。彼らは日刊紙の全てを発刊停止にし、さまざまな出版物に対して検閲をおこない、ラジオ・テレビを管理し、進歩的とみられる出版物を破棄して、人民の目と耳を完全に塞ごうとした。彼らは売国的政策を実施し、祖国と人民を裏切り、近隣諸国に介入し、タイ国とタイ人民をますます破滅的な方向へと追いやっている。人民はこのような祖国と人

民を裏切り、血に飢えた如く残虐に殺戮を犯している彼らの行為を、決して許しはしないであろう。

アメリカ帝国主義の手先であるファシスト軍部極右反動勢力は、一九七三年一〇月一四日以来、クーデターによって権力を奪取し、ファシスト独裁体制を復活させることを目論んできた。今回暴君タノームが僧衣をまとって帰国するのをバックアップしてきたのも、人民によってくり返し暴露され反対され、結局失敗に終ったこれまでの一連の陰謀の一つであった。労働者、学生、各界人民及び全ての祖国、民主主義を愛する人々によっておこなわれた平穏かつ合法的な暴君タノーム帰国に反対する運動、そしてナコンパトゥム県の電々公社の労働者二名の殺人犯を処罰せよという要求に対して、彼らは「国王に対する不敬」であるとか、「武器を使って不穏なことを起こそうとしている」とか「ヴェトナム人が加担している」とか言って事実を歪曲し、事態を悪化させてきた。また「ヤーングロ」を司令部とする「自由放送グループ」を使って、デッチ上げをおこない、人民を煽動し、あるいは暴力団を利用して人民の動きに対抗させた。一方、彼らは数百人に及ぶ私服警官、軍、暴力団、スパイをタマサート大構内で開かれていた抗議集会に潜入させ、彼らにまず発砲させておいて、それを口実に学生・人民を目的どおり犯罪者に仕立て上げ、血に飢えた如く徹底的に彼らを弾圧逮捕した。さらにファシスト軍部極右反動勢力は、学生・人民を吊し、撲殺し、あまつさえ焼き殺すといった目に余る行為をおこない、あるいは金や金目のものを盗み取り、数百人を傷つけ殺し、数千人を逮捕拘禁し、タイ国を暗黒と地獄の収容所に一変させるに至った。こうした野獣にも劣る残虐さについて、ファシスト軍部極右反動勢力は、完全に責任をとらなければならない。

労働者、学生、各界人民、そして全ての祖国と民主主義を愛する人々がおこなったタノーム帰国

に反対する闘争は、独立・民主主義・正義を求める闘争であり、また合法的かつ全国の広範な人民の参加と支援の下で遂行された闘争であった。この闘争の英雄的行為と、そして名誉ある闘いの犠牲者となった英雄たちの名は、永久にタイ人民の心とタイ国の民主主義運動の歴史の中に残るであろう。またわれわれは、彼らの英雄的行為に対して深い敬意を表し、負傷した人々、逮捕拘禁された人々に対しても、同胞として心底から同情し、その身を案ずるものである。さらに今回犠牲となった英雄たちの家族の人々に対しても、深い哀悼の意を表したい。

ファシスト軍部極右反動勢力は、この運動によって逮捕拘禁した人々をただちに釈放すべきである。また彼らが与えた損害に対し補償金を出し、負傷者・死亡者にも補償金を出し、残虐無比な殺人者を厳罰に処すべきである。

サンガット・チャローユーを首領とするファシスト軍部極右反動勢力は、くり返し自分たちは民主的であり、いかなる形の独裁にも反対すると自ら公言している。しかし彼らの実際の行動たるや、議会制度を破棄し、人民の目と耳と口を塞ぎ、血に飢えたように人民を弾圧しているのだ。彼らは、学生・人民に「国王に対する不敬」というレッテルを貼っているが、しかし憲法を破棄し、国会を解散し、国王が任命した政府を倒したことを彼らはいったいどう説明するというのか。

反動勢力の支配下にある地域のさまざまな形の人民の闘争は、民主独立の闘争に大きな貢献をしつつある。しかし反動勢力とファシスト軍部は何度もこの闘争を破壊し、闘争を阻止すべく努めてきた。人民はくり返しおこなった自らの闘争の中から、教訓を得るべきである。人民の政府を樹立し、独立・民主主義・繁栄の新しいタイ社会をつくるには、農村の武装闘争を第一の闘争とし、これを反動勢力支配下のさまざまの闘争形態と結びつけ、農村によって都市を包囲し、武装勢力によって国家権力を掌握する路線を堅持する以外に道はない。広範な農村で、わが党が指導する人民戦争はますます発展を続けている。革命根拠地と人民の革命的国家権力も、とどまることなく拡大しつづけている。これはわれわれタイ人民の希望であり、また輝しい未来を示している。

反動勢力の支配下の地域において、敵が恐るべき白色テロを使っていかに人民を脅そうと、独立・民主主義・正義を求める人民の闘争は決して消滅することはないだろう。人民が敵に屈伏する日は決して来ない。農村の解放区は、信頼できる後衛であり、強力な支援の力である。「10月14日の意志」を高く掲げ、心を奮起させ、勇敢に闘い、勇敢に勝利し、過去の教訓を総括し、情勢に応じた方法とやり方を使うことによってのみ、人民の闘争は継続発展しうるのだ。

ファシスト軍部極右反動勢力の全ての悪辣な犯罪は、広範な敵を作り出した。彼らの基盤は不安定で、彼らが内部に抱えている矛盾は単に解消できないだけではなく、今やますます拡大している。彼らが残虐野蛮に弾圧すればするほど、人民の憤怒と闘争は拡大する。彼らが卑劣な陰謀を使って多くの人を欺けば欺くほど、彼らの行為はその醜悪な素顔を露呈するのだ。彼らの未来は暗黒であり、決して長続きはしない。彼らは屈辱に満ちた最期を迎えるにちがいない。彼らに煽動された者も、彼らの悪辣な素顔をますます知り、背を向け、ついには彼らを厳罰に処すであろう。

アメリカ帝国主義とその手先であるファシスト軍部極右反動勢力は、人民の血に染まったクーデターとファシスト独裁体制によって彼らの悪辣な支配を維持しようと考えている。しかし彼らの試みは、全ての帝国主義の手先と同様、結局失敗に終らざるをえなかった。彼らはますます孤立し、

以前にもまして急速に没落していくであろう。未来は人民の側にある。人民に敵対するファシスト軍部極右反動勢力の前に未来はない。

人民の革命的武装勢力は、人民とともに彼らを絶対に処罰するであろう。

流された血は血によって洗われなければならない！

資料48

一〇月六日戦線宣言

一〇月六日戦線
（一九七六年一〇月一二日）

宣言

われわれ一九七六年一〇月六日のタイ、バンコクのタマサート大学における弾圧の犠牲者・生存者たちは、全世界の正義を愛する人々に対し、何よりもまずこの機会を利用して、弾圧されたタイの学生・民衆は、今後も自らの正当なる大義をめざして闘いつづけることをここに宣言する。

われわれは長い間、よりよき社会、公正な社会をめざして闘い、真なる民主主義と祖国の独立を要求してきた。そして一九七三年「10月14日」の闘いは、われわれタイ民衆の政治意識を、より高いレベルへと引き上げた運動だった。しかし今や、国家統治改革団なる新たな仮面をひっかぶった連中が、われわれを彼らの圧制の下におくに至った。

タイは、半封建・半植民地国として、少なくとも戦後二六年間、アメリカによって経済的に搾取され、政治的にコントロールされ、文化的に支配されてきた。そしてタイの支配階級、王室支持者、軍部、資本家どもの忠実なる連合によって支えられた現国家統治改革団の独裁体制は、民衆の見ている前でリンチにかけられ、首を吊され、焼き殺されていった数百人に及ぶ人々、そして獄中に送り込まれた三〇〇〇人の人々の犠牲者の中から、まさに登場してきたのである。

一〇月六日未明に勃発した軍事クーデターは、平和と民主主義を求めるわれわれの心からの希望を徹底的に打ち砕いてしまった。過激な行動に走った右派の兵士、警察、暴力集団たちのその手にはアメリカの武器が握られていた。

タイでは今、多くの生命が弾圧の犠牲となっている。今後、犠牲者の数はますます増えていくだろう。全ての大学は閉鎖を命じられ、立ち入り調査を受けている。そして彼らの言う「証拠」なるものが次々と「発見」されつつある。しかしわれわれは、自らの正当なる大義をめざしてあくまで闘いつづけるだろう。今、大学構内にいる「捜査・破壊」団たちは、最後のファシストたちの独裁体制を打ち倒した蜂起、あの一九七三年「10月14日」の闘いの中から生まれたタイ学生・民衆の運動をつぶそうとする彼らの努力が、絶望的なものでしかないことをはっきり示している。

アメリカは今や、自由を愛するタイ民衆に対して悪辣な締めつけを強化すべく、絶望的なあがきをおこなっている。今回の軍事クーデターは、タイ国におけるアメリカの利害を守るための最後の方法だったわけだ。

しかし、民主的諸権利の確立と祖国の独立をめざす民衆の闘いが、最後まで断固として続けられるかぎり、彼らの企ては決して成功することはないだろう。アメリカに支えられた国家統治改革団なるものは、必要ならばいかなる手段を使ってでも、打倒しなければならない。

われわれは、全世界の抑圧された正義を愛する人々が、われわれの正義を求める正当なる大義を支持するありとあらゆる行動に起ち上がり、そしてその輪を広げていくことを信じて疑わない。

われわれは闘い続ける。そして必ずや勝利するであろう！

連帯の志をこめて

（注）バンコク市内で配布されたビラ。その後全国に伝えられた。一〇月六日戦線の実体については不明であるが、クーデター直後に地下に潜行した人々によって結成されたものといわれる。

資料49

タイ社会党武装闘争宣言

「タイ社会党の理念は不滅である」

カイセーン・スックサイ
チャイワット・スラウィチャイ
プラサーン・マルッカビタック
プラヨン・ムーンサーン

（一九七六年一〇月一四日、『タイ人民の声』放送一〇月二一日）

〈略　歴〉

カイセーン・スックサイ　一九五五年逮捕、共産主義の容疑で懲役七年の刑を言い渡される。一九五八年、共産主義及び国内外での王国反逆罪に問われ再び逮捕されたが、無罪であるとして不起訴処分になった。一九七三年一〇月一四日の時には、憲法即時要求の運動で獄中にあった。ナコンパノム県出身の国会議員を二期つとめ、のちタイ社会党副委員長になる。一九七七年四月六日、タイ社会党中央執行委員会内に設立された「非常時」常任委員会の議長に就任。一九七六年二月に暗殺されたブンサノーン博士がタイ社会党の理論的指導者であったのに対し、カイセーン氏は党の事実上の最高指導者であった。

チャイワット・スラウィチャイ　一九七一年チュラロンコーン大学生連合の委員長。一九七二年から一九七三年までタイ全国学生センターの顧問をつとめる。一九七三年には技術専門学校の運動の指導者となり、



1976年３月　暗殺されたブンサノーン社会党書記長の追悼集会

同年憲法即時実現を要求する闘いに加わり、一〇月六日に逮捕された。その後「民主主義を求める民衆グループ（ポチョ・ポチョ）」を創設し、執行委の一人となる。また一九七四年から一九七六年まで、タイ社会党の副書記長の地位にあった。現在常任委員会の副書記長。

プラサーン・マルッカピタック　一九七〇年チュラロンコーン大学の学生連合委員長、「チャンゲーン」のペンネームで大学の不正行為に抗議する運動を展開する。憲法即時実現の運動に参加。「ポチョ・ポチョ」の中央執行委員の一人でもあった。一九七四年『ピトゥプーミ』という週刊紙を発刊。タイ社会党の創設者の一人であり　かつその中央執行委員会のメンバーでもあった。

プラヨン・ムーンサーン　ラームカムヘーン大学の政治学部在学中に、憲法を求める百人委員会の一人となる。その後『プラチャーティパタイ』紙の新聞記者、及びタイ社会党のメンバーとなる。ヤソートン県出身の元国会議員。

〈本　文〉

国を愛し、民主主義を愛する国民のみなさん！　そして愛すべき社会党のメンバーのみなさん！

国家統治改革団と名のるクーデター・グループが、自分たちの支配を維持し、引き続きわが祖国と人民を、以前にもまして都合よく抑圧し、搾取するためにひきおこした「10月6日」のあの血に塗られた悲劇的事件は、今や広範なタイ人民と全世界の世論によって白日の下にさらされ、激しく抗議を受け、非難されている。なぜならサンガット・チャローユーを首領とする軍部は、タイにおける影響力を復活させ、今後ともタイを自らの利益の源泉として利用しつづけようとするアメリカ帝国主義の手先ＣＩＡの支援を受けているからである。先のクーデターは、決して偶然の産物ではなく、一九七三年「10月14日」以来、組織的かつ周到に計画された陰謀であった。それは国家の独立と人民の民主主義の達成をめざす強固な意志（精神）――「10月14日」の英雄たちの意志を粉砕しようとするものに他ならなかった。彼らは図々しくも憲法を廃棄し、議会を解散し、政府を倒し、全ての政党を解散させ、タイ全土に戒厳令をしき、人民の基本的権利と自由を脅し侵害し、さらには狂人の如く学生、生徒、各界各層の人民を弾圧し、殺戮し、逮捕し、投獄したのである。「10月6日」の事件は、タイ史上例を見ないほど野蛮で残虐な事件だった。

この政治的ならず者たちは、今やタイ全土をつうじて、祖国に反逆し、タイ人民の利益を裏切り破壊する行動に出ている。このようなグループをどうしてわれわれは人道的連中と呼べるだろうか。彼らをどうして真のタイ人と言えるだろうか。

今回の事件は、全ての国を愛し、民主主義と正義を愛する人民に、とりわけ生き残った英雄たち

とその家族に対し、大きな悲しみと憤りを、そして多分癒えることのない傷を与えた。タイ人民は、憲法と法に定められた権利にもとづいて、平和的運動を展開していた学生、生徒、人民を脅し、弾圧し、殺害し、逮捕し、投獄し、吊し、生きたまま焼き殺すといった残虐野蛮なやり方をとり、悪辣な策謀を仕掛けた政治的ならず者たちのありあまるほどの犯罪を決して許すことはないだろう。

タイ人民は、軍部独裁者たちが祖国と人民をアメリカ帝国主義の奴隷におとしめることを決して望まないし、また絶対許しもしないだろう。タイ人民が求めているのは、独裁制ではなく民主主義なのである。

国を愛し、民主主義を愛する人民は、サンガット・チャローユーら軍部独裁者の一味と最後まで闘うであろう。このことは、正当かつ理にかなったものであるから必ず人民の理解を得、さらに、全世界の正義を愛する人々も、軍部独裁者であるサンガットたちの野蛮で残虐な行為に抗議し、非難するであろう。

先の「10月6日」の事件で、タイ社会党の中央委員会のメンバーはもちろんのこと、党員の何名かも虐殺され、逮捕され、投獄され、拷問を受けた。このような行為に対して、われわれタイ社会党は、他のタイの同胞と同じように激しい憤りを感じる。タイ社会党は、国を愛し、民主主義を愛する人民の政党であり、「10月14日」の英雄たちの偉大なる精神を継承するために設立された政党である。わが党は憲法の規定の下に結成され、政治に関する法にもとづき議会をつうじてこれまで闘争を貫徹してきた。われわれは、全国の人民に公表した党の意志、即ちわが党は議会の内外において、祖国の独立と人民の民主主義を求めて最後まで闘うという意志に、断固としてまた絶対的に

従ってきた。

タイ社会党のメンバーが絶えず弾圧され、共産主義の嫌疑を受けて逮捕されたにもかかわらず、また党書記長であるブンサノーン・ブンヨートヤーン博士が虐殺されたにもかかわらず、国を愛し、民主主義を愛する人民とわれわれタイ社会党のメンバーは、タイ人に正義をもたらし、タイ国に繁栄をもたらすという希望を胸に抱いて、粘り強い活動を続けてきた。

全ての国を愛し、民主主義を愛する国民のみなさん！　そして正義を愛するみなさん！　尊敬しまた愛すべきタイ社会党のメンバーのみなさん！　あなたがたはこれらの活動を目撃しており、このことを十分に立証することができるだろう。

「血の10月6日事件」は、国を愛し、民主主義を愛する人民が、祖国の独立、人民の民主主義、祖国の真なる繁栄をかちとるためには、議会闘争の道をつうじてではもはや不可能なことをわれわれタイ社会党のメンバーに決意させた。反動的支配階級は、人民に対して一度も誠実であったことはないし、祖国に対して一度もまともな関心をもったことがなかった。

支配階級によって人民に手渡されたいわゆる民主主義なるものも、人民を欺き、「民主主義」に耽溺させるための砂糖をまぶした毒にすぎなかった。事実彼らは、民主主義に同意しなかったばかりでなく、反動的支配階級たちはいわゆる「民主主義」を守ることさえせず、民主主義を破壊し、かわりにファシストの独裁という冷酷な支配体制をつくり上げた。国を愛し、民主主義を愛するタイ人民は、幾度となく民主主義の機会を切り拓こうとしてきた。また実に長い間にわたって、独裁者の抑圧と搾取に耐えてきた。しかし支配者たちがその見返りとして与えたものは何かと言えば、

何百何千という血と生命の犠牲だったのである。

祖国は、ますます過酷で残虐で野蛮な手によって傷つけられ、殺された愛国者たち――彼らの流した血によって埋まった。そしてこの「10月6日」の勇敢な英雄たちが流した血の犠牲は、議会による闘争に終止符を打った。そのことはわれわれに対して、人民はある個人やある機構の慈悲なり親切に訴えるやり方では、もはや独立・民主主義・正義を達成しえないことを、そしてわれわれ人民は、自らの手で運命を決し、また自分たちの国家の運命を決定しなければならないことをはっきり理解させた。以上の理由から、われわれは次のように結論づける。また全ての国を愛し、民主主義を愛し、正義を愛する人民、そして全ての尊敬し、愛すべきタイ社会党のメンバーに対して次のように宣言する。

(1) われわれは、血に塗られた手を持つ、そして祖国と人民に対立する政策を遂行するような、サンガット・チャローユーら軍部独裁者と、ターニン・グライウィチアンを首班とする傀儡政府の独裁的支配を決して認めない。われわれは、政治的ならず者たちが、人民の権利、自由並びに生命を脅す暴力とその掌中にある権力を使って任命する傀儡政府とまやかしの改革議会を決して認めない。

(2) タイ社会党は、すでに政党の解散を絶対に認めないことを宣言した。われわれは「たとえいかなるクーデターが勃発しようとも、わが党は決して死滅しない」という先に全人民の前に明らかにした誓約どおり、今後とも闘いつづけるであろう。われわれは、国を愛し、民主主義を愛するならば、いかなる個人、いかなる政治団体、政党、大衆組織とも心から喜んで連帯するであろう。

われわれは再度宣言したい。人民の敵が最初に暴力的手段に訴え、人民を弾圧・虐殺した以上、人民が自らの生命と財産を守り、祖国の独立と人民の民主主義を守るため、そしてわれわれのより高邁な理想を実現するため、暴力をもってこれに応えるのは正当かつ理にかなったことであると。われわれは、人民が真の勝利をかちとるまで、現在断固として武装闘争をすすめている人民と共闘することをここに決意する。

われわれが誠実かつ純粋な心を持ち、また祖国の独立と民主主義と人民のために闘うというその決定が正当かつ理にかなったことである以上、われわれは、国を愛し、民主主義を愛し、正義を愛するタイ人民から、また尊敬すべき愛すべきタイ社会党のメンバーから必ずや支援と共感を得られるものと確信する。

サンガットら軍部独裁者たちに反対し、その闘争に起ち上がった人民が将来必ず勝利することをわれわれは信じて疑わない。そして人民が結集し、手をしっかり握り合うならば、また彼らが幅広く団結するならば、それは強固な力となり、必ず敵を打ち倒すであろう。そして彼らは、最後には必ず独立・民主主義・繁栄をそなえた新しいタイを樹立することができるであろう。

タイ人民は軍部独裁者たちがひきおこした今回の犯罪を最後まで追及し、彼らの頭上に鉄槌を下すであろう。彼ら独裁権力の寿命は決して長くはない。外からは彼ら軍部独裁者たちの基盤は強固に見えるが、実はきわめて脆いのだ。権力を奪取したクーデターは、死を目前にひかえた連中のあがきでしかない。それは死に向かって後退する第一歩にすぎない。独裁者たちは人民との対立に加

え、自らの権力を拡大しようとして日増しに激化しつつある内部の対立にも今や直面している。彼らは決してこの問題を自ら解決することはできない。彼らの未来は暗黒でしかないのだ。彼らは今や破滅に向かって突き進んでいる。古人が言ったように、「死は今日来るか明日来るか誰もわからない」のだ。

軍部独裁者たちは、人民が払った血債を必ず支払わなければならない。

輝かしい未来は、必ず人民の側にある！

資料50

タイ労働運動指導者の声明

「あくまで団結しファシスト独裁に反対し、よりよい生活を求めて闘おう！」

タードプーム・チャイディー
プラシット・チャイヨー

（一九七六年一一月一〇日、『タイ人民の声』放送一一月二〇、二一日）

〈略　歴〉



1974年6月　繊維労働者のストライキ

タードプーム・チャイディー　タイ東北部スィーサゲート県の生まれ。現在三二歳。イサーン（東北タイ）の農民と同じように家は貧しく、常に一所懸命働いてきた。タマサート大学を卒業。その後進歩的書物に接し、労働者とともに民主的諸権利を求める闘いに参加した。この時の闘いの困難さから、彼は平和的議会闘争から革命的闘争へ考えを変えた。

「10月14日」以後は、さまざまの労働協会の代表となり、一九七四年六月の繊維労働者のストライキ、一九七五年夏のドゥシタニ・ホテルの戦闘的ストライキ等を指導した。この間ホテル業労働組合委員長及び全国労働者連絡センターの委員長、全国反独裁戦線の執行委をつとめる。ドゥシタニ・ホテルの闘争後、暗殺をさけるため、姿を消した。

プラシット・チャイヨー　タイ南部ナコンスィータンマラート県の生まれ。現在二五歳。ラーチャブリー県の工業技術学校に学ぶ。「10月14日」以後は、労働者の搾取に反対する運動に参加し、次第に労働運動の指導者として知られるようになる。その後民主的諸権利を求める数

多くの闘争、若者、学生、農民の運動を支援。一九七四年六月のストライキでは、サムットサーコン繊維労働組合の委員長として活躍する。全国労働者連絡センターの執行委の一人でもあった。

〈本　文〉

敬愛する労働者のみなさん！　そして祖国を愛し、民主主義を愛し、正義を愛する尊敬すべき全ての国民のみなさん！

タイでは一〇月六日に、アメリカ帝国主義とタイの極右反動勢力の手先である軍部ファシストのサンガット・チャローユーたちの手によって、「血の弾圧」がひきおこされた。アメリカ帝国主義の卑劣な道具であるCIAに支配された彼らは重火器を使って祖国・民主主義・正義を愛する、そして丸腰の学生・民衆たちを残虐に弾圧したが、その残虐さはタイ史上かつてみられないほどのものであった。一九七三年「10月14日事件」以来、祖国・民主主義・正義を愛する諸勢力の力は、ますます増大し、彼らの権力基盤に脅威を与えた。労働者、農民、学生、さまざまな民衆グループの闘いは、日毎にその激しさを増していき、彼らの利害を揺さぶっていった。そこで彼らは、動揺する反動勢力の権力を立て直すべく必死の試みをおこなった。たとえば、プラップラーチャイ事件、スタンダード・ガーメント事件、ドゥシタニ・ホテル事件などでは、彼らは旧い反動勢力を利用して――具体的には、暴力団や「赤い野牛」、「ナワポン」、「ルーク・スア・チャーウ・バーン」、あるいは労働運動の中にいる売国奴、裏切者、スパイなどを使って労働者に対抗してきた。そうした反動勢力の中には、「ヤーングロ（機甲師団放送）」の配下にある「自由放送グループ」の放送局員

とか、僧侶で「ナワポン」のメンバーでもあるギティウットーのような人間も含まれており、彼らは祖国、民主主義を愛する進歩的諸勢力の運動にあらゆる手段を使って対抗してきた。また彼らはこうした運動に対し、あらゆるデッチ上げ、歪曲をおこない、分裂を画策し、世論を操作し、気違いじみた野蛮さで民衆を威嚇し、あまつさえ殺してきたのである。しかし大衆の精神と意志を完全に圧殺し切れないと悟ると、今度はサンガットを、ほとんど倒壊しつつあったサクディナーと軍のグループからひっぱり上げ、血に飢えたファシスト独裁体制の手先の首領にすえた。彼らは、自分たちの素顔に白粉を塗りたくり、自らを「国家統治改革団（カナ・パティループ・ガーン・ポックロン・ペーン・ディン）」と称しているが、しかしその実、彼らは「国家のゴミ捨て場（カナ・ゴーンカヤ・パティグーンロック・ペーン・ディン）」でしかない。彼らは依然として帝国主義、サクディナー、官僚資本主義の代弁者であり、タイ祖国とタイ人民を破壊し壊滅させる根源になっている。彼らは歴史的にみて、他のどのような独裁者よりもはるかに残虐無比なファシスト的独裁者たちなのだ。

このならず者の集団は、大虐殺を平気でやるほど狂っている。彼らは残虐にも、銃から重火器に至るまでさまざまな武器を使って、タマサート大学で平和的かつ丸腰で集会をおこなっていた学生・民衆に襲いかかり、若い彼らを捕え、首に縄をかけ、木に吊し、よってたかって意識を失うか死ぬまで殴打し、石油をぶっかけて焼き殺した。それも一国の首都の真只中、しかも白昼に多くの民衆が見ている前でそれをやったのである。彼らのこうした流血行為の罪悪は、測り知れないほど深く、今後決して許されることはない。彼らは祖国、人民に対して暴君としてふるまい、いっしょになって祖国と人民を売りわたし、全世界の抑圧されている人民の冷酷な敵であるアメリカ帝国主義

の奴隷になり下がっているのだ。

タイ人民は、決してこうした連中に屈伏することはない。彼らはさまざまの残虐な手段を使って人民の闘争の力を粉砕しようとしている。しかし彼らが、人民の力を完全に粉砕するような日は決して来ないだろう。真に強固な力は、反動勢力の側ではなく人民の側にあるからである。歴史はこの点を如実に物語っている。たとえば奴隷主、封建領主は過去崩壊し、ロシアのツァーもドイツのヒットラーも崩壊した。中国のファシスト政権の首領であった蔣介石も倒され、台湾へ追放の身となった。巨大な支配者であるアメリカ帝国主義も、同じ様に朝鮮戦争とインドシナ侵略戦争で屈辱的な敗北を余儀なくされた。ヴェトナム、カンボジア、ラオスの傀儡政権も無残にも敗れ去った。アメリカ帝国主義の飼い犬であり、残虐かつ愚かな極右ファシスト軍閥のサンガットは、自らが人民の敵であることをはっきり示している。彼らが犯した罪は、全人民との亀裂をますます広範にひきおこした。彼らは必ずや、近い将来歴史の流れによって否定され打倒されるであろう。

現在、民主主義を愛する無数のタイ人民、そして世界中の正義を愛する多くの人民は、起ち上がり、彼ら独裁者の残虐な行為に抗議し、非難をおこなっている。彼らがますます孤立していき、ついに崩壊する日は迫りつつあるのだ。

勇敢で犠牲を恐れない闘いを展開した「10月6日」の英雄たちの偉大な行動は、タイ人民の心とタイの民主主義、祖国の独立を求める闘いの歴史の中に永く書き留められ、讃えられるであろう。われわれは、「10月6日」に殺された英雄たちの遺族に対し、心から敬意と深い哀悼の意を表したい。われわれは断固として、「10月6日」に血を流した英雄たちに続き、彼らの意志と行動を最後

まで貫徹し、流された血に対する復讐をやり遂げなければならない。流された血は血で洗わなければならないのだ。

悪辣な殺人者たちは、歴史によって、また人民によって、十字架にかけられ審判されるであろう。人民は永久に彼らを呪咀し、非難するだろう。

今日、アメリカ帝国主義に飼われた犬どもは、祖国・民主主義・正義を愛する労働者、農民、学生、教師、大学教師、ジャーナリストから一般市民に至るまで逮捕を続け、残虐にも多数の人間を投獄している。われわれは、敬愛する人民から今遠く離れているが、それはただ闘争の場が移ったからである。しかしわれわれの心はつねに民主主義と独立を求める闘いを展開してきた人民の側にあり、人民のことに思いを馳せている。われわれは、独立・民主主義・正義を求める光栄ある闘いをこれまで進めてきた人民が、団結して最後まで闘争に起ち上がることを信じて疑わない。

全ての労働者諸君！

われわれの基本的権利である自由権は、極右ファシストたちの手によってつぶされた。われわれ労働者は今や手足を拘束され、口を封じられ、正義を求めるストライキの権利も剝奪されてしまった。また一般の民衆は政治運動をおこなう権利を奪われた。独裁者たちは、「10月14日の意志」を完全に踏みにじったのだ。この三年間、労働者たちによって闘い抜かれたストライキ闘争は、国内外の独占資本の傀儡である彼ら独裁者たちの手によって、今さまざまな形で脅され、蹂躙され、あるいは弾圧され殺されている。極右ファシストたちは、労働者のストライキ（彼らの労賃は、タイ資

本の生産費のたかだか五パーセント、また日本、アメリカ進出資本の生産費の各々二五、三〇パーセントを占めるにすぎない）は、タイに騒擾をひきおこしている元凶であると恥知らずにも非難してきた。しかしこうした混乱は、腐朽しつつある資本主義体制そのものがひきおこしている経済危機が生みだしたものに他ならない。彼らは労働者たちを、国の政治的混乱の張本人の如く吹聴し、彼らが外国の煽動にのって祖国の経済を破壊しているのだと非難してきた。しかしこれこそ真実をねじ曲げた誹謗中傷でなくてなんであろう。実際には、大資本家が権力を握り、労働者を搾取していることは誰でも知っていることだ。労働者は社会の経済力をつくり上げる上で重要な力である。しかしその見返りとして彼らが受けとるものは何か。それは惨めな生活状態でしかない。彼らは放ったらかしの貧困の真只中で闘わねばならない。空腹をかかえ、ボロ切れを身にまとい、汚ない不衛生な家に住まわなければならない。たとえ病気になっても、看病してくれるものはなく、ただ運命に身を委ねるしかない。労働者の生活状態に比べれば、大資本家の家に飼われている犬の方がまだはるかにましなほどである。仕事中の事故で、片輪になったり手足を失わざるをえなかった労働者、あるいは死んでいった労働者たちの数は、厖大なものになる。しかしわれわれはそれにじっと耐えてきた。彼らはわれわれの命をボロ切れを身にまとった品物としか考えていないのだ。

彼らは、自分たちがかき集めた巨万の富がわれわれの血と汗から搾り取ったものであり、われわれの生命とその重労働の中からつくり上げられたものであることなど思いも及ばない。だからわれわれの方はますます貧しくなるだけであり、またますます耐えがたい屈辱の中に押し込められるだけなのである。

われわれ労働者たちが闘う方法は、ストライキしかない。われわれはこれまで、このストライキを彼らが定めた法律の条項とその制度にもとづいて合法的におこなってきた。しかし彼らはわれわれが労働法に違反していると恥知らずにも非難してきた。そうならばわれわれはこう問い返したい。七万を越えるタイの工場、会社——とりわけ国内外の独占資本——の中で、労働法の基準に従ったような工場がいったいどこにあったというのか。なかった。一つとしてなかったではないか。また、労働法違反を理由に、たとえ一人でも大資本家を逮捕するような役人がこれまでいたというのか。

最近、極右ファシストであるサンガット・チャローユーは、資本家側の工場閉鎖と労働者のストライキの両方を禁止した。しかし彼らが実際に狙っているのは、われわれ労働者に対する攻撃だけであり、大資本家たちを攻撃する意図など最初からない。その恰好の例は、サラブリー県にある日本人資本の製麻工場（日本製麻株式会社）である。彼らは違法にも工場閉鎖を宣言し、一二〇〇名の労働者を解雇した。一方県の担当役人は、日本資本の側に立って日本人資本家がこのようなことをやっても違法ではないとこたえた。他方これとは対照的に、一〇月六日の「血の水曜日」より前の段階で、平和的に労働法の枠内でストライキをおこなっていた労働者たちに対しては、暴力集団の頭目である「赤い野牛」や「ナワポン」が労働者の集まりの中に割り込んで分裂を煽り、あるいは彼らを銃撃したり、ストライキ集会の真只中に爆弾を投げた。しかも警察は、こうした暴力団たちから労働者を守ったり、彼らを逮捕・処罰したりするような行為はまったくとらなかった。むしろ完全武装した警官、暴動鎮圧隊、そして特別機動隊は、たとえば、インド・タイ・アユタヤー工場とかサラブリー・ジュート・ミル工場とかナコンラーチャシーマー県のジョホール工場とか、スタン

ダード・ガーメント工場とか、サムットサーコン県のオームノイ・ハーラー工場とかドゥシタニ・ホテルなどに見られるように、労働者を弾圧し、虐殺し、たとえ相手が婦人であっても容赦しなかった。これらは、われわれが平和的手段で合法的に闘っていた時のことである。

今またわが国は、アメリカ帝国主義の手先である極右ファシスト軍閥の支配の下で、暗黒に逆戻りした。労働者たちの生活状態は今やますます悪化している。いったいこれからわれわれはどのように生きていけばよいのか。労働者の正義を求める闘いの武器であるストライキは、極右ファシストであるサンガットによって完全に禁止された。賃上げ、福利厚生を求める闘い、あるいは不公正な抑圧体制に対する抗議は、全ての労働者たちがもっている当然の基本的権利である。窮乏生活を強いられている労働者がその生活をよりよくするための重要な手段なのである。極右ファシストのサンガットは、一方でこの労働者たちの当然の権利を剝奪し、彼らの重要な対抗手段である武器(ストライキ権)を奪った。全ての労働者たちは、このような権利、武器をもはや使用しえない。あえてやろうとすれば、徹底的に弾圧で脅しをかける。他方彼らは聖人君子の仮面をかぶって労働者を欺いている。つまり彼らに身を委ねれば、労働者の生活状態を改善することに協力しようというわけである。彼らは、労働者を弾圧と甘言に慣れ親しませようとしているのだ。しかしたとえ口ではすばらしいことを言っても、アメリカ帝国主義の手先である彼らの手には、労働者を打擲する杖が握られている。労働者は決してこうした脅しに屈伏してはならない。彼らの空約束などうのみにしてはいけない。労働者は自分たちの賃金上昇、福利厚生の改善、あるいはその他の諸権利は、決

して神や聖人がその意志にもとづいて下賜してくれるものではなく、脅迫を恐れず、甘言に惑わされない労働者たちの団結と闘争によってのみえられるものであることを十分に理解しなければならない。全ての労働者諸君は、各々の工場、同じ業種同士で、あるいは異なる工場、産業間で団結し、極右ファシストたちのやり方と虐殺に反対しなければならない。労働運動に潜入しているスパイ、裏切り者を見つけ、彼らを糾弾せよ！　大資本家とファシストに仕える連中への警戒を怠るな！　彼らに労働者たちの分裂をひきおこすような機会を与えるな！　彼らにわれわれを分裂させるような行為を許すな！　われわれは自分たちの正当な要求を充たすためには、必要とするいかなる手段、戦術といえどもこれを使うであろう。それがわれわれとその家族がよりよい生活と民主主義を得るための唯一の道なのだ。

労働者の正当な権利を求める闘争は、不可避的にファシストたちの反対と抵抗にぶちあたるだろう。しかし売国奴である極右ファシストを倒す政治闘争をおこなわなければ、われわれの前に道を切り拓くことはできない。またできるだけ広範に抑圧された、とりわけ国の支柱であり、わが国最大の社会層である農民たちと連帯する以外にわれわれの道はない。

人民の勝利は、われわれが敵に懇願したり、支配階級がつくり上げた法の枠内で要求したり、あるいは平和的闘争を展開したりすることによって獲得しうるものではない。それは反動的暴力に対抗する革命的暴力をつうじてのみ達成しうるのだ。敵が銃をとるならわれわれも銃をとらなければならない。われわれは「農村によって都市を包囲する」というやり方で武装闘争を展開し、それによって国家権力を奪取する道をとらねばならない。なぜならこのような道こそが、われわれ労働者

あるいは祖国、人民の問題を解決し、われわれが愛する祖国に独立をもたらし、われわれの子孫に民主主義を与え、妻や子供によりよい生活を与える唯一の道だからだ。

今日、人民の革命的戦争は、すでに全国各地で戦闘を開始した。われわれタイ人民の前にあるのは希望と輝かしい未来である。

われわれは、今ここに次のような闘争宣言をおこなう。われわれはアメリカ帝国主義をわが愛するタイから追い出し、人民を大資本家と封建的地主及びその傀儡である極右ファシスト政権から解放し、人民のための政府を樹立するために闘うことを。

労働者諸君！

われわれ労働者階級は、革命において重要な役割を担っている。歴史はわれわれの双肩に人間解放の輝かしい任務を課した。われわれは最後の勝利をかちとるまでその輝かしい任務を遂行していかなければならない。

同胞である労働者諸君！

何千何万という民衆は、今塗炭の苦しみを受け、残虐に搾取され、その基本的諸権利は人民の敵によって踏みにじられている。労働者は今後もはや、彼らの奴隷的地位に甘んじてはいないだろう。彼らは闘いに起ち上がり、われわれに必要な支援を求めているのだ。われわれは、七三年「10月14日」と七六年「10月6日」の英雄たちの意志にもとづき、彼らの意志をあくまで貫徹しなければならない。われわれは団結して、大衆を彼らが陥っている苦しみの中から救い、輝かしい未来をつくるべく支援しなければならない。われわれ人民は、自らの運命は自らの手に委ねる必要がある。そ

して武器を手にとり、力を結集しあらゆる手段を使って敵を攻撃しなければならない。山岳地帯で、農村で、都市で各々最も有効な方法を使って闘わなければならない。全ての闘いの流れを一つにし、強力な川と化し、タイ全土に革命歌を轟かさなければならない。今こそ人民の敵を包囲し、彼らを人民戦争の大海に巻き込み、彼らの終末と、人民の偉大なる勝利を一日でもはやく実現しなければならない。そしてこの抑圧と搾取の地獄である社会を倒し、独立・民主主義・繁栄を基礎とする新しい人民のための社会を樹立しなければならない。

全ての労働者は団結せよ！

「10月14日の意志」と「10月6日の意志」を貫徹せよ！

ファシスト独裁体制は崩壊し、勝利は必ずや人民がえるだろう！

資料51

統一戦線の呼びかけ

「団結してファシスト軍閥を打倒しよう！」

タイ共産党

（『タイ人民の声』放送一九七六年一一月二四日）

タイ社会党のカイセーン・スックサイ氏、チャイワット・スラウィチャイ氏、プラサーン・マルッカピタック氏、プラヨン・ムーンサーン氏の闘争声明、青年及び学生のリーダー、セクサン・プラサートグン氏、ティラユット・ブンミー氏、ウェーン・トーチラーガーン氏、サマーン・ルワットウォンハット氏、プリーディー・プンスー氏、チラナン・ピットゥラプリーチャー氏、ウィサー・カンタップ氏の闘争声明、詩人プラサート・ヂャンダム氏の闘争声明、及び労働運動指導者タードプーム・チャイディー氏、プラシット・チャイヨー氏の闘争声明は各々勇敢、かつ荘厳で力のこもった闘争声明である。これらの声明は、真に民主主義・独立・社会正義を獲得するため、ファシスト軍閥をその代弁者とするアメリカ帝国主義、大地主及び大資本家階級の共同の反動支配を打倒し、その打倒のために闘争勢力の結集をはかるという人民の共通かつ緊急な意志と要求を反映している。これらの闘争声明は、各階級、各界人民から広範な歓迎を受け、同時に人民の闘争に対する精神を大きく奮起させた。

政治家、若者及び生徒・学生のリーダー、詩人、労働運動指導者のこれらの声明は、アメリカ帝国主義の手先、ファシスト軍閥の悪辣な権力に勇敢かつ強固に挑戦し、これを攻撃するものであり、アメリカ帝国主義の手先、ファシスト軍閥の期待にまったく反して人民の政治的覚醒と闘争がいっそう発展していることをまさに象徴するものである。

人民の力量と人民の闘争精神を過小評価したアメリカ帝国主義の手先であるサンガットらファシスト軍閥は、恐るべき流血事件を利用してクーデターを断行し、ファッショ的独裁体制を復活させ人民の基本的自由と権利を完全に破壊し、野蛮かつ狂気じみた弾圧を人民に加え、全国人民の祖国

を愛し、民主主義を愛し、正義を愛する闘争を威嚇し、阻止しようとしている。しかし、彼らのこの目論見が失敗に帰すことは明白である。祖国・民主主義・正義を愛する全ての各界各層の人民、政治集団、政党、諸個人は、アメリカ帝国主義の手先、ファシスト軍閥の悪辣な権力に対し士気を失わず、身を屈し投降することもなく、かえってますます憤怒し、ますます闘争の意志を強くしている。日々孤立し、人民の支持を得ていないアメリカ帝国主義の手先、ファシスト軍閥がバラ色の最期を迎えることは、決してありえないだろう。

アメリカ帝国主義の手先、大地主・大資本家階級の代弁者であるサンガット・ファシスト軍閥の残虐さは、人民にますますはっきりと彼らの本性を悟らせるとともに、人民は血を流し生命を失った闘争の経験から、次のような深い教訓を再び得た。すなわち、「独立・民主主義・正義をめざすわれわれ人民の闘争は、ある人やある制度に慈悲を懇うことによってはまったく達成できない。また反動支配階級がきめた規則にもとづく議会主義や平和主義の路線によっても、達成することはできない。ただ、武装勢力による国家権力の奪取という路線に従って力を結集し、闘い、農村によって都市を包囲し、最後に都市を占拠する。農村における武装勢力の闘争を第一の形態となし、これを他の闘争形態と結びつけ、都市の闘争を農村の闘争に結びつける。このようにして、つまり人民自らが権力奪取の闘争をおこなうことによってのみ、独立・民主主義・正義は真に達成しうるのだ」という教訓がそれである。平和的、合法的方法によってなされた人民の独立、民主主義、そして各種の正義を求める闘争が、おしなべて反動的支配階級の暴力に圧殺され、首都でも地方でも流血事件が頻発し、国を愛し民主主義を愛する農村指導者、労働指導者、学生、政治家が多数逮捕・

投獄され、危害を加えられ、暗殺されたことは、「10・14運動」以後の多くの事実によって明らかである。そしてわれわれ人民が決して忘れることのできない、血と生命を犠牲にして教訓を得た、あのタイ史上例を見ない残虐非道な「血の10月6日」が生じたのである。これらはタイ共産党が指摘する武装勢力による闘争と農村によって都市を包囲するという路線の正しさ、そして必要性をいっそう認識させた。

国家が真に独立し、人民が真に民主主義を享受し、社会に真の正義をもたらすという人民の共通の意志を早急に実現させるため、また、サンガットらファシスト軍閥を代弁者とするアメリカ帝国主義、サクディナー、官僚資本主義の共同の反動的支配から生ずる人民の損失、困窮、悲哀、抑圧を減少させるため、労働者、農民、漁民、学生、教師、知識人、政治家、民主愛国の全ての勢力及び諸個人は、より広範に、かつまたより強固に団結し、勢力を結集し、情勢に適合した方法と形態で闘争し、農村における人民の武装闘争との連合をいっそう大きくし、いっそう成果を獲得して、ターニン政府を徹頭徹尾あやつっているサンガットらファシスト軍閥の独裁的反動的支配をともに攻撃し、彼らを人民の包囲の中に追い込み、至る所で撃破し、彼らの臨終の日を早める必要がある。「10月14日の意志」は必ず実現され、独立・民主主義・繁栄の新しいタイ国は絶対に実現されるであろう。

抑圧者との闘争を堅持するとき
人民は新しい人生を得る

そして空が金色に輝くとき
人民は国土の主となる

資料52

タイ共産党創立三四周年声明（新一〇大綱領）

「国を愛し民主主義を愛する全ての人民は団結し、全面的に人民戦争を拡大し、売国反動的ファシストの支配集団を打倒しよう！」

タイ共産党中央委員会
（『タイ人民の声』放送一九七六年一二月一日）

革命が日増しに発展し、人民の敵が気違いじみたあがきを示すというすばらしい情勢の下で、一二月一日、タイ共産党は創立以来三四年を経過した。

広範な農村において、人民解放軍と各々の人民革命勢力は、さまざまの困難を克服する中で絶えず成長を続け、ますます多くの敵と戦闘し、ますます多くの敵を撃滅し、広範に大衆を組織し、統一戦線を拡大し、新しい遊撃地区を拡大し、革命根拠地をいっそう拡大し、また強固にしている。反動支配の下にある地区でも、労働者、農民、学生、知識人、各界の民衆、全ての国を愛し民主

主義を愛する人々の正当な権利を求める闘争、ファッショ独裁への抵抗、民主独立のための闘争は熱烈に盛り上がり、人民の敵を全面的に狼狽させている。

これら農村及び都市における闘争は、アメリカ帝国主義、サクディナー（封建）主義、官僚資本主義を激しく動揺させているのだ。

極右ファシストの封建大地主、大資本家、軍閥集団は、タイ人民の覚醒と至る所における民主独立を求める闘争の広がりに周章狼狽し、また隣国とりわけインドシナ三国人民の勝利による革命闘争の発展に恐怖を抱いている。そこで彼らは、彼らの主人であるアメリカ帝国主義の命令に従い「血の10月6日事件」を共謀し、血に飢えた野蛮な方法で学生と各界民衆の運動を圧殺し、クーデターを起こし、全面的にファッショ独裁を復活させ、タイ国を前例がないほどの暗黒の中に引きずり込んだ。

サンガット＝ターニン一味は、偉大な「10月14日」の花実を徹底的に破壊した。彼らは、自らが全人民の敵であり、アメリカ帝国主義に従属する奴隷であることを白日の下にさらし、さらに隣国人民に頑固に敵対している。彼らはサリット＝タノーム＝プラパート一味の旧い布告を掘り起こして、これでもって人民を欺き、自らの大罪を覆い隠している。また人民弾圧や売国とファショ独裁、祖国と人民を盗む悪どいやり方を隠蔽している。たとえサンガット＝ターニン一味がどのように化粧しようとも、彼らが売国反動ファシストであり、祖国と人民の禍の元凶であるアメリカ帝国主義、大地主、大資本家の代理人であることは明らかだ。彼らは労働者、農民、若者、学生、知識人の困窮を解決できず、インフレと生活費の高騰及び社会の退廃堕落を解決することができない。彼らの

援助および改革計画は祖国と人民の問題を真に解決することのできないまったくのごまかしにすぎない。

「血の10月6日」はわれわれ人民に再度次のような深い教訓を与えた。即ち独立、民主主義、正義、人民の利益と幸福は、帝国主義、封建主義、官僚資本主義の支配を完全に打倒することによってのみ実現される。平和的方法によっては実現できない。というのも国家機構が彼らの掌中にある限り、彼らはあらゆる方法、たとえ冷血野蛮な方法を使ってでも、人民を弾圧・破壊し、彼らの反動的支配を継続するため、最後まであがきを続けるからである。

サンガット＝ターニン売国反動ファシスト集団は、野蛮きわまりない殺戮によって人民を弾圧し、全面的ファッショ独裁体制を樹立することで、彼らの不安定な権力の座を維持し、人民の闘争を排除し、さらに彼らの延命を図ることができると夢想している。しかし、現実は彼らが夢想しているのとはまったく反対である。彼らがつくり出した「血の10月6日」は国を愛し、民主主義を愛し、正義を愛する全ての人々にこのうえなく憤怒と憎悪をひきおこし、全世界の人々の激しい糾弾の声をひきおこしただけであった。彼らはタイ全人民の悪辣な敵であり、彼らは全人民のますます燃え上がる抵抗に今や直面している。

「血は血で洗うべし」「銃には銃を」という叫びが響き渡り、反動支配下の地区で、奴隷の地位を甘んじて受け容れない各界人民は勇敢に闘争を継続し、一方遊撃地区、革命根拠地にはますます多くの人民が大挙して参入してきた。われわれはこのような各戦線で闘争を継続している全ての人民の闘いの決意と、祖国人民に対する犠牲的精神とに深い敬意の意を表したい。

カイセーン・スックサイ、その朋友セクサン・プラサートグン及びティラユット・ブンミー、タードプーム・チャイディー及びプラシット・チャイヨー等々は、人民とともに武装し最後まで敵と闘うことを表明した。われわれはこの確固たる決断に深い喜びを表したい。われわれは、人民とともに武装闘争を遂行する全ての朋友を心から熱烈に歓迎する。

わが党は民主独立、人民の利益のために闘争を継続し、人民の正義の闘争に心から参加し、またこれを支持援助してきた。祖国と人民の問題を解決する明確な政策をわれわれはすでに持っている。一九六八年一二月一日に発表したわが党の政策は全国人民の歓迎と支持をうけ、その後の情勢の発展はわが党の政策の正しさを証明した。しかし今日の情勢の発展と変動に政策を適合させるため、われわれは以下のように改訂し、当面の一〇項目の政策とする。

(1)労働者、農民、小ブルジョア、民族ブルジョア、各民族、及び全ての愛国民主の政党、組織、個人を団結させ、人民戦争を拡大し、アメリカ帝国主義の影響力を排斥し、売国的反動ファシスト政権を打倒し、各革命勢力の代表者からなる人民政府を樹立し、独立・民主主義・繁栄の新しいタイ国をつくる。

(2)人民に敵対する全ての法律、告示、命令、規則を廃止し、逮捕・拘禁されている愛国的民主主義者を解放する。人民に言論、出版、集会、示威、ストライキ、信仰、結社の自由を与え、満一八歳以上の者には完全な選挙権と被選挙権を与える。

(3)アメリカ帝国主義、悪辣な売国反動派及び悪徳地主の財産を没収し、祖国と人民の利益のためにこれを分配する。祖国と人民に対し罪を犯した反革命派と反動派をその罪状に応じて処罰する。

これらの犯罪者が反省改心すれば刑罰を軽減する。

(4)独立自主の外交政策をおこない、全ての売国的で正義に反する条約、協定を廃棄する。帝国主義、とりわけ二つの超大国の覇権に反対する。平等、主権と国土の尊重、互恵を基礎として、諸外国と友好関係を樹立する。また全世界の被抑圧人民及び民族の正義の闘争と連帯しこれを支援する。

(5)タイ国内の各民族は平等であり、互いに尊敬し、援助しあう。各民族は各々の言語、文字を使い、そのすばらしい文化、慣習、伝統を維持する権利を有する。民族間の抑圧や差別に反対する。民族の集住地域では、タイ国という大家族の下で自治をおこなうことができる。また経済、教育、公衆衛生の全面発展がはかられる。

(6)封建的搾取制度を廃し、各地域の実情に合わせて漸進的に土地革命をおこない、全ての農民に自分の土地を与える。高利貸に反対し、正義に反する全ての負債と債務契約を廃棄する。農業生産を発展させ、農民の生活レベルを引き上げる。

(7)祖国の資源を保全し、国家の工業、商業その他の事業を発展させ、民族資本の工業、商業を保護し、手工業及び人民にとって有益な零細商業を援助する。

(8)労働者の雇用、賃金、福祉を保障する。同一労働には、性、年齢、民族を問わず同一賃金を与える。

(9)政治、経済、文化、教育、労働の全てにおいて女性は男性と同一の権利をもつ。革命運動と生産活動における女性の役割を促進する。女性と子供の福祉を保障する。

青年に教育と雇用を保障する。青年に祖国、民主主義、人民、労働を愛することを奨励し、全体のために犠牲となる精神を持たせ、革命と新社会建設に真剣に取り組ませる。

無能力となった革命兵士及び革命家、革命のための犠牲者をもつ家族、革命兵士の家族には援助を与える。

(10)帝国主義、サクディナー（封建）主義の文化、教育を一掃し、民族民主及び科学的性格を有する革命文化と革命教育を促進する。タイ国の文化を継承するとともに外国文化を批判的に摂取する。とりわけ農村における医学と公衆衛生活動を全面的に拡大する。

われわれの最愛のタイ国は、一握りの極右ファシストである大地主、大資本家、軍閥集団によって、地獄・暗黒の収容所と化そうとしている。タイ全人民は起ち上がって禍から国を救い、輝かしい未来を建設すべきである。わが党は、全ての祖国を愛し民主主義を愛する政党、組織、個人と喜んで協力し、ともに敵と闘うであろう。われわれは、われわれの闘争をより強く、また勝利をより早く勝ちとるため、各界人民勢力は団結し、広大な革命統一戦線となるべき時が到来したと考える。

わが党各級機関は、党のいっそうの強化増大の促進に注意すべきである。党員の幹部は、党の方針を堅持し、革命闘争の最前線に立ち、全ての活動の模範となり、武装勢力をさらに拡大強化し、革命を前進させるべきである。

武装勢力と全国の各革命勢力は、奮起し、精神を高揚させ、勇敢に闘い勇敢に勝利し、忍耐強く全ての困難を克服し、人民戦争の戦略、戦術に熟達し、すばらしい条件と機会をとらえて敵を打破し、引き続いてすばらしい勝利を獲得し、各方面に数多くの顕著な成果を打ちたてている。全ての

同志諸君！ これらのすばらしい成果をさらに発展させ、より多数の敵を打破し、早急に大衆を組織し、武装勢力を拡大し、遊撃地区を拡大し、根拠地を建設し、根拠地をさらに広範に拡大し、反動支配下の地区の人民の闘争を支持し、これに連帯し、さらに新しい成果をうちたてよう！

ますます明白に売国的反動ファシスト集団は悪辣なその正体を暴露しつつある。反動支配下の地区の労働者、農民、学生、知識人、各界人民はいっそう団結し、適切な形態と方法で断固として敵と闘争しつづけている。彼らは敵の矛盾と弱点を十分有利に利用し、独立、民主主義及び全ての社会正義にかなった利益を求める強力な闘争を弾圧・破壊しようとする敵に抵抗している。そして人民の抵抗と闘争の包囲の中に敵を追い込みつつある。

人民は「血の10月6日」をひきおこした野蛮な犯罪者を厳罰に処すであろう。全ての官僚、軍人、警察官、人民は、サンガットーニン一味から離脱し、売国的反動ファシストの彼らの政策に奉仕せず、祖国と人民のために価値あるものを創造すべきである。われわれはサンガットーニン一味の加担者に対して一刻も早く身を引くことを勧告する。さもなくば彼らは再び屈辱に満ちた最期を迎えるであろう。

現在の敵の気違いじみた行為は、死を目前にひかえた悪あがきにすぎない。彼らは今までになく孤立している。彼らはすでに自らの墓穴を掘ってしまった。人民よ！ いっそう団結を強固にし、革命の炎を至る所で燎原の烈火とせよ！ 敵の死滅の日はより近づき、人民の勝利はより早く達成されるだろう。

資料53

タイ全国学生センターの声明

「若者、生徒、学生諸君！　大衆とともに広く団結し、ファシスト独裁に反対し、一〇月一四日と一〇月六日の意志を実現し、祖国の独立と人民の民主主義をかちとるまで闘おう！」

グリアンカモン・ラオハパイロート
（一九七五年タイ全国学生センター〔NSCT〕書記長）
ティラチャイ・マルッカピタック
（一九七三―七四年北タイ学生センター書記長
一九七五年NSCT副書記長政治担当）
ヂャトゥロン・チャーイセーン
（一九七六年チェンマイ大学自治会委員長
NSCT執行委メンバー）
ヂャトゥロン・ブンヤラットタンスントン
（一九七六年NSCT副書記長経済担当）
チューウィット・オーワートワォン
（一九七五年タマサート大学自治会委員長　一九七五年東北タイ学生連盟委員長　一九七五年NSCT執行委）
サワーイ・ウドムチャルーンチャイヤギィット
（一九七五年NSCT副書記長経済担当）
ブンソン・チャルトーン

親愛なるお父さん、お母さん、兄弟姉妹たち！　祖国を愛し、民主主義、正義を愛する全ての国民のみなさん！　尊敬する先生方！　そして親愛なる若者、生徒、学生のみなさん！

一九七六年一〇月六日、タイ全国学生センターに指導され、独裁者タノームの帰国に抗議するために合法的かつ平和的に集会を開いていた若者、生徒、学生たち、さらに祖国を愛し、民主主義、正義を愛する人民は、反動的売国奴たちの手によって、彼らが仏教徒の街と称するバンコクの真只中で、しかも数百人のタイ人・外国人新聞記者を含む数万人に及ぶ一般民衆の見ている前で、公然と虐殺された。そして今回の事件は、反動的支配階級の犯罪を、若者、生徒、学生、人民の前に、言い逃れるすべもないほどはっきりと示した事件であった。

彼らはこの日、武器をもたない若者、生徒、学生、人民を虐殺した。たとえば首に縄をかけて死ぬまで街路を引きずり、殴る蹴るなどの暴行を加えて殺し、あるいは生きたまま棒を突き刺し、首吊りにし、焼き殺したのである。なかには強姦され、略奪されたものもいた。また男子学生も女子学生も全て強制的に服を脱がされ、地面に腹這いにさせられた。このような残虐行為は、ファシスト独裁体制の本性を、またアメリカ帝国主義にこびへつらう継子のような極右ファシストたちのタイ史上例をみない残虐さと悪辣さを、このうえなくはっきりと暴露させることになった。

（一九七五年ラームカムヘーン大学学生自治会委員長
一九七三年NSCT副書記長教育社会担当）
（一九七六年一二月一〇日、『タイ人民の声』放送一九七七年一月二日）

極右ファシストたちが、祖国を愛し、民主主義を愛するわれわれの兄弟姉妹、友人たちに加えた野獣にも劣る残酷な虐殺、それに対するわれわれの心の中の激しい憤りは到底言葉では言い表わせない。われわれは彼らのために幾度となく涙を流すであろう。われわれの流す涙は残酷にも殺されたわれわれの友人、兄弟、姉妹、家族の一員の屍体を洗うに十分なほどだ。さらにわれわれは、タイ全国学生センターの書記長であるスタム・セーンプラトゥームと全てのＮＳＣＴ執行委員及びその他の役員、そして極右ファシストたちによって逮捕された全ての友人たちのために涙を流すであろう。

今回の極右ファシストたちのあり余るほどの大罪は、人民に対して血をもって償われなければならないものだが、しかしそれはたとえ彼らが体中の血を流したとしても償えるものではないだろう。彼らの大罪は犬畜生にも劣る彼らの肌に刻みこまれ、その罪は、永遠に忘れ去られることはないであろう。そして「血の10月6日事件」で彼らが犯した悪辣な行為は、今やタイ全国の人民と正義を愛する世界中の人々から非難されているのだ。

今回の流血事件は、極右反動的支配階級、大サクディナー勢力、大資本家、軍部たちと、連中が実の父よりも尊敬しているアメリカ帝国主義の間の公然たる陰謀の結果であった。彼らはあらゆる種類の戦争兵器と国家機関を使って気違いじみた虐殺をおこない、ＣＩＡが金を出している大サクディナー勢力の国境警備警察軍も、若者、生徒、学生、民衆を残酷に殺戮するために呼び寄せられた。また彼らは、ならず者の頭目である「ルーク・スア・チャーウ・バーン」や「自由放送グループ」を使って、流血事件のきっかけをつかむための緊迫した状況をつくりだし、さらにはアメリカ

帝国主義の手先である「ナワポン」や「赤い野牛」、暴動鎮圧隊、「サワット60」殺人部隊といった組織を他の反動的手先とともに動員して、今回の流血事件を計画的にひきおこした。彼らは無反動砲、手投げ弾、機関銃などあらゆる殺人兵器を使って、武器を手にしないまま集会に集まっていた人々に銃弾を浴びせかけ、その結果タマサート大学とチャオプラヤー川では実に一〇〇人近い人々が殺され、さらに数百人に及ぶ人々が傷ついた。

彼らは、若者、生徒、学生、人民を十分弾圧・虐殺して、自らの目的を達成し終えると、クーデターを断行して統治権力を奪取し、サンガット・チャローユーを極右反動勢力の頭目にすえ、売国奴ターニン・グライウィチアンを傀儡政府の首相に任命した。そして彼らは自らを国家統治改革団と称し、あるいは「国王を元首とする民主政体下の政府」と呼んだ。同時に彼らは、さらに多くの若者、学生、労働者、農民、教師、作家、医者、新聞記者、ジャーナリスト、公務員、政治家及び祖国を愛し、民主主義を愛するあらゆる階層の人民を逮捕・拘禁した。彼らのヒステリックな逮捕は現在も依然として続いている。こうして彼らは家族たちを破壊し、何百何千という家庭を分裂させ、ひどい空腹と困難に陥らせている。彼らは、独裁的な権力を用いて、労働者や農民その他あらゆる階層の人民からあらゆる自由を奪い取った。彼らは人民が政治活動に参加することを禁止し、夥しい数の出版物を焚書に付した。さらに学校の閉鎖を命じ、クラブ、研究会、協会などあらゆる学生組織、並びに全ての学生自治組織、及びＮＳＣＴを廃止し、通達を出して強権的に教師の政治活動への関与を控えさせ、全ての教師の組織を廃止し、政治的社会的研究を禁止し、若者たちの目と耳と口を完全に封じ込めることを企てた。

この連中は、ちょうどサリット、タノーム、プラパートなどの強奪者の時代と同じように、生徒、学生たちを帝国主義的サクディナー（封建）主義的文化の中に耽溺させようとした。また彼らは、労働者がストライキに起ち上がり、農民が正義とよりよい生活を求めて闘争に参加するのを禁止した。彼らは、家庭、ホテル、教育機関を捜索し、商店、病院、僧院すらも家捜しの対象とした。人民の基本的な自由と権利を蹂躙しているサンガット・チャローユーとターニン・グライウィチアンら極右ファシストたちのこれらの悪辣でヒステリックな行為が、タイ史上最悪のものであることは明らかである。

親愛なるお父さん、お母さん！　祖国と民主主義と正義を愛する国民のみなさん！　先生方！

われわれ――あなたがたの子供であり、あなたがたから教えを受けた若者、生徒、学生は、人民の汗と労働、及び先生方の暖かい愛情とお世話によって成長し教えられてきた。われわれは、あなたがたが人民裁判の場に裁判官として席を占め、反動的支配階級の若者、生徒、学生、そして各界各層の人民に対する先例のない極悪非道な血の負債を審理し、判決を下すことを訴えたい。同時にわれわれは、強奪者サンガット＝ターニン一味が祖国と人民を売り渡したことに対してあなた方が判決を下すことを強く訴えたい。

親愛なるお父さん、お母さん！　国民のみなさん！

われわれ若者、生徒、学生、そして祖国を愛し、民主主義を愛する各界各層の人民と、一握りの頭目からなり、「血の10月6日事件」と売国的クーデターを起こしたアメリカの手先である極右フ

ァシストたちとの間の対立は、愛国者と売国奴との対立である。われわれは独立と民主主義を求めてきたが、彼らは国の売り渡しとファシスト独裁を望んできた。われわれは抑圧され、搾取されている人々の正当な権利と利益のために闘ってきたが、しかし彼らはあらゆる手段を行使し、彼らの悪辣な抑圧を維持せんとして、われわれの闘争を弾圧し妨害してきた。

アメリカ帝国主義に導かれたあの帝国主義者どもは、われわれの祖国に侵略し、干渉し、支配し、略奪し、豊かであった国を貧しく後進的な国に変えた。祖国と民主主義を愛する若者、生徒、学生、人民は、「10月14日」の事件発生以降起ち上がり、結集し、アメリカ帝国主義の経済的、政治的、軍事的支配に断固として反対する愛国的運動を展開してきた。またわれわれはアメリカ帝国主義がスパイ活動をおこなうために、軍事基地やレーダー基地を設置することに反対し、マヤグエス号事件の時のように、近隣の友好諸国に侵略することに反対し、ついには、傲慢なアメリカ帝国主義が、わが国からその軍隊と基地を撤退することを余儀なくさせた。そしてこのような若者、生徒、学生、そして人民の愛国的運動は、わが国に偉大な栄誉をもたらしたのである。

しかしながら、アメリカの新しい手先であるサンガット＝ターニン極右ファシストの一味は、彼らの主人にかわってこうした動きに怒りを示した。彼らは権力を奪うとすぐにアメリカ帝国主義を呼び戻し、タークリー空軍基地やその他の場所を公然と使用するように促した。さらにアメリカ帝国主義が再びタイにアメリカ兵を送ってわれわれの領土と国民を蹂躙するような口実と条件をつくりだした。これは大地主、大資本家、ファシスト軍部らによる悪辣極まりない売国奴行為である。したがって祖国を愛する全ての人民は、彼らを断固非難し、彼らと最後まで闘わねばならない。

一方、祖国を愛する全ての若者、人民はアメリカ帝国主義がわが国に進出し、陸海の資源を略奪することに反対してきた。たとえば毎年二億バーツに及ぶわが国の亜鉛鉱石をかき集め、かすめとってきたタイ亜鉛会社に採掘権を与えるのに反対した。この採掘権の有効期間は二五年で、推定五〇億バーツ総額以上もの利益をもたらしている。またわれわれはアメリカ帝国主義に年間四・八億バーツ近くの利益を与えてきたビリトン社に採掘権を与えることに断固反対した。さらに数十億バーツの錫を採掘してきたテムコ社や、アメリカ帝国主義と金融面で結びつき、一九七一年から七五年の間に七・二二億バーツに及ぶ利益をかき集め、一方同じ五年間に一〇〇〇人近くのタイ労働者にはわずか七〇〇万バーツ、つまり彼らの純益の一パーセントにあたる額しか賃金を支払わなかった「トゥンカー港湾会社」や「カムティン港湾会社」「南キンタ会社」にも反対した。

これらの事実はわれわれ若者が団結して、真に祖国と人民の利益を守るために闘ってきたことを十分証明している。人民の利益を売り渡してきた売国奴的手先たちだけがわれわれの闘争を誹謗中傷してきた。若者や生徒、学生によるアメリカ帝国主義勢力に対する反対は、正当かつ理にかなった闘争であり、祖国と人民に大いに貢献するものであった。一方、このようなわれわれの愛国的闘争は、これらの独占資本から残りものを頂戴していたアメリカ帝国主義の手先である大地主や大資本家たちの利害に深刻な影響を与えた。そこで彼らは主人の利益を守るためにありとあらゆる手段を使ってわれわれの愛国的闘争を脅し破壊した。そして極右ファシストであるサンガット＝ターニンの一味は、権力を奪うとすぐに大々的に宣伝をおこない、恥知らずにも外国の独占資本を招いて、大規模にわが国の豊富な資源を略奪させ、安価な労働力を搾取させることを企てた。

大地主や大資本家階級の支配と搾取の下で、タイの状況は悪化し、混乱に陥った。経済は破綻し、道徳は腐敗堕落した。労働者はきわめてひどい搾取を受け、飢えにさいなまれ、みじめな生活状態に追いこまれ、いかなる政治的権利も失ってしまった。工場労働者や従業員は低賃金の下でひどく搾取され、福利厚生の設備などもなかった。彼らの大部分の労働条件は、奴隷のそれと同じだった。何百万もの人々が失業に追いやられ、その数は今後ともますます増大の傾向にある。労働者の家庭の生活状態も窮迫をきわめており、そのためどの家庭も日々の生計をたてるのに四苦八苦している。彼らは健康を害した時のことや、衣服、住居、子供の教育などを考える暇もない。というのも、反動的支配階級がこういった問題に本当に関心を向けたことなどまるでなかったからである。

人口の最も大きな部分を占め、また「国の支柱」として重んじられてきたわれわれの同胞である農民たちも大地主や高利貸しから高い小作料や利息を絞り取られた。彼らの土地もだまし取られ、米やその他の生産価格も最低限に抑えられてきた。しかも反動的国家機構である地方及び中央の役人たちは（地主たちと）結託し、ありとあらゆる方法をもって農民たちを搾取した。一方大多数の農民は、このような状況の下で生き延びるために必死に働きつづけたが、しかし彼らは年がら年中また一生をつうじて貧しい生活を送らざるをえなかった。そのため少なからざる人々が破産し、農地を手離し、バンコクやその他の大都市に赴いて自らの労働力を売ることを余儀なくされた。そしてこのことは、彼らにとって奴隷的労働に強制的につかされ、引き続き搾取されることを意味するだけであった。また露店商人や行商人の場合も、数万人の人々が反動的国家機構である警察や市当局によって抑圧され迫害され、動物のように追い回され、駆逐された。彼らが逮捕・処罰されない日

は一日としてなかった。その結果彼らは窮迫のどん底に落ち、たとえ今日生き延びたとしても、明日はいったいどうやって食べていくのか誰もわからないという有様だった。

国の未来であり希望である若者や生徒、学生の大多数は、教育を受ける機会すらない。一方教育の機会をもつものは、腐敗した教育・文化制度――若者や生徒、学生を毒し、彼らを帝国主義、封建主義、官僚資本主義に役立つように教え込み、また人民の上に立ち、労働者大衆の汗と涙から自らの幸福を築くような悪しき社会の特権階級の一員となることを教え込み、あるいは自分のことだけを考え、「わが身第一」の言葉に従い、手の長いものが欲しいものを手に入れる(強いものが勝つ)といった生き方を教え込む制度――にどっぷり浸っている。

しかし彼らの欺瞞的やり方もわれわれ若者の国を愛し、人民を、正義と進歩を愛する若者の心を破壊することはできない。一握りの反動的支配階級を助けるためにわれわれは学ぶのではなく、むしろ人民と協力して帝国主義勢力を駆逐し、祖国と人民の破滅の元凶である売国的な大資本家や大地主勢力を打倒するために勉強するであろう。われわれ若者は、人民の上に君臨し、抑圧階級の一員になるために勉強するのではなく、むしろ労働者や農民そして働く民衆に目を向け、被抑圧階級の側につくであろう。今や若者、生徒、学生は目覚め、真実を、即ちわれわれが成長し、学び、知識と実力を身につけることができたのは、ひとえに労働者、農民、そして働く民衆全ての汗と労働、そして諸先生方の愛情とお世話の賜物であることを知るようになった。われわれは決して彼らから受けたこの大きな恩恵(ブン)を忘れはしないであろう。否、だからこそ若者、生徒、学生たちは教室を去り、搾取され抑圧されている労働者、農民そして働く民衆がよりよい生活を求めて展開し

ている闘争に、そして反動的支配階級がいつの時代にもずっと踏みにじり破壊してきた自由や権利、そして民主主義を求める闘争に、さらにまた帝国主義や封建主義、官僚資本主義の軛から人民や祖国を解放するための闘争に参加していったのである。

この若者や学生の正当かつ輝かしい闘争の新たなる進展は、帝国主義、封建主義、官僚的資本主義の抑圧搾取の下にあった広範な働く大衆、そして民族資本家たちから暖かく迎え入れられた。彼らは自分たちの子弟を含むわれわれの闘争を支援し、これに加わり、擁護した。その意味でタイ全国学生センターに率いられた若者、生徒、学生の運動は広範な人民が心から賛同し、そしてまた支援した運動であった。あらゆる策略を用いて人民を弾圧してきた反動的支配階級に対するわれわれ若者の闘いは、この四年を越える期間の間に、妥協を許さない過激なものへと発展していった。しかしたとえどんなに闘争が険しく、かつ困難であっても、われわれはその間人民を見捨てることはなく、また人民も決してわれわれを見捨てることがなかった。

一九七三年一〇月一四日、若者、生徒、学生、そして祖国を愛し民主主義を愛する全ての人民は団結し、それを強力な力となし、タノーム、プラパート、ナロンの三暴君によるファシスト独裁体制を倒壊させ、一定程度の自由と権利を手に入れた。

悲しいことに人民が反動的支配階級に対し自らの血を流してかちとった諸権利と自由は、彼らによって再び蹂躙され奪い取られてしまった。「10月14日」の勝利の後、われわれ若者の一部は人民の代表が政権を担当し、新政府は人民の政府になり、新たに選出された議会は人民を代表するであろうと期待していた。われわれはタイを真に独立した民主主義の国に作り上げるために彼らは力を合

わせるであろう、そして工場労働者や農民そして働く民衆、すなわち国民の大多数の飢えと貧困の問題を本当に効果的に解決してくれるものと期待していた。また彼らが零細な、また民族資本家を倒産の危機から効果的に救い上げてくれるものと期待していた。われわれは彼らがわが国とわが国の経済を発展させることができるであろうと期待していたのであった。

悲しいことに、われわれの期待は見事に裏切られ、まったく逆の事態がおこった。政府、議会その他の国家機構をも含むあらゆる政治的諸制度は、相変わらず反動的支配階級の抑圧と搾取の道具として機能した。「10月14事件」以前と以降では、国家権力は、その本質において何の違いもなかったのである。もし違いがあるとするならば、それは方法と形態の違いにすぎない。国家機構は引き続き人民を抑圧し弾圧し、アメリカ帝国主義者、大地主及び買弁的大資本家たちに奉仕することをめざしていたのである。

われわれが血と生命という大きな犠牲を払って得た教訓は、およそいかなる反動勢力も、独立・民主主義・正義を祖国及び国民の手においそれと譲り渡すことはないということであり、だからこそわれわれ人民は、力を結集し、彼らと闘わなければならないということであった。そして月日が経つにつれ、若者は、大地主たちが富を蓄積すればするほど農民の大多数の貧困はますますひどくなることを、また祖国を裏切り略奪することによって大資本家たちが富裕になればなるほど工場労働者や従業員など全ての労働力を売っている人々はますます貧しくなることを、反動的支配階級の生活がぜいたくになればなるほど大多数の国民の生活はますます貧困に打ちひしがれるようになることをいっそう認識するようになった。若者や学生が工場労働者や農民その他全ての働く民衆の側

に立ち、非常に貧しく悲惨なこれらの人々とともに断固として闘おうとした理由はまさにここにあった。

若者や生徒、学生は、労働者、農民、そして各界各層の人民とともに正当な自由と権利を行使してアメリカ帝国主義者の支配に抗議し闘い、正当な賃金を要求し、生活の糧を得るための土地を求めて闘い、そして三人の暴君がタイに帰国することに反対した。これらの闘争は反動的支配階級自身が定めた法と規則の範囲内でおこなわれたが、しかし反動的支配者たちは、若者や学生、生徒、人民が、自らの正当な諸権利を行使することを認めるどころか、逆にファッショ的暴力に訴えて卑劣かつ野蛮に彼らを抑圧し、弾圧した。そして彼らはタイを歴史上かつてないほど暗黒の時代へと導いていったのである。

広範な大衆は、改革議会もターニン傀儡政府もアメリカ帝国主義者、大地主、買弁的大資本家たちの利益を維持するためにほえたてている飼い犬たちの首領の集まりにすぎないということを今やはっきりと理解している。彼らは自分たちの国を売り渡すという反国家的、反人民的行為を覆い隠すべく可能な限りあらゆる手段を講じてきた。しかし手で空をすっかり覆い隠そうとしているようなもので、彼らがその裏切行為を覆い隠すことなど所詮不可能なことである。

この一握りの祖国と人民を裏切った連中が、真の独立と民主主義及び繁栄をともなった新しいタイを建設することなど到底できない。むしろ真の独立と民主主義、繁栄をともなった新しいタイを建設するためには、われわれ人民こそが、この売国的ファシスト一味の支配を打倒する必要がある。新しいタイを建設するための闘争の中心勢力は、労働者、農民、零細資本家、さまざまな国籍の民

族資本家、並びに全ての祖国と民主主義と正義を愛する人々、即ちわが国の真の所有者であり、心から祖国と民主主義を愛しており、帝国主義と大地主、大資本家たちによって抑圧・搾取されてきたわが国の大多数の人々、とりわけ労働者階級と農民、即ち著しく抑圧され搾取されてきた貧しい人々の階級である。全ての階級の人々は、団結し、自らの力を強化し、ファッショ的で売国奴のあの悪党たちの一派を打倒するために闘い、そして人民の政府を打ち建てねばならない。そうすることによって初めて、労働者は自らを隷属から解放することができ、農民は自分自身の土地を所有することが可能となり、またわが人民は抑圧の軛から真に解放され、愛する祖国タイを真に独立した民主的で豊かな国にすることができるのである。

親愛なる、そして尊敬する兄弟のみなさん！　祖国を愛し、民主主義、正義を愛する全ての国民のみなさん！　尊敬すべき最愛の先生方！

過去のあらゆる闘争において、われわれ若者や生徒、学生、人民は、一貫して誠実をもととし、あくまで平和的手段を用いてきた。そしてできる限り理にかなった闘争を堅持し、また相手もわれわれの道理に耳を傾け、同じように平和的やり方で対応してくれるものと期待した。しかしこれは「強盗から正義を学ぶ」のと同じであることをわれわれは後になって知らされた。彼らは決して人民に対して理にかなった方法を取らなかったのだ。その証拠に彼らは、若者、生徒、学生、人民が法の枠内でアメリカ帝国主義の撤退を要求し、正当に闘っていた時、彼らに向かって手投げ弾を投げつけ殺したのである。それればかりではない。農民が正義のために闘い、生活の糧を得るための土

地を要求していた時、何百人に及ぶ農民とその指導者たちを彼らは殺した。また工場労働者や従業員が賃金の引上げと福利厚生の改善を求めて闘っていた時、制服をまとったごろつき共は、労働者たちを棒で殴打し、銃で撃ち、あるいは共産主義の容疑で逮捕・拘禁したのであった。最後に、若者や生徒、学生及び各界各層の人民が、独裁者タノームの帰国に反対して闘っていた時、彼らはバンコクの真只中でこれらの人々にさまざまな残虐行為を加え、さらには大量に虐殺した。そしてごろつき共の一味は、その後クーデターをおこなって政権を奪取し、ファシスト独裁制を復活させ、人民に対する大規模な弾圧・逮捕にのりだした。そして人民をこのような大厄災の中に落とし入れる一方、彼らはわが愛する祖国タイを地獄、暗黒の収容所に一変させたのである。

親愛なるお父さん、お母さん、兄弟姉妹たち！　祖国を愛し、民主主義、正義を愛する全ての国民のみなさん！　敬愛し尊敬する先生方！　そして親愛なる若者、生徒、学生のみなさん！

以上の事実を見れば、われわれが人民の悪辣な敵である極右ファシストを打倒し、人民の新しい国家権力を打ち立て、真に人民を代表する政府を樹立するのは、きわめて当然のことではなかろうか。極右ファシストのサンガッド＝ターニン一味は、過去あらゆる時代の反動的支配階級と同じように、野蛮かつ残虐な弾圧でもって人民の闘争を鎮圧することができるものと夢見ている。しかしタイ人民の強い愛国心と民主主義を愛する心は、彼らが連中に屈することを決して許さないであろう。「10月6日」の流血事件における若者、生徒、学生そして人民の英雄的闘いは、単に闘争を堅持し、犠牲をもいとわない彼らの精神を示したばかりでなく、祖国の独立と人民の民主主義のため

に闘うという「10月14日の意志」の継承をも意味した。「10月6日」の英雄たちは、彼らが連中の残酷きわまりない抑圧や足枷、牢獄すらも何ら恐れていないことを証明したのだ。

いかに残虐な手段をもってしても、われわれ若者の祖国と人民に対する信念を、そして独立と民主主義を愛する心を破壊することはできない。「10月6日」の英雄たちの偉大なる行為は、タイ人民の心の中に永久に残るであろう。そしてそれは祖国と民主主義を愛する若者や人民を奮起させ、人民の勝利をかちとるために英雄たちが流した血をさらに発展させるための輝かしい前例となるであろう。われわれは、英雄的闘いを断固として推しすすめたわれわれの友人、兄弟姉妹たちに対して敵がおこなった行為を想うとき、怒りで体中の血が煮えたぎる思いがする。われわれは今ここに、「10月14日」の英雄たちの意志と「10月6日」の英雄たちの意志を受け継ぎ、広範な大衆と団結し、人民の勝利をかちとり、真の独立、民主主義、そして社会正義をそなえた新しいタイを実現することを固く決意した。

親愛なるお父さん、お母さん、兄弟姉妹たち！　祖国を愛し、民主主義、正義を愛する全ての国民のみなさん！　そして敬愛し尊敬する先生方！　その全ての人々に対してわれわれは次のように宣言する。われわれは喜んで自らの精神的、肉体的力を結集し、祖国と民主主義を愛するあらゆる個人並びに政党、団体、組織と団結し、極右ファシスト政権を打倒し、かつまたアメリカ帝国主義を駆逐し、人民の政府を樹立するために闘うであろう。

今日この日から、われわれの平和的闘争には終止符が打たれた。「血の10月6日事件」によって

極右ファシストたちは、われわれが新しい闘争の時代を、彼らの反動的暴力に対しては革命的暴力でもって対抗するという闘争の新たなる時代を切り拓くことを余儀なくさせた。われわれは彼らの犯罪を、口や文書をつうじて暴露するだけでなく、銃には銃を、血には血をもって応えるという闘争をおこなうであろう。われわれはタイ全国の広範な大衆と団結し、一握りの反動的支配階級を打倒するためにともに闘うであろう。そして彼らの血をもって、彼らが「10月14日」と「10月6日」に犯した途方もない大罪の血債の償いとなすであろう。

極右ファシストのサンガット＝ターニン一味は、国内外で次第に孤立しつつある。また彼ら自身の内部の利害対立も深刻化している。彼らの選ぶべき道は次第に狭まり、刻一刻と死滅に向かいつつある。隘路を打開することはできない。彼らの終末はすでに目前にまで近づいているのだ。

一方さまざまの形態をとった人民の闘争は、ますます広範囲に広がり、日々その激しさを増している。そして彼らの闘いは、タイ国内国外の人々、都市に住む人々、そして反動的支配下にある人々から完全なる支持と共感を得ている。屈伏を認めない労働者、農民、貧しい人々、若者、生徒、学生、各界各層の人民は、今や勇敢なる心と巧妙なる戦術を駆使して、ありとあらゆる戦場で闘いを堅持し、また闘争の中心形態であり、今や急速に発展している農村の武装勢力の闘争と連帯している。人民の闘争は絶え間なくその戦線を拡大し続け、彼らは日々大勝利をかちとりつつある。

広範なる人民の闘争は正義にかなったものである。一方極右ファシストの反動的支配は正義に背反している。勝利は必ず人民の側にあるだろう。極右ファシスト一味は絶対に敗北するだろう。彼ら極右ファシストの崩壊と人民が勝利する日は、刻一刻と近づきつつある。たとえ水が枯渇し、山

が砕け散ろうともこの真実は決して変わることはない。

「10月14日」と「10月6日」の英雄たちの意志を発展させよ！
サンガット＝ターニン極右ファシスト一味を打倒せよ！
アメリカ帝国主義を断固追放せよ！
人民戦争は必ず勝利するであろう！
独立・民主主義・繁栄をそなえた人民の新しいタイは必ず実現するであろう！

資料54

人民戦争、輝かしい勝利の一年

タイ共産党
（『タイ人民の声』放送一九七六年一二月三〇日）

一九七六年――それは人民武装闘争にとって輝かしい一年であった――は、画期的段階にはいった革命とともに今終ろうとしている。タイ全国に広がっている人民解放勢力は、一九七七年のより大いなる勝利をめざして、そしてこのうえなく勇気ある精神をもって、着実にかつ断固として前進しつつある。

一九七五年八月のタイ人民解放軍の創立一〇周年記念日の声明と、七六年一〇月七日のタイ共産党の強靱かつ確固たる声明にふるい立った全土の人民武装勢力は、この一年、あくまで闘いぬく精神と、あらゆる辛苦を耐えしのぶ意志を、十二分に発揮した。

彼らはあらゆる障害をのり越え、人民戦争の戦略・戦術をつくして、あらゆる機会・条件を捕捉し、攻撃にのり出し、敵を徹底的に打ち砕いている。彼らは輝かしい勝利につぐ勝利を重ね、偉大なる業績をあらゆる分野でつくり上げてきた。

革命的戦争の燃えさかる炎の中で、タイ全土の解放勢力はますます大きくなり、ますます強大なものになっている。彼らは、戦闘能力を改善し、敵を打倒するための実力をさらに一段と引き上げた。彼らは今や、より広範な戦争――村の防衛基地、行政村（タンボン）の防衛隊、行政村の警察署から郡警察署、警官の攻撃に至るまで――を担うだけの力を持つに至った。彼らは敵の武器をますます奪い取って自ら武装している。彼らは、殲滅作戦の展開、捕虜処遇の方法を改善してきた。このことは、タイ共産党に率いられた人民戦争が支障なく拡大し、また進展するのを助けてきた。

不完全な数字ではあるが、この一年の間にタイ人民解放軍は、タイ全土で二四六一名の敵を倒した（内訳は、一〇一五名死亡、一三〇〇名負傷、一四六名捕虜）。また人民解放軍は、六一一丁のライフル銃その他の武器を捕獲し、四五個の通信器材を奪った。さらに彼らは三六機の航空機に損害を与え、七〇台の敵の軍用車等を破壊した。（一九七七年一月九日の『タイ人民の声』放送によると、一九七五年一年間の人民解放軍の攻撃は七五回で、敵側の死亡者数は四五〇であった。また七六年一〇月六日の大虐殺から七七年一月までの三ヶ月弱の戦果は、攻撃回数が一〇四回、そのうち敵側の死亡数は二四六名、負傷者

は三三三名、捕虜は六四名で、計六四三名に達する。地域的内訳は北部が二三八名、東北部が一八七名、南部が二〇三名、東部が一五名である。またこの三ヶ月弱の間に解放勢力は、一五七の武器を奪い、二四の自動車（トラックその他軍用車）を破壊し、六機のヘリコプターを撃墜するか破壊させたという。）

アメリカ帝国主義の命令の下で、あの「血の10月6日」を遂行した、巨大なサクディナー勢力、大資本家、軍部の一味は、血に飢えたかのように残虐に、あらゆる階層の学生・民衆を弾圧しにかかった。彼らは、ファシスト独裁体制の全面的復帰をめざすクーデターを画策し、タイ全土に及ぶ人民解放軍に対してこのうえない憎悪の牙をむきだしにした。しかし人民解放軍は、こうした敵に対して勇気ある闘いを挑んだ学生・民衆の勇敢なる精神を学んでいく運動を展開し、「10月6日」の英雄たちがつくりだした果敢なる闘争方針を学び取った。

人民の復讐をはらそうというタイ共産党のアッピールに応え、タイ全土の人民解放軍は、革命的英雄精神の発揮にのり出し、敵に対する積極的攻撃を開始した。彼らは、よりいっそう頻繁に、かつよりいっそう広範な攻撃に転じた。今彼らは、次々と輝かしい勝利を収めている。スラートターニー県（南タイ）の人民解放軍は、一一月一四日、一五日そして一六日に、三二名の敵を倒した。この闘いで県副知事は死亡し、他の者は負傷し、警官一人（陸軍の少将の位にあたる）が重傷を負った。またナーン県の人民解放軍は、一二月二六日の攻撃で、第一一一地上機動部隊第二中隊の兵士二六名を倒した。死亡者の中には、中隊長も含まれている。この攻撃はサンガット＝ターニンの売国的反動ファシスト一味を心底から驚愕させた。

この一年間の人民解放軍の輝かしい勝利は、まさに人民戦争の勝利である。それは、タイ共産党

の指導の下で武装闘争を通じて政治的権力を奪取するというやり方に対する人民の一貫した信頼の勝利である。彼らの勝利は、武装闘争による政権奪取の道を確信する人民の数をますます増大させている。彼らは、こうした道によってのみ、わが国及び人民の問題は真に解決されうるのだということをますます確信するに至っているのだ。

祖国・民主主義・正義を愛する広範な大衆、とりわけ、巨大なサクディナー勢力、資本家、軍部がファシスト独裁支配体制に拍車をかけ、血に飢えたように人民を弾圧し迫害したあの「10月6日」の大虐殺以来、ますます真実に目覚めることになった。事実彼らのうち多数が武装闘争を展開する人民の隊列に加わってきた。多数の若者、学生、少年少女が、革命的根拠地や広範な農村の解放区にはいり、断固として武装闘争に加わっている。人民解放軍の力は急速に広がり、彼らがより多くの敵を倒し、より大きな勝利を収めるための条件は、ますます整ってきた。これらの若者、学生、労働者、農民、政治家、そして祖国と民主主義を愛する人民は、革命的根拠地や解放区にいる大衆、人民解放軍によって暖かく迎え入れられた。各県の解放区は、タイ人民解放のための後背地を守り、反動勢力によって支配されている地域の人民に対して、強力な支援をおこなっている。

この一年間のタイ人民解放軍の輝かしい勝利は、祖国・民主主義・正義を愛する全国の人民に、多大の勇気を与えた。それは反動勢力によって支配されている地域の人民の士気を著しく高めた。彼らの勝利はこうした地域の祖国・民主主義・正義を愛する人民にとって直接的間接的支えとなった。一方、彼らの勝利は敵に対して決定的打撃となり、敵の士気を大きくそぐことになった。今や敵はどこでもパニック状態に陥っている。

裏切者のサンガット＝ターニンの一味は、最近実に愚劣なことにタイ共産党と人民解放軍を誹謗中傷する活動に力を入れている。さらに彼らは、人民と人民解放軍を弾圧する動きに狂奔し、軍、警察、民間の防衛隊を使ってきた。しかしこのことは、恥知らずの敗北と事態の進展が進む中で、彼らが抱いている恐怖をはからずも反映しているにすぎない。タイ共産党の完璧な指導の下にある人民解放軍は、一九七六年の輝かしい勝利に引き続いて、大衆をさらに動員し、武装勢力をますます拡大し、解放区を広げ、根拠地を強化し、それをさらに拡大していくことだろう。彼らは反動勢力の支配下にある地域の人民と手をつなぎ、彼らを支援していくだろう。そして彼らは、一九七七年の新たなる武装闘争をさらに推し進め、より大いなる勝利を手にすることだろう。

資料55

南タイ・ムスリム学生指導者の声明

サマーン・ルアットワォンハット
ナレ ッ ト・ス マ リ

（一九七七年一月二八日、『タイ人民の声』放送二月一二日）

〈サマーンの略歴〉

ナコンスィータンマラートの生まれ。タマサート大学に入学した年から反独裁の闘争に参加し、タマサート大で「正義の力」党を結成する。「10月14日」の偉大なる事件のときには、タイ全国学生センターから、闘争の間中集会の総責任者を任される。その後自由学生連盟を結成し、国家主権と民主主義を守る闘いに参加した。

一九七四年、タマサート大学生会議議長、一九七五年、タマサート大学生自治会委員長。

〈本　文〉

親愛なるムスリム（回教徒）、仏教徒のみなさん！　そして祖国を愛し、民主主義、正義を愛するタイ国同胞のみなさん！

一群の血に飢えた野獣どもがこのタイ国土に現われ、われわれの聖域は信心深い人々の流した血で染まった。これは現在権力を握っている悪辣で野蛮な犯罪者たちの手でおこなわれた。大衆がパニック状態の中で叫び声をあげているさなか、そして一〇月に流された血がまだ渇き切っていないというのに、今また彼らは新たな罪を犯しつつある。

この新たな犯罪は今年の一月一四日に、サンガット＝ターニン極右反動的支配階級と反動的戦争挑発者たるフセイン・オンの結託の下に開始された。（これはタイ・マレーシア軍共同による南タイ共産主義掃討作戦＝ビッグ・スター作戦をさす。二月五日まで続けられた。その後三月一四日から四月一八日まで、タイ軍一四〇〇名、マレーシア軍三二〇〇名の共同の下で第二次ビッグ・スター作戦が展開された。いずれも大がかりな作戦であったが、しかし南タイのゴム栽培者と住民に甚大な被害を与えただけで失敗に終った。）彼らは相互に協力して、国境地帯に住むタイとマレーシアの国民——ムスリムと仏教徒——を広範囲に

わたって弾圧している。彼らは大がかりなタイ・マレーシア合同軍を送り込んで攻撃し、爆弾や大砲を使って人民の住宅を破壊しているのだ。彼らは血に飢えたようにうろつき、南タイの無辜のムスリムと仏教徒を逮捕し、迫害している。人民は略奪され、収容所に投獄されつつある。今この地域には、混乱、不安、パニック、悲惨な状態が広がり、あるものは殺され、またあるものはさまざまな容疑で逮捕された。彼ら反動勢力は南部の愛国者たちの闘争――日本帝国主義者の侵略から今日に至るまでの長い闘争の歴史で知られる愛国的かつ勇敢な彼らの闘いの成果を破壊しようと努めているのだ。

この海賊まがいのサンガット＝ターニン及びフセイン・オン一味の犯罪はしかし思いがけない行動、偶然の産物ではない。むしろそれは長い間計画され実施されてきたことだ。タイ・マレーシア国境委員会の議長をつとめるチャルドン・ポンパニットによれば、南部のタイ・ムスリムに対する掃討作戦は、これまでタイとマレーシアで別々に進められてきたが、両国は情報を交換し、きわめて密接に協力し合ってきた。またタイの一味は、共同作戦の会議に出席するためマレーシアを訪れ、共同掃討作戦の成果を値ぶみし、よりいっそう本格的な作戦の展開を計画したと伝えられる。

南部のタイ愛国者の壮烈な歴史は、人々の記憶に永久にとどめられることだろう。タイの反動的支配階級は、これまで常に南タイに対してことさら苛酷な弾圧政策をとってきた。しかしそのことは南部の階級対立をますます深刻なものにし、いっそう先鋭化させただけである。反動的支配階級はこの対立を解決することができない。このことに関連し、反動的支配階級は、南部の抑圧された国民の闘争の真の目的を歪曲しようと、つまり階級対立をナショナリズムにすりかえ、分断的支配

を図ろうとした。しかし彼らの残虐な弾圧は、常に南部のムスリム、仏教徒である英雄的人民の激しい抵抗にぶつかった。一人が斃れると別の一人が起ち上がって闘いに続いた。

第二次世界大戦の終了直後に、数百名のムスリムが反乱、共産主義及び分離主義の容疑で逮捕された。そのうち一〇名以上が、川に投げ込まれ溺死させられるといった最も残酷なやり方で殺された。こうして逮捕は、独裁者サリット、タノーム、プラパートの時代まで続けられた。反動的支配階級のおこなった残虐行為は、人民がはっきり目撃している。その後クックリット・プラモート政権の時には、パッターニー県の数万人の英雄的住民が海兵隊による五人の住民虐殺に抗議してデモをおこなった。しかしデモに対して爆弾が投げられ、われわれはさらに九名の犠牲者を出さなければならなかった。さらに最近では、ヤラー県ベトン郡の住民が、ファッショ的マレーシア軍の主権侵害に抗議して大規模なデモを展開した。

こうした動きは、一時的に弾圧の度合いを弱めるのに役立った。しかし血のクーデターの後権力を奪取した売国奴サンガット＝ターニンの一味が登場するに及んで、南タイの人民に対する弾圧キャンペーンは今一度その激しさを増すことになった。弾圧作戦は、欧米の新聞特派員が最も残虐で非人間的な弾圧と呼んだほどの激しさを帯びるに至った。

この血に飢えた反動的支配階級は、人民の問題の解決に何の関心も払わなかった。貧困と飢餓は野火のように広がっているのに、彼らは意に介さなかった。それどころか人民を弾圧し駆り立てることに力を入れてきたのだ。南部の人民は恒常的に洪水の犠牲になってきたが、これもまた意に介

さなかった。彼らが関心を払ったのは次のことだけである。つまり洪水がひくと、外国の軍隊の助けを借りて人民を弾圧し、国家の主権を犯すことだけだった。

反動勢力は、口を開けばタイ人は他人を殺してはならないと言う。それなら聞きたい。「10月6日」に最も野蛮なやり方で学生・民衆を迫害した血に飢えた悪魔はどこの誰だったのか？　連中がいったいどれだけの南部のタイ人ムスリムと仏教徒を殺してきたか。しかも彼らはそれだけでは不十分と考えたのか、今度はタイ人ムスリムと仏教徒を迫害するのに手を貸すよう、マレーシアの売国奴を誘った。そして外国の軍隊がタイの領土を踏みにじり、タイ人ムスリム、仏教徒を迫害することに同意した。これは反動勢力がおこなった最も屈辱的かつ恥知らずの行為である。傀儡首相であるターニン・グライウィチアンと内務大臣サマック・スントーンウェットは、これを正当化するため、タイ軍もマレーシア領にはいる権限があるから、タイにとって何ら不都合なことはないと語った。しかしこれは盗人の論理である。ファシスト・サンガット＝ターニン政権には、誰であれタイ国内に侵略を許す権利などない。同じようにマレーシア人の領土に侵入する権利もない。タイ、マレーシアの愛国者たちは、彼らの侵害に決して屈伏することはないだろう。

売国奴サンガット＝ターニン一味の犯罪は、祖国を売り渡すという彼らのもっとも恥知らずの意図を反映している。これがタイを裏切る行為であることは、彼らの犯罪を知った人々の目には明らかだ。彼ら売国奴一味の悪辣かつ残虐な犯罪のひどさはとうてい筆舌には尽くしがたい。売国奴サンガット＝ターニンら支配階級が反動的戦争挑発者であるフセイン・オン一味と手を結べば、いったいどうなるか。彼らは人民を魚や野菜のように安価な商品として、彼らがどうにでもできるもの

として見ているのだ。

フセイン・オン反動一味は、マレーシアの人民に向かってマホメットの教えを守り、イスラムの戒律に従ってくらすよう説いている。しかもマレーシアが存続する道はこれしかないとまで主張している。しかし、それなら聞きたい。イスラムは連中に人民を弾圧し迫害するように説いているのか？　マホメットは連中に他人を搾取し抑圧せよとお教えになったことがあるのか？　とんでもない。コーランその他の教典のどこにも、ムスリムは他人を迫害すべきであるなどとは書いてない。フセイン・オンの残虐な行為はいかなる方法をもってしても釈明することはできない。彼とその一味は言葉の上では聖人だが、やっていることは罪人なのだ。売国奴サンガット＝ターニンの一味も右に同じである。

権力を奪取し、タイの統治を国王を元首とするファッショ的支配に変えて以来、ファシスト・サンガット＝ターニンの一味がやってきたことと言えば、人民の願望に反することだけなのだ。

人民は自由を求めている。しかるに彼らは悪いことは何もしていない連中まで牢獄に投げ込む。人民は安全と平和を求めている。しかるに連中は生活必需品の物価をつり上げ、ますます高い税金を人民からぶんどっている。人民は祖国を愛し、独立を求めている。しかるに連中はタイをアメリカ帝国主義の奴隷に変え、戦争挑発者であるフセイン・オンを招いて主権を蹂躙させているのだ。

全てのタイ人のみなさん！　国籍を問わず祖国・民主主義・正義を愛する全ての国民のみなさん！　あらゆる宗教を信じるみなさん！　そして国の独立を守ろうとする全ての軍・警察のみなさ

ん！

今や、団結して南部のムスリム、仏教徒の弾圧に反対する時は来た。全ての人々は団結して、戦争挑発者であるフセイン・オン一味の侵略と主権の侵害に反対しなければならない。

われわれタイ人ムスリム元学生たちは、武装闘争によってファシスト・サンガット＝ターニン一味を打倒し、サンガット＝ターニン一味と戦争挑発者フセイン・オン一味が共同でおこなっている残虐な犯罪を徹底的に糾弾することを決定した。われわれは、フセイン・オン一味によるタイ領土主権の蹂躙と領土の侵害を強く糾弾する。現在南部のムスリムと仏教徒で愛国的人々は、最悪の状態に置かれている。われわれは迫害されている人々の家族、及び逮捕された人々の身を心から心配している。

タイ、マレーシアの反動勢力による気違いじみた人民の弾圧は、彼らの力を反映するものではない。それどころか、彼らの弱さ、彼らが破滅に向かって進みつつあることを示すだけである。われわれは、南部のムスリムと仏教徒である愛国者たちが、侵略者に対する長い歴史と固い決意を秘めた彼らが、必ずや反動的一味の弾圧をはね返すことを信じて疑わない。

タイ、マレーシアの人民は、愛国者たちを迫害する両国の反動的一味に決して屈することはないだろう。われわれはいかなる肉体的精神的犠牲もいとわず、また総力をあげて最後まで南部のタイ・ムスリム、仏教徒の闘いを支援するだろう。

ファシスト・サンガット＝ターニンの一味を打倒せよ！

侵略者、戦争挑発者であるフセイン・オン一味を打倒せよ！
勇敢なるタイ・ムスリムと仏教徒は必ずや勝利するだろう！
人民万歳！

資料56

タイ全国農民連盟の声明

「タイ農民が生き延びる道」

（一九七七年二月二五日、『タイ人民の声』放送三月一八、一九日）

スィートン・ヨードガンター

〈スィートンの略歴〉

スィートン・ヨードガンターは現在三九歳、元村長であった。北タイのチェンマイの農家に生まれ、子供の頃は煙草の乾燥工場で働いていた。その後農業に従事。しかし水害や旱魃といった災害、低米価の中で高利の金を借りざるをえなくなった。スィートンは返済のためいろいろ努力したが、結局最後の土地を売

り払い、土地なし農民に転落した。当時スィートンは三二歳、今から七年前のことであった。スィートンは親切かつ真面目な人柄で、絶えず村の人たちの生活状態に気を配り、自分のことよりも村全体のことを考える人であった。そしてやるべきことがあると自らすすんで考え、話し、実行に移した。そこで彼はチェンマイ県ドーイサゲット郡タラートヤイ行政村メェチェーン村の村長に選ばれた。

一九七三年の「10月14日事件」の後、スィートンは積極的に農民運動に参加し、当時タイ全国農民連盟副委員長のインター・スリブンルアンが反動的支配階級の手によって暗殺された後は、彼の任務を受け継いで、北タイ農民連盟委員長兼タイ全国農民連盟副委員長の地位に就いた。

スィートンは独立・民主主義・正義を求めるさまざまの階層の民衆の闘いを積極的に支援し、とりわけ、労働者、貧しい人々、そして若者、生徒、学生の闘争を心から支援した。

またスィートンの長女は、一九七六年半ばに、反逆、煽動、共産主義の容疑で他の一〇人の北タイの学生とともに反動勢力たちの手によって逮捕された。

スィートンは、現在タイの農民が直面している問題は、土地、小作料、負債、肥料、そして農産物の価格問題であると語っている。彼がタイ農民のために武器を手にとって森にはいる前に、彼はしばしば反動的支配階級からつけ狙われ、一九七六年七月一七日には自宅に手投げ弾が投げられた。このため家は全壊したが、彼自身は難を逃れた。スィートンは次のように語る。「反動的支配階級がクーデターを起こし、生徒、学生、民衆を虐殺した。こうしたことに私はもはや耐えることができない。平和的闘争はもう不可能だ。私は革命に参加し、武装闘争に加わることを決心した」と。

〈本　文〉

農民のみなさん！　労働者、生徒、学生、そして国と民主主義を愛する全てのタイ国民のみなさん！

農民はこれまで実に長い間「国の支柱」であると讃えられてきた。また全ての農産物は、われわれの労働と汗の結晶であった。それは全国の国民の食卓にのぼるだけでなく、わが国の主要な輸出品でもあり、これによって反動的政府や大資本家たちは年に何千何億万バーツにものぼる収入や利益を獲得してきた。

しかしわれわれ農民はその見返りとしていったい何を得てきたというのか。農民の大部分は自分の食べる米すらまったくないか、あるいは事欠き、服といったらつぎあてだらけのボロ布を身にまとい、家とはとても呼べないようなところに住み、また病気にかかると自分のやり方に従って、精霊信仰に頼って治すほかなかった。われわれは幾世代にもわたってお寺や掘立て小屋のような建物の中で勉強し、大多数の子供たちは、極く少数の例外を除いて小学校四年以上の教育を受けることができなかった。彼らは学校を卒業すると、大地にへばりつき、牛や水牛とともに田んぼで働き、雨と炎暑に苦しめられた。そしてわれわれ農民は、ひいお爺さんの代からその子、孫、ひ孫の代に至るまで幾世代にもわたって抑圧と搾取に苦しめられながら働いてきた。これが支配階級が「国の支柱」と讃えるわれわれ農民の真の姿であった。

サクディナー勢力は何千年もの間、われわれ農民を彼らの支配の軛につないできた。われわれ農民が抱えている主な問題は、土地がないこと、あるいは食べていくだけの十分な土地がないことである。大多数の農民は小作農で高い小作料を搾り取られ、その率はある所では半分に、また高い所

では半分以上にも及んでいる。さらに小作農たちは生産費をも自分で負担しなければならない。われわれはただ自然の恵みにすがって耕作を続けるだけで、灌漑設備のようなものもなかった。肥沃な土地は全て支配階級や地主、高利貸の手に独占されてしまった。

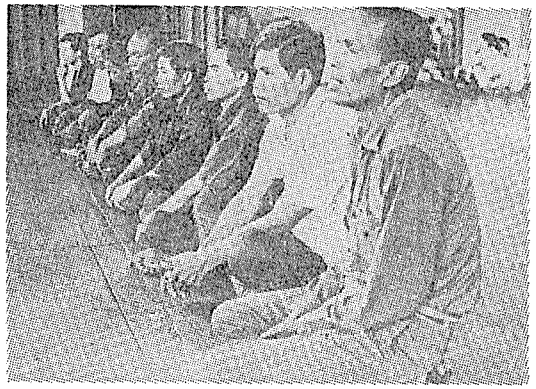
われわれの苦労がどのくらいのものかは農民なら誰でもよく知っている。一本の稲穂、一粒のピーナッツをつくるのにいったいどれだけの雨、炎暑に耐え、そして太陽をを背に受けながら前かがみの姿勢を続け、多くの汗を流し、手足が棒のようになり、日射しで皮膚がガサガサになるまで働かなければならないかを。しかし収穫が終ると、冷血漢の地主や高利貸たちはただちに小作料や利子を計算して容赦なく収穫物を車に積んで持ち去っていった。

われわれ農民の中で、妻子たちに食わせるだけの米が手許に残る人々はまだ幸せである。大多数の農民は借金の返済や必要なものを買うために残りの米すら売りに出さなければならない。しかもその米の価格は人為的に低く抑えられていた。借金返済のために新たに借金を重ねる人やあるいは病気にかかったり逮捕された人のいる家では、もっている品物を質屋に入れるか、土地を抵当に入れるか、さもなくばなけなしの財産を売り払うしかなかった。さらにあるものは米、麻、サトウキビの青田売りをするか、冷血漢の高利貸からたとえ利子が不当に高くても新たに金を借りるために駆けずり回らなければならなかった。

このように農民は(借金に追いまくられて)息つくひまもなかったが、しかし借金の方はますます積み重なる一方で、多少とも土地をもっている人はついにそれすらも法律やさまざまな詐欺的やり口によって取り上げられてしまった。われわれ農民の中で、破産し自らの労働力を売らざるをえなくなった人の数は、日増しに増加している。大多数の農民は今や農業労働者か工場労働者になる他ないのだ。われわれ農民の生活状態はこのようにひどいものであったが、しかしわれわれの境遇に真面目に関心を払ってくれるような反動的政府は、今までに一つとしてなかった。それどころか、われわれがさまざまの正義を求めて起ち上がった時、彼らは逆にわれわれを残酷に弾圧してきたのである。

「10月14日」の大事件は、われわれ農民をも大いに奮起させた。この時以来、実に多くの農民が起ち上がり、正義を求める大規模な、あるいは小さな闘いを幾度も展開した。一九七四年一〇月には、全国の農民が大規模な集会を開き、サンヤー政府に農民の土地と負債問題を解決するように要求した。労働者、若者、生徒、学生、そして僧侶を含むあらゆる人々がこの闘争に広範な支援を与え、政府は農民の負債問題を解決するため「農民負債調査委員会」を設立せざるをえなくなった。しかし土地、小作料、利子は、反動的勢力の共通の利益の源泉である。そのため反動的支配階級は積極的に農民問題を解決しようとはせず、「農民負債調査委員会」も口約束ばかりで、何の成果も生みださなかった。

一九七四年一一月一七日、北タイの農民——その大部分は小作農である——は、九日間にわたって連日の闘争を断固として展開し、政府に対して小作料を規制する法律をつくり、われわれ農民に正義をもたらすように要求した。この闘争は各界各層の人民、とりわけ全国の農民から支持をうけたので、サンヤー政府は「一九七四年小作料規制法」の公布を余儀なくされた。一方農民たちは(一九七四年一一月二四日、サナームルワンで)タイ全国農民連盟を設立することを決定し、各地方にそ



1975年8月　逮捕された9名の北部タイ農民・学生指導者

の支部をつくった。この時インター・スリブンルアンがタイ全国農民連盟の副委員長と北タイ農民連盟の委員長に選ばれた。タイ全国農民連盟の目的は、運命をともにする全国の農民の権利と利害を守る点にあった。

しかしバンコクや地方にいる一部の地主は、悪辣な官吏たちと結託してこの小作料規制法に従うことを拒絶した。彼らは自分たちの搾取を続けるため、この法律ができたことを農民に知らせる労すらとらなかった。そこでタイ全国農民連盟の執行委員たちは、生徒・学生と協力してこの法律を宣伝し、農民たちにその内容を知らせるべく努力した。その後われわれは小作料の規制を図る委員会を設立し、農民と学生の代表がこの委員会に加わった。

こうした動きは、地主、悪徳官吏の機嫌を損い、彼らはさまざまな方法を使って絶えず農民、学生の動きを妨害しようとした。そしてこれがうまくいかないと、農民指導者を誹謗中傷するか金を使って買収し、それでもだめなら、デッチ上げをおこなって彼らを逮捕・投獄した。そして最後になると彼らは野蛮にも農民指導者一〇数人を暗殺し

たが、犯人は一人として役人に逮捕されなかった。さらに農民の闘争を威嚇・妨害するために、反動的地主は、一九七五年七月三〇日に、タイ全国農民連盟の副委員長で北タイ支部の委員長でもある、そして疲れも身の危険もかえりみることなく、全てを全国の抑圧された農民の利益を求める闘争に捧げてきたインター・スリブンルアン氏を暗殺したのである。

しかし反動的支配階級はこの事件を捜査するどころか、翌日にはこの事件を理由に九名の北タイの農民指導者と学生を不当にも逮捕した。そこでタイ全国の農民は、学生と協力して九名の逮捕とインター氏の暗殺に抗議し、さらに（暗殺者の背後にいる）黒幕たちの権力を恐れることなく憤怒の意を明らかにした。われわれは集会の場で、クックリット政府に対して勾留されている全ての農民指導者、学生の即時無条件釈放とインター氏を殺した犯人の逮捕を求め、かつ正義を求めて闘っている農民の指導者たちの身の安全を保障するように要求した。この闘争は、同胞である労働組合の有力な支援をうけ、そして正義を愛する全国の民衆たちは力を合わせて七日七晩の闘争を展開した。その結果ついに、クックリット政府は逮捕した九名の農民指導者、学生を無条件に釈放せざるをえなくなった。しかし暗殺はその後もあとを断たず、さらに一〇数人に及ぶ農民指導者が殺されていった。

反動的支配階級は、自分たちの巨大な利益をそうおいそれとはあきらめようとはしなかった。彼らはありとあらゆる方法を使ってわれわれ農民の力を切り崩そうとした。彼らはさまざまな暴力団を、たとえば「ナワボン」や「ルーク・スア・チャーウ・バーン」等をつくり、プロの殺し屋やスパイを雇って常にわれわれの闘争の妨害をはかってきた。しかしわれわれは恐れず筋の通った正当

な闘争をあくまで続けていった。

一九七六年一〇月六日、アメリカ帝国主義の命令のもとに大サクディナー勢力、ファシスト軍閥は血のクーデターをおこない、反タノーム闘争に参加していた多くの若者、生徒、学生そして農民を含む各界各層の人民を虐殺した。彼らは狂ったように、そして野獣にも劣る残虐さで人民を弾圧したのである。ついで彼らは「国家・仏教・王制」のスローガンの下、自分たちの支配に反対するものは誰でも、全国の数千人にも及ぶ若者、生徒、学生、そして祖国を愛し、民主主義、正義を愛する人民を次々と逮捕・投獄した。その中には各地方、各県で正義を求める闘争を展開していた農民の指導者たちも数多く含まれていた。

一九七三年一〇月一四日以来、反動的支配階級がつくった法律の枠内ですすめてきたわれわれ農民の平和的闘争は、以上のように反動的支配階級とアメリカ帝国主義の弾圧と虐殺に見舞われることになった。

私は常にわれわれ農民とともに闘い、われわれの生活状態の向上を望んできた。しかしその見返りとして反動的支配階級は、私を誹謗中傷し、あらゆる方法を使って妨害を企てた。それがうまくいかないとついには何度か闇討ちを仕掛け、最後には私を殺すために、真夜中に自宅に人殺し用の爆弾を投げ込んだ。しかしこのような惨事がおこっても、私は身の危険を恐れなかった。むしろわれわれ貧しい人々のための闘争の決意をいっそう強固にした。なぜなら私も貧しい農民の一人であり、もしわれわれ農民が多数の貧しい人々と力を合わせて闘争に起ち上がらなければ、われわれ農民の問題を解決する道はないということをよく知っていたからである。しかし「血の10月6日事件」

が勃発して、売国奴であるファシスト独裁者たちは、私を含めて農民指導者たちの逮捕——生きたままでも殺したあとでも——を命じた。

敬愛する農民のみなさん！

私が農民のみなさんとともに、正義を求め、生活するための土地を求め、われわれ農民の汗と涙に対する公正な分け前を求め、さらに少しでも生活の向上を求めて闘ってきたことは、はたしてまちがっていたのだろうか。私はファシスト・サンガット＝ターニンらに率いられた反動的支配階級の弾圧のため、家族や親戚に別れの挨拶も交わさないまま姿を消さざるをえなかった。しかし私は決して屈伏しない。どのような危険も恐れることなく、生命を賭けて、最後まで断じて闘いつづけることをここに誓うであろう。

敬愛する全ての農民のみなさん！

われわれはこれまでの闘争の経験から次のような教訓を得た。反動的支配階級は、われわれのいかなる要求に対しても耳を傾ける気などまったくもっていない。もし人民が強固であれば彼らはごまかし、逆に人民が弱く分裂していれば、これ幸いにと彼らは残虐にわれわれを弾圧するということを。今弾圧は、ますますその残虐さを増している。われわれこの国の大半をしめる農民は、どうしてこのような弾圧がいつまでも続くことを黙って許すことができようか。われわれは他の誰かに頼ることなどできない。選ぶべき他の道もない。われわれ農民自身が団結し、正義を求める闘いに起ち上がる以外に道はないのだ。

どのような請願も、そして屈伏も、われわれの上にのしかかる苦しみを取り除くことはできない。それらは、決してわれわれに土地やよりよい生活を与えはしないだろう。敵が銃を使ってわれわれ農民を弾圧し殺すなら、われわれも銃を手にとってこれに応じなければならない。われわれが抑圧と搾取から解放される道はそれしかないのだ。現在、広範な農村で農民たちは銃を手にとり、われわれの敵と勇敢に闘っている。支配の軛からわれわれを解放する人民革命の炎は、反動的支配階級の権力の座を襲い、燃え広がりつつある。

タイ全国農民連盟のみなさん！

これこそがわれわれ農民の正しい、そして唯一の闘争の道である。即ち武装闘争だけが、われわれ農民を抑圧と搾取から解放し、われわれに自分たちの土地を与えることができるのだ。

全ての労働者、生徒、学生のみなさん！

みなさんは、われわれが置かれている貧しく困難な状況をよく理解し、権力を恐れず、危険をもかえりみず、心からわれわれの闘争に支援を送ってくれた。われわれ農民はこのような生徒・学生をわが子、わが孫の如く愛している。われわれ農民はみなさんと団結しともに闘いたい。われわれ農民は、若者、生徒、学生が、偉大なる「10月14日の意志」を継承し、情熱的かつ真面目に、また祖国と民主主義を愛し、広範な大衆そしてわれわれ農民と連帯して最後まで闘いつづけることを心から希望する。

全ての搾取され抑圧されている労働者のみなさん！

労働者と農民はもともと運命をともにし、生死をともにする血を分けた兄弟同士である。大多数

の貧しい労働者たちは、破産した農民に他ならない。彼らの家族の大半は地方の農村の出身なのだ。われわれはこれまでの闘争で互いに心から支援し助け合ってきた。反動的支配階級はさまざまの陰謀を使ってわれわれの間の団結と連帯を切り崩し破壊しようとしてきた。しかしわれわれ農民と労働者は、一日として分裂することなく、逆に団結と連帯の絆を強めてきた。さらにわれわれは今、共通の利益を求めて最後までともに闘いつづけている。

祖国と民主主義を愛する全ての国民のみなさん！

われわれ農民は、サンガット＝ターニン売国奴一味を打倒し、国を売り、反人民反国家の代表である彼らを葬り去り、わが愛する祖国に真の独立を、そして人民に民主主義と生活の向上をもたらすためにみなさんとともに闘うであろう。

われわれ農民は、ここに売国的反動勢力が銃をとってわれわれを弾圧し殺すなら、われわれも銃を手にしてこれに対抗しなければならないと宣言する。われわれは今日この日から人民武装勢力の隊列に加わり、わが祖国と偉大なる人民、そして農民たちの解放のために闘うことを宣言する。われわれは、売国奴で人殺しの反動的支配階級を打倒し、アメリカ帝国主義を駆逐するであろう。

全ての農民は心を一つにして闘争に決起せよ！

社会を主導し、建設し、育てていく全ての人々は団結せよ！

労働者、生徒、学生、農民は団結せよ！

勝利は必ずわれわれの側にある！

資料57

新聞記者の声明

「私が選んだ道」

スィー・インタパンティー

（一九七七年五月一五日、『タイ人民の声』放送五月二九日）

〈スィーの略歴〉

一九三八年七月一四日生まれ、三九歳。バンコクにあるベーンチャマバピット高等学校卒業後、一九五五年にタマサート大学に入学、大学院法学研究科修士課程を修了。タマサート大学で勉学中に、学生運動と正義を求めるあらゆる闘争に参加する。また「ナーイ・プティ」というペンネームでいくつかの詩を書いた。大学院修了後『デイリー・ニューズ』新聞社に入社、最初は社会部記者として勤め、翌年には政治部記者になる。

サリット・タナラット元帥のクーデターによって、『デイリー・ニューズ』社は、他の多くの新聞社とともに閉鎖された。その結果彼は、別のタイ字紙や外国字紙、ラジオ、テレビ関係、そしてAPの記者など転々とした。一九六六年にはタイ国営放送局のジャーナリストになり、一九七一年一一月一七日、タノーム

ムが自分に対するクーデターを起こした時には、政府の広報担当者の職を得た。

一九七三年の「10月14日事件」以後は、当時国軍最高司令官であったクリット・シワラー元帥の政治担当記者になり、その後セーニー政権の下では、ニュースの調整役として、また総理府の官吏として働いた。しかし一九七六年「10月6日事件」がおこる前に、ニュースの報道をめぐってセーニー政権の政策と対立し、七月には政府の広報局を辞職した。この間彼は、『サヤーム・ラット』紙にも勤め、BP、国内のテレビ放送、タイ字紙、外国字紙のジャーナリストも勤めた。

人民闘争の道を選ぶことを決意する以前、スィー・インタパンティーはタイ国内で最も信頼のできるジャーナリストの一人であった。

〈本　文〉

(1)私はジャーナリストである。ジャーナリストというのは、真実を探求し報告することが仕事である。真実に対する誠実な態度は、全てのジャーリストに共通する魂であろう。

この二〇年間、ジャーナリストを生業にしてきた私は、絶えず二つの大きな対立にぶつかってきた。第一は、ニュースの探求とその報道、真実の報道と広報活動の間の対立である。（換言すれば）ニュースを書く自分自身の公正なペンと、新聞社の社主や政府にとってはあくまで道具にすぎない報道機関との対立である。第二は正義とそれに反するものの、長い間私が日々直接に接触してきたニュース、個人、集団、社会そして国家に関する正しいものと正しくないものの間の対立である。

私はこのような対立を憎んでいたが、しかし私に選ぶべきすべはなかった。

(2)タイの国営放送局につとめていたころ、私はニュースの編集に従事したことがあった。その当

時しばしば経験したことは、真実と虚偽の間の対立であった。

支配階級の広報活動は事実を歪曲し、そして虚偽を事実に仕立て上げて報道することである。たとえば一九七六年三月二一日には、数万人に及ぶ生徒、学生、民衆が米軍基地に反対するデモに参加したが、タイ国営放送はデモ隊は二〇〇〇人にすぎないという短い放送を伝えただけであった。また政府にとって都合の悪いニュースが存在する場合には、そのようなニュースの報道を許可しないこともあった。

一九七三年一〇月一四日以前に、私は当時野党（であるタイ民主党の）党首セーニーにインタビューを試みたことがある。しかし首相官邸の秘書官は、セーニーとのインタビューはほとんどニュース価値がないとして割愛し、また改悪した。一方セーニー自身も自らが首相の座につくと、野党に関するニュースをできるだけ省略するか放送を差し止めた。

これがタイ国営放送局のやり方だった。

(3)一九七一年一一月一七日、「革命団」のスポークスマンに任命された時、私は真実と虚偽の間の対立を前よりいっそう強く認識するようになった。

当時、共産主義掃討作戦司令部（ＣＳＯＣ）（現在は国内治安作戦司令部（ＩＳＯＣ））の報告は、印刷する紙の色によって五つの段階に、具体的には少数の人だけが知りうる「最高機密」の赤紙から国民に報告される第五段階の白紙まで五つに分けられた。各段階では同じ事件であってもその報道には雲泥の差があった。かりに赤色の報告が「最大の機密」であるなら、白色の報告は「最大の虚偽」だったのである。第二段階までは、政府官吏に配布するためにつくられ、各段階に応じて虚偽がつ

け加えられた。したがって、タイでは事実を知る権利は民衆にはなく、ただ修飾された事実を知らされる権利しかもっていなかった。

(4)タイの軍将校だけでなく国軍最高司令官でさえも、タイの国土につくられたラマスーンというアメリカのレーダー基地にはいることは許されなかったという現実、これ一つをとってもわが国の主権がどれほど危険な状態に陥っているか推測するには十分であろう。さらに閣議のいかなる秘密の決議でもアメリカの大使館は全てこれを知っており、またＣＩＡ長官がタイの高級官僚より首相の自宅や宮殿にたやすく出入りできること、そしてクーデターを断行した革命団ないし改革団の司令部内には必ずアメリカの軍事顧問団が参加、陪席していること等の事実を見れば、タイがすでにアメリカの植民地以外の何物でもないことは明らかである。

(5)ニュースを探求するジャーナリストとしての職業柄、私は否応なく真実に、とりわけ同国人の生活の辛苦にぶつからざるをえなかった。

たとえば農民は、地主から小作料と利子を搾取され、破産の状態にあった。一方地主たちは、政府や議会の間では評判のよい人々である。タイ国内の米輸出商人の数は一〇〇人に満たないものであったが、しかし彼らが手に入れる利益は年に何千万何億バーツに達した。また北部タイの農民は、自分たちの娘を売春婦に売らなければならないというのに、政府はこれを合法化するような法律を制定した。

農民が正義を求める運動を展開した時、（政府が）不本意にも設立せざるをえなかった農民援助委員会の仕事の一つは、タイ全国農民連盟の指導者たちを調査することであった。その結果、数十人

に及ぶ指導者が暗殺された。

(6)一方、「国益」のためという口実を使って、クックリット政権下の外務省は、繊維製品を販売するためにさまざまの国と懸命になって交渉にあたった。ところでここで言う繊維製品の「国益」というのは、実はタイ最大の繊維工場を所有し、毎年巨額の利益を繊維から獲得していたプラマーン・アディレクサーンの(個人的)利益に他ならなかった。

他方この工場につとめる労働者たちは、正義を求めて闘争することはまったくできなかった。「赤い野牛」のリーダーたちは政府関係者の家に絶えず出入りして指示を仰ぎ、命令を出していたスッドサーイ・ハッディントン大佐は、いつでも労働者の弾圧ができるように準備を整えていたからである。そのため彼らの労賃はきわめて低く、一日わずか半リットルの米しか買えないほどであった。これも彼らに言わせれば全て「国益」のためであった。

(7)軍部は資本家であり、サクディナー勢力も同じように資本家である。王室財産管理局がタイ最大の投資家であり、タイの利益をかき集めるために進出してきたアメリカや日本の独占資本家と結託していることは、今日では周知の事実である。各国営企業は、ホテルから自動車工場に至るまで、その投資が奨励されている。さまざまの行政機関のうち多くは、総理府の規程にもとづいて、王室財産管理局が共同出資している諸々の工場から製品を買わなければならない。

(8)共謀したり、あるいは裏切ったりすることは、権力を握っている連中内部の人間関係に見られる一つの法則である。

たとえば米軍の撤退とラマスーン基地の撤去に反対する「トムヤンティー」のテープが全国のさまざまの放送局を通じて公表され、そのため(クックリットに対する)反政府の気運がひきおこされたことがあった。ところでこのテープは、クックリット・プラモートにとっては実に苦々しいことではあるが、国軍最高司令部内のそれもグリアンサック・チャマナンの眼前で録音されたものであった。

またセーニー・プラモートにとって悲しむべきことは、暴君プラパート・チャルサティアンが帰国した時のことであろう。この時チャイチャーン・ガンナスート陸軍少佐の家で政府の代表者たちはプラパートと話し合っていたが、その最中にヨット陸軍大将が現われ、陸軍総司令官の命令を読み上げて暴君プラパートを連れ去ってしまった。その後暴君プラパートは、国土にとって重要な人だが、しかし「国土にとって重い人物(ナック・ペーン・ディン)」から挨拶を示す二つの花束を頂戴した。(「ナック・ペーン・ディン」というのは、もともと政府、右派勢力が反共キャンペーンのためにつくった歌の題名で、直訳すれば「国土にとって負担の重い人」、意訳すれば「売国奴」ということになる。共産主義者を非難するこの歌は、一九七六年五月頃から放送をつうじて全国に流され、一時タイでは流行語になった。この声明では国王を暗に示すものとして「ナック・ペーン・ディン」の言葉が使われている。)

(9)一九七六年一〇月六日におこった事件は、祖国を愛し正義を愛する人々の心にいつまでも残るであろう。しかしその背後には、事件で示された残虐さに匹敵するほどの薄汚ない卑劣なやり方が隠されていたのである。

「国土にとって重い人物」は、右派の一グループと共謀し国境警備警察軍に命じて学生・民衆を虐殺した。そして次には別のグループと共謀してクーデターを断行し、先のグループを裏切ったので

ある。そこで先のグループは、一九七七年三月二六日に対抗クーデターを企てたが、結果は（失敗に終り）一人が死刑、以下終身、二〇年、一五年、一〇年、五年の刑に各々処せられた。

神聖だとみなされてきた「誓いの水」も神聖ではなかったのだ。もし顧問の地位にあるアメリカがどちらかに肩入れするようなことがあれば、三〇年に及ぶ歴史が如実に示しているように彼らの将来は激しい抗争と化すであろう。

(10)しかしタイ人民の将来は、これとはまったく異なっている。彼らの未来は輝きにみちあふれているのだ。あの血で汚された王冠を頭に戴くものが誰であろうと、それに関係なく人民は生き続け、そして次第に成長していく。そしてついには、あの時代遅れの薄汚れた王冠（王制）を破壊し、歴史のごみ箱に捨て去ることだろう。

共産主義者鎮圧の専門家であるサーイユット・ガートポン大将やソムチャイ・ラックオイット博士のような人々は、共産主義掃討作戦司令部（CSOC）が設立されてからその名を国内治安作戦司令部（ISOC）に変えるまで一〇年以上にわたって、結局タイ共産党の発展を阻止することができなかったことを――すすんで認めるかどうかは別として――認めざるをえなかった。なぜそうであったのか。ジャーナリストにとってその答えは実に簡単である。というのも共産主義者の鎮圧は、実は人民を弾圧することに他ならないからである。

(11)私は共産主義者ではない。しかし私は真実を愛しているので、真実の側につくことを決意した。真実というのは、国家には主権が、人民には民主主義が、社会には公正が、そして働く人々にはよりよい生活が必要であるということだ。

このような真実をかち取るために闘争の道を切り拓き、忍耐強く献身的に闘争を指導してきたのは、またタイ人民に対して現在のようなすぐれた状況をつくりだしてきたのは、他ならぬタイ共産党であった。サンガット＝ターニンが今死力を尽くして、（第一軍管区から第四軍管区まで）全ての軍をあげて攻撃しているのは実にこのタイ共産党なのである。

これが「私の選んだ道」である。

タイ民衆の闘いの記録編集委員会
〈連絡先〉 東京都文京区白山1—37—9　自主講
座分室内

1977年11月25日　第1版第1刷

血の水曜日

——軍事クーデターと
タイ民衆の闘いの記録——

編　者　タイ民衆の闘いの
記録編集委員会

発行所　株式会社 亜紀書房
東京都千代田区神田神保町2—9
電　話　03—264—8301(代)
振　替　〈東　京〉　144037

落丁本，乱丁本はおとりかえいたします．
鎌倉印刷・協栄製本ⓒ25
3031—0148—0098

タイ現代史年表　(1932—1977)

1932. 6	人民党により立憲革命おこる．絶対王制廃止される．
1933. 6	陸軍若手グループにより第二次クーデターおこる．
10	ボワラデート親王による勤王党の反乱失敗する（親国王派失脚）．
1935. 3	国王ラーマー7世退位（34年1月からイギリスに事実上亡命）．
1941.12	日本軍，真珠湾攻撃に先立って南タイのソンクラー等に上陸．
12	日本・タイ攻守同盟に調印（ピブーン内閣）．
1942. 8	抗日反ピブーン組織である「自由タイ」の成立を公式に発表する．指導者は当時摂政のプリーディー・パノムヨーン．
12	タイ共産党，創立される．
1944. 7	ピブーン内閣総辞職．翌8月プリーディー派のクアン・アパイウォン内閣成立．
1945. 8	タイ政府，対米英宣戦布告を無効と宣言．
9	セーニー・プラモート内閣成立．
1946. 3	プリーディー内閣成立．
6	ラーマー8世（現プミポーン国王の兄）宮殿内で変死．
12	タイ，国連に加盟．
1947.11	ピブーン派による「政変団」が政権奪取．国王暗殺の嫌疑でプリーディー国外に亡命．
1648. 4	第3次ピブーン内閣成立（5月アメリカ承認）．
1949. 2	プリーディー，クーデターを実施，しかし2日後失敗に終る．
3	49年永久憲法発布．
5	国名を「サヤーム」から「タイ」に復帰．
6	第4次ピブーン内閣成立．しかし実力者はパオ警察局長官．
?	CIAがタイで活動を開始する．
1950. 9	タイ・アメリカ経済・技術協力に関する協定，調印．
10	タイ・アメリカ軍事援助協定，調印．
1951. 3	プリーディー派の海軍が反乱，7月鎮圧される．

1951.11	ピブーン，憲法停止事件おこす．
?	第２回タイ共産党代表大会．独立，民主，平和のための武力解放闘争を決定．
1952.11	パオ警察局長官が中心になって左派弾圧．この月共産主義幹部大量逮捕．反共法施行される．
1954. 9	ＳＥＡＴＯ 条約批准．
10	産業奨励法発布．
1957. 1	労働法発布，組合の結成を承認．1958年10月までに 154 の組合が登録．
9	パオ警察局長官がクーデターを計画．それに先立ってサリット陸軍元帥の「兵士団」がクーデターを断行． パオ，ピブーン国外追放．実権はピン＝パオ派（ソーイ・ラーチャクルー派）からサリット派へ移る．
1958. 1	タノーム内閣成立（サリットは外遊）．
10	サリット，クー・ド・マン（奇襲）断行．1932年憲法，1954年政党法，1957年労働法各々廃止．
11	共産主義取締り令発布．
12	産業奨励法発布．
1959. 2	憲法制定議会成立，サリット内閣成立．
1961. 3	永久憲法草案作成開始（1968年６月発布）．
7	タイ，マラヤ，フィリピン３国で東南アジア連合(ＡＳＡ)設立，のちＡＳＥＡＮに発展する．
1962. 2	産業投資奨励法公布（輸入代替工業化をめざす）．
3	ラスク・タナット共同声明，（アメリカ，タイの防衛を明言）．
3	『タイ人民の声』放送が放送開始．
5	ケネディ米大統領，１万人の米兵のタイ派遣を命令する．
1963.12	サリット死去，第２次タノーム内閣成立．
1964. 8	トンキン湾事件でジョンソン大統領，タイからのヴェトナム爆撃を命令する．
11	クーデター計画発覚（12月２日事件）．
11	「タイ独立運動」等いくつかの解放勢力の組織がつくられる．

1965. 1	「タイ愛国統一戦線」つくられる．
8	東北タイのナコンパノム県で解放勢力と政府がはじめて武力衝突．
1966. 5	タイ政府，南ヴェトナム派兵を決定．
8	ウータパオ基地完成．67年８月開設．Ｂ52戦略爆撃機を移駐．
1967. 8	タイ共産党幹部等33名を逮捕．
9	佐藤首相訪タイ，共同声明発表．
1968. 1	タノーム，南ヴェトナムを公式訪問．
4	タノーム・佐藤共同声明（日・タイ反共体制）．
6	新憲法発布．
7	南ヴェトナムにタイ「黒豹師団」3,500名派遣．
7	解放勢力，ウドン基地を攻撃，政府に衝撃を与える．
8	「総選挙を監視するタマサート大学生有志グループ」結成．12月には17の大学等に拡大．のちタイ全国学生センターに発展．
12	タイ共産党創立26周年声明，当面の政策（10大綱領）を発表．
1969. 1	タイ人民解放軍最高司令部成立を公表．
1	南ヴェトナムに「黒豹師団」6,000人を増派，在ヴェトナム・タイ国軍の数は11,000名にのぼる．
2	総選挙実施．翌３月タノーム新内閣成立．
7	アメリカ上院でタイ・米秘密軍事協定の存在暴露される． ニクソン大統領訪タイ．
12	タイ全国学生センター（ＮＳＣＴ）設立を決定，活動は1970年から．
1970. 1	プンチャナ経済相，国産品愛用を呼びかける．
5	アメリカのカンボジア侵略を政府が公式に支持．
9	チュラロンコーン大の学生が大学当局の汚職に抗議．
10	「パッターニー共和国民族解放戦線」が成立を発表．
12	ソ連と貿易協定を締結．
1971.11	タノーム，プラパートの「革命団」が自分に対するクーデ

	ターを断行．憲法停止．
1971.12	対中国国交回復交渉一時中断．
1972. 1	タイ軍3,000人ラオス派兵．
2	新労働法公布．
4	第3次5ヶ年計画に日本640億円借款供与．
4	国境警備警察軍（ＢＰＰ），警察から独立し新司令部設立．
10	貿易使節団，訪中．
10	野口ジムでキックボクシング事件，反日運動の口火を切る．
10	新産業投資奨励法（輸出産業育成に重点）．
11	タイ全国学生センター，日本商品ボイコット運動を展開．
12	暫定憲法公布．タノーム新内閣成立，戒厳令解除．
1973. 1	パリ和平協定，ヴェトナム戦争停戦．南ヴェトナムの米軍事援助司令部解散後，東北タイのナコンパノム基地に米支援活動司令部を改めて設置する．
5	トゥンヤイ密猟事件生じる．政府批判強まる．
6	コメの対外輸出を，タイ史上はじめて全面禁止．未曽有の凶作のため．
6	ラームカムヘーン大で独裁制批判をおこなった学生9名が退学処分．1万人の学生が抗議デモ，のち学生釈放．
10. 4	憲法即時実現要求の「100人委員会」結成される．
10. 6	11名の代表を逮捕，のち2名逮捕．
10.13	40万人を越す学生・民衆が決起．**「10・14運動」**．
10.14～15	軍・警察がデモ参加者に発砲，死者77名，行方不明400名（**「血の日曜日事件」**）．タノーム，プラパート，ナロンの3暴君追放される．
10.16	サンヤー新内閣成立．
11.12	セクサンを中心に「自由タマサート・グループ」結成．
12.18	国民大会で299人の議員を選出．
12.28	国民代表議会成立，議長にクックリット・プラモート就任．
1974. 1. 5	米大使館，ＣＩＡがタイの内政に干渉したこと認める．以後反ＣＩＡキャンペーン広がる．
1. 9	田中首相訪タイ．ＮＳＣＴ，タイ独立学生連盟等3,000人が反日抗議集会．

1974. 1.24	ナーサイ村事件発覚する（共産主義村という容疑で村民を虐殺）．
3.29	在タイ米軍3分の1削減，タイ・米共同声明．
5.31	第2次サンヤー内閣成立．
6. 4	土地問題調停委員会設置．
6. 8	繊維労働者ストライキ（14日まで）．
6.24	農民が負債の救済，土地改革等7項目要求（30日まで）．
7. 4	バンコク中国人街で警官・軍と民衆が衝突，バンコクは非常事態体制となる．死傷者148人（プラップラーチャイ事件）．同日，ＮＳＣＴが反米集会．しかしデモは中止．
7.27	中央農民負債委員会設置を発表．
7.30	日本人学校正式に認可．
8.？	「ナワポン」結成（10月結成の説もある）．
8.30	ドゥシタニ・ホテルでストライキ（9月13日まで）．
9. 6	三井，三菱参加によるシーラーチャ（バンコク東部）の石油化学コンビナート建設計画中断される（1969年以来推進）．
10. 7	74年新憲法発布．
10.14	「10.14」1周年，国王列席の下に合同火葬．
10.22	タイ社会党結成．委員長ソムキット，書記長ブンサノーン．
11.24	タイ全国農民連盟結成，29日から1万人を越える大農民デモ．
12. 6	借農地（小作料）規制法国会通過．
12.27	タノーム帰国．全国で抗議集会開かれ，29日再追放．この時，学生・労働者・市民の大連合結成される．
1975. 1. 7	「民衆のためのタイ全国職業学生戦線」結成される．
1.16	パンガー県の知事，テムコ事件で政府に抗議．20日には資源保護グループがテムコ社の採掘権取消を要求する．
1.17	土地改革法国会通過．
1.26	総選挙実施．サクディナー勢力と軍部が議席を二分する．
2.14	南タイ・パッタルンの大量虐殺でＩＳＯＣに抗議する1万

	人集会.
1975. 2.21	セーニー内閣成立．3月6日不信任.
3.17	クックリット内閣成立（タイ民族党，社会行動党等の連立内閣）.
3.25	農民新たに12項目を要求.
3.29	新労働法発布，労働組合の結成認める.
4. 9	ナーン県で解放勢力が攻撃，政府側17人が死亡.
4.16	ファイアストーン社でストライキ（6月4日まで）.
4.17	カンボジアのプノンペン陥落.
4.24	タンボン(行政村)開発法成立．道路建設等24億バーツ.
4.29	サイゴン陥落.
5. 1	ドゥシタニ・ホテルでストライキ．「赤い野牛」等が襲撃（6月25日まで）.
5. 6	タイ全国農民連盟の要求を政府が全面拒否.
5.10	サゴンナコンで反ヴェトナム人暴動.
5.13	「マヤグエス号」事件発生．15日には2万人の反米デモに発展.
5.28	スタンダード・ガーメント社のストライキに警察介入．労働運動の政府弾圧開始される.
6.26	土地改革法公布．農地の所有50ライに制限.
7. 1	中国と国交樹立.
7. 3	職業学校の学生3,000人が親米デモ.
7. 4	タマサート大でＮＳＣＴ等が反米集会.
7.30	タイ全国農民連盟副委員長インター・スリブンルアン暗殺される（1974年3月以来22名の農民指導者が暗殺）.
8. 3	北タイのラムプーン県，チェンマイ県の農民指導者，学生9人が逮捕．5日北タイ各地で抗議集会．7日タマサート大で抗議集会．14日釈放決定.
8.19	バンコクの警官2,000名が首相の釈放決定に抗議して私邸に乱入．北タイのラムプーン県でも警官が県庁その他を占拠し示威行動をおこなう.
8.20	「赤い野牛」がタマサート大を焼き打ち.

1975. 9. 2	反共法の代わりに治安維持法案を閣議で承認.
10. 4	タノーム等3暴君の犯罪調査委設置.
10.12	ラムパーン県メーリアン村のスズ鉱山鉱毒事件で村民と会社側が衝突（タイにおける「足尾鉱毒事件」）.
10.14	南タイ，パッターニー独立グループが武装闘争宣言.
10.31	タイ・カンボジア共同コミュニケ.
11.17	ＮＳＣＴ，タイ労働組合連合，石油値上反対集会.
12. 1	ラオス王制廃止，共和国樹立.
1976. 1. 2	労働組合58がコメ値上反対の共同ストライキ．5日1万人デモ.
1. 4	「ナワポン」，議会の解散，独裁体制の復活を要求.
1. 8	クックリット，内閣改造．12日国会解散.
2.28	タイ社会党書記長ブンサノーン暗殺.
3. 3	ラーマー6世技術学校に「赤い野牛」が投爆.
3.20	4ヶ月以内の米軍完全撤退をクックリット首相公約.
3.21	ＮＳＣＴ等が反米デモ，右派の投爆により85人死傷.
3.24	新勢力党演説会場に投爆.
3.30	反共法違反で学生，労働者活動家逮捕.
4. 4	総選挙実施，クックリット首相落選.
4.21	セーニー内閣成立.
4.23	クリット国防相急死（暗殺の噂流れる）.
5. 5	異例の人事異動で反クリット系のチャラート陸軍副司令官を解任.
5. 9	北タイの学生活動家，及びタイ全国農民連盟の指導者逮捕.
5.30	タイ労働組合連合，タイ全国労働会議に改組.
6.10	ＮＳＣＴ機関紙『アティパット』の印刷所襲撃される.
6.24	ペッチャブーン県で解放勢力が空軍機を撃墜．救援に向かった政府軍も全滅．軍の反共キャンペーン強化される.
7.20	タマサート大で1万人の反米集会．一方全国各地で「ルーク・スア・チャーウ・バーン」が親米デモ.
8. 3	タイ・ラオス共同声明.
8. 6	タイ・ヴェトナム共同声明.

1976. 8.15	プラパート秘密裏に帰国．22日追放．
9.19	タノーム僧侶姿で帰国．
9.23	セーニー内閣総辞職．
9.24	ナコンパトゥム県で労働者２人が警官に虐殺される．
9.29	タノーム帰国抗議集会．
10. 1	ワチラロンコーン皇太子オーストラリアから突如帰国．
10. 4	タマサート大構内で無期限の反独裁集会開かれる．
10. 5	セーニー新内閣成立．
10. 6	未明タマサート大の学生・民衆200人以上を警察，右派が惨殺（「血の水曜日事件」）．同日午後７時，「国家統治改革団」がクーデターを宣言．
10.22	ターニン新内閣成立．新憲法発布．
11.12	韓国，タイ教育省の教科書改訂に協力．
11.26	国家改革議会開会，大半は軍・警察出身で占める．
12. 1	タイ共産党，創立34周年声明で「新10大綱領」発表．
1977. 1. 3	ワチラロンコーン皇太子結婚．
1. 8	プラパート，台湾より帰国．
1.14	タイ・マレーシア国境地区の共産主義掃討作戦開始される．
2.13	ワチラロンコーン皇太子襲撃される．
3.26	チャラートを中心とする陸軍の一部がクーデター未遂．軍実力派と軍王室派の対立が暴露．チャラートは４月21日処刑される．
4. 6	タイ社会党，戦時４大綱領発表．カイセーンを議長とする常任委員会を森の中に設置．
7.20	タイ・カンボジア国境紛争激化．
8.15	ＮＳＣＴ，森の中で臨時執行部再建する．
8.15	福田首相タイ訪問．
9. 5	「血の水曜日」で逮捕された学生18人の軍事裁判始まる．
9.26-28	「民主愛国勢力連絡委員会」を森の中に設置．
10.20	軍実力派「革命団」がクーデター．王室派のターニン首相，サマック内相を排除．